

平成28年度 横浜国立大学 博士学位論文

郊外住宅団地における多世代近居からみた 世帯間相互支援行動に関する研究

Study on mutual support among close-residential relationship
in suburban area.

横浜国立大学大学院
建築計画研究室

12WA901 金 由羅

目次

論文の要旨	-1
英文要約	-7
論文本文	
1. 研究の目的と方法	-13
1-1.研究の背景	
1-2.既往研究と本研究の位置づけ	
1-3.研究の目的と方法	
2.近居の実態と生活との関係	-31
2-1.アンケート調査概要	
2-2.近居世帯間の距離	
2-3.外出行動と近居	
2-4.小括	
3.環境変化と近居の関係	-63
3-1.アンケート調査概要	
3-2.建替えと近居への意向	
3-3.住環境と近居への意向	
3-4.小括	

4.近居の支援機能の実態 -83

4-1.相互支援と近居のリスク

4-2.近居ならではの外出行動の特徴

4-3.小括

5.まとめ -103

5-1.結果の考察

5-2.実態からみた課題

5-3.結論と提言

12WA901 金 由羅

指導教員 大原一興 教授 藤岡泰寛 准教授

1. 研究の目的と方法

高度経済成長期に都市へ集中する労働人口の受け皿として開発された大都市近郊の郊外住宅地は自然に近く緑も豊かな地域に住宅地とその生活を支える商業施設、教育環境が計画的に開発された。開発されて 40～50 年経過して団地の老朽化、高齢化が進んでいる。しかし、住み慣れた地域にそのまま住み続けたいという声も多く、また高齢での住み替えは身体的、精神的に負担が大きいことも良く知られている。

こうしたなかで、親族近居への期待は広がりを見せている。UR 都市機構や地方自治体では、家賃補助や引っ越し費用の補助等によって高齢親世帯と若年子世帯との近居を促進しようとする試みもみられる。しかし、その多くの事業は地域内に近居世帯が住み始めるための支援であり、近居した後の生活については各世帯に任されている。また、ひとくちに近居といっても、その様態は様々であり、どのような近居がより望ましいのか、はっきりとはわからないまま制度化が先行しているのが現状である。

既往研究によると同居、二世帯住宅、近居などですでに一般的な住まい方として既に広く普及しており、親族近居が親世帯や子世帯の居住の安定に寄与する可能性が挙げられている。しかし、日常的な生活のなかで近居という住まい方をどのように有機的に関係づけていくべきかといった視点については必ずしも明らかとされていない。また、近年の長寿化に伴う在宅ケア重視へのシフトや、共働き率上昇に伴い育児サポートを必要とする人たちの増加等の社会構造的な変化とこうした住まい方の特徴や具体的事例についての研究も十分にされてないと見える。老朽化、高齢化が進んでいる郊外住宅団地において、若年層の流入策の一つと

して、または不足しているサービス施設への対案として近居が推奨されている今、近居と日常生活に対する関連性や将来変化による計画における正確な視点が必要とされている。

本研究では日常生活と近居親族との関係や、親族近居の地域内での支援資源としての可能性を発見する手がかりとして外出行動に着目する。高齢化、人口減少の進行する郊外住宅団地において閉じこもり孤立することなく多世代が安心して暮らすことのできる近居のあり方を外出行動と近居経緯の視点から考察し、幅広い生活と時間による変化への近居の有効性を明らかにすることが研究目的である。

2. 近居の実態と生活との関係

丘陵地で地理的に不便な団地を対象地域として選定する。横浜市旭区に位置する左近山団地は昭和 43 年から都市再生機構によって丘陵地形と緑を残しながら開発された中層 5 階建ての階段室型住棟を基本とする団地であり、分譲街区と賃貸街区がほぼ同時期に建設され混在している。

左近山団地の居住者を対象としてアンケート調査か

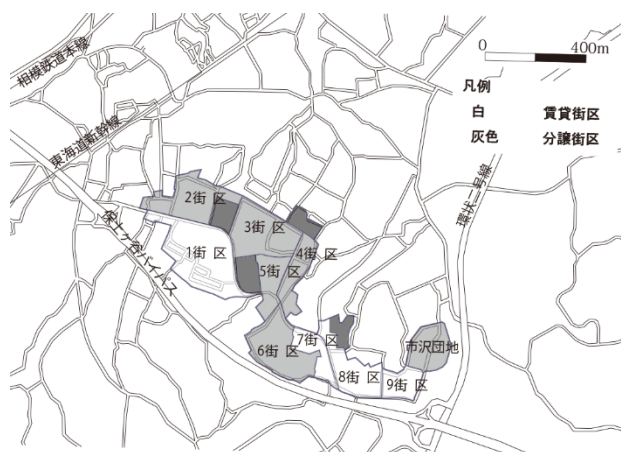


図1 左近山団地

Study on mutual support among close-residential relationship in suburban area.

KIM, Yura

close-residential relationship, suburb housing estate, going-out activity

ら外出行動と近居との関係に着目する。日常生活での親族近居の特徴や有効性を見出すことが本章の目的である。

まず、居住実態と居留意向を把握することを目的としたアンケート調査を実施した。その結果、団地内に限定した近居率をみると、賃貸街区では301人中37人(約12.3%)、分譲街区では449人中66人(約14.7%)という結果となった。また、分譲街区での調査では団地周辺地域まで含めた近居率は分譲街区で449人中135人(約30.1%)であった。

近居世帯の物理的距離を見てみると、近居相手の住所は団地内と外で半々であった。住戸間の距離は20分以内、200m圏内の歩道圏に集中していて、同一住棟や隣住棟といった50m圏内のケースも多く見られる。近居の距離はできるだけ近くしたい傾向があると思われる。(図2)

次に、近居している世帯の日常生活をはかる尺度と

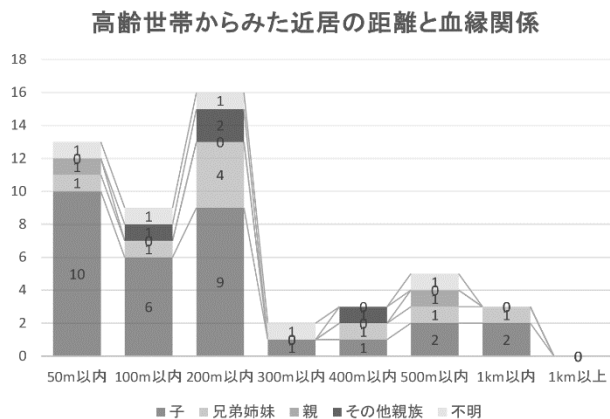


図2 高齢世帯の近居あり群の世帯間の距離と血縁関係
表1 近居の有無と外出行動との関係

		子育て世帯69人		高齢世帯495人			
		近居あり 38人	近居なし 28人	近居あり 135人	近居なし 314人		
外出頻度	毎日	29 (76%)	25 (89%)	48 (36%)	118 (38%)	外出目的	
	4~5	5 (13%)	0 (0%)	44 (33%)	78 (25%)		
	2~3	2 (5%)	1 (4%)	27 (20%)	75 (24%)		
	外出しない	0 (0%)	1 (4%)	5 (4%)	12 (4%)		
外出目的	買い物	33 (87%)	26 (93%)	108 (80%)	236 (75%)		
	仕事	26 (68%)	23 (82%)	16 (12%)	58 (18%)		
	通院	7 (18%)	4 (14%)	75 (56%)	142 (45%)		
	家族・知人宅訪	17 (45%)	6 (21%)	26 (19%)	31 (10%)		
	外食	11 (29%)	10 (36%)	19 (14%)	41 (13%)		
	散歩	6 (16%)	10 (36%)	61 (45%)	108 (34%)		
	趣味	8 (21%)	6 (21%)	50 (37%)	93 (30%)		
	ボランティア	0 (0%)	2 (7%)	12 (9%)	27 (9%)		
外出手段	その他	4 (11%)	1 (4%)	2 (1%)	6 (2%)		
	自家用車	21 (55%)	14 (50%)	38 (28%)	76 (24%)	外出手段	
	家族運転	7 (18%)	7 (25%)	18 (13%)	31 (10%)		
	タクシー	3 (8%)	2 (7%)	18 (13%)	36 (11%)		
	送迎バス	1 (3%)	0 (0%)	4 (3%)	14 (4%)		
	バス・電車	21 (55%)	16 (57%)	87 (64%)	220 (70%)		
	車いす	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)		
	自転車・バイク	9 (24%)	12 (43%)	6 (4%)	25 (8%)		
	徒歩	27 (71%)	19 (68%)	82 (61%)	176 (56%)		
	福祉サービス	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)	3 (1%)		
	その他	0 (0%)	1 (4%)	1 (1%)	2 (1%)		

して、日常的な外出行動に着目、「外出頻度」「外出目的」「外出手段」の3つの視点から傾向と近居の関係について分析を行った。

高齢世帯と子育て世帯のそれぞれについて近居の有無との関係を整理した結果、「外出頻度」と「外出手段」については明確な差は認められなかったが、「外出目的」については、近居の有無の違いによっていくつか有意差が認められた。具体的には、子育て世帯においては「家族・知人宅訪問」を目的とする外出、高齢世帯においては「家族・知人宅訪問」「通院」「散歩」を目的とする外出について、それぞれ近居あり世帯と近居なし世帯との有意な差が認められた。

子育て世帯と高齢世帯に共通して「家族・知人宅訪問」を目的とする外出について有意な差がみられたことは、近居が単に近くに住んでいるという「状態」だけでなく、実際に互いの家を行き来する外出行動にもつながっていることを示しているといえる。特に高齢世帯においてこの傾向(近居なし世帯との有意な差)が認められた。

また、高齢世帯にのみ差が認められた「通院」「散歩」については、子世帯による車送迎が親世帯の通院の移動負担を軽減している可能性、保育所・幼稚園・学童保育等への孫の送り迎えや孫との散歩などが親世帯の外出につながっている可能性などが考えられる。

3. 環境変化と近居の関係

建て替えを経た団地を対象地域として選定する。神奈川県茅ヶ崎市に位置する浜見平団地は昭和39年10月に都市再生機構によって建設された、総住棟数93棟、3407戸の大規模郊外住宅団地である。団地の中心にバス路線が通り、最寄りの鉄道駅である茅ヶ崎駅までバスでアクセスが可能である。地形は平坦地で歩行や自転車による移動に不便ではない。

当該団地は都市再生機構によって平成16年度に建て替え事業着手団地に指定され現在、浜見平団地には建て替えを終えた新建物と建て替え待ちの既存建物が混住している状態である。また、古い建物を撤去した一部は民間開発が行われ、新しく分譲マンションが建てられた。

アンケートの分析は建て替えというイベントによる変化に視点を当てて行うために、既存建物はもともとそこに住んでいた群と住み替えのための借り住まい群

に分け、新建物の方は元浜見平団地住民である戻り入居と団地の外からの入居で分けて分析を行う。団地の外からの入居はさらに団地の周辺からの入居とそれ以外に分ける。環境変化での親族近居のあり方を把握するため、建替えを経た対象地を居住移動という変化と周辺環境の変化という2つの視点から比較分析することを試みた。

戻り入居世帯が新建物居住世帯の82%と非常に高い。また、新建物の世帯主65歳以上の世帯は81%で既存建物の既存住民より高齢化率が上がった。高齢者の住み慣れた地域で住み続けたいという希望が原因の一つといえる。

建替え後の団地で近居率は上がっている。新しく住居を探すにあたって多くの世帯が近居を選択肢として挙げていると考えられる。建替え計画で最低2回の引っ越しをしなければいけない既存建物の仮住まい群においては65歳以上の世帯の近居率が特に高く、親族近居が高齢者の引っ越しへの負担軽減に寄与していると考えられる。平坦地で交通便が比較的便利な浜見

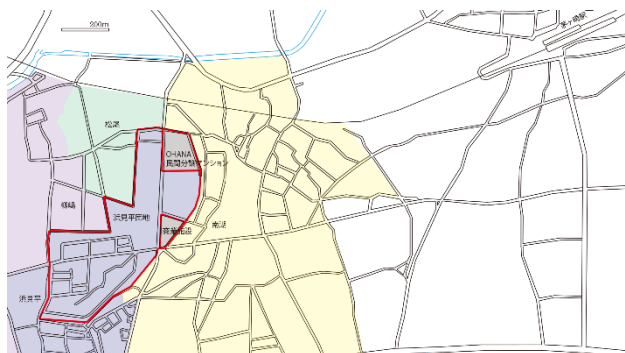


図3 浜見平団地

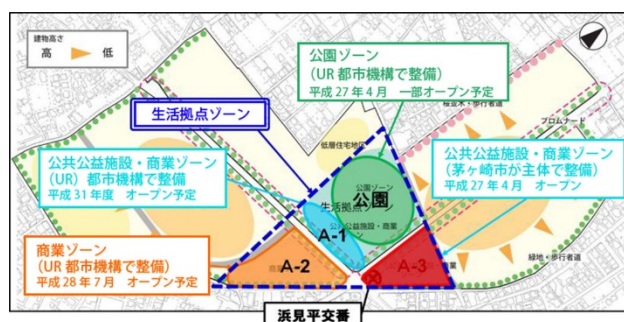


図4 浜見平団地 生活拠点ゾーン

表2 回答者の分類と近居有無

既存建物				新建物			
168				218			
既存住民		仮り住まい		戻り入居		外部入居	
133	79%	35	21%	182	83%	36	17%
近居あり	近居なし	近居あり	近居なし	近居あり	近居なし	近居あり	近居なし
29	22%	104	78%	11	31%	24	69%
45	25%	137	75%	4	11%	32	89%

平団地の地理的特徴のゆえ、多少離れている親族世帯と頻繁に付き合いがある世帯で、さらに近く住むことを望んでいる層も見られた。引っ越しを経験した群では65歳以下の子世帯の近居率が高く、約30%となっている。特に住居が一新した戻り入居群の子世帯においては既存建物の3倍くらいの近居率であった。

しかし、高い近居率と近居への希望をみせるが、「日常的に助かる」の回答は近居あり群の半数以下であり、かならずしもどちらかの世帯が「現在」近居へ直接的な期待があって近居を決めたわけではないことがわかった。

既存建物の近居あり群と新建物の近居あり群を比較したら、新しく近居をはじめた新建物の方より既存建物の方が、「子・孫育て支援をする」「家事の援助をする」の頻度が高い高い傾向であった。近居なし群においても「子・孫育て支援をする」項目で既存建物の方が高い頻度を見せた。

4. 近居の支援機能の実態

近居経緯と日常的な外出行動について、親族近居世帯へのヒアリング調査を行った。左近山団地のヒアリング対象となった世帯は管理組合を通じて協力が得られた世帯であり、このため団地内での近居世帯に限られている。左近山団地の分譲街区におけるヒアリング調査は2014年6月に実施され、対象となった世帯は親世帯が7、子世帯が6であり、このうち血縁関係のある親子世帯がそれぞれ2世帯含まれる結果となった。(表3) 浜見平団地ではアンケート調査に回答する時にヒアリング調査へ協力できると連絡先を記入した世帯のうち近居している世帯を対象に2016年11月にヒアリング調査を行った。ヒアリングの内容はアンケートへの回答について理由などをさらに詳しく聞き、かつ近居世帯との付き合いについては過去の付き合い方も調査した。(表4)

互いのサポートニーズによって実行された近居が多く見られるが、中には親世帯が別の目的で余分に確保しておいた住戸が子世帯の近居の住まいとして置き換わるケースが見られた。経済的にゆとりのない子育て世帯に対して、親世帯からの実質的な経済的支援とみることができ、親世帯にとってもこうした空間的余裕を備えておくことは担保物権としての活用可能性もふくめた老後の居住の安定につながると考えられる。

表3 左近山団地でのヒアリング

ヒアリング対象世帯の概要	ID	親①/KN	親②/KB	親③/NE	親④/EM	親⑤/YS	親⑥/WN	親⑦/KS	子①/NT	子②/HN	子③/TM	子④/NJ
	現在の年齢	79	87	86	73	69	87	80	70	46	47	不明
	性別	男	男	男	女	女	女	男	女	女	男	女
	家族構成	夫婦	夫婦	夫婦	単身	単身(長女同居)	夫婦	夫婦	単身(次女同居)	夫婦と子ども	夫婦と子ども	夫婦と子ども
	入居開始	1999年	1969年	1968年	2005年	1988年	1975年	1968年	1976年	1994年	1995年	1999年
	居住街区	3街区	3街区	3街区	5街区	3街区	3街区	3街区	4街区	3街区	3街区	3街区
親族近居の概要	近居親族	長男家族	長女家族	次男家族(長男は幼い頃に死去)	長男夫婦	三女家族	次女家族	長男家族	母	両親と妹	両親	妻の母と夫の父
	子世帯の共働きの有無	有(妻パート)	有(妻フルタイム)	有(妻パート)	無	無	有(妻パート)	無	無	有(フルタイム、夫は単身赴任)	有(妻パート)	有(妻パート)
	親世帯の生活支援・介護支援の有無	妻は要介護2、週2～3回複数の医院に通院	一時期要介護1(現在は回復)、週3回通院	妻が週3回のリハビリ施設への通所	無	無	無	無	普段はデイサービスを利用。家事全般支援	無	無	家事支援程度
	入居開始	2002年	1989年	1988年頃と1993年	2006年	2005年	2003年	1997年	2007年と2010年	1971年	1969年	母は1980年父は1985年
	居住街区	3街区	5街区	3街区→3街区	3街区	4街区	3街区	3街区	7街区→4街区	3街区	3街区	母は3街区父は7街区→3街区
	準近居世帯	なし	長男家族	三男家族	なし	なし	長女家族	なし	長女家族	なし	なし	なし
	近居経緯	息子が結婚して左近山で新居を探した。候補となった3軒のうち結果的に親世帯から一番近い家に決めた。	長女が結婚して新居を探しているときにたまたま売りに出していた家。近くて条件もよく決めた。息子も車で15分ぐらいのところに住んでいる。	階段室向かいの家が転居する際、子ども部屋用に購入していたが、売却して近居するために左近山団地の2軒を購入した。	同居用に別の団地の分譲住宅を購入していたが、売却して近居するために左近山団地の2軒を購入した。	娘が家族連れで訪ねてくるので、自宅とは別の住戸をゲストハウス用に買っていた。そこに三女家族が孫を連れて移り住んできた。	次女夫婦に子どもが生まれ、生まれる直前に左近山に引っ越してきた。	孫が生まれて1歳3ヶ月のころに隣の住棟に引っ越してきた。昨年息子の義母が独り身になったのでここに越してきた。	現在99歳になる母が92歳のときに賃貸街区の1階(高便室)に呼び寄せた。その後、4街区の同じ住棟で物件を見つけて購入し、移ってきてもらった。	両親(70歳代前半)と妹が住んでいたこと、子育ての手助けが必要となり移ってきた。	両親が二人で住んでいて、自分が結婚して子どもが生まれたときに移ってきた。価格も手ごろだった。	夫婦ともにこの団地で生まれ育っていたこともあり、偶然売りに出していた家を買った。妻の母は3街区で一人暮らし、夫の父は賃貸街区に住んでいたが4年前に3街区に呼び寄せた。
	近居距離	徒歩5分	徒歩4分	徒歩2分	徒歩5分	徒歩2分	徒歩5分	徒歩2分	徒歩2分	徒歩2分	徒歩2分	徒歩2分 徒歩2分
主な外出行動とその目的	単独で	妻の通院の送迎(週2～3回)、貸し菜園など	週3回のリハビリにバスで通っている。リハビリを兼ねて毎日散歩している。	妻が週3回のリハビリ施設への通所(施設の送迎車がかかる)	週に1～2回パート勤め。その他友人との外出を含めると週5～6日は外出。	月に1回の通院、2～3日に1回は団地内スーパーで買い物する。	月20日パート勤めをしている。	スポーツジムに週4回通っている。日常的にスーパーで買い物をする。	毎日散歩(1日7000歩)している。平日の買い物は団地内のスーパーを利用。	共働きしている。買い物は団地内のスーパーを利用。休日は長女の子供サッカールの応援。	共働きしている。買い物は団地内のスーパーを利用。	共働きしている。買い物は団地内のスーパーを利用。休日は息子のサッカーの応援。
	子から親(自宅)	月3～4日、孫を一日預けに来る。	長女が毎日のように来てくれる。	次男が週に1回は来る。孫が小さいときはもっと頻りに来ていた。	ほとんどない	週に2～3回孫を連れてくる。	孫が小学生にあがってから来なくなった。	孫が小さいときにはよく遊びに来ていた。息子が来るとは月に1回ぐらい。	毎日数回食事を作り、にいたり、デイサービスの見送りをしている。昼食と夕食は母宅で食べる。	ほとんどない	子供たちが小さいときは、よく両親の家に遊びに行っていた。今は用がないと行かない。	母方にはほとんど行かない。父方には洗濯・買い物・通院などで週に1回は必ず顔をを出す。
	親から子(自宅)	妻が体調を崩す前はよく行っていたが最近では行かなくなった。	以前は何かあるたびに訪ねていたが今は3ヶ月に1回ぐらい。	減少に行かない。年に1回ぐらい。	月1回ぐらい訪ねる程度	週に2～3回は行く。	娘夫婦が共働きなので、平日は毎日のように娘の家にいき、家事をしてあげている。	いけない(足が悪いので階段が登れない)	ほとんどない	母が、平日は毎日家事をしに来てくれる。	ほとんどない	母方は週に1回程度訪ねてくる。父方はほとんど来ない。
	親子で(団地内)	特になし	孫が小さいときには三輪車の乗り方を教えたが、今はない。	妻が数年前に入院してから、近所での買い物や病院などに出かけるときには、息子が車を出してくれるようになった。	特になし	特になし	孫が幼いころ幼稚園のお迎えの帰りによく一緒に遊んだが、今は一緒に遊ぶこともなくなった。	ときどき車で一緒に通出している。買い物する。あとは月1回の主人の通院に娘が車を出してくれる程度。	特になし	ときどき団地内の診療所に連れて行く。	特になし	特になし
	親子で(団地外)	息子の結婚当時はよく外食に連れて行っていたが最近ではなくなった。	年に2回ぐらい外食に行く程度。	以前は一緒に外食することもあったが今はなくなった。	たまに一緒に銭湯にいたり、外食にいたりする程度。	たまに一緒に旅行に行く程度。	特になし	たまに一緒に旅行に行く程度。	特になし	家族の誕生日に外食する程度。	たまに外食する程度	特になし

近居世帯の物理的距離は歩道圏内にできるだけ近く住みたい傾向を見せたが、近居体験後近すぎたことが不利となり、隣接住戸から隣の住棟に移すなど適度に離れていることの方が望ましいというケースもみられた。互いの家の訪問など相手世帯がサポートを必要としている時の外出行動が近居世帯ならでの外出行動として見られた。特に子世帯から親世帯へと偏る傾向がある。しかしサポート目的以外で一緒に出かけることはほとんど見られず、親族近居が必ずしも日常的な地域での外出行動に関係しているわけではないことがわかった。子世帯は家事援助や外出支援などの親世帯の生活援助、親世帯は家事援助や孫の送迎・一時預かり

などの育児支援がそれぞれ主な目的としており、いずれも近居親族は有力なサポート提供者となっていた。しかし、両世帯に身体的又は時間的余裕がなく互いがサポートを必要としている場合にはむしろ負担となる可能性も指摘された。

近居は空間の独立性から同居、隣居とは大きく異なり、そのゆえ世帯間の距離が各世帯の生活に深く影響している。互いにどのようなサポートを受けたいか、またどれくらいの私生活の分離を必要としているかによって適切な距離をとることになっている。私生活の分離は日常外出で同伴外出がほとんど見られないことから確認することができる。

表3 浜見平団地でのヒアリング

	浜①Sさん	浜②Mさん	浜③Kさん	浜④KSさん
性別（年齢）	女（72）	男（73）	女（80）	男（88）
同居家族	夫と二人暮らし	一人暮らし	夫と二人暮らし	妻と二人暮らし
職業	6月まで働いて現在無職	自営業	無職	無職（以前は東京で教師）
近居親族	長女（40代）	次女	長男、長女	長男
家族構成	独身	夫、子供二人（大学生、高校生）	長男家族：妻、子供1人 長女家族：夫、子供2人、義理の親（二世帯）	妻（子供はない）
近居居住地	柳島町／徒歩15分	中島／自転車10分	長男家族：南湖2丁目／徒歩10分 長女家族：柳島2丁目／徒歩10分	川崎市／電車60分＋バス30分
特異事項	一時福島へ転勤した兄（回答者の長男）の家に住んでいる。2017年4月に兄が戻ってからの居住地が決まっていない。	以前の住まいは茅ヶ崎市。次女とは孫が小さい時から近居している。	長女の家族は以前は浜見平団地に住んでいて義理の親とも近居をしていて、現在二世帯住宅を建て義理の親と同居。 以前子どもが小さい時は回答者が週2回育児支援、義理の親に週3回育児支援をうけていた。幼稚園の迎えと夕食の時まで回答者	回答者は団地の開発初期から浜見平団地に住んでいる。息子家族が近くに来てほしいが、職業が東京なので難しい。 奥さんは毎週通院をしていて、一人で外出が難しい。
安心感・負担感	・具合がわるくなった時などに頼りになる	・非常時に助けになると思う	・長男には重いものの買い物を手伝ってもらっている。 ・将来的に助けになると思う ・長女家族との付き合いに気遣いなどの負担感がある	・非常時に助けになると思う。 ・すぐには無理だけど、いざというときに助けになる。
訪問外出	親族からの訪問 ・月に2回ほど：帰りによる	回答者からの訪問 ・2,3か月に1回ほど	親族からの訪問 ・月1回以上	親族からの訪問 ・月2回程度
同伴外出	・家で食事をする ・食料を分け合う		・長男が子供をつれて週末などに来る。 ・子供が小さい時は幼稚園迎えにいて夕食の時まで孫の面倒をみた。	・長男が一人でくる。家庭料理を食べて帰る。 ・一緒に散歩する。
将来	現在の賃料が高いので息子との同居を考えている。	同居は考えていない。たまにいて分はいいけど一緒に暮らすのは無理。	・月に1回以上：長女の家族みんなと食事をする。一緒に趣味（カラオケ）活動をする。	・月に1回程度：長男に茅ヶ崎市内にショッピングにつれてもらう。 ・月に1回より少ない：一緒に外食にてかける。一緒に散歩する ・自分が用事があるとき、妻の通院の付き添いを頼む。 ・奥さんが先になくなったなら、息子と同居をする。 ・自分が先になくなったなら、奥さんは施設に行く。

5. まとめ

① 生活ニーズへの対応としての近居

子育て世帯の近居ニーズは潜在的に高い。左近山団地では、子育て世帯の約3割が前居住地を当該団地と回答しており、かつ、将来的に親と同・近居したいとの意向も約6割と高く、今後も引き続き近居ニーズは存在すると考えられる。一方で左近山団地については経年経過による公園遊具や歩行者路などの老朽化への不満もみられた。住環境への希望を多少あきらめても親族との近居を選択する切実な近居となる可能性も大きいだろう。浜見平団地でも建替え後の新建物をみると65歳未満の世帯のうち近居世帯は3割と建替え前の既存建物に比べ高い近居率を上げていた。一新した施設と住環境が若年世帯にとって近居に応じやすい結果となったと考えられる。また、既存建物群より新建物の方が近居世帯間の付き合いが多い傾向がみられた。親世帯の近居に対する考えは「子世帯に負担をかけてはならない」という考えが強く、近居を望んではいるものの積極的に進めていないケースもみられた。親世帯の場合、時間が経過とともにサポートを必要とするところが増えるため、将来への不安が近居ニーズにつながる傾向があった。

② 近居を成立させる環境条件

親世帯の入居の際に、別の目的で取得した余裕住戸が子世帯の近居の住まいとして置き換わるケースが見られた。経済的にゆとりのない子育て世帯に対して、親世帯からの実質的な経済的支援とみることも可能であり、親世帯にとってもこうした空間的余裕を備えておくことは担保物件としての活用可能性もふくめた老後の居住の安定につながると考えられる。浜見平団地は、建替えて住居の経済性が上がったことが働いたか、子世帯を呼び寄せたケースは多く見られなかった。また、子育て世帯では土地勘があることや施設環境の一新などが近居へ応じやすい要因となっていた。左近山団地での調査では、近居相手の居住地は団地内と団地外で半々であった。住戸間距離は20分以内、200m圏内の徒歩圏に集中していて、同一住棟や隣住棟といった50m圏内のケースも多く見られた。団地内住戸の個体差は少なく、できるだけ近くに住みたいとする意向が結果として現れたものと考えられる。浜見平団地での調査では、当該団地とその隣地に近居している親族との距離に対し「ちょうどいい近さ」と80%以上が回答、「さらに近くがいい」まで合わせ約90%と、できるだけ近くに住みたい意向を示した。

一方で、必ずしも近ければよいというわけではなく、たとえば介護期は在宅が中心となるため隣接していることが望ましいが、乳幼児期は必ずしも隣接している必要はないため、適度に離れていることの方が望ましいという考えもみられた。近居世帯間で求められている距離は今現在の相互支援行動、訪問行動、外出行動などと世帯がどのように付き合いに深くかかわっている。また、近居世帯間の関係から生じる「気遣いなどの負担感」も距離をとる要因として思われる。

③ 近居における外出の意味

近居ならではの外出行動としては互いの家を行き来する訪問外出がみられる。特に子世帯から親世帯への訪問外出の方に偏る傾向が見られた。この訪問外出は支援、物資の共有といった目的のついでとなることが多いが、まだ一人暮らしの子世帯の場合は会社帰りに寄る、食事をするなどと近居世帯の住居を含めて日常生活圏としているケースもあった。また、この日常生活での訪問外出は必ずしも世帯構成員の全員が行うわけではなく、近居世帯の親族の方のみが行うことが多い。同伴外出については、どちらかの世帯がサポートを必要としている時期以外はほとんど見られず、親族近居が必ずしも日常的な地域での外出行動に関係しているわけではないことがわかった。しかし、浜見平団地の場合では「散歩」と「外食」などと近居世帯同伴外出の事例が左近山団地のそれより多く、地域内の環境がこういった付き合いの上昇につながることもわかった。

④ 近居による生活への影響

子世帯は家事援助や外出支援などの親世帯の生活援助、親世帯は家事援助や孫の送迎・一時預かりなどの育児支援がそれぞれ主な目的としており、いずれも近居親族は有力なサポート提供者となっていた。しかし、両世帯に身体的又は時間的余裕がなく互いがサポートを必要としている場合にはむしろ負担となる可能性も指摘された。以上から親族近居の実態および近居世帯の外出行動と相互支援の実態を事例的に明らかにした。近くで離れて支え合って暮らす住まい方として近居の広がりへの期待は大きいですが、一方で、長寿化や共働き率上昇といった社会構造の変化にともない、場合によっては育児期と要介護期が重複するケース、親も子ども在宅で高齢となり老々介護となるケースなどが

みられることもわかった。

この重複リスクは晩産化や長寿化によって今後拡大・長期化する可能性も考えられ、同居あるいは二世帯住宅とは異なる近居ならではの空間的独立がどのような問題を生じるのか注意を要する。また、近居ならではの外出行動のなかでも、たとえば未就学児がいる時期や、親世帯の身体機能が低下していく時期など、一定期間内に集中的にあらわれる外出行動については、本研究では必ずしもその特徴を明らかとすることができなかった。今後の課題であろう。さらに付け加えるとすれば、近居ニーズが特に子育て世帯に偏って形作られていた点にも注意が必要である。背景には子育て世帯に対する公的サービスや近隣地域からのインフォーマルなサポートが少子化の進む郊外住宅団地で不足しており、その裏返しとして最も身近な親からのサポートへの期待が高まっていることが推察される。

近くで離れて支え合って暮らすという近居の利点を活かすためにも、近居世帯間だけの相互支援に閉じるのではなく地域の様々なサポート資源とも関係をもっていく視点が重要であろうと考えられる。

【参考文献】

1. 大月敏雄＋住総研：「近居 少子高齢社会の住まい・地域再生にどう活かすか」、学芸出版社、2014
2. 在塚 礼子：「老人・家族・住まい」、住まいの図書館出版局、1992
3. 上和田 茂，鳥飼 香代子，山田 英代，付 開楠：準近居の存在からみた老親世帯の自立と支援を止揚するサポート居住の動向：親子の居住関係を軸とする高齢者のサポート構造に関する研究 その 1、日本建築学会計画系論文集 (566)，9-16，2003-04-30
4. 松本 吉彦，入澤 敦子，添田 昌志，任 智顕：近居と同居における「孫共育」の比較：親子ネットワーク居住の実態調査(1)、学術演梗概集，E-2，建築計画 II，住居・住宅地，農村計画，教育 2010，219-220，2010-07-20
5. 松本恭治，吉田進一，江口司津：長期経過した公的分譲集合住宅団地における居住者の高齢化と住まい方，その 3 親族近居の実態，日本建築学会大会学術講演梗概集，F-1，pp. 1197-1198，995
6. 金 由羅，藤岡 泰寛，加藤 仁美，山口 剛史，大原一興：郊外住宅団地における親族近居世帯の外出行動の特徴に関する研究：親族近居世帯間の相互支援に着目して，日本建築学会計画系論文集 81(728)，2163-2172，2016-10

【謝辞】

本研究を進めるにあたり、左近山団地 789 街区、市沢団地、市沢住宅地区の 3 自治会、左近山団地 345 街区管理組合の皆様と東海大学の加藤仁美教授ならびに研究室の方々に多大な協力をいただいた。また、浜見平団地の研究については 2005 年度より継続して行っている浜見平団地再生支援研究会（日本大学建築・地域共生デザイン研究室と横浜国立大学建築計画研究室の協同研究）によるものであり、研究に際しては、浜見平団地自治会の協力を得た。ここに記して御礼申し上げる。

Study on mutual support among close-residential relationship in suburban area.

Suburban residential area was developed as a receptacle for the working population concentrating on cities during the period of high economic growth. Such area has advanced 40 to 50 years after being developed and the aging of both buildings and residents are proceeding. However, there are also a lot of voices that want to continue to live in a familiar area where they lived for long time. It is also well known that moving at older age is physically and mentally burdensome.

Under such circumstances, expectations for close-residential relationship between relatives are spreading. Urban Renaissance Agency and some of local governments have also tried to promote close-residential relationship between parents and young households by assisting rent, moving expenses, etc. However, many of these projects are support only to start living in the area, and each household is responsible for life after moving in. As for the present situation, institutionalization is preceding without clearly knowing which of close-residential relationship is more desirable.

In previous studies, cohabiting, Two-household house, and close-residential relationship have already spread widely as general way of living. And the possibility that relatives in close-residential relationship can contribute to the stability of the residence, both elderly parent households and young child household. However, because of social structural changes such as longevity of the elderly person, double-income couple, and changes of family members, the differences appear in close-residential relationship between past and present.

Since close-residential relationship is recommended as a young age inflow measure in suburban residential area, it is now necessary to have an accurate viewpoint on the relationship between close-residential relationship and daily life, and how it effect on the future life.

Based on previous studies about how close-residential relationship plays a constant role by reducing the risk of daily life for the elderly households and child care support for raising child households, this study focus on going out activity to analyze the relationship between daily life and close-residential relationship and the possibility of support resources within the area of close relatives. The purpose of this study is to clarify the effectiveness of close-residential relationship to changes in a wide range of living and time from the viewpoint of going out behavior and process of close-residential relationship.

First, As the research object, geographically inconvenient housing estates on hilly area was selected. Located in Asahi-ku Yokohama City Kanagawa Prefecture, the Sakonyama Complex is five-story apartment buildings based residential area, which was developed by the Urban Renaissance Agency in 1968. In order to find out the characteristics and effectiveness of the close-residential relationship in daily life, a questionnaire was conducted for residents of Sakonyama Complex focused on the relationship between the going out behavior and the close-residential relationship.

Secondly, a housing estates which is on rebuilding plan was selected as the research object. The Hamamidaira Complex located in Chigasaki City Kanagawa Prefecture, is a large-scale suburban residential area with 3407 households, totaling 93 buildings constructed by the Urban Renaissance Agency in October 1964. The bus access to Chigasaki station, the nearest railway station passes through the center of the housing area. The terrain is flat and not too inconvenient for walking or bicycle movement. The Hamamidaira Complex was designated by the Urban Renaissance Agency in 2004 as a rebuilding project starting apartment. Now, the new building that has completed rebuilding and the existing previous buildings waiting for rebuilding are mixed in the Hamamidaira Complex. Also, some of the previous buildings were removed, and private development was conducted a new condominium at the area. A questionnaire was conducted for residents of Hamamidaira Complex, both the previous building and the new building, to see how the relationship between nearby relative changed after rebuilding plan. In order to analyze the questionnaire by focusing on the change due to the event of rebuilding, the previous building group is divided into the group that originally lived there and the borrowed group who live there temporarily before they move to the new building. And the new building group is divided into the former Hamamidaira Complex residents, people moved from surrounding areas, and others. In order to grasp the ideal way of close-residential relationship in environmental changes, analyze was held from two perspectives: a change of residence movement and a change of the surrounding environment.

In addition, I interviewed on households who are in close-residential relationship about how they and their close-residential household moved in and details of going-out activity. The households that were interviewed by the Sakonyama Complex are those who cooperated through the management association. The interview survey was conducted in June 2014, and the target households were 7 parent households and 6 child households, of which the blood related parent-child households each included 2 households. In the Hamamidaira Complex, interview survey was conducted in November 2016 for households who are in close-residential relationship mentioned that they could cooperate in the interview when answering the questionnaire survey.

The following information was revealed about the

① The present conditions for close-residential relationship

The need of close-residential relationship in raising child households is potentially high. About 60% replies that they want to do live together or live close to the parents household. It can be telling that the close-residential needs exist sequentially in future

② Process of close-residential relationship

The most reason is carried out by each other's support need. It is often showed that the dwelling unit which parents household secured extra was replaced by as a house of child household. For the raising child household in lack of spare, it can be considered as substantial economic support from the parents household.

③ Characteristic of close-residential relationship: physical distance

The distance between the households is concentrated in the walk distance zone within the range of 200m for less than 20 minutes, and the case within the range of 50m such as the same building and the next building is frequent also. However, there is a case which moved to the next building after lived in the same building.

④ Characteristic of close-residential relationship: distance in living

Visiting each other's house to support when needed has showed in going-out activity. It tends to deviate in particular from the child household to the parents household. Without supporting purpose going out with each other can be barely seen, and it refers that close-residential relationship is not related with going-out activity

⑤ A purpose and burden of close-residential relationship

Close-residential relationship became a convincing support provider as both to child household and parents household. However, the possibility to rather burden when both households have no spare physically or in time but needed support was pointed out.

Adding the distance and geographical condition to data how daily going-out activity related with close-residential relationship can help understand specific situation of life in more comprehensive area and extract the problem. The mutual supports among such relationship are very effective. It is not only for the physical help but also mentally supportive especially for the elderly parent household who can be very risky with environment changes. It also can cause multi-generation interaction by two or more generations in close-residential relationship using or visiting the utilities in local area. However, the problems are shown in the area where support utilities are desperate. Recommending the close-residential relationship without planning out any utility maintenance make more of the burden to the people who are in need. Which shows the mutual support among such relationship should not be the trade-off for whole support facility yet need to be considerate as one.

郊外住宅団地における多世代近居からみた
世帯間相互支援行動に関する研究

第 1 章 研究の目的と方法

第1章 研究の目的と方法

1-1 研究の背景

1-1-1 高齢化の進展と郊外住宅団地における実態

高度経済成長期に都市へ集中する労働人口の受け皿として開発された大都市近郊の郊外住宅地は自然に近く緑も豊かな地域に住宅地とその生活を支える商業施設、教育環境が計画的に開発された。しかし、開発されて40～50年経過して団地の老朽化、高齢化が進んでいる。

郊外住宅団地は開発時に入居してきた世帯の年代が一定であったため、その世帯が短期間でほぼ同時に高齢化することで団地の高齢化がさらに加速している。また、若い世帯の独立がすすむにつれ、高齢者のみの世帯の割合の上昇と団地の次世代となる若年層が入ってこないことで空き住戸の増加などの共通した課題が見られる。

都心へのアクセスを考慮し鉄道駅を中心に立地されているが、丘陵地など地理的に交通不便な地域に造成・開発されたものも多い。中でも個別に開発の進んだ住宅団地は大きくてもニュータウンの1～2住区程度の規模で団地の開発時期の集中が住戸の間取りや面積等の種類の乏しさにもつながっている。小規模であるがゆえに商業機能の衰退や廃校などが日常生活へ及ぼす影響は大きい。一方、国の人口減少に伴う税収減等によって行政の対応力には限界が予測される。

しかし、住み慣れた地域にそのまま住み続けたいという声も多く、また高齢での住み替えは身体的に、精神的に負担が大きい^{文1)}ことも良く知られている。

高齢者のみ世帯の増加や共働き世帯の増加といった変化した環境への対応をするべく、地域内でサービスが自給自足できるように住民コミュニティ活動、施設の小規模多機能化などの活動が見えている。

文1-1

工藤禎子：都市部に引越した独居高齢者の危機管理（北海道医療大学看護福祉学部学会誌 9(1), pp.43-53, 2013.03)

1-1-2 近居の実態

こうしたなかで、親族世帯、特に親世帯と子世帯がいわゆる『スー
プの冷めない距離』^{注1)}に住み合う住まい方（以降、近居）への期
待は広がりを見せている。

近居は複数の世帯が一つの住居に住む同居とは違い、世帯がそれ
ぞれ住居を持つ。複数の世帯が各自住居を構えながら近くに住む、
その空間の独立性が近居の大きな特徴となっている。

その近居世帯間の物理的距離は明確に定められているわけではな
く、二世帯住宅の完全分離型^{注2)}や隣の敷地に住居を構える隣居も
近居とみなすことができ、同市内で暮らすことも世帯の感じ方に
よっては近居とされる。また、近居世帯間の関係も様々で親世帯と
子世帯間の近居だけではなく、甥・姪との近居もあり、兄弟姉妹間
の同年世帯近居や、祖父母と孫のようにかなり年代の離れた世帯の
近居もある。

その中で近年注目されるのは、若年世帯と高齢世帯の近居である。
若年子世帯（以降、子世帯と呼ぶ）が親世帯の近くに住むことによっ
て、高齢親世帯（以降、親世帯と呼ぶ）の日常生活の不安を軽減し、
家事等のサポートを期待できるなどがある。子世帯にとっても、特
に子育て中の子世帯にとっては、親世帯からの育児サポートが期待
できることから、一方通行ではなく相互の支え合いが期待される。
さらに、郊外住宅団地の場合は住環境としても歩車が分離されオー
プンスペースも広く確保され、住宅団地の空間が子育て環境として
十分に魅力的である。

このような観点からUR都市機構や地方自治体では、家賃補助や
引っ越し費用の補助等によって高齢親世帯と若年子世帯との近居を
促進しようとする試みもみられる。

注1-1

昭和41（1966）年版の『厚生白
書』に「住宅難の今日においては、
老人が子といわゆる『スー
プの冷めない距離』に住むことが早急
には期待できないとしても、たとえ
ば団地住宅の建設にあたってその
一部に老人向け住宅を確保すると
いった配慮をすることも考えられ
てよいであろう」と記述されてあ
る。

注1-2

1棟の建物の空間で分け、それぞ
れに個別の住宅機能をもたせる
か、2棟の建物を通路などでつな
いだ二世帯住宅の形式

1－1－3 近居を優遇する制度の実態

近年多くの機関で近居を優遇し促進させようとする動きがみられる。ここでいくつかの事例を紹介する。

注 1－3
UR都市機構の「近居割」制度の中
の定義
近居世帯のうち、現に同居する満
18 歳未満の子を扶養している世
帯

注 1－4
UR都市機構の「近居割」制度の中
の定義
近居世帯のうち、満 60 歳以上の
方を含む世帯扶養している世帯

注 1－5
<http://www.ur-net.go.jp/>
参照

注 1－6
民法 8 7 7 条第 1 項および第 2 項
に規定する者

UR 都市機構では「子育て世帯」^{注 3)}と「高齢社世帯」^{注 4)}が近居するということを条件に新たに UR 都市機構の団地に入居する世帯の家賃を最長 5 年間割引する「近居割」、「近居割 W I D E」という制度を実施している^{注 5)}。条件となる扶養対象子供が 18 歳になると割引対象から外れる。近居世帯の条件は 3 親等内の親族^{注 6)}となっている。世帯間の距離については同じ団地か、または 2km 以内の別の UR 団地であったが、新しくなった制度ではエリア内であれば UR 団地に住むケースも対象としている。対象となるエリアとは市または区を単位としている。

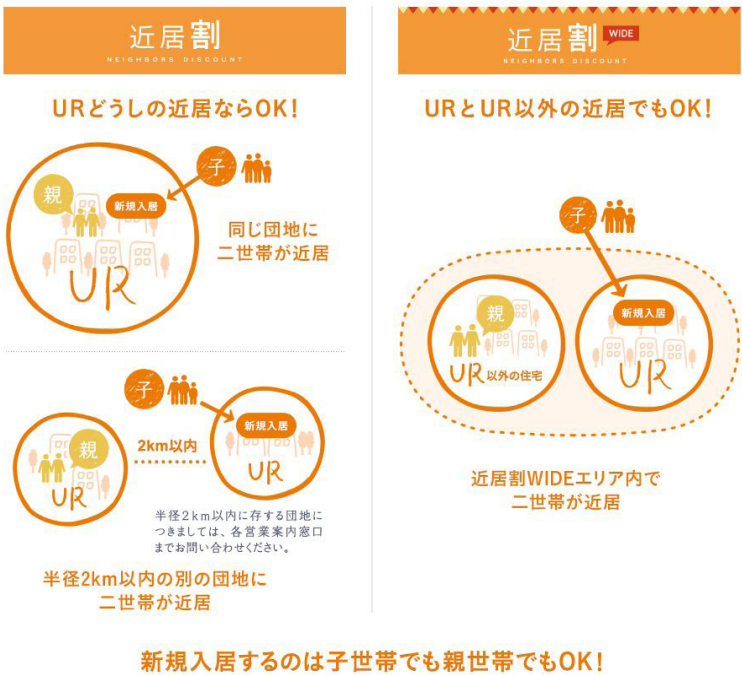


図 1－1 UR 都市機構の近居割制度

表 1－1 UR 都市機構の近居割 WIDE の対象エリア一部

東京	千葉	神奈川	埼玉
板橋区・練馬区	千葉市中央区	横浜市磯子区・港南区	富士見市・ふじみ野市
北区	千葉市花見川区	横浜市青葉区	所沢市
多摩市・八王子市・稲城市・町田市	浦安市	横浜市旭区・保土ヶ谷区	さいたま市見沼区
八王子市	船橋市	相模原市南区	上尾市
町田市	八千代市	茅ヶ崎市	春日部市
など	など	など	など

地域で行われている近居推奨の例をみると、まずは移転費用に対する補助がある。

兵庫県川西市の場合は、「川西市親元近居助成制度」で子育て世帯を対している。近居の基準は川西市内とされている。親世帯が川西市内で居住していて、子世帯が新たに市内でマイホームを取得する場合、その登記費用として司法書士等に支払った費用を対象に上限 20 万円まで助成する。また、「親元近居助成制度」に合わせ、地域振興連携協定を締結している銀行において「川西市 親元近居住宅ローン」といった利子の優遇制度もある。(図 1-2)

同県の三田市の「子育て世帯親元近居助成事業」では、登記費用の一部に合わせ、引っ越し費用も助成している。近居の基準は三田市内とされている。

上記 2 つの制度は子育て世帯の基準として出産予定を含めて 18 歳以下の子どもを有する世帯となっている。

神戸市の「神戸市親・子世帯の近居・同居住み替え助成事業」では、子育て世帯とその親世帯が近くに住むことになった場合の引っ越し代の助成^{注7)}をしている。子育て世帯の条件は小学校入学前の子供を有する世帯となっている。近居の距離については同一小学校区内もしくは直線距離で概ね 1.2 キロメートル以内で、市内転居の場合は親世帯も対象とされる。

注 1-7

引っ越し費用、不動産登記費用、仲介手数料、礼金を対象とする。

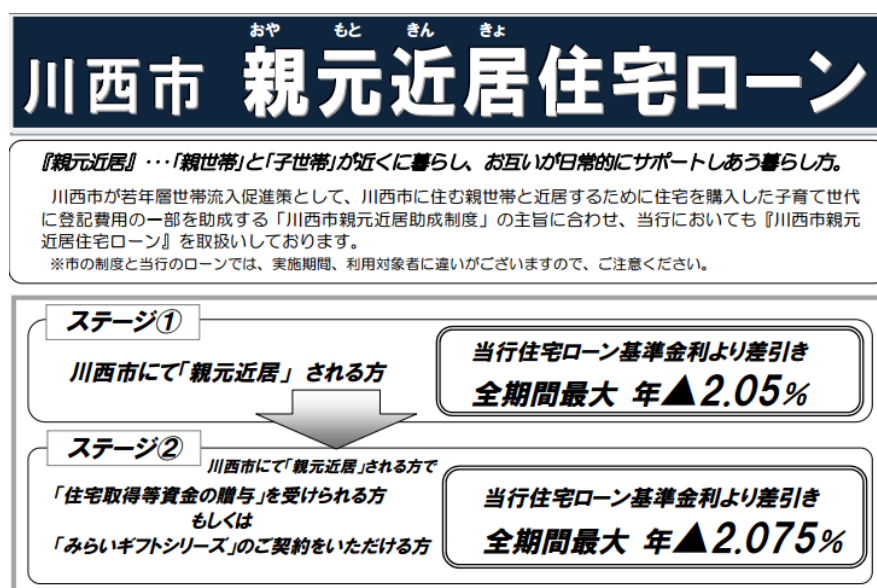


図 1-2 川西市 親元近居住宅ローン制度

住宅取得費用や増・改築に対する補助の例もみられる。福島県内では「福島県多世代同居・近居推進事業」として新たに多世代同居・近居するために住宅取得などを行う場合、住宅取得などに関わる経費^{注8)}の補助する制度がある。「多世代」とは、祖父母（どちらか一方を含む。曾祖父母も含む）、父母（どちらか一方を含む）及び子（1人以上。年齢は問わない）の三世代以上のことで、近居とみる距離は世帯それぞれの住宅の敷地の最短直線距離がおおむね2キロメートル以内にあることとされている。

福井市の「多世帯近居住宅取得支援事業」も同居のためのリフォーム工事と近居のための住宅取得に補助金を支援している。近居の条件は同一小学校区域内で、多世帯が近居することである。また、移住定住促進のため、U・Iターン世帯^{注9)}が同居・近居する場合、補助額加算がある。

千葉県白井市の「親元同居近居支援補助金制度」では子世帯を対象として市内に居住する親世帯と同居または近居をするため住宅取得、または増築等をした場合補助金を交付している。子世代の条件は子供の有無は問わず転入日において年齢が49歳以下であることになっていて、義務教育終了前の子どもがいる場合又は申請者若しくは申請者の配偶者が妊娠している場合は、補助額に10万円を加算する。

注1-8

同居、近居のために新たに取得するための費用、または増・改築するための費用。取得する住宅は中古住宅でも可。

注1-9

着工時(住宅購入の場合は購入時)において福井県外に住所を有する方、又は福井県外から転入して2年以内の方を含む世帯。

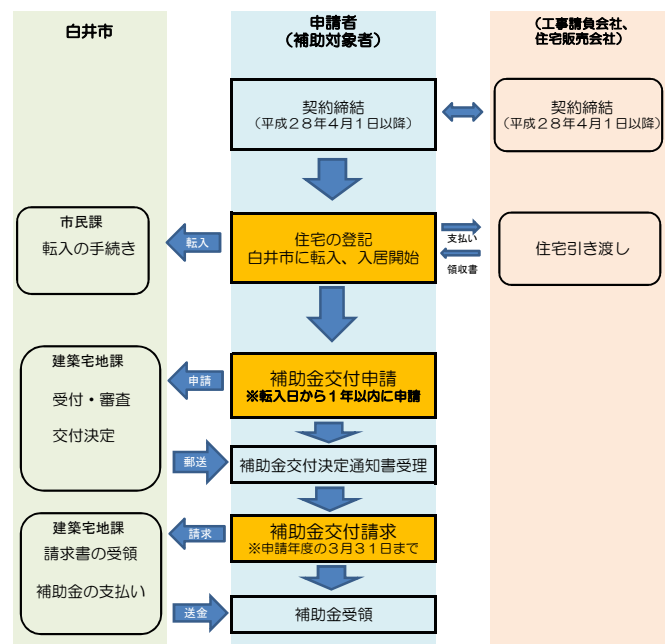


図1-3 白井市「親元同居近居支援補助金」交付申請に係る手続き

東京都品川区の「親元近居支援事業」では近居のために転入・転居する時の費用^{注10)}の一部をポイントとして交付し区内共通商品券などの商品と交換する三世代すまいるポイント制度を投入している。対象となるのはファミリー世帯となっていて、中学生以下の扶養子供のいる子世帯を指す。ファミリー世帯と親世帯のどちらかの世帯が区外から転入する場合、または相手世帯が直線距離1,200メートル圏内になるように区内転居する場合、ファミリー世帯にポイントを交付する。交付予定件数が決まっていて、申込者が多い場合は抽選となる。

注1-10

引っ越し代、登記費用、礼金、仲介手数料など

しかし、上にあげられた事業の例をみると、複数の世帯が近くに住み始めるための支援しているものがほとんどであり、近居した後の生活の利便性については近居世帯間の支援に任されている。優遇対象についても子世帯、特に扶養子供を有することが条件であるものがほとんどで、若年世帯の呼び込み策とされていることが主であると思われる。

また、対象世帯としての家族構成条件、世帯間の距離も異なり、ひとくちに近居といっても、その様態は様々であり、どのような近居がより望ましいのか、はっきりとはわからないまま制度化が先行しているのが現状である。

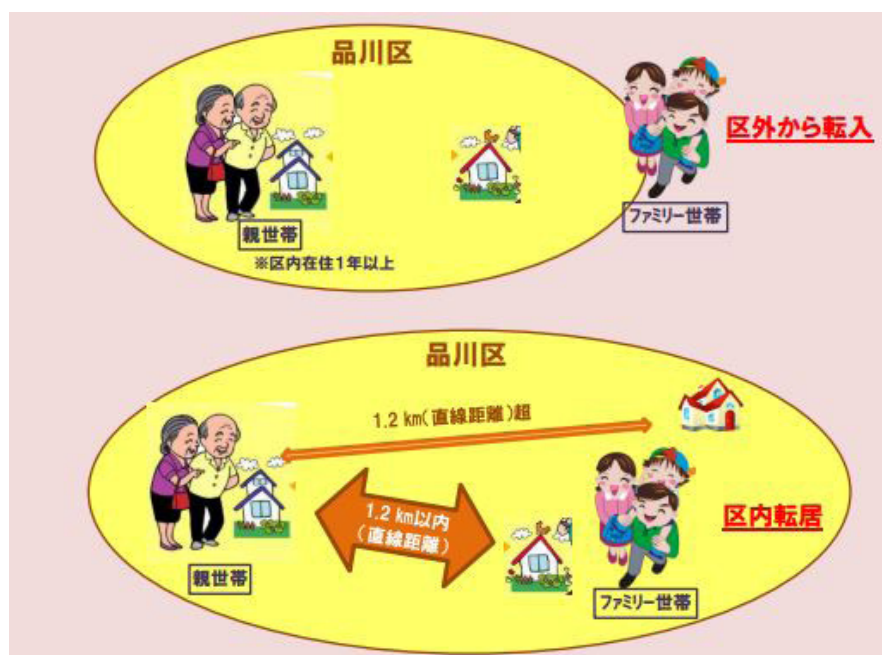


図1-4 品川区 親元近居支援事業（三世代すまいるポイント）対象

文1-2

大月敏雄＋住総研：「近居 少子高齢社会の住まい・地域再生にどう活かすか」、学芸出版社、2014

文1-3

在塚 礼子：「老人・家族・住まい」、住まいの図書館出版局、1992

文1-4

上和田 茂，鳥飼 香代子，山田 英代，付 開楠：準近居の存在からみた老親世帯の自立と支援を止揚するサポート居住の動向：親子の居住関係を軸とする高齢者のサポート構造に関する研究 その1、日本建築学会計画系論文集 (566), 9-16, 2003-04-30

文1-5

J.H.Sheldon : The Social Medicine of Old Age, 1989

文1-6

藤崎 宏子：高齢者・家族・社会的ネットワーク (現代家族問題シリーズ)、培風館、1998-03

文1-7

安達 正嗣：高齢期家族の社会学 (SEKAISHISO SEMINAR)、世界思想社、1999-02

注1-8

Esther Urdang : Human Behavior in the Social Environment - Interweaving the inner and outer worlds The third edition、Published 2016 By Routledge

文1-9

Elaine Piller Congress : Multicultural perspectives in social work practice with families、Springer publishing Company, LLC、1997

1-2 既往研究と本研究の位置付け

1-2-1 住まい方としての近居と近居への期待

近居は昔から存在していてそれ自体は珍しくない。その実態についても二世帯同居、隣居、近居、準近居など、幅広くかつ多様にみられ、一通り取り上げられている。^{文2)3)4)}

1960年代後半伝統的な家族制度ではなく、新しい家族形態が登場するにあたって、老人の居住をどのように位置づけるべきか世帯間の距離関係について言及している。^{文5)}

社会学では、例えば直井道子氏が近居について形態としての同居は避けながら、相互の情緒的関係は限りなく同居に近いものを維持するという「離れていても親しい関係」と称している。また、同居から近居、遠居へと親子の居住関係の種類が幅広くなっていくのは、単に若い世帯の就業問題等で世帯独立するだけではなく、高齢世帯の自立したいという考えが増えたからでもあるという指摘もあった。^{文6)7)} 近年の高齢者は年金等により高齢者の経済環境が向上し、また健康状態も昔に比べ高い。それらを背景にして自分の生活環境を自分が好きなように選びたいという意向も高まり、子世帯と離れて住むことが自ら選択されたものともなっているとも指摘している。^{文6)7)} また、世帯と環境の関係と世帯の文化による生活の違いについても考察されている。^{文8)9)}

同居と近居の違いについては、例えば松本 (吉) ^{文10)} らが子育て世帯の観点から注文戸建て住宅購入者を対象として近居と二世帯同居などの相違点を研究した。親世帯が子世帯の孫育児にどのように関与しているかを度合いや頻度との関係から着目しその違いを明らかにしている。

地理的に離れていながら繋がり合う親族間の住まい方については、たとえば上和田ら^{文11)} が親世帯と職場に子世帯が住まいを構えるという準近居を対象として高齢者居住支援の観点からその住まいの動向に関する研究が挙げられる。それまで同居か同居以外として

しか統計上は明らかでなかった親族間の住まい方について、つかず離れずの住まい方が今後広がる可能性と、高齢者施策との関係で捉える必要があることを示した。

高齢期居住と親族近居との関わりとして、経年化した郊外戸建て住宅地の高ビルドアップ率地区において、近居が高齢者の居住性確保に一定の役割を果たしている可能性を吉田と松本（恭）^{文12)}が指摘している。また、長期経過した公的分譲集合住宅団地を対象とした研究では、8、90年代にはすでに親族近居が広がりつつあることと、親世帯による複数住宅使用が将来の近居形成につながる可能性を示した。^{文12)13)}

文1-10

松本 吉彦, 入澤 敦子, 添田 昌志, 任 智顯: 近居と同居における「孫共育」の比較: 親子ネットワーク居住の実態調査 (1)、学術演梗概集・E-2, 建築計画Ⅱ, 住居・住宅地, 農村計画, 教育 2010, 219-220, 2010-07-20

文1-11

上和田 茂: 高齢者支援の視点からみたサポート居住と準近居の現状と今後の展望 (特集 多世代居住)、住宅 62(11), 15-23, 2013-11

文1-12

松本 恭治, 吉田 進一, 江口 司津: 長期経過した公的分譲集合住宅団地における居住者の高齢化と住まい方: その3 親族近居の実態、学術講演梗概集・F-1, 都市計画, 建築経済・住宅問題 1995, 1197-1198, 1995-07-20

文1-13

重村力, 田代純, 菊田純一, 延沢優, 尾崎久純外 5 名: 生活集積としての都市研究 # 38 ~ 46 千里ニュータウンの都市的成熟に関する研究 その5 親族間近居関係とライフステージに関する分析と展望、日本建築学会大会学術講演梗概集、2017-2018、1984-10

文1-14

澤田 圭祐, 橋立 博幸, 大沼 剛, 柴田 未里, 浅野 克俊, 嶋崎 聡美, 千葉 美幸: 屋外活動が困難な在宅高齢者における屋内生活空間と床からの立ち上がり動作との関連、日本理学療法学術大会 2012(0), 48100031-48100031, 2013

文1-15

橋立 博幸, 大沼 剛, 澤田 圭祐, 阿部 勉: 屋外活動が困難な在宅高齢者における屋内および屋外の生活空間と移動・移乗動作の自立度との関連、日本理学療法学術大会 2012(0), 48100019-48100019, 2013

文1-16

井上 忠俊, 上城 憲司, 藤原 和彦 [他]: 介護老人福祉施設入居者に対する外出支援・屋外活動の試み、臨床作業療法 10(3), 298-304, 2013-07

文1-17

柳原 崇男: 高齢者の外出頻度から見た日常生活活動能力と移動手段に関する考察、土木学会論文集 D3 (土木計画学) 71(5), I_459-I_465, 2015

文1-18

久家 あかね, 余 錦芳, 松本 真澄, 上野 淳: 多摩ニュータウン諏訪・永山地区における高齢者の屋外活動に関する調査、学術講演梗概集 2012(建築社会システム), 227-228, 2012-09-12

文1-19

松橋 圭子, 大原 一興, 藤岡 泰寛 [他], 三輪 律江, 谷口 新: 地域における親子の居場所選択からみた子育て支援施設のあり方に関する研究: 東京都三鷹市における外出調査より、日本建築学会計画系論文集 (600), 25-32, 2006-02-28

1-2-2 郊外住宅団地における暮らしと外出環境

医学研究では、高齢者の日常生活活動の維持・向上のために、日々の活動量の確保および生活空間の維持・向上が重要であると指摘している。^{文14)15)16)}

高齢者の外出行動については、例えば柳原^{文17)}の研究で高齢者の心身機能や社会活動性を表す健康指標として高齢者の外出頻度を調査、介護予防の観点から外出行動の関係を明らかにした。

多摩ニュータウンにおける上野^{文18)}の研究では、在宅高齢者が閉じこもらずに他者と関わることのできるインフォーマルな場と機能の必要性を指摘し、筆者らは丘陵住宅地における高齢者の外出行動調査から、外出頻度の低下傾向と公共交通機関への依存度の上昇傾向を明らかとしている。

子育て世帯の外出環境については、三鷹市における松橋^{文19)}の研究において、母親の育児による孤立感や閉塞感は外出頻度や出かける場所の有無との関係が深いことが示されている。特に団地居住者は「家の近くに行くところがない」率が高く課題である点が指摘されている。

高齢期や子育て期における外出環境への配慮のあり方として、身近な生活圏（徒歩圏）への着目が重要であると言える。また、外出行動に近居がどのような影響を与えているか把握することは近居の日常生活への関連性を見出す手法となる。

1-2-3 既往研究の到達点と本研究における位置づけ

このように、近くで離れて暮らす居住形態は、一般的な住まい方として既に普及している。これは子世帯の独立による一方的な選択だけではなく、親世帯が将来のため選好する形態でもある。親族近居が親世帯や子世帯の居住の安定に寄与する可能性が挙げられており、今後もさらなる広がりを見せるだろうと指摘されている。しかし、お互いの世帯を支援するという目的をもったものだけではない日常的な生活のなかで近居という住まい方をどのように有機的に関係づけていくべきかといった視点については必ずしも明らかとされていない。近居世帯が互いの世帯に大きな助力者となるとあきらかになっている中、助けを必要としない地域、時期には近居がどのような役割を持つかも検討が必要である。

また、近年の長寿化に伴う在宅ケア（在宅支援や在宅介護）重視へのシフトや、共働き率上昇に伴い育児サポートを必要とする人たちの増加等の社会構造的な変化とこうした住まい方の特徴や具体的事例についての研究も十分にされてないと見える。

地域再生事業の一つとして近居親族からの支援の有効性が認められ近居へのニーズが高まり推奨されている中、日常生活全般に亘っての関係性を明らかにすることは今後の地域再生にとっても重要であろう。

1-2-4 本研究における課題

以上の事を踏まえて、本研究は次のような項目を研究課題とし、2～4章で分析する。

研究課題 ①

近居をしている事が日常生活にどのような影響を与えるのか近居の特徴と日常生活との関係を把握する。日常生活の中で近居世帯と直接交流が行われている実態と支援されることによる間接的な影響を明らかにする。

研究課題 ②

生活支援サービスなど公的施設のインフラ整備された環境では親族近居がどのような役割を持つのかについて明らかにする。公的施設と近居世帯の支援が併用できる環境での関わり方及び近居世帯への期待を調査する。

研究課題 ③

具体的事例から近居に期待されている相互支援の課題を見出す。また、近居と周辺環境の関係性について考察から近居のあり方を模索する。

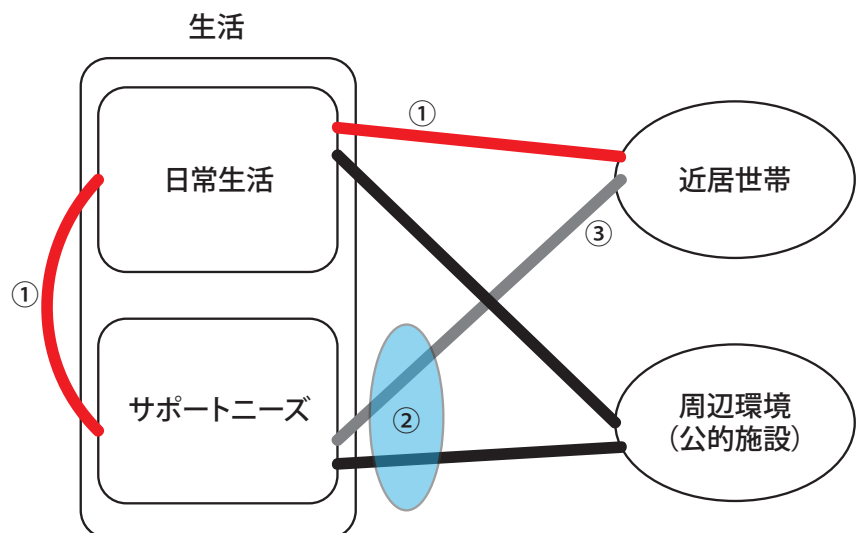


図1-5 本研究の課題模式図

1-3 研究の目的と方法

1-3-1 研究の目的

こういう背景から、本研究では日常生活と近居親族との関係や、親族近居の地域内での支援資源としての可能性を発見する手がかりとして外出行動に着目する。

近居を新たに始まる世帯は片方、もしくは両世帯は近居という状況のために住まい環境を変えることになる。現在のためであれ、将来のためであれ、近居世帯への期待や目的があると考えられる。基本的に、近居世帯は相互支援のためのお互い期待される役割を認識している。

しかし、時間経過や外部的要素で当初近居世帯に対する期待の変化、または環境特性により影響される可能性が考えられる。すなわちこの仮説は、近居はその役割外の生活にも影響を及ぼし、周辺的环境と変化とともに近居世帯間の関係性が影響されると言える。

老朽化、高齢化が進んでいる郊外住宅団地において、若年層の流入策の一つとして、または不足しているサービス施設への対案として近居が推奨されている今、近居と日常生活に対する関連性や将来変化による計画における正確な視点が必要とされている。

すなわち、高齢化、人口減少の進行する郊外住宅団地において閉じこもり孤立することなく多世代が安心して暮らすことのできる近居のあり方を外出行動と近居経緯の視点から考察し、幅広い生活と時間による変化への近居の有効性を明らかにすることが研究目的である。

地域資源の有効活用を意識した建て替え、再開発計画をされる場合の要素の一助となる研究として位置付けられることを願う。

1-3-2 研究の構成

研究の構成の各章の内容について、本研究で明らかにすべき課題とその研究方法について次のようにまとめる。

2章では丘陵地で地理的に不便な団地を対象地域として選定する。課題①に対応して、近居に対する意識と近居世帯間の距離分布を調査し、どれくらいのニーズがあり、どれくらいの距離で求められるかを明らかにする。また、日常生活については、近居の有無での外出行動の比較を行う。外出行動の傾向から親族が近居していることからどのような影響があるのかを分析、日常生活への有効性を見出す。

3章では建て替えを経た団地を対象地域として選定する。課題②に対応して、移転の前後で近居に対する意識を調査し、生活が変わる時への近居の役割を見出す。また、育児支援、介護支援といった生活支援サービスのインフラが整備された地域では近居がどのように必要とされ、有効であるか考察する。

4章では課題③に対応して、近居世帯を事例的に調査、近居するにいたった経緯を分析し、長期的な暮らしの中での近居の実態をとらえ、その課題と方向性を考察する。

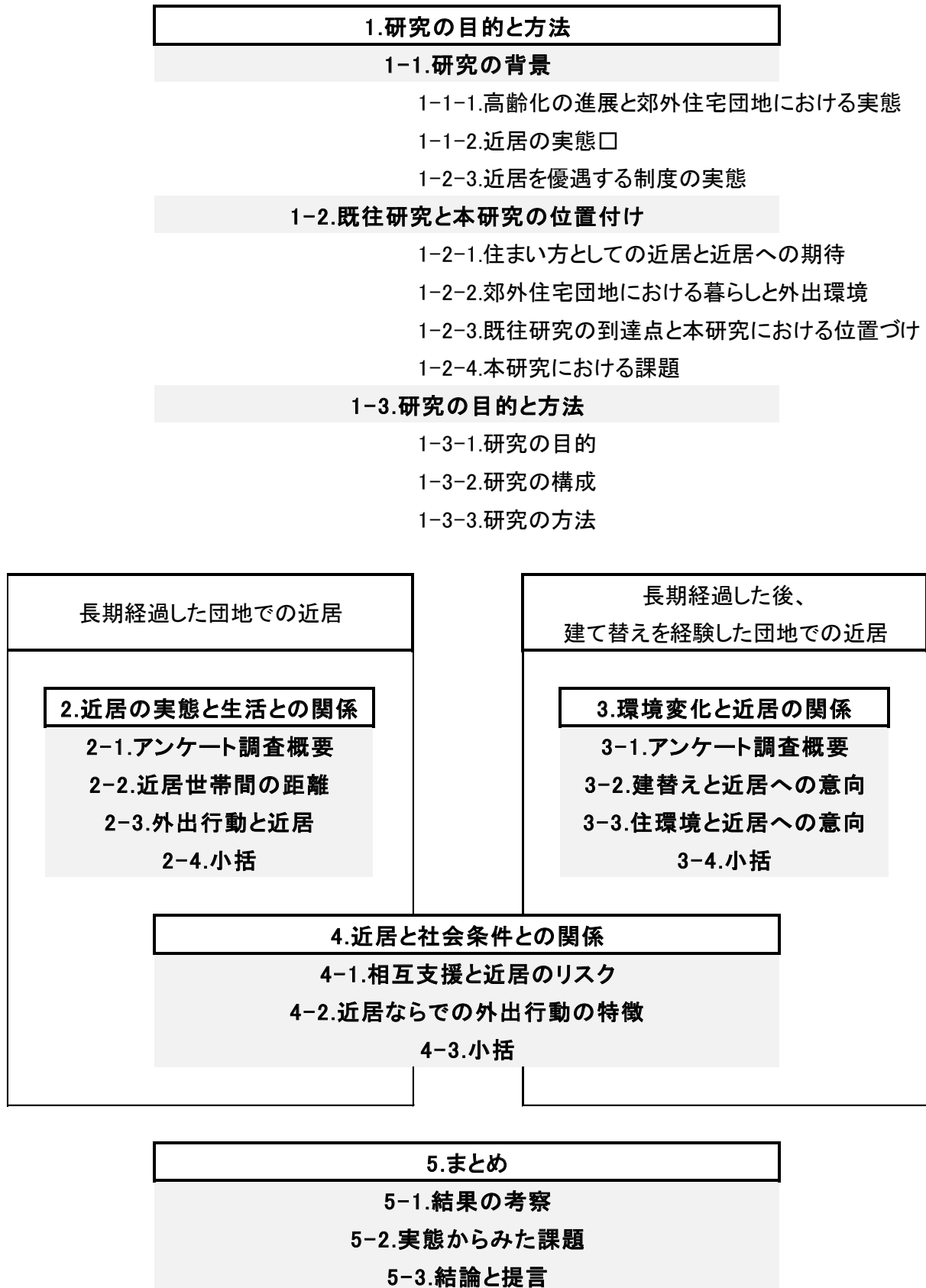


図1-6 研究の流れ

1-3-3 研究の方法

研究の対象としては長期経過した郊外住宅団地と建替えを経験した郊外住宅団地を選定する。

まず、長期経過した郊外住宅団地では外出行動に着目してアンケート調査を行う。人口減少と一緒にサービス施設の不足が問題となっているため、親族からのサポートの求め近居をしているケースが多くみられると思われる。また、最寄り鉄道駅からバスでのアクセスとなっている丘陵地で交通便が不便なので、条件による外出行動の変化がみられやすい。近居による外出行動からその違いを比較分析し近居と生活の実態を明らかにする。

次に建替えを経験した郊外住宅団地では、建替え前後の変化に着目してアンケートを行う。近居世帯間の付き合い方が建替えを経験していない群と経験した群でどのような違いを見せるか比較、サービス施設が一新した環境での近居の意味を考察する。

最後に近居の相互支援の実態と課題を見出すため、アンケート結果で確認できた内容を基に詳しくヒアリング調査を行う。近居を始めた契機、過去の付き合い方と現在の付き合い方などを事例的に整理し、変化していく近居への期待とその課題を抽出する。

郊外住宅団地における多世代近居からみた
世帯間相互支援行動に関する研究

第2章 近居の実態と生活 との関係

第2章 近居の実態と生活との関係

本章では、左近山団地の居住者を対象としてアンケート調査から外出行動と近居との関係に着目する。日常生活での親族近居の特徴や有効性を見出すことが本章の目的である。

横浜市旭区に位置する左近山団地は昭和43年から都市再生機構^{注1)}によって丘陵地形と緑を残しながら開発された中層5階建ての階段室型住棟を基本とする団地であり、分譲街区と賃貸街区がほぼ同時期に建設され混在している。

団地造成後に、団地周辺地域において分譲戸建て住宅の散発的な開発が進んでいるが、総じて団地および周辺地域において近年では空き家化の進行がみられる。

注2-1
旧日本住宅公団

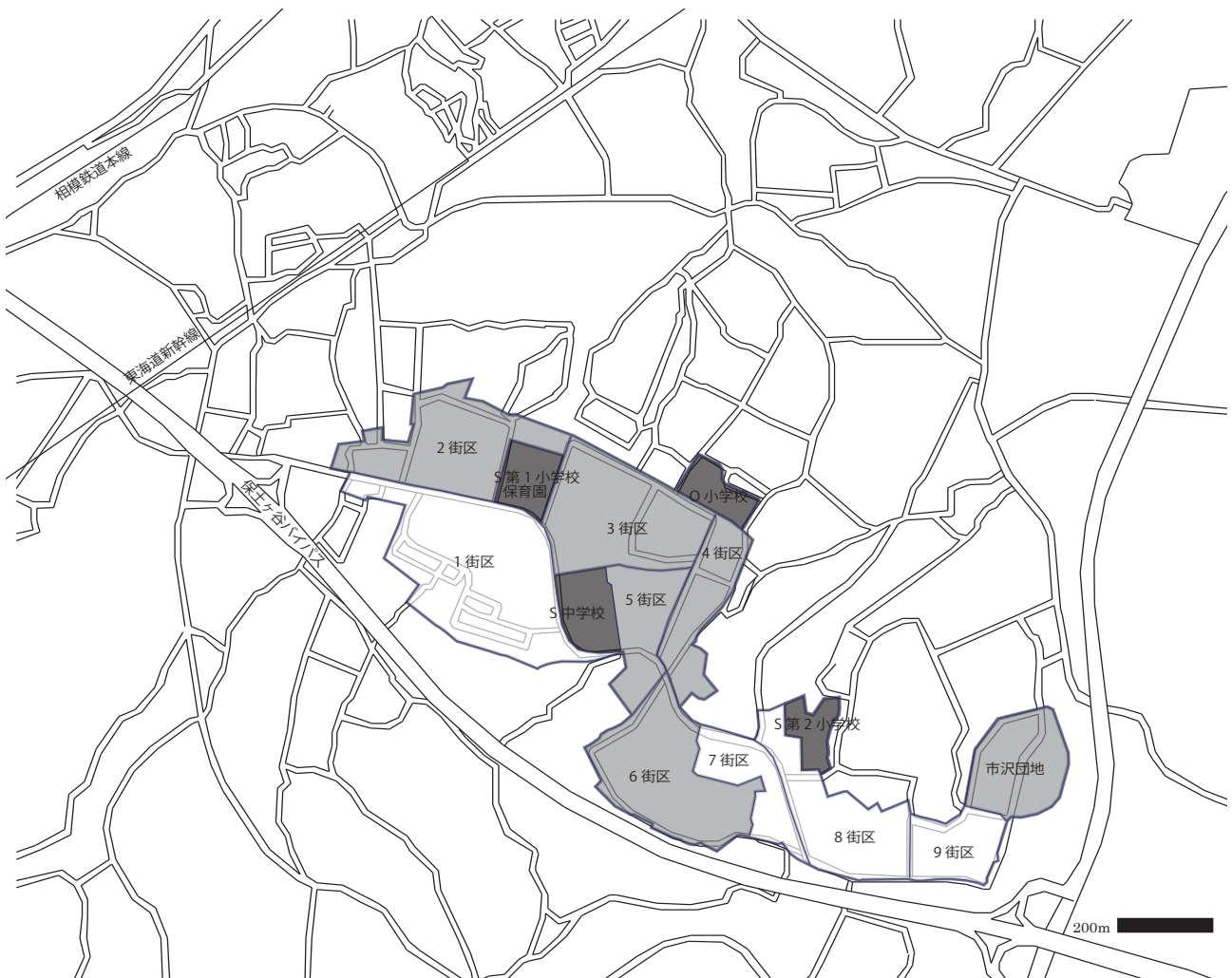


図2-1 左近山団地とその周辺

また、横浜市旭区は市内 18 区の中で 2 番目に高い高齢化率を示す行政区であり、なかでも左近山団地は高齢化率 42.1%^{注2)} に達した。児童数減少に伴い団地周辺にあった小学校 3 校のうち、2 校が閉校され、平成 26 年度からは 1 校に統合された。

住戸プランは 3DK^{注3)} を標準として戸あたり約 45 ～ 47㎡とほぼ共通している。また、賃貸街区に隣接して、横浜市住宅供給公社によって昭和 45 年に建設された分譲団地（市沢団地）があり、やや広い（約 60㎡）住戸面積を持つが、間取り（3 室）、現在の分譲価格などが左近山団地の分譲街区と比較的類似しているという特徴を持つ。

これらのことから、この地域の集合住宅団地については、居住階の違いは残るものの住戸そのものの空間的違い（間取りの大きな違いや、面積の大幅な違いなど）が住戸選択へ与える影響をある程度排除することができるものと考えられる。

注2-2
 H26.4 横浜市 HP 参照

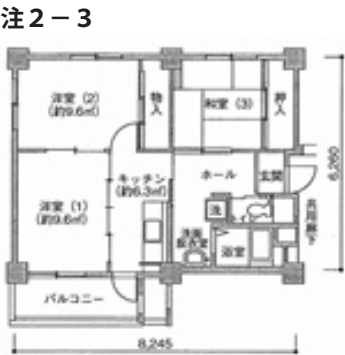


表 2-1 左近山団地概要

名称	左近山団地
所在地	神奈川県横浜市旭区
開発時期	昭和43年
事業主	UR都市機構
分譲住戸数	2,665戸
賃貸住戸数	2,134戸
構造	鉄筋コンクリート
地区内店舗	28店舗

表 2-2 左近山団地の街区分譲および賃貸棟数

街区分譲および賃貸棟数									
	1街区	2街区	3街区	4街区	5街区	6街区	7街区	8街区	9街区
分譲	-	26	33	25	15	29	-	-	-
賃貸	35	-	-	-	-	-	12	18	13

表 2-3 市沢団地概要

名称	市沢団地
所在地	神奈川県横浜市旭区
開発時期	昭和45年
事業主	横浜市住宅供給公社
分譲住戸数	374戸
分譲棟数	13棟
構造	鉄筋コンクリート

2-1 アンケート調査概要

左近山団地の賃貸街区(7,8,9 街区)自治会、分譲街区(3,4,5 街区)を対象に管理組合の協力を得て、次の調査を実施した。

まず、居住実態と居住意向を把握することを目的としたアンケート調査を実施した。調査に際しては地図記入方式の質問紙も同封し近居相手や外出先、外出目的等の記入を得た。これらの調査は賃貸街区では2011年10月に実施し、配布1570回収824(回収率53%)、分譲街区では2013年10月に実施し、配布1200回収792(回収率66%)の結果を得た。

全体的な傾向を把握するために、分譲街区、賃貸街区におけるアンケート結果から世帯主年齢や世帯構成、居住年数などを(表2-5)に整理した。

分譲街区、賃貸街区ともに、世帯主年齢は65歳～74歳が最も数値が高く、全体の約1/3を占めている。世帯構成を見ると2人世帯が最も多く、次に単身世帯が多い。この両者を合わせて過半を占めていることがわかる。なお、世帯主年齢と世帯構成との関係からは、世帯規模が小さいほど世帯主年齢の高齢化の傾向が見られた。(図2-2)

居住年数は比較的分散する傾向が見られる。40年以上の長期居住世帯もあれば、5年以内に新たに入居した世帯も見られる。65歳以上の高齢世帯に限ってみると分譲街区では40年以上の長期居住世帯が37%、31年以上では計64%と約2/3を占め、高齢で長期居住世帯が多いのが分譲街区の特徴であるといえる。(図2-3)

表2-4 アンケート調査概要

	配布	回収	回収率
賃貸(2011年10月)	1570	824	53%
7～9街区			
分譲(2013年10月)	1200	792	66%
3～5街区			

団地内に限定した近居率をみると、賃貸街区では 301 人中 37 人（約 12.3%）、分譲街区では 449 人中 66 人（約 14.7%）という結果となった。また、分譲街区での調査では団地周辺地域まで含めた近居率は分譲街区で 449 人中 135 人（約 30.1%）であった^{注4)}。その中どちらの世帯が先に地域に住み始めたかを聞くと、「回答者が先」、「親族の方が先」がほぼ同じくらいであった。「回答者が先」と答えた人は親の呼び寄せや、子世帯の分家等が、「親族の方が先」は子世帯の里帰り等が考えられる。「どちらともいえない」については地域内での住み替え等が考えられる。

これらの傾向をふまえ、以降の分析は分譲街区を対象をしぼり、さらに世代や年齢による違いを考慮するために、高齢世帯^{注5)}と子育て世帯^{注6)}の二つの属性に分けて分析を進めることとする。

注2-4

賃貸棟と分譲棟に配ったアンケートの内容が若干違ったため賃貸棟では団地内の近居に限ったデータ、分譲棟では団地外の近居も含めてのデータとなっている。以後分譲街区のデータで近居している世帯の数は周辺地域まで含めたデータ（135 人、約 30.1%）とする。

注2-5

高齢世帯：本研究では世帯主の年齢が 65 歳以上の世帯

注2-6

子育て世帯：本研究では中学生以下の子どもがいる世帯

表2-5 アンケート回答者の属性

		総計		分譲街区		賃貸街区	
		人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)
年齢	20歳代	19	1.2%	9	1.1%	10	1.2%
	30歳代	91	5.6%	40	5.1%	51	6.2%
	40歳代	129	8.0%	73	9.2%	56	6.8%
	50歳代	140	8.7%	73	9.2%	67	8.1%
	60～64歳	180	11.1%	88	11.1%	92	11.2%
	65～74歳	521	32.2%	261	33.0%	260	31.6%
	75歳以上	415	25.7%	237	29.9%	178	21.6%
家族数	単身	358	22.2%	203	25.6%	155	18.8%
	2人	662	41.0%	334	42.2%	328	39.8%
	3人	289	17.9%	140	17.7%	149	18.1%
	4人	130	8.0%	69	8.7%	61	7.4%
	5人以上	40	2.5%	15	1.9%	25	3.0%
家族構成	夫婦	529	32.7%	258	32.6%	271	32.9%
	夫婦と子ども	396	24.5%	198	25.0%	198	24.0%
	親と夫婦と子ども	30	1.9%	3	0.4%	27	3.3%
	親と夫婦	6	0.4%	3	0.4%	3	0.4%
	親と子ども	—	—	83	10.5%	—	—
居住年数	5年以内	243	15.0%	100	12.6%	143	17.4%
	6～10年	212	13.1%	84	10.6%	128	15.5%
	11～20年	247	15.3%	131	16.5%	116	14.1%
	21～30年	193	11.9%	93	11.7%	100	12.1%
	31～40年	307	19.0%	163	20.6%	144	17.5%
	40年超	366	22.6%	188	23.7%	178	21.6%
	無回答	48	3.0%	33	4.2%	15	1.8%
総計		1616	100.0%	792	100.0%	824	100.0%

注2-7

団地周辺を含めて近居をしている
親族があると答えた世帯

図2-5は分譲街区において近居あり^{注7)}と回答した世帯を対象として、入居時の世帯主年齢と現在の親族近居率を居住年数別にみたものである。現在の近居世帯は年齢層に偏りなく分布しているのではなく、入居時の世帯主年齢が30代以下の世帯に偏ってその分布が形作られていることがわかる。

表2-7と2-8は、分譲街区居住者を対象としたアンケート調査の結果を、子育て世帯(69人)と高齢世帯(498人)に区分し、比較したものである。

子育て世帯の前居住地をみると「左近山団地内」である世帯は28%(19人)と、同じ団地内や近隣からの転居が多いことがわかる。(表2-6)現在の住まいを選んだ理由としても、「職場や学校に自分や子供が通いやすい」(36%)が最多であるが、「近所に親族が住んでいた」(28%)や、「周辺に土地勘があった」(23%)や「ここで生まれ育ったから」(13%)なども決して少なくない割合を示している。

高齢世帯は団地造成時に入居した第一世代である場合が多く、「自然が豊かだから」(46%)や、「価格が手ごろだった」(26%)「静かな住宅地」(22%)などが理由として挙げられている。

子育て世帯の60%が、今後親族と同・近居を「そうしたい」(9%)もしくは「どちらかといえばしたい」(51%)と考えている。高齢世帯では「そうしたい」(15%)が多いものの、無回答が最多(34%)であり、将来の親族との住まい方に現時点で考えが及んでいないことをうかがわせる。

表2-6 子育て世帯の前居住場所

分譲棟（3～5街区）

		子育て世帯 人数（%）	子育て世帯以外 人数（%）
前 居 住	左近山内	19 (28)	66 (9)
	旭区内	14 (20)	127 (18)
	横浜市内	23 (33)	237 (33)
	神奈川県内	7 (10)	105 (15)
	都内	2 (3)	115 (16)
	その他	5 (7)	56 (8)

表2-7 子育て世帯と高齢世帯の比較（1）

			子育て世帯 69人 (%)	高齢世帯 (65歳以上) 498人 (%)	全体 792人 (%)
基本調査項目	職 種	自営業	6 (9)	7 (1)	51 (6)
		会社員	54 (78)	16 (3)	183 (23)
		パート・アルバイト	5 (7)	27 (5)	74 (9)
		無職	2 (3)	385 (77)	418 (53)
		その他	0 (-)	0 (-)	4 (1)
		無回答	0 (-)	57 (11)	43 (5)
	通 学 中 の 子 供	保育園	10 (14)	0 (-)	10 (1)
		幼稚園	15 (22)	0 (-)	15 (2)
		小学生	42 (61)	2 (0)	42 (5)
		中学生	24 (35)	1 (0)	24 (3)
		高校生	6 (9)	0 (0)	20 (3)
		大学生	4 (6)	5 (1)	23 (3)
		その他	1 (1)	0 (-)	106 (13)
		無回答	0 (-)	0 (-)	542 (68)
管理組合活動	公 園 の 整 備	満足	7 (10)	112 (22)	162 (20)
		やや満足	15 (22)	174 (35)	264 (33)
		どちらでもない	26 (38)	121 (24)	213 (27)
		やや不満	12 (17)	23 (5)	48 (6)
		不満	6 (9)	12 (2)	27 (3)
		無回答	3 (4)	56 (11)	78 (10)
	バ リ ア フ リ ー	満足	3 (4)	58 (12)	83 (10)
		やや満足	12 (17)	129 (26)	178 (22)
		どちらでもない	30 (43)	163 (33)	281 (35)
		やや不満	12 (17)	55 (11)	103 (13)
		不満	9 (13)	25 (5)	57 (7)
		無回答	3 (4)	68 (14)	17 (2)

表2-8 子育て世帯と高齢世帯の比較(2)

		子育て世帯 69人	高齢世帯 (65歳以上) 498人	全体 792人 (%)
現在の住まいを選んだ理由	周辺に土地勘有	16 (23)	58 (12)	112 (14)
	住み替えが容易	6 (9)	41 (8)	64 (8)
	家の広さが丁度	2 (3)	73 (15)	96 (12)
	価格が手ごろ	15 (22)	127 (26)	191 (24)
	リフォームができそう	1 (1)	40 (8)	52 (7)
	敷地内に駐車できるから	0 (-)	29 (6)	36 (5)
	職場や学校に通いやすいから	25 (36)	47 (9)	113 (16)
	近くに親族が住んでいるから	19 (28)	65 (13)	126 (14)
	眺めがよかったから	3 (4)	40 (8)	55 (7)
	自然が豊かだから	14 (20)	230 (46)	304 (38)
	静かな住宅地	7 (10)	110 (22)	151 (19)
	ここで生まれ育った	9 (13)	5 (1)	34 (4)
周りの住環境の印象	街並みがきれい	1 (1)	40 (8)	55 (7)
	緑(公園)が多い	43 (62)	356 (71)	562 (71)
	交通の便がいい	10 (14)	140 (28)	202 (26)
	近所付き合い	6 (9)	27 (5)	45 (6)
	地域の行事が盛ん	4 (6)	29 (6)	49 (6)
	治安がよい	11 (16)	82 (16)	135 (17)
	買い物がしやすい	27 (39)	220 (44)	315 (40)
	医療機関が近い	8 (12)	105 (21)	142 (18)
	福祉施設が近い	0 (-)	13 (3)	15 (19)
	公共施設が近い	0 (-)	20 (4)	23 (3)
	歴史を感じる雰囲気がある	1 (1)	2 (0)	6 (1)
	保育園・幼稚園や小中学校が近い	48 (70)	95 (19)	180 (23)
将来の住まいに対する考え方	い住かみど続うけた	住み続けたい	9 (13)	212 (43)
		どちらかといえば住み続けたい	21 (30)	169 (34)
		どちらかといえば住みたくない	11 (16)	27 (5)
		住みたくない	3 (4)	1 (0)
		わからない	20 (29)	42 (8)
		無回答	5 (7)	47 (9)
	に同親族と近い近居	そうしたい	6 (9)	76 (15)
		どちらかといえばそうしたい	35 (51)	129 (26)
		どちらかといえばそうしたくない	12 (17)	62 (12)
		そうしたくない	3 (4)	62 (12)
		無回答	13 (19)	169 (34)
	流地域とい交	交流したい	12 (17)	70 (14)
		どちらかといえば交流したい	33 (48)	187 (38)
		どちらかといえば交流したくない	8 (12)	44 (9)
		交流したくない	1 (1)	62 (12)
		無回答	15 (22)	135 (27)

管理組合活動について尋ねたところ、公園整備（ベンチや遊具の設置、植栽活動など）について、子育て世帯では「満足」「やや満足」を合わせても32%にとどまり、高齢世帯の57%と差が見られた。バリアフリー（歩行者空間の整備、EV設置など）についても不満の割合が高かったことから、団地内に複数ある公園のなかには、乳幼児同伴でアクセスしにくい公園や、子どもの遊び場として使いにくい公園があることが考えられる。

実際に自由記入のなかには「毎日子供が遊ぶ公園で危ない場所、修繕してくれたらいいのになって思う点がいくつかあります。（40代男性）」「学童世代にはきわめて住みにくいです。数年我慢すればよいことなのですが。（40代男性）」「子供がのびのびと遊ぶ場所の提供、公園、樹木、石垣等の安全性を。（40代男性）」などの声も見られる。

継続居住意向については、高齢世帯の43%が「住み続けたい」と最多であるのに対して子育て世帯は13%にとどまる一方で、「わからない」が29%に達した。これらの世帯については何らかのきっかけで将来別の地域に転居する可能性も考えられる。

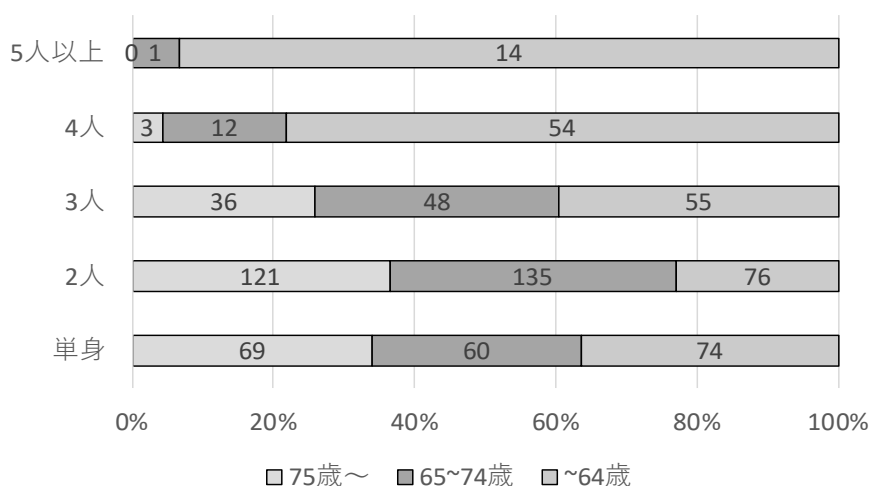


図2-2 世帯年数×世帯主の年齢

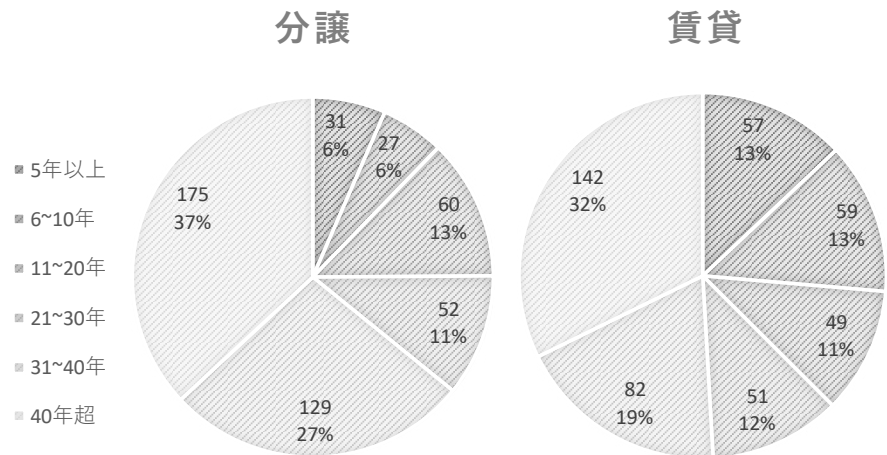


図2-3 65歳以上×居住年数

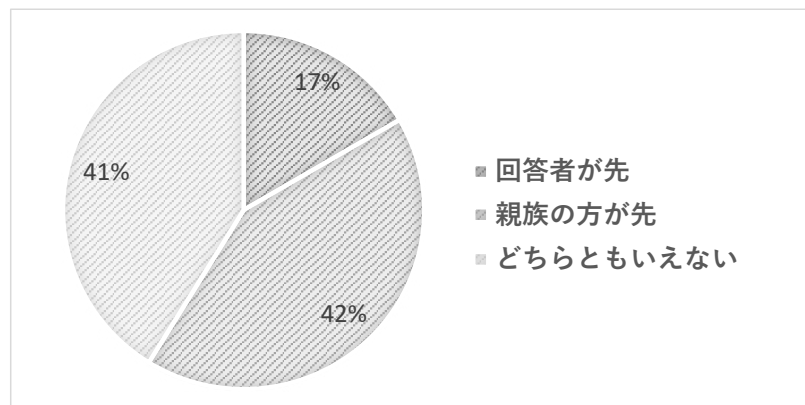


図2-4 分譲街区近居している世帯の近居の順番

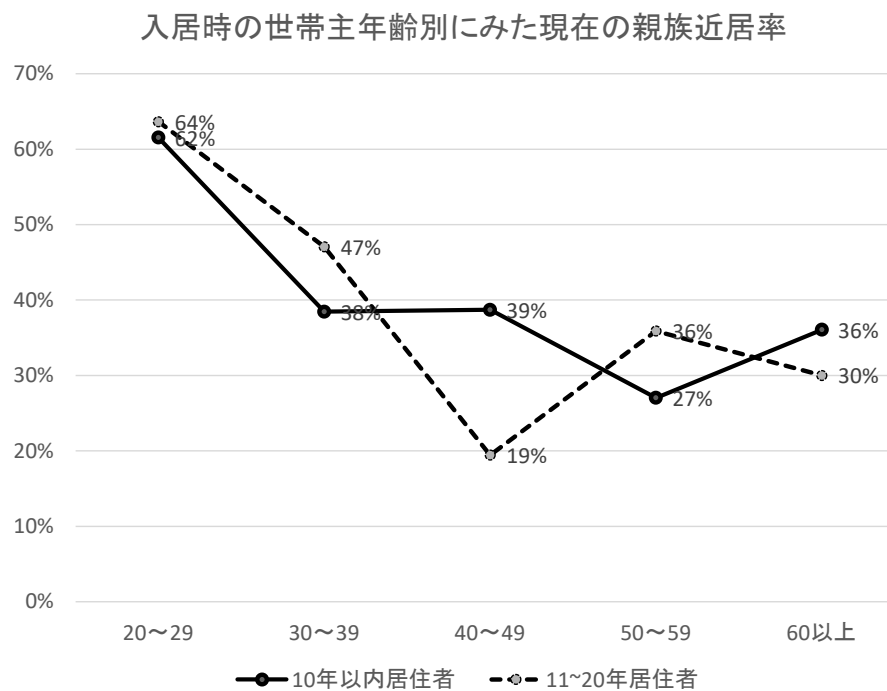


図2-5 入居時の世帯主年齢別に見た現在の親族近居率

2-2 近居世帯間の距離

図2-6は分譲街区で「近居あり」と回答したすべての高齢世帯を対象として、近居先の住棟番号や住所の記入のあったものを近居世帯間の距離と血縁関係の別によって図示したものである。なお、ここでの距離は地図上での直線距離とした。

図によると、当該団地において、高齢世帯の近居していると感じる世帯との距離(近居距離)は1km以内であることが分かる。また、近居距離は200m以内の至近距離に集中している。

高齢世帯からみた近居の距離と血縁関係

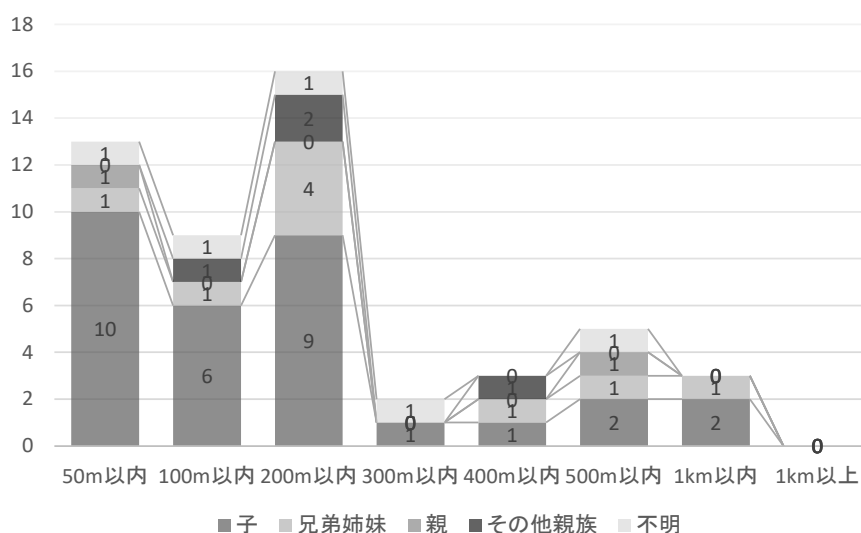


図2-6 高齢世帯の近居あり群の世帯間の距離と血縁関係

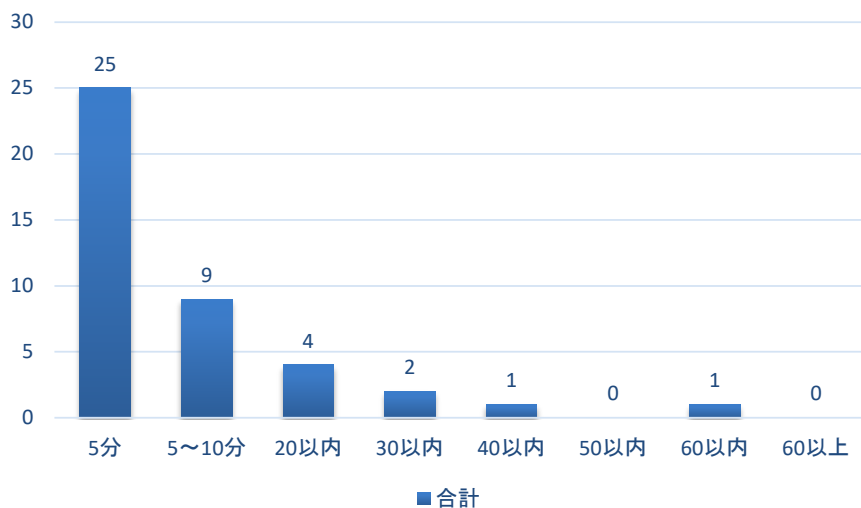


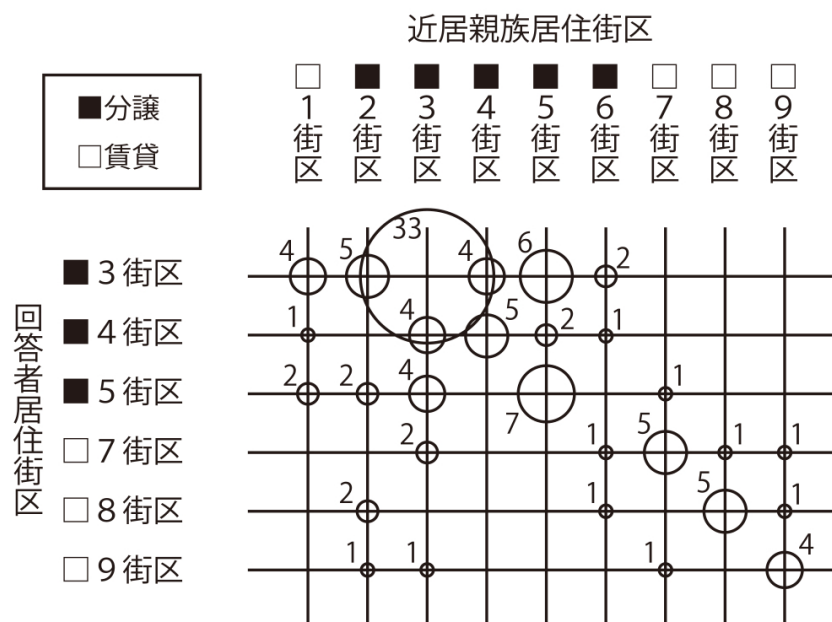
図2-7 高齢世帯の近居あり群の世帯間の移動所要時間

確認のため所要時間でも距離（時間距離）をみたが、5分以内が最頻値（25人（約60%））となり、20分以内まで含めると38人（約90%）にのぼった。この結果から、できるだけ近くに住みたいという意向が読み取れる。

団地内近居については賃貸街区におけるアンケート結果でも同様の傾向（200m以内に偏った近居）がみられ、結果的に図2-8に示すように同じ街区内の近居が多いことがわかった。

これは、自己所有か賃貸かの違いや公団住宅か公社住宅かの違いは残るものの、建設年時がほぼ同じであることから広さ、間取りや設備面での差が小さく、また、実際に市場価格の差も小さく、結果的に住宅選択要因として近さ（距離）が優先されやすかったためと考えられる。

図2-9、10、11、12、13、14は高齢世帯とその近居世帯の位置を地図の上にまとめたものである。



注2-8
分譲棟(3,4,5 街区)と賃貸棟(7,8,9 街区)での調査結果

図2-8 回答者と近居親族の位置関係^{注8)}

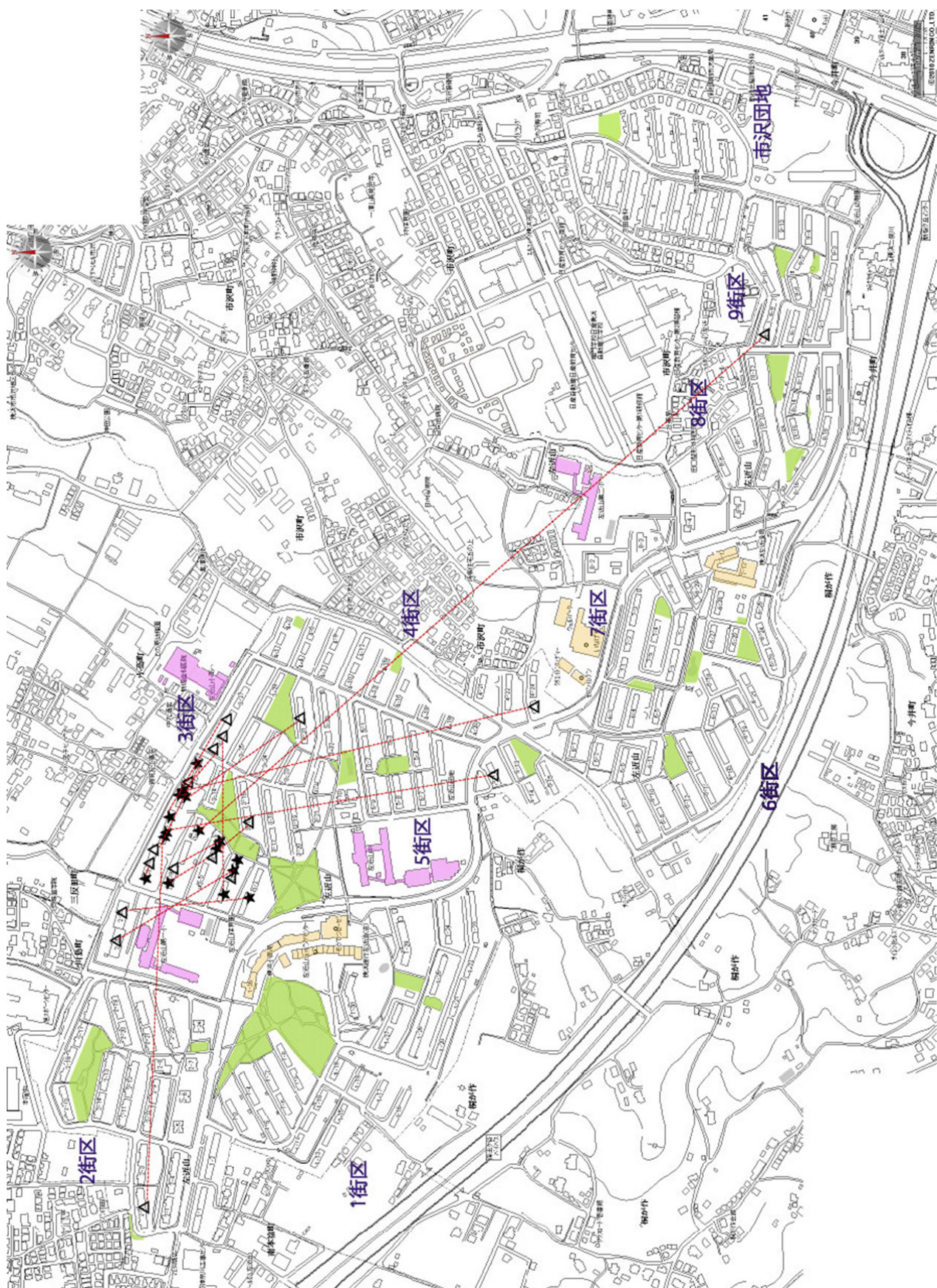


図2-9 左近山団地3街区1～12棟の近居世帯の位置関係

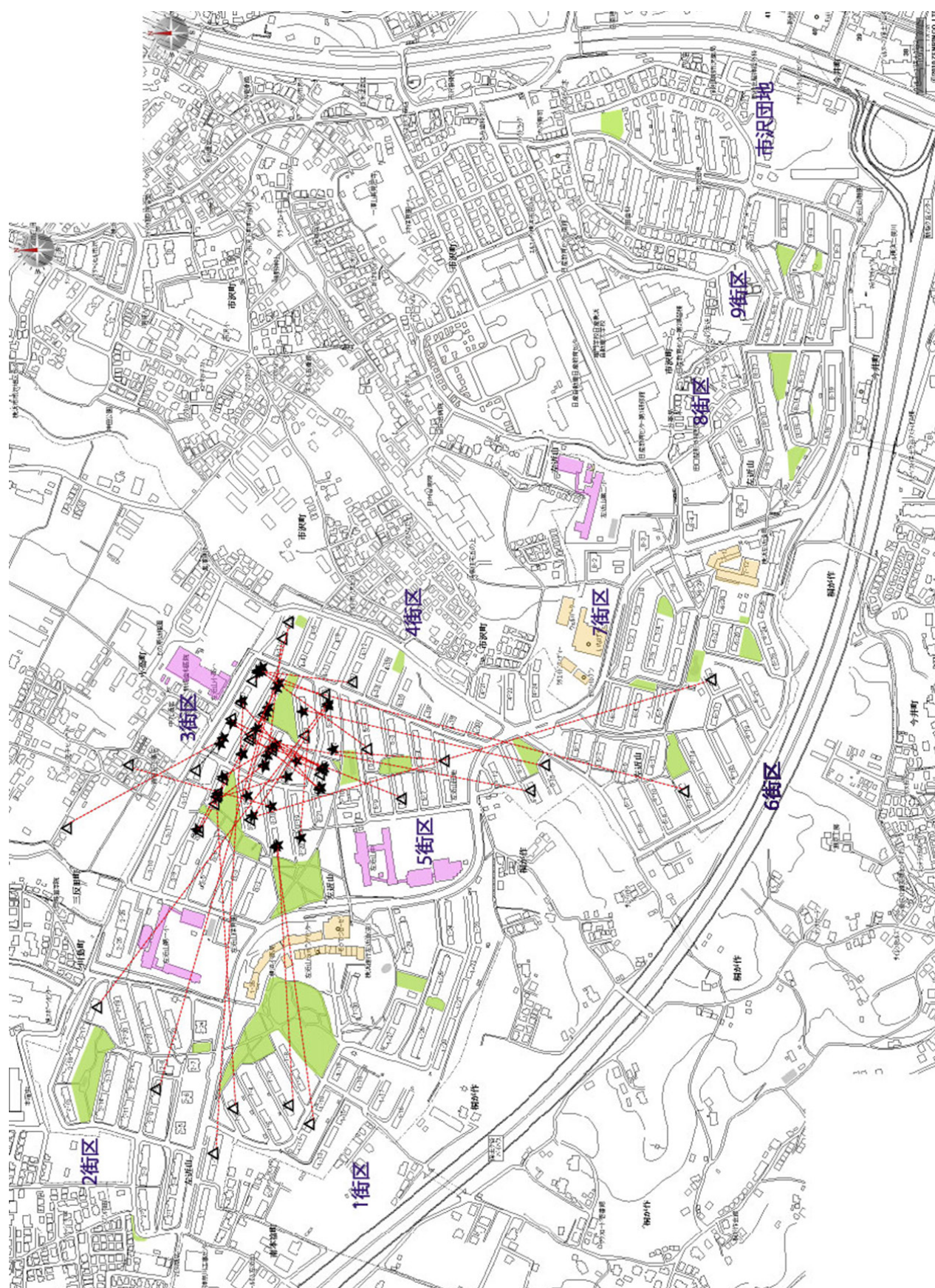
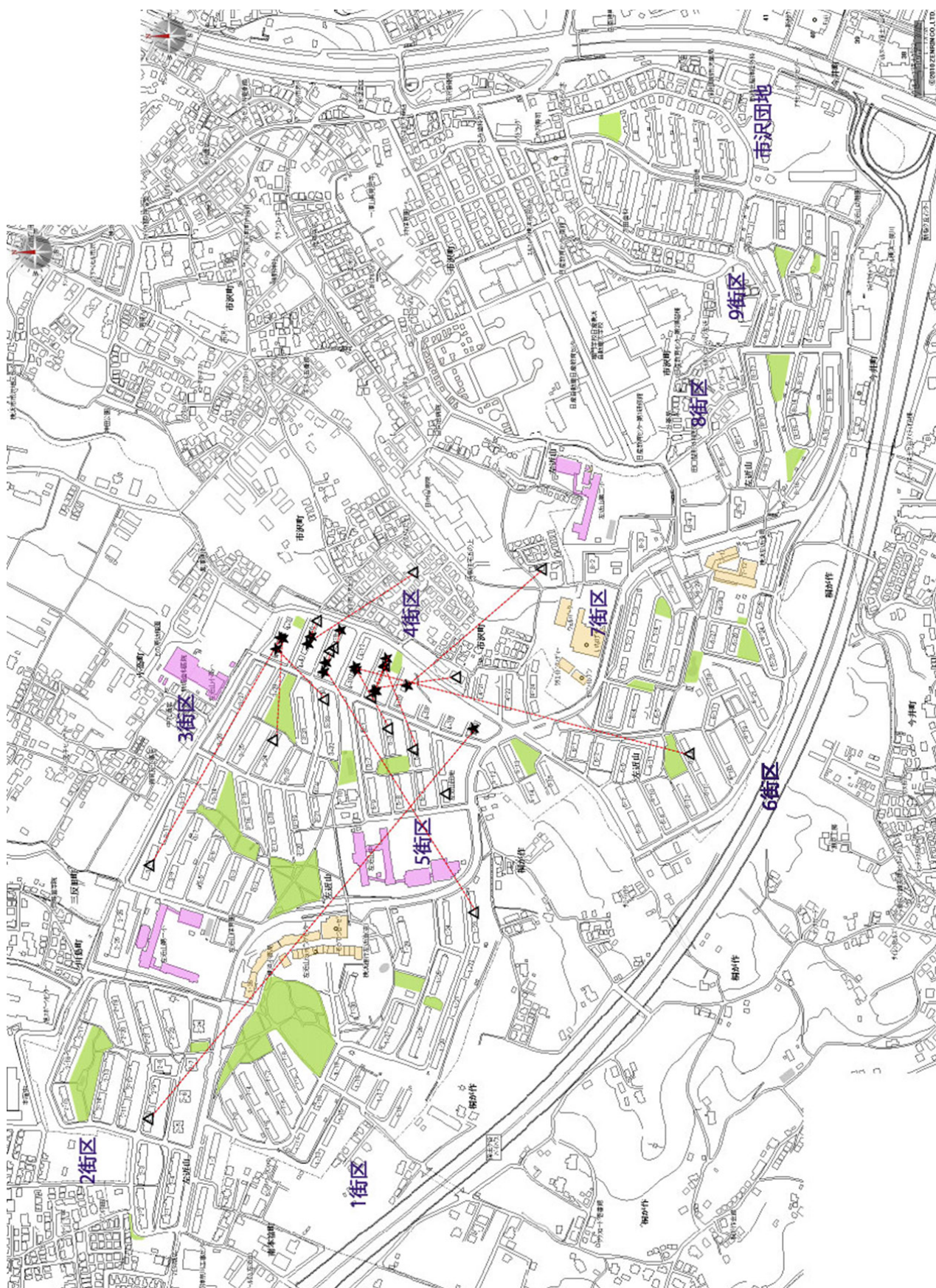


図2-10 左近山団地3街区13～33棟の近居世帯の位置関係



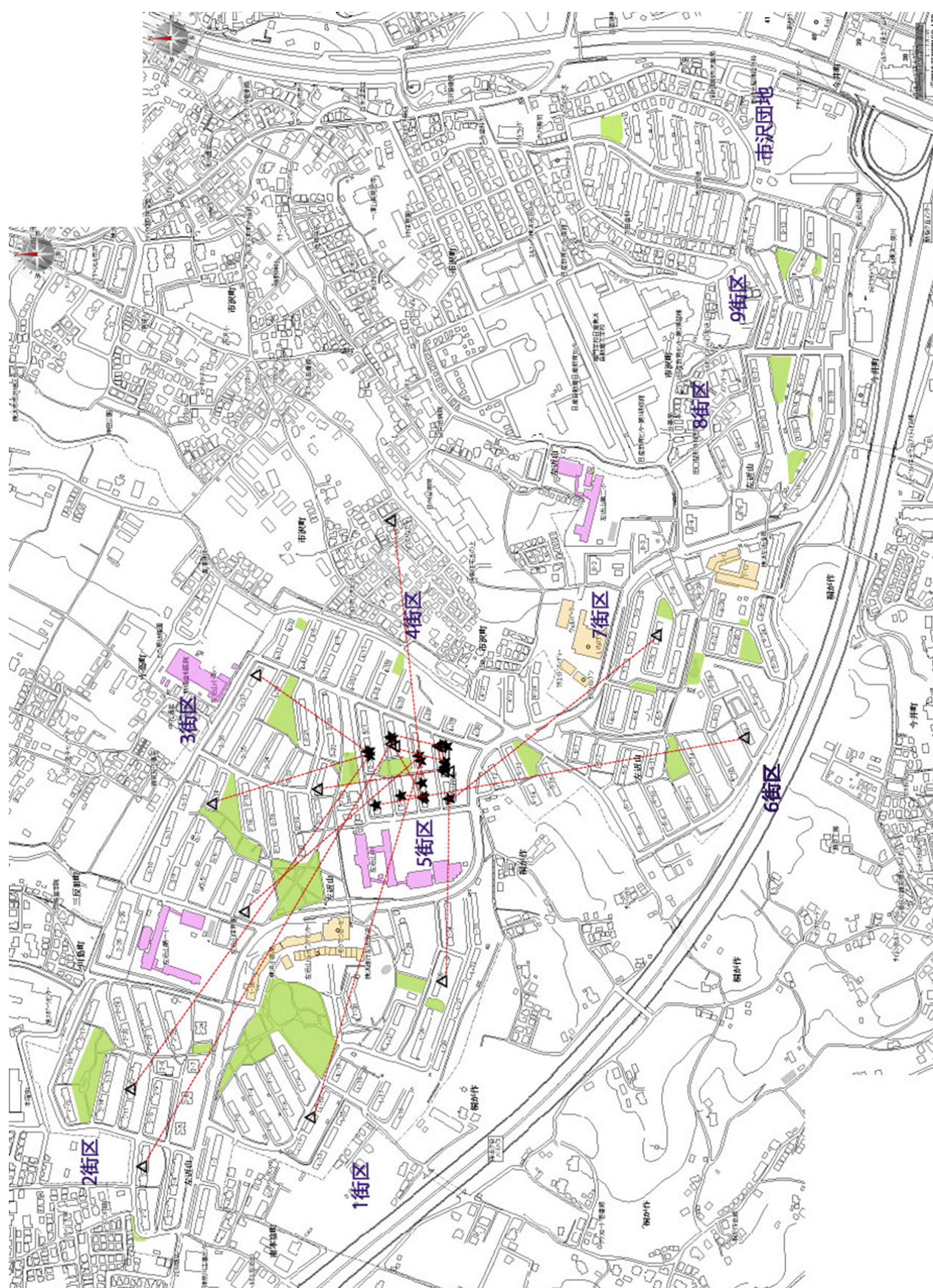


図2-12 左近山団地5街区の近居世帯の位置関係

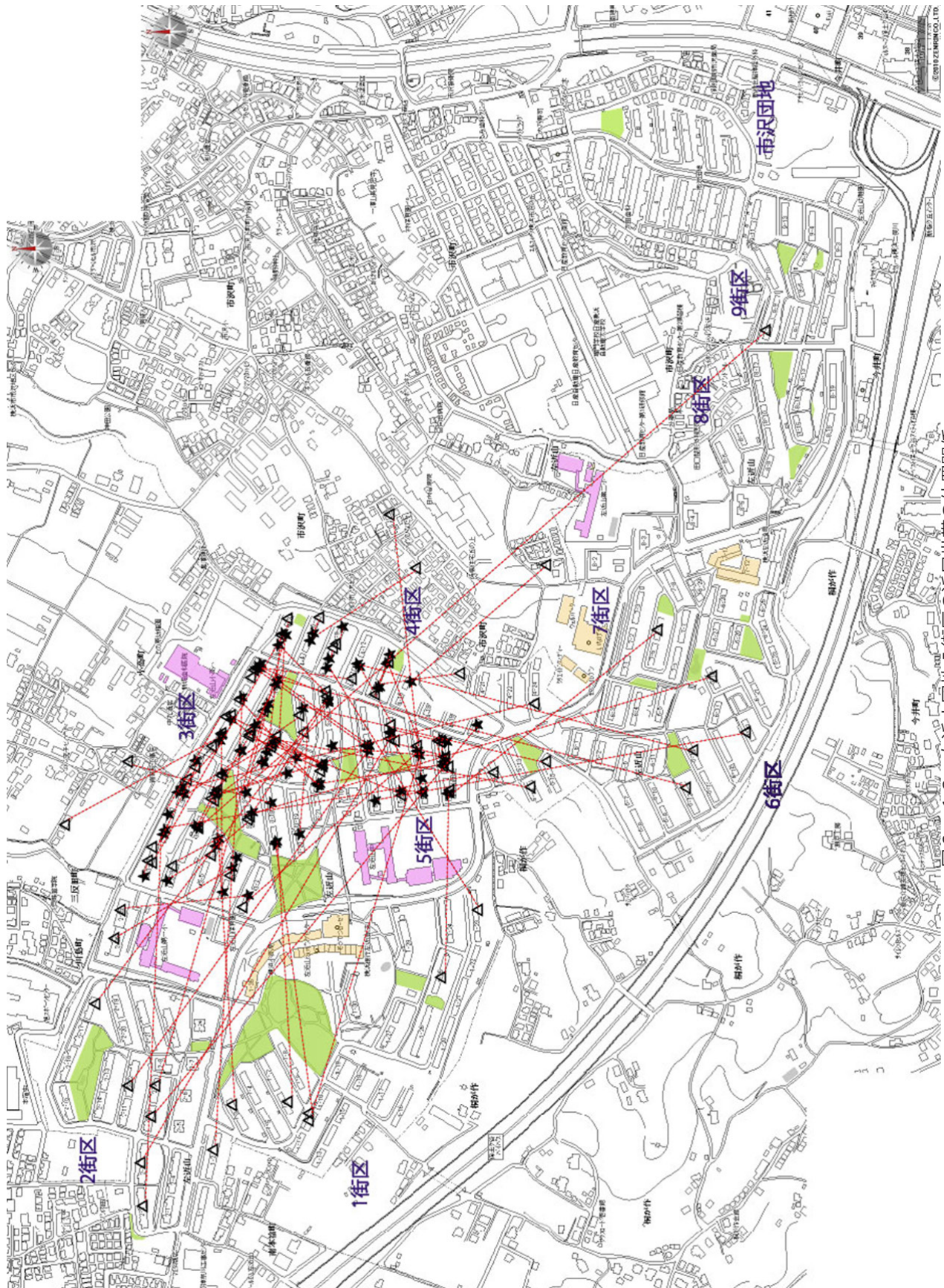


図2-1-3 左近山団地5街区の近居世帯の位置関係

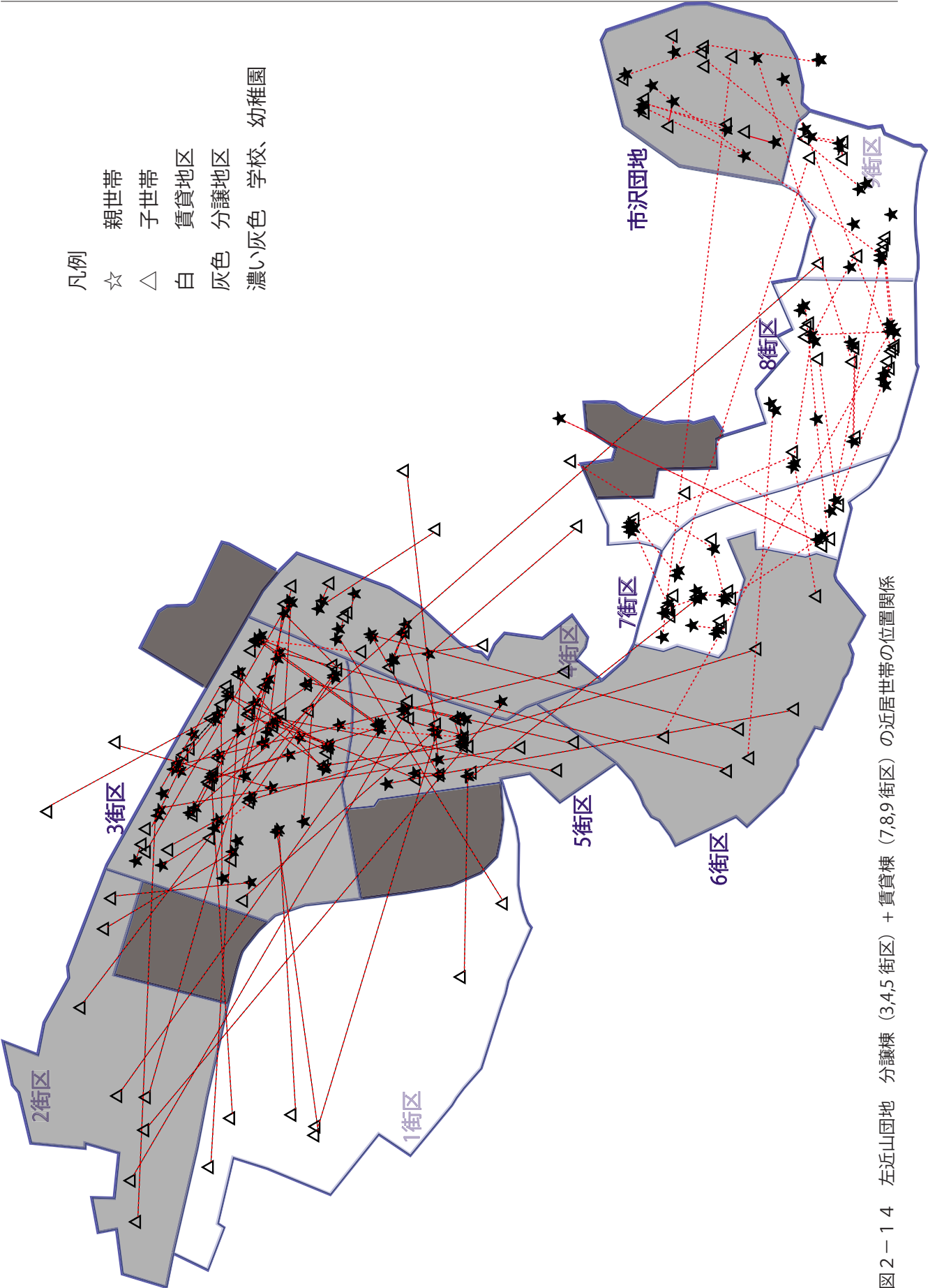


図2-14 左近山団地 分譲棟 (3,4,5 街区) + 賃貸棟 (7,8,9 街区) の近居世帯の位置関係

2-3 外出行動と近居

居親族同士の「関係」をはかる尺度として、それぞれの世帯の日常的な外出行動に着目し近居との関係について傾向を把握することを試みた。外出行動の基本的特徴を把握するために「外出頻度」「外出目的」「外出手段」の3つの視点から分析を行う。

図2-15で年齢別の外出頻度を見てみると、年齢が高くなるに従い、外出頻度も低くなることが分かる。特に仕事をリタイヤする65歳を境に「毎日外出する」割合が半数以下となる。

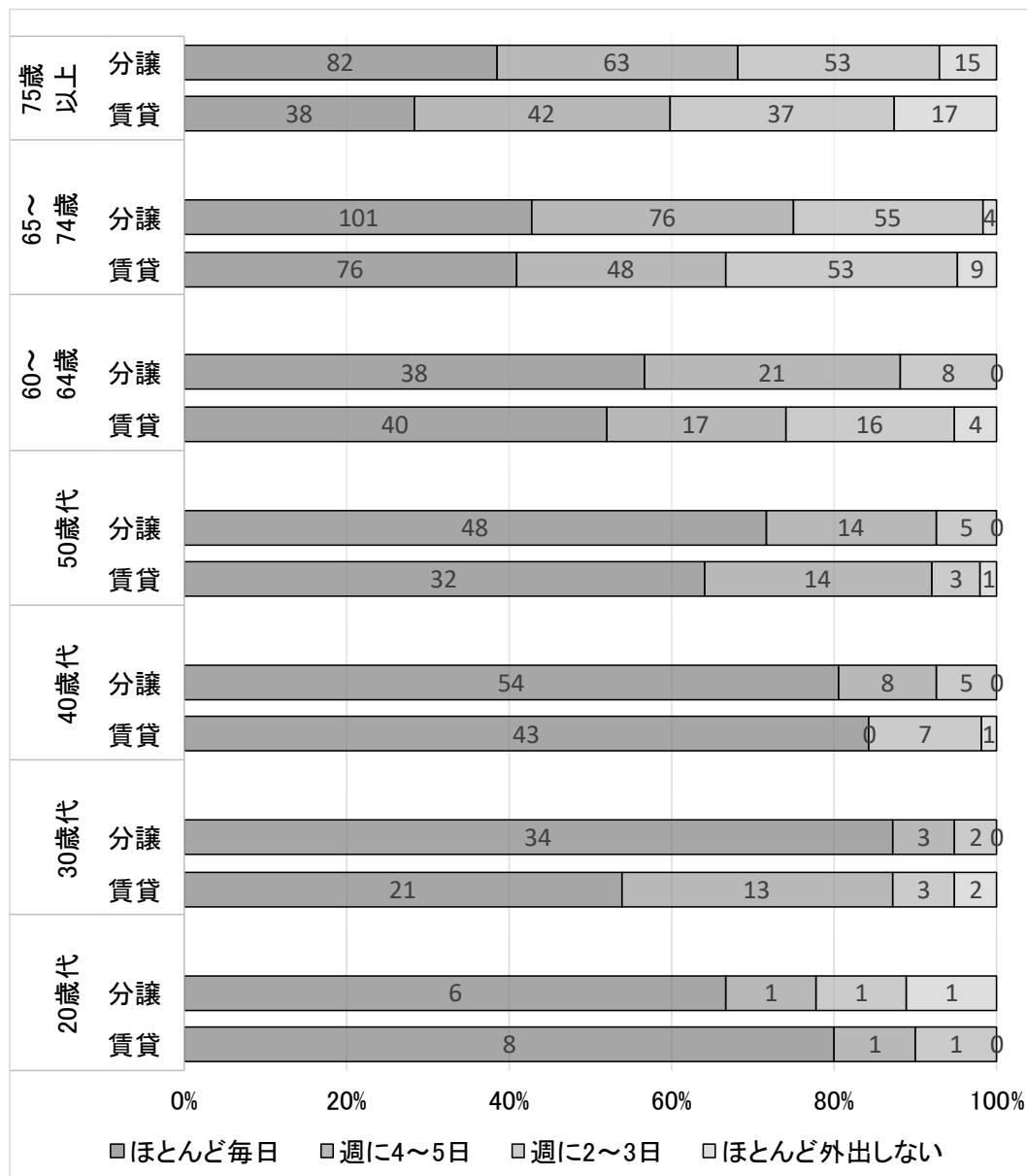


図2-15 年齢×外出頻度

図2-16は各外出目的をどれくらいあげているか65歳未満、65歳～74歳、75歳以上で比較したものである。共通として「買物」が一番高く、75歳以上では「通院」が上位であった。65歳未満では外出目的として「仕事」を持つ割合が他の年齢代に比べ圧倒的に高く、その分「ボランティア活動や地域活動」、「趣味・余暇活動」、「散歩」で他の年齢代より低い傾向を見せている。65歳～74歳と75歳以上を比べると、「散歩」と「通院」以外は65歳～74歳以上で少しずつ高い傾向がみられる。

外出手段は「徒歩」と「バス、電車」が共通として上位であった。75歳以上は他の年齢代にくらべ「施設の送迎バスなど」、「タクシー」が高い傾向であったが、「通院」のためと思われる。(図2-17)

これらのことから年齢が上がるにつれて外出頻度が下がり、外出目的も少なくなる傾向があるといえる。こういった視点から近居世帯のありなしと外出行動の関係を分析する。

表2-9、2-10で外出行動と近居世帯の有無の関係をまとめた。

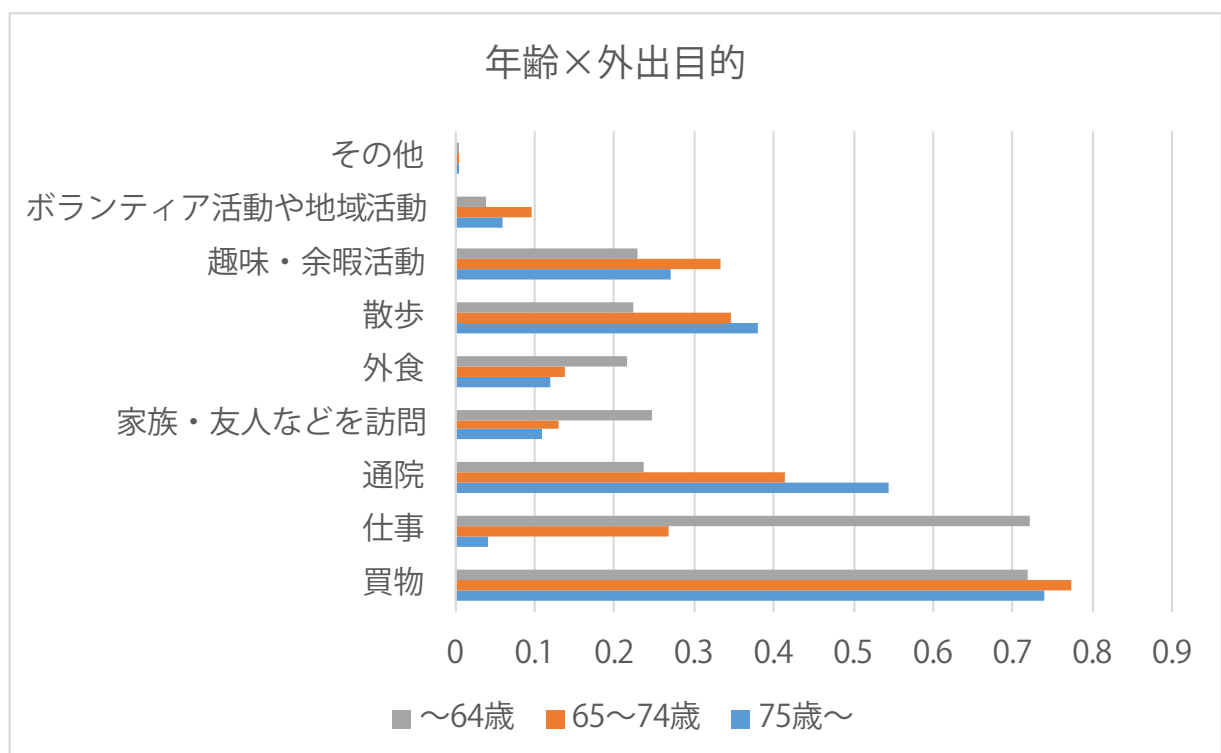


図2-16 年齢×外出目的

外出目的について、子育て世帯では「買い物」、「仕事」が一番多い。次に多い回答を見ると、近居あり世帯の場合は「家族・知人宅訪問」が、近居なし世帯の場合は「外食」、「散歩」となり、違いが見られた。

高齢世帯では「買い物」「通院」「散歩」が共通して上位となった。しかし、近居あり世帯の場合、子育て世帯ほどではないものの、「家族・知人宅訪問」が多く回答される傾向がみられた。

子育て世帯と高齢世帯に共通して「家族・知人宅訪問」を目的とする外出について有意な差がみられたことは、近居が単に近くに住んでいるという「状態」だけでなく、実際に互いの家を行き来する外出行動にもつながっていることを示しているといえる。特に高齢世帯においてこの傾向（近居なし世帯との有意な差）が認められた。

また、高齢世帯にのみ差が認められた「通院」「散歩」については、子世帯による車送迎が親世帯の通院の移動負担を軽減している可能性、保育所・幼稚園・学童保育等への孫の送り迎えや孫との散歩などが親世帯の外出につながっている可能性などが考えられる。これらの外出目的を含めて、高齢世帯は総じて近居ありの方が近居なしに比べて外出目的を幅広く回答する傾向がみられた。

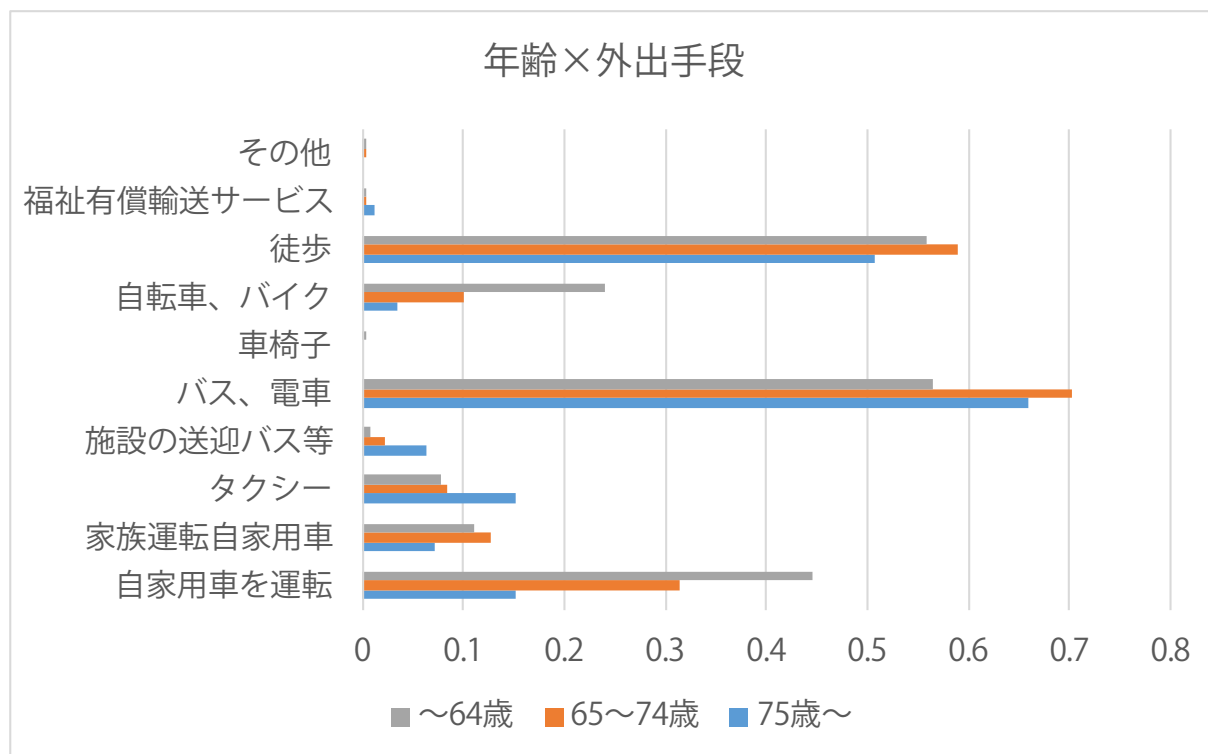


図2-17 年齢×外出手段

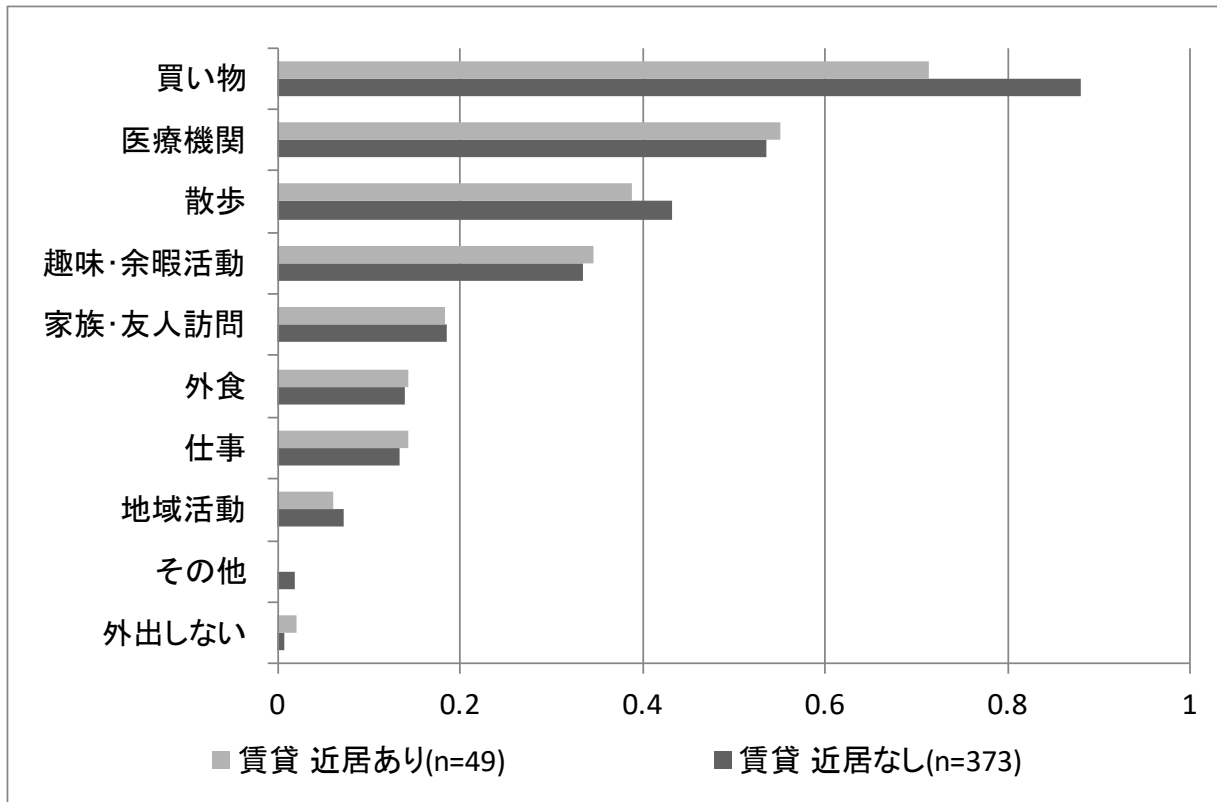


図2-18 賃貸棟の年齢65歳以上の回答者：近居ありなし×外出目的

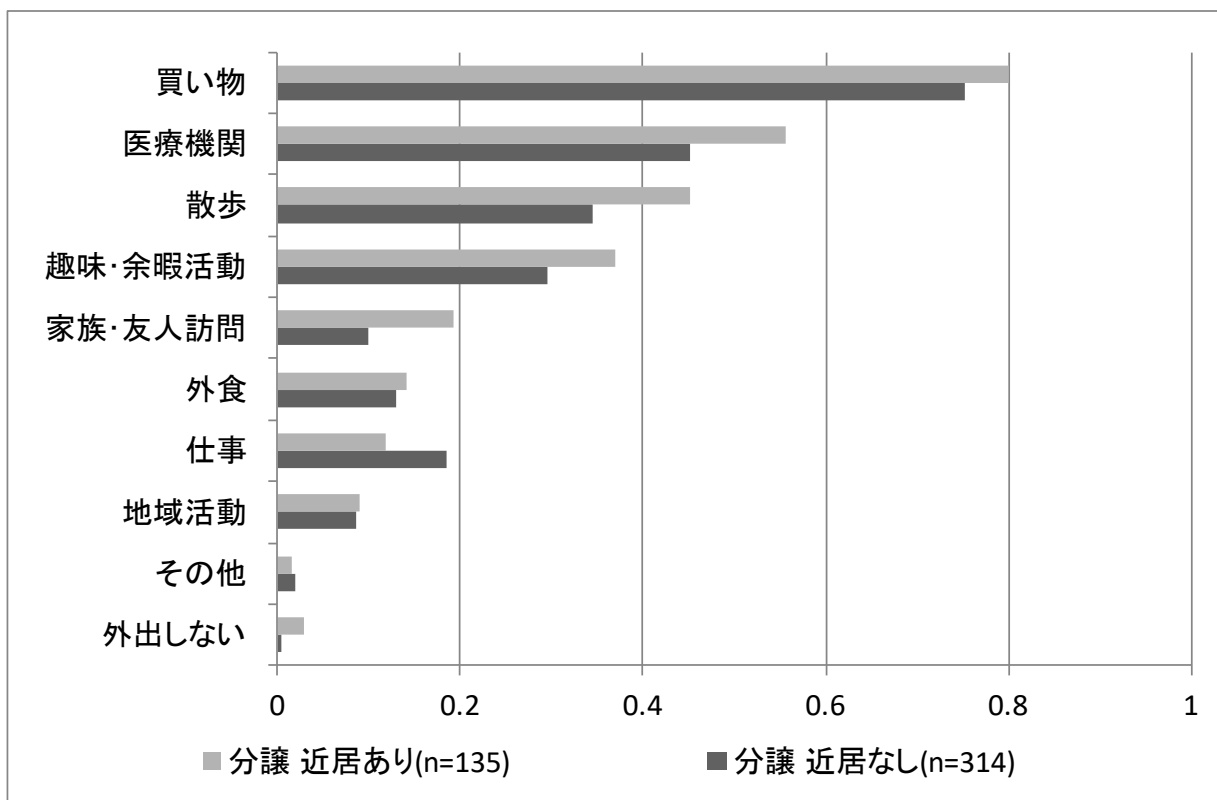


図2-19 分譲棟の年齢65歳以上の回答者：近居ありなし×外出目的

表2-9 左近山団地全体の外出行動の傾向

全体(3～5街区、7～9街区)											
	分譲	賃貸	総計	近居あり	近居なし	総計	近居あり (高齢者)	近居なし (高齢者)	総計		
	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)		
外出頻度	ほとんど毎日	365 (46)	377 (46)	742 (46)	178 (52)	525 (45)	703 (47)	71 (39)	263 (37)	334 (37)	
	週に4～5日	190 (24)	204 (25)	394 (24)	82 (24)	273 (24)	355 (24)	54 (29)	187 (26)	241 (27)	
	週に2～3日	129 (16)	182 (22)	311 (19)	46 (13)	249 (22)	295 (20)	36 (20)	193 (27)	229 (25)	
	外出しない	20 (3)	39 (5)	59 (4)	31 (9)	41 (4)	72 (5)	9 (5)	15 (2)	24 (2.7)	
外出目的	買い物	583 (74)	699 (85)	1282 (80)	271 (79)	928 (80)	1199 (80)	144 (78)	590 (82)	734 (81)	
	仕事	287 (36)	256 (31)	543 (34)	126 (37)	396 (34)	522 (35)	23 (13)	113 (16)	136 (15)	
	通院	305 (39)	350 (42)	655 (41)	145 (42)	465 (40)	610 (41)	102 (55)	353 (49)	455 (50)	
	家族・友人訪問	132 (17)	167 (20)	299 (19)	88 (26)	194 (17)	282 (19)	35 (19)	103 (14)	138 (15)	
	外食	126 (16)	124 (15)	250 (15)	59 (17)	178 (15)	237 (16)	26 (14)	98 (14)	124 (14)	
	散歩	245 (31)	316 (38)	561 (35)	120 (35)	408 (35)	528 (35)	80 (43)	289 (40)	369 (41)	
	趣味・余暇活動	218 (28)	236 (29)	454 (28)	104 (30)	324 (28)	428 (29)	68 (37)	228 (32)	296 (33)	
	ボランティア	50 (6)	52 (6)	102 (6)	20 (6)	75 (6)	95 (6)	15 (8)	57 (8)	72 (8)	
	その他	18 (2)	22 (2)	40 (2)	17 (5)	17 (1)	34 (2)	1 (1)	8 (1)	9 (1)	
	自家用車を運転	245 (31)	231 (28)	476 (30)	121 (35)	337 (29)	458 (31)	48 (26)	154 (21)	202 (22)	
外出方法	家族の自家用車	81 (10)	146 (17)	227 (14)	56 (16)	165 (14)	221 (15)	28 (15)	81 (11)	109 (12)	
	タクシー	80 (10)	55 (8)	135 (8)	37 (11)	92 (8)	129 (9)	23 (13)	65 (9)	88 (9)	
	施設の送迎バス	23 (3)	40 (5)	63 (4)	11 (3)	48 (4)	59 (4)	6 (3)	41 (6)	47 (5)	
	バス、電車	503 (64)	631 (76)	1134 (70)	215 (63)	838 (73)	1053 (70)	124 (67)	550 (76)	674 (75)	
	車いす	1 (1)	5 (1)	6 (1)	2 (1)	4 (0)	6 (1)	2 (1)	3 (0)	5 (1)	
	自転車、バイク	103 (13)	104 (12)	207 (13)	53 (15)	146 (13)	199 (13)	12 (7)	57 (8)	69 (7)	
	徒歩	432 (55)	459 (55)	891 (55)	197 (58)	646 (56)	843 (56)	108 (59)	402 (56)	510 (56)	
福祉輸送サービス	5 (1)	1 (1)	6 (1)	1 (0)	5 (0)	6 (1)	1 (1)	4 (1)	188 (21)		

表2-10 分譲棟 (3,4,5 街区) × 子育て世帯と高齢世帯 × 外出行動

		子育て世帯69人		高齢世帯495人	
		近居あり 38人	近居なし 28人	近居あり 135人	近居なし 314人
外出頻度	毎日	29	25	48	118
	4～5	5	0	44	78
	2～3	2	1	27	75
	外出しない	0	1	5	12
外出目的	買い物	33	26	108	236
	仕事	26	23	16	58
	通院	7	4	75	142
	家族・知人宅訪	17	6	26	31
	外食	11	10	19	41
	散歩	6	10	61	108
	趣味	8	6	50	93
	ボランティア	0	2	12	27
	その他	4	1	2	6
	外出手段	自家用車	21	14	38
家族運転		7	7	18	31
タクシー		3	2	18	36
送迎バス		1	0	4	14
バス・電車		21	16	87	220
車いす		0	0	0	0
自転車バイク		9	12	6	25
徒歩		27	19	82	176
福祉サービス		0	0	1	3
その他		0	1	1	2

「外出手段」については、子育て世帯・高齢世帯ともに「自家用車」「バス・電車」「徒歩」が上位であった。高齢世帯では「自家用車」が減り、「バス・電車」が増える傾向がみられた。

近居あり世帯でみると、外出手段としては「徒歩」あるいは「自転車」はほとんど変化が見られない一方で、「自家用車」や「バス・電車」などの利用の割合が上昇していた。これは、親族近居によって外出の機会は増加するものの、地理的制約から車利用が中心となり、身近な場所ではなく公共交通機関を利用した遠出につながっているためであると考えられる。

近居世帯の有無と「外出目的」、「外出頻度」の関係について見てみる。図2-20は分譲棟と賃貸棟のそれぞれについて高齢世帯の近居の有無と外出頻度との関係を示したものの、図2-21はこのうち外出目的として「家族・友人に訪問」の回答者を抽出したものである。「週に4～5回外出する」が近居あり群で少し上がっているが、全体としてははっきりとした傾向はみられない。しかし、分譲棟では、「近居あり」かつ「家族・友人に訪問」を外出目的として回答する群において、外出頻度が高まる傾向がみられた。

次に近居世帯の有無と「外出目的」「外出手段」の関係をみる。図は分譲棟、賃貸棟における近居あり群の外出目的を示したものである。図によると、分譲棟において「家族・友人に訪問」を外出目的として回答する群は、外出手段として「家族が運転」「バス、電車」の割合の上昇傾向がみられた。一方で、賃貸棟において「家族・友人に訪問」を外出目的として回答する群は、「タクシー」「自分が運転」「バス、電車」「徒歩」の割合の上昇傾向が見られた。

高齢世帯と子育て世帯のそれぞれについて、近居の有無との関係を整理した結果、「外出頻度」と「外出手段」については明確な差は認められなかったが、「外出目的」については、近居世帯のありなしの違いによっていくつか有意差が認められた。

即ち、親族近居という住まい方によって、個人での外出に加えて近居家族と一緒に外出などの多様な外出集団の編成が可能となり、結果的に外出目的や外出頻度の多様化、増加につながっていることが考えられる。

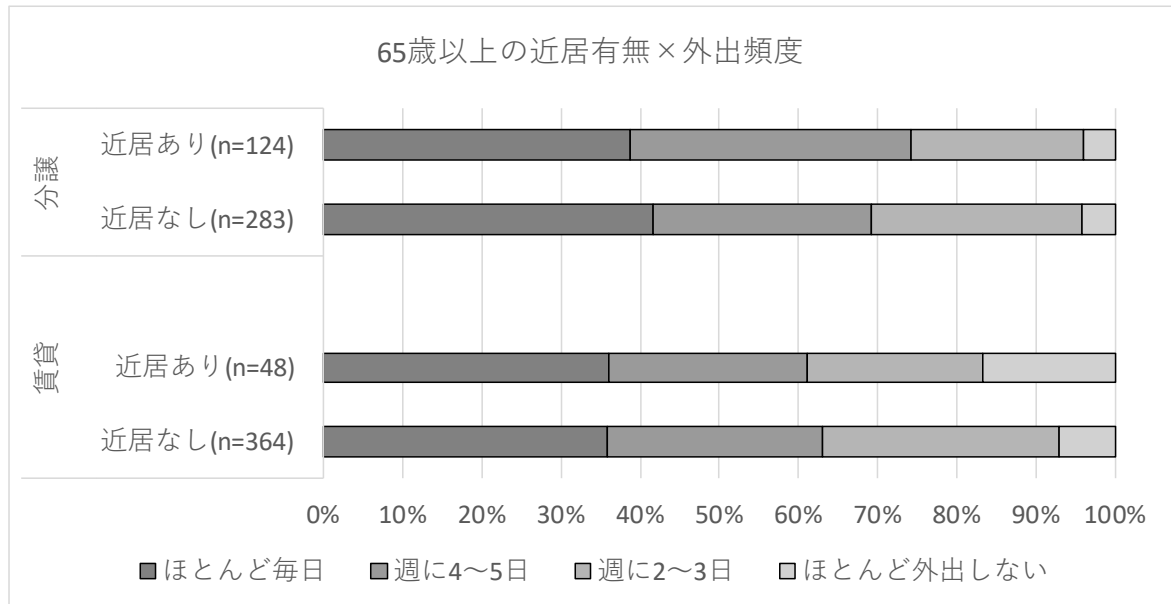


図2-20 年齢65歳以上の回答者：近居ありなし×外出頻度

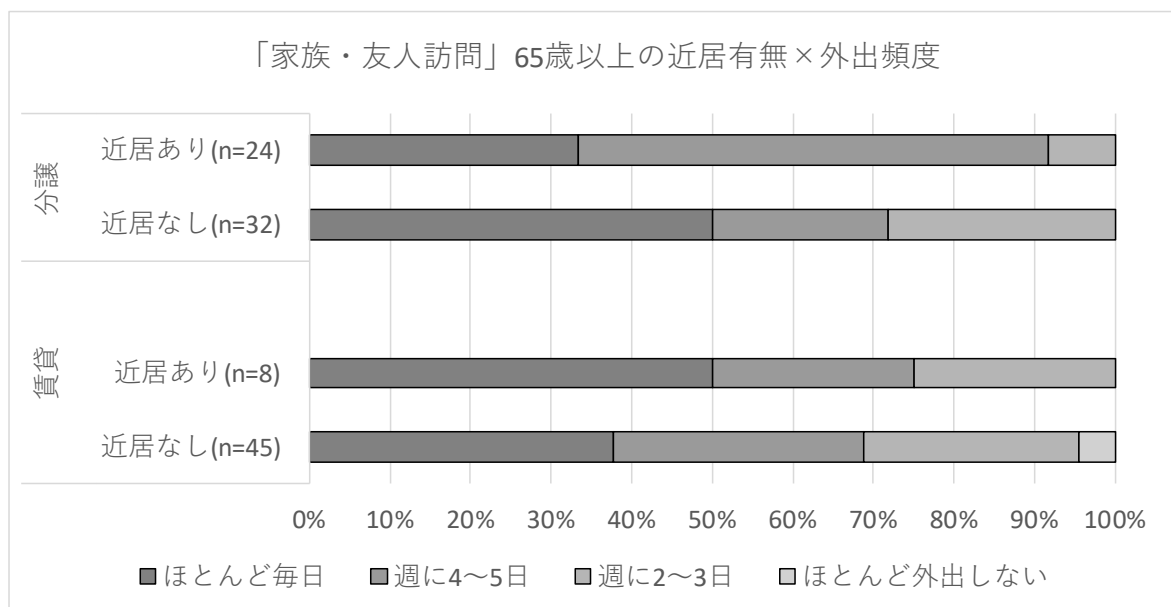


図2-21 年齢65歳以上×「家族・友人に訪問」の外出目的を持つ人：
近居ありなし×外出頻度

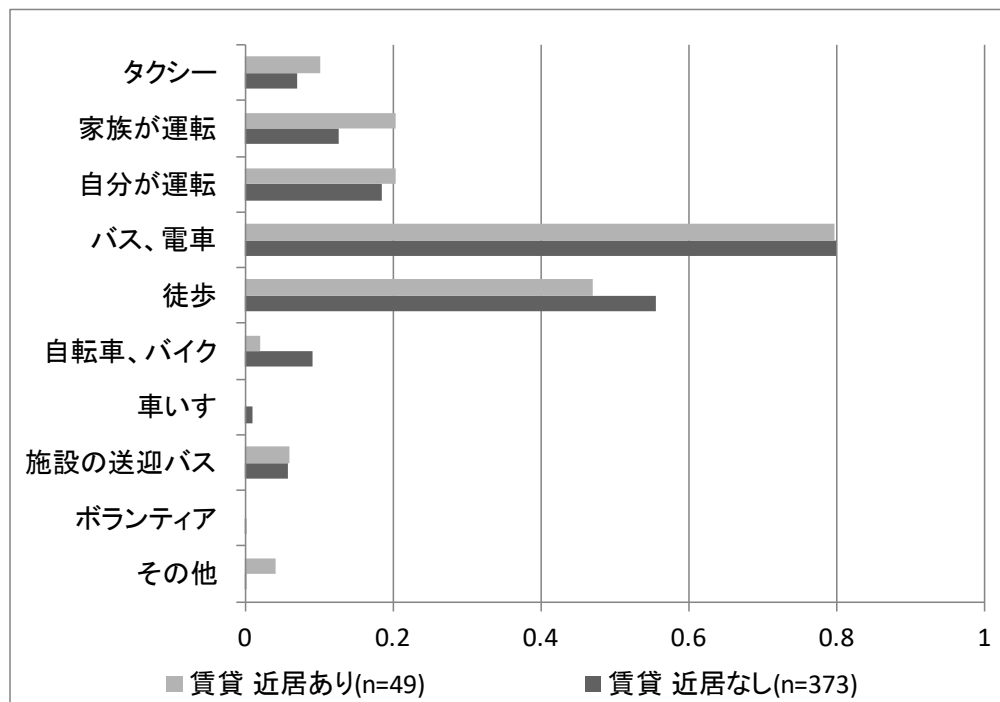


図2-22 賃貸棟の年齢65歳以上の回答者：近居ありなし×外出手段

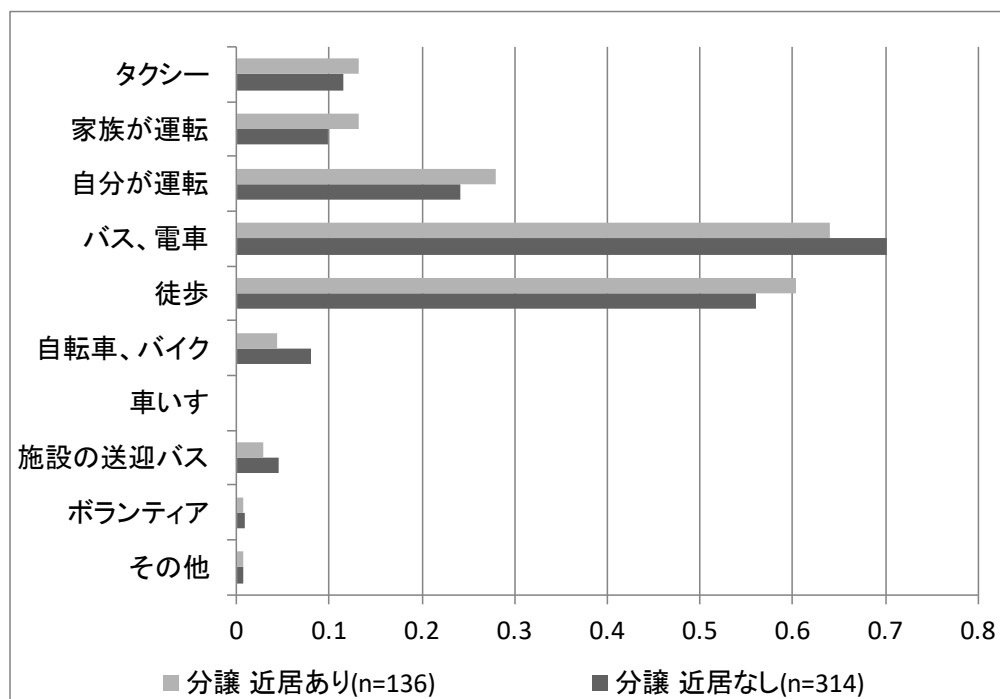


図2-23 分譲棟の年齢65歳以上の回答者：近居ありなし×外出手段

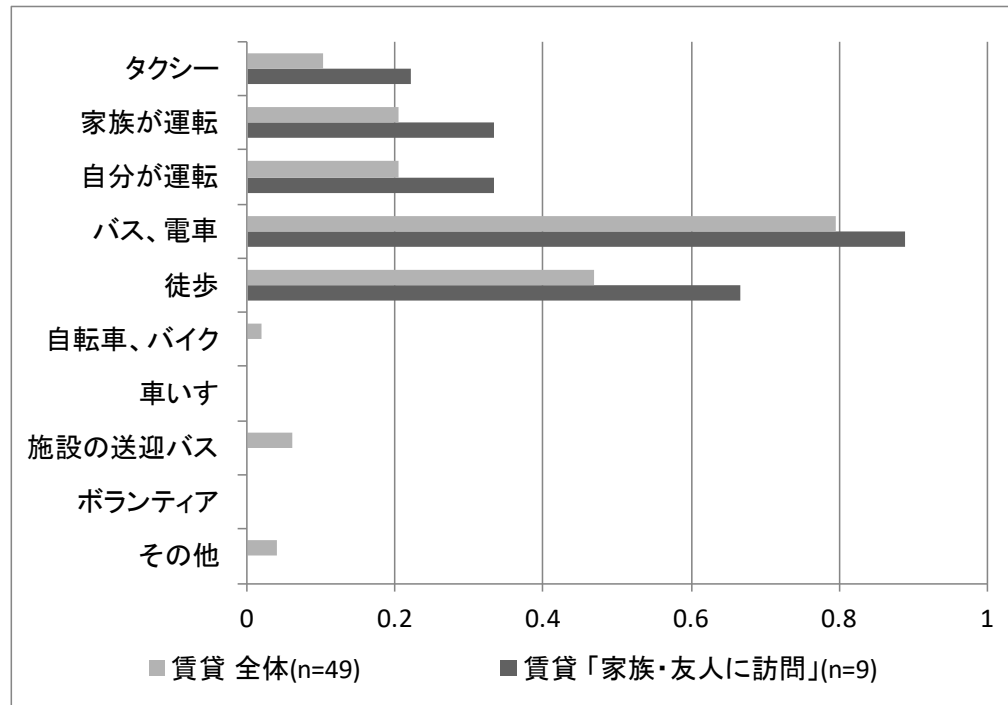


図2-24 賃貸棟×年齢65歳以上×近居あり：
「家族・友人に訪問」の外出目的を持つ人×外出手段

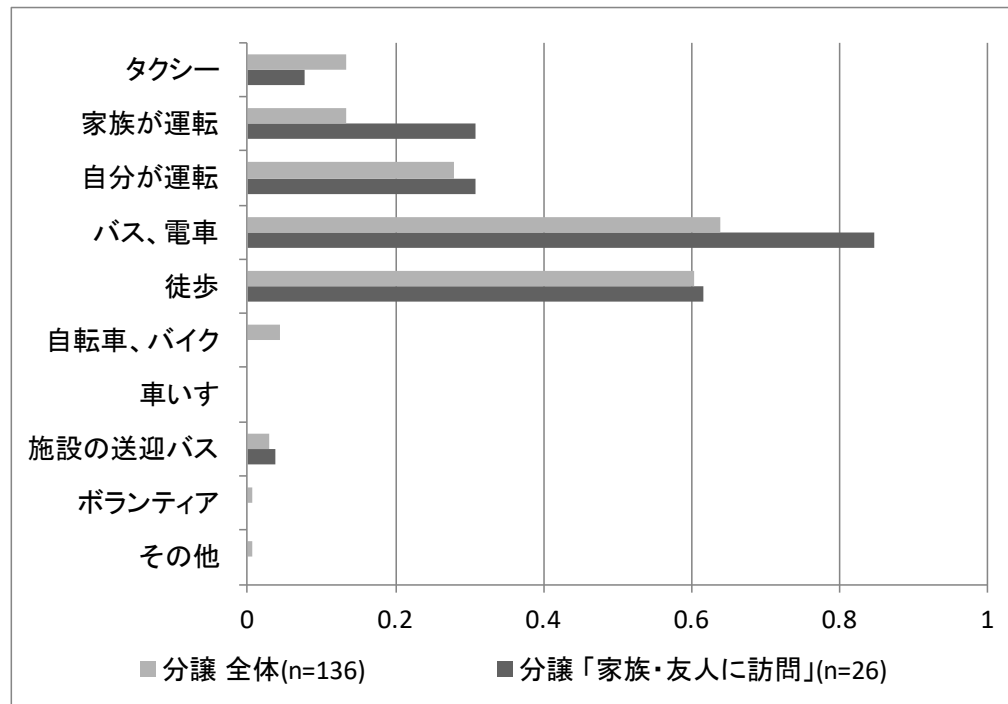


図2-25 分譲棟×年齢65歳以上×近居あり：
「家族・友人に訪問」の外出目的を持つ人×外出手段

2-4 小括

本章では、日常生活での親族近居の特徴や有効性を把握するため、まず対象地の近居に対する意思と現状を分析することを試みた。

子育て世帯の近居ニーズは潜在的に高い。子育て世帯の約3割が前居住地を当該団地と回答していて、全体近居世帯の中で一定の層を形成している。将来的に同・近居したいとの意向も6割と高く、今後も引き続き近居ニーズは存在すると考えられる。

近居世帯の物理的距離を見てみると、近居相手の住所は団地内と外で半々であった。住戸間の距離は20分以内、200m圏内の歩道圏に集中していて、同一住棟や隣住棟といった50m圏内のケースも多く見られる。近居の距離はできるだけ近くしたい傾向があると思われる。

次に、近居している世帯の日常生活をはかる尺度として、日常的な外出行動に着目、「外出頻度」「外出目的」「外出手段」の3つの視点から傾向と近居の関係について分析を行った。

高齢世帯と子育て世帯のそれぞれについて、近居の有無との関係を整理した結果、「外出頻度」と「外出手段」については明確な差は認められなかったが、「外出目的」については、近居の有無の違いによっていくつか有意差が認められた。

具体的には、子育て世帯においては「家族・知人宅訪問」を目的とする外出、高齢世帯においては「家族・知人宅訪問」「通院」「散歩」を目的とする外出について、それぞれ近居あり世帯と近居なし世帯との有意な差が認められた。

子育て世帯と高齢世帯に共通して「家族・知人宅訪問」を目的とする外出について有意な差がみられたことは、近居が単に近くに住んでいるという「状態」だけでなく、実際に互いの家を行き来する外出行動にもつながっていることを示しているといえる。特に高齢世帯においてこの傾向（近居なし世帯との有意な差）が認められた。

また、高齢世帯にのみ差が認められた「通院」「散歩」については、子世帯による車送迎が親世帯の通院の移動負担を軽減している可能

性、保育所・幼稚園・学童保育等への孫の送り迎えや孫との散歩などが親世帯の外出につながっている可能性などが考えられる。

郊外住宅団地における多世代近居からみた
世帯間相互支援行動に関する研究

第3章 環境変化と近居の関係

第3章 環境変化と近居の関係

本章では、浜見平団地の居住者を対象としてアンケート調査から建替え前後での環境変化と近居の関係に注目する。建替えを経て生活支援サービスなどのインフラが整備された環境では近居がどれくらいであり、近居世帯間でどのような付き合いをしているかを調査し、どのようなニーズで近居が求められているかをあきらかにすることが目的である。

対象地は神奈川県茅ヶ崎市に位置する浜見平団地である。昭和39年10月に都市再生機構^{注1)}によって開発された、総住棟数93棟、3407戸の大規模郊外住宅団地である。

団地の中心にバス路線が通り、最寄りの鉄道駅である茅ヶ崎駅までバスでアクセスが可能である。地形は平坦地で歩行や自転車による移動に不便ではない。

当該団地は都市再生機構によって平成16年度に建替え事業着手団地に指定されて、第1期の521戸が平成23年3月より入居が開始、第2期の349戸が平成27年10月より入居が開始され、ま

注3-1
旧日本住宅公団

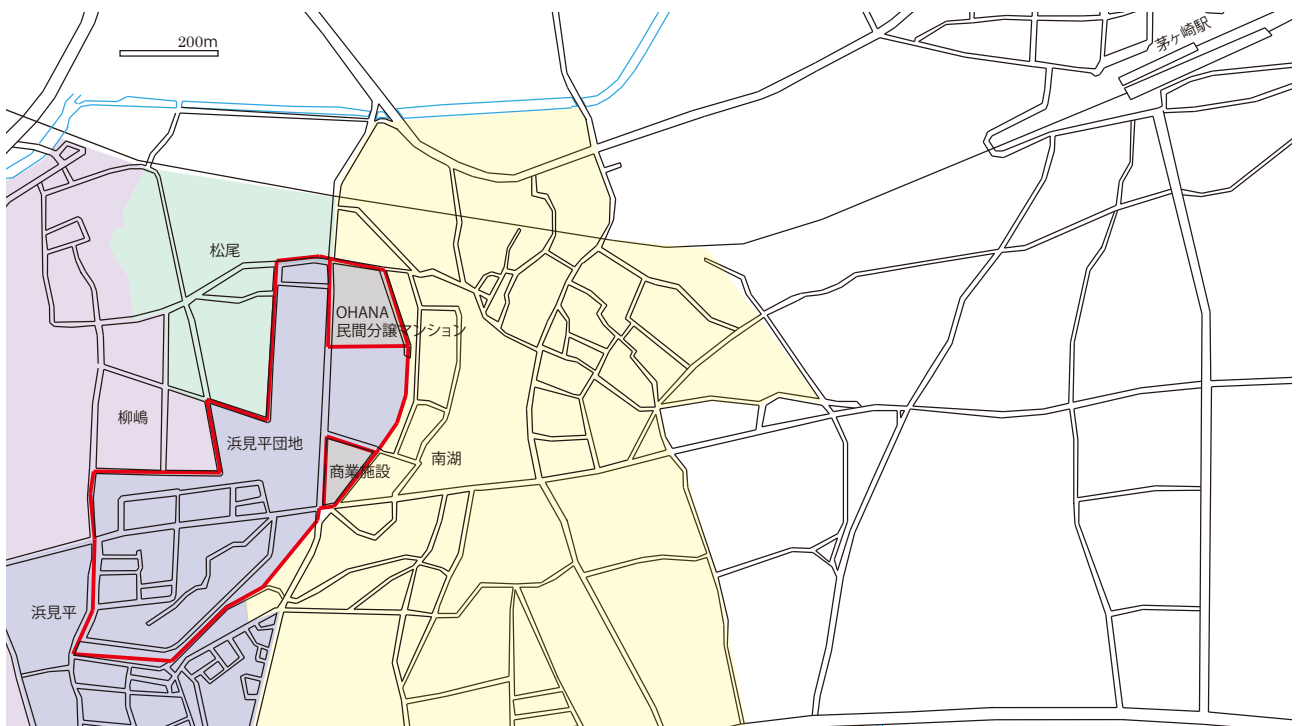


図3-1 浜見平団地とその周辺

だ第3期を控えている。現在、浜見平団地には建替えを終えた新建物と建替え待ちの既存建物が混住している状態である。また、古い建物を撤去した一部は民間開発が行われ、新しく分譲マンションが建てられた。

建替え計画の一部として団地中心部に「生活拠点ゾーン」が設けられ、公共施設、商業施設、公園機能を集約化している。（図1-2）公園ゾーン内の「しろやま公園」は公園機能だけでなく防災機能も兼ねている。図3-2のA-3地区には保育園や図書室、地域包括支援センター、行政窓口など茅ヶ崎市の施設が入るハマミーナと郵便局や医療施設、コンビニなどの民間施設が併設され、全部で29店舗が入居している。

注3-2

茅ヶ崎市ホームページ内浜見平地
区のまちづくり資料参照

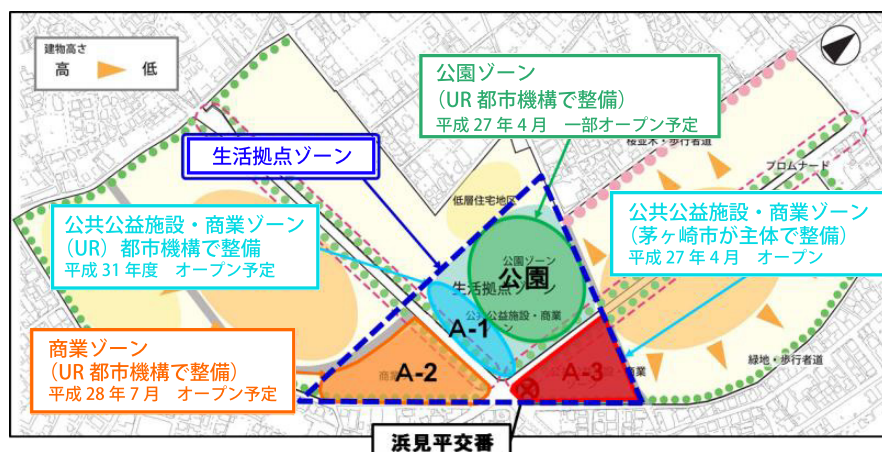


図 3-2 浜見平団地^{注2)}

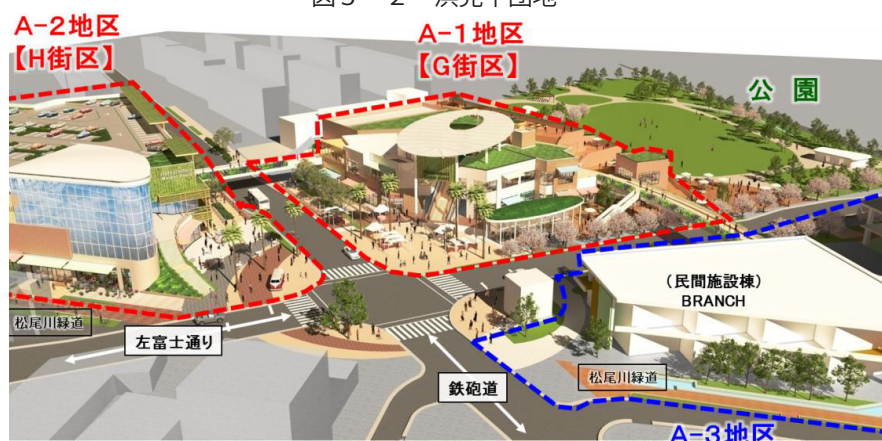


図3-1 浜見平岡地「生活拠点ゾーン」イメージ図^{注2)}



図3-4 A-3地区の施設ハマミナ^{注2)}

3-1 アンケート調査概要

浜見平団地の建替えが行われた新建物（以後、新建物）とまだ建替えが済んでいない既存建物（以後、既存建物）の居住者に対象に自治会の協力を得て建替え後の団地内での生活実態とともに、建替え前後の団地に対する居住者の意識を把握するためにアンケート調査を実施した。

アンケート設問は今の居住地に移転する前の居住地についての1問のみ異なるものを既存建物と新建物で2種類用意し全戸配布した。

調査には最も付き合いのある親族についての設問を設け、近居ではない世帯からも親族との付き合い方についてデータが取れるようにした。また、左近山団地での調査結果に見られた近居世帯間の付き合いについてその頻度を聞いている。

これらの調査は2016年9月に実施され、建替えがまだされていない既存住宅に配布824回収169（回収率20.5%）、建替えされた新建物に配布850回収219（回収率25.8%）と全体で回収率23.2%の結果を得た。（表3-1）

まず、表3-2のように回答者を5つの群に分けてアンケート分

表3-1 アンケート概要

所在地	茅ヶ崎市
実施主体	浜見平団地自治会、 浜見平団地再生支援研究会 （横浜国立大学建築計画研究室、 日本大学建築・地域共生デザイン研究室）
配布日	2016年9月16日
配布・回収方法	郵送法（ただし配布は直接投函による）
配布数	1674（既存建物824、新建物850）
回収数	388（既存建物169、新建物219）
回収率	23.2%（既存建物20.5%、新建物25.8%）

析を行う。既存建物の回答者はもともとそこに住んでいた群と住み替えのための既存建物の空いている住戸に借り住まいしている群に分ける。新建物の回答者は移転する前の居住地を基準に浜見平団地からの戻り入居と浜見平団地の周辺^{注3)}からの入居とそれ以外の地域からの入居の3つに分ける。

回答者の浜見平団地への入居時期をみると約半数が開発してまもなくから住み続けていて、30年以上住み続けている回答者は全体の3/4となっている。(図3-4) 戻り入居群は新建物の約83%であって、茅ヶ崎市内まで広げると新建物群の約91%となる。新建物群もそのほとんどが土地勘を持っていると考えてよいのだろう。(表3-4)

回答者の年齢をみると、65歳以上の割合が全体の77%を占めて高齢化の進行が顕著な地域であることわかる。表3-3は回答者の全体、既存建物群(①+②)、新建物群(③+④+⑤)、戻り入居群(⑤)^{注4)}を年齢別に整理したものである。既存建物では72%、新建物群では81%と建替え後の高齢者率が上がったいる。また、戻り入居群のうち65歳以上が約83%とさらに高い傾向となっていて、高齢者の戻り入居群が建替え後の高齢者率の上昇に関係したと思われる。建替えが行われても住み慣れた地域に住み続けたいという願望

表3-2 浜見平団地住民分類

既存建物		新建物		
①もともと住んでいた世帯	②建て替えのため仮入居	③浜見平団地からの戻り入居	団地外からの入居	
			④団地周辺	⑤外部
近居あり	近居あり	近居あり	近居あり	近居あり
近居なし	近居なし	近居なし	近居なし	近居なし

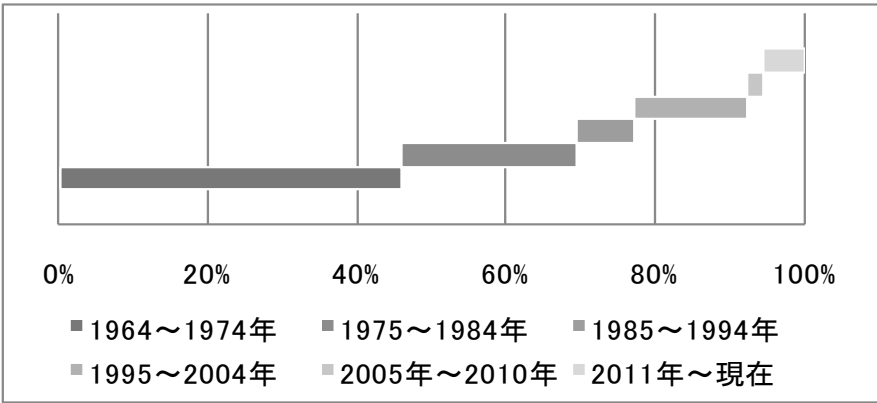


図3-4 回答者の浜見平団地への入居時期

注3-3

浜見平団地周辺地域とは浜見平団地を隣地である南湖町、柳島町、松尾町とする。
 図3-1参照

注3-4

①～⑤は表3-2で回答者が群分けされたものである。

が高齢者の方で強いことがわかる。

建替えに対する住民の評価は建替え前後の暮らしへの満足度で読み取るとする。施設の新設や道路の整備などは行われたが住居環境はそのままの既存建物群と住戸も新しくなった戻り住居群の暮らしへの満足度を図3-5、6に整理した。

傾向を見ると、戻り入居群は「住環境全般」については建替え後の満足度が上がっている。しかし、「社会的交流」についてはほぼ変化がない。既存建物群は全項目^{注5)}において「満足」、「やや満足」が建替え後で下がっている。

「社会的交流」で満足度が下がった理由としては、以前の住まいでは同じ棟など近くに住んでいた仲の良い住民が建替えによって離れてしまったことや建替え後の賃料が高く戻り入居ができず他の地域に引っ越してしまったことなどが挙げられた。また、新建物の場

注3-5

「住まい（住宅の性能）」は既存建物では建替えが済んでいないため建替え後に関する回答が分析対象としない。

表3-3 回答者の年齢

		全体		既存建物		新建物		戻り入居	
年齢	39歳以下	7	2%	1	1%	6	3%	1	1%
	40～49歳	24	6%	13	8%	11	5%	11	6%
	50～54歳	17	4%	11	7%	6	3%	5	3%
	55～59歳	12	3%	5	3%	7	3%	5	3%
	60～64歳	29	8%	17	10%	12	6%	8	4%
	65～69歳	61	16%	29	17%	32	15%	20	11%
	70～74歳	60	16%	24	14%	36	17%	29	16%
	75～79歳	78	20%	32	19%	46	21%	44	24%
	80～84歳	75	19%	26	15%	49	22%	46	25%
	85歳以上	23	6%	10	6%	13	6%	13	7%

表3-4 回答者の分類と近居有無

既存建物				新建物			
168				218			
既存住民		仮り住まい		戻り入居		外部入居	
133 79%		35 21%		182 83%		36 17%	
近居あり	近居なし	近居あり	近居なし	近居あり	近居なし	近居あり	近居なし
29 22%	104 78%	11 31%	24 69%	45 25%	137 75%	4 11%	32 89%

合は既存建物のような階段室型ではなく、廊下型であることで周辺住戸の人たちと会う機会も減り付き合いも薄いとの意見もあった。その他の項目で既存建物群の満足度が下がった理由は現在の段階では既存建物とそのすぐ周りの街区は変わらず団地の一部だけ開発されたからと思われる。今までの生活パターンで使いやすかったもの、例えば、撤去された商店街や緑などがなくなったことで満足度がさ

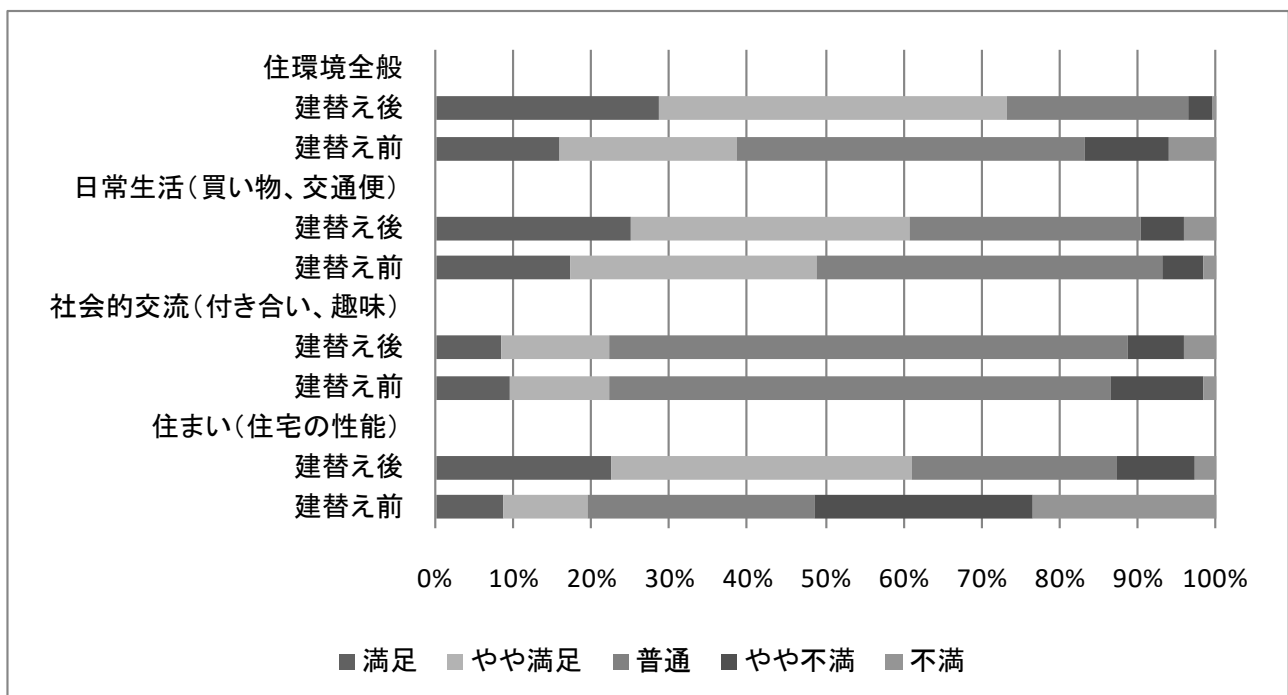


図3-5 新建築居住者のうち戻り入居者の暮らしへの総合的満足度

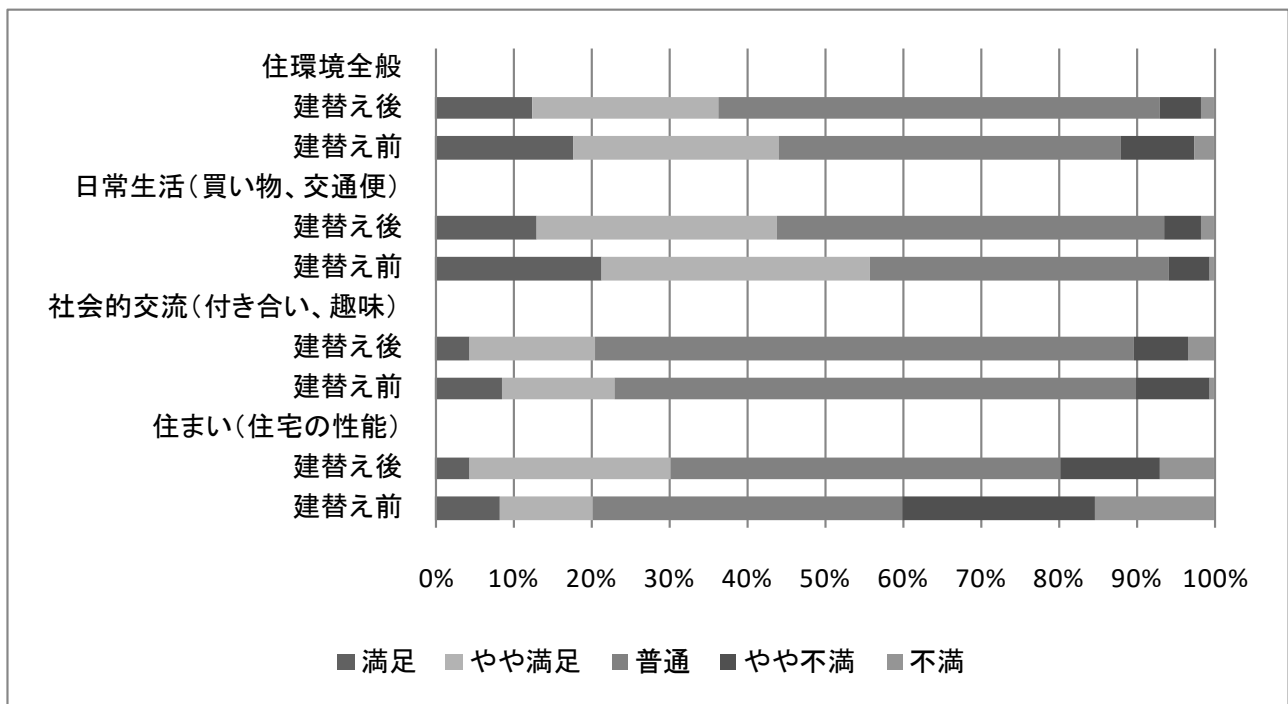


図3-6 既存建物居住者の暮らしへの総合的満足度

がった原因であろう。

図3-7は建替え後、新建物群の戻り入居群と外部入居群の生活環境に対する満足度について比較したものである。全体的に外部入居群の方が満足度が高い。その中「生活の安全性」、「交通安全対策」、「保険・医療サービス」、「公園・緑地・広場」の項目では「満足」の「満足」と回答した割合に差が見られる。

岡村ら^{文9)10)}によって2006年に建替え前の団地においてアンケート調査を行っている。図3-8は2006年 アンケートで調査した「建替え後団地に期待するもの」と2016年のアンケートで「どのような団地になりつつあるか」を比較した図である。建替え後の評価の中で「高齢者支援や子育て支援の施設が充実」、「緑豊かで散歩できる広場や遊歩道がある」が期待値より低いことが分かる。

文3-1

岡村 遼 他：建替え計画団地における世代間交流の場に関する研究 その1：居住者による近隣交流の実態，日本建築学会大会学術講演梗概集，E-2，pp.269-270，2007

文3-2

入村 誠 他：建替え計画団地における世代間交流の場に関する研究 その2：世代別にみた交流実態とコミュニティカフェの実験的取り組み，日本建築学会大会学術講演梗概集，E-2，pp.271-272，2007

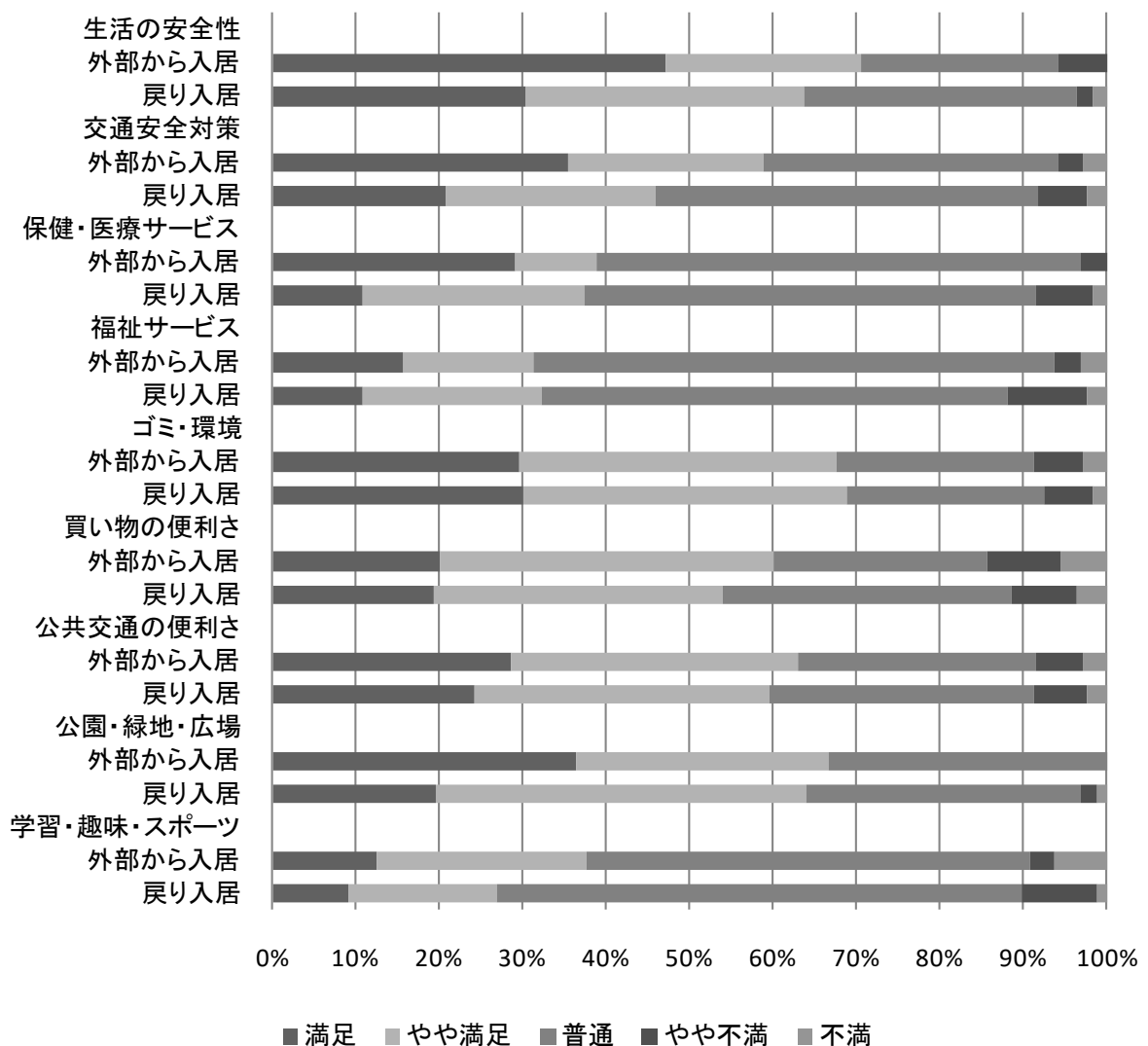


図3-7 新建物の外部からの入居者と戻り入居者の満足度

以上より、当該団地に以前より住んでいた居住者は外部から引っ越してきた者より団地への評価が低く、それは以前の環境からの期待に関係する。一定の環境変化は避けられないが、建替え前後の生活を円滑に移行するためには既存環境を生かした計画が重要であると考えられる。

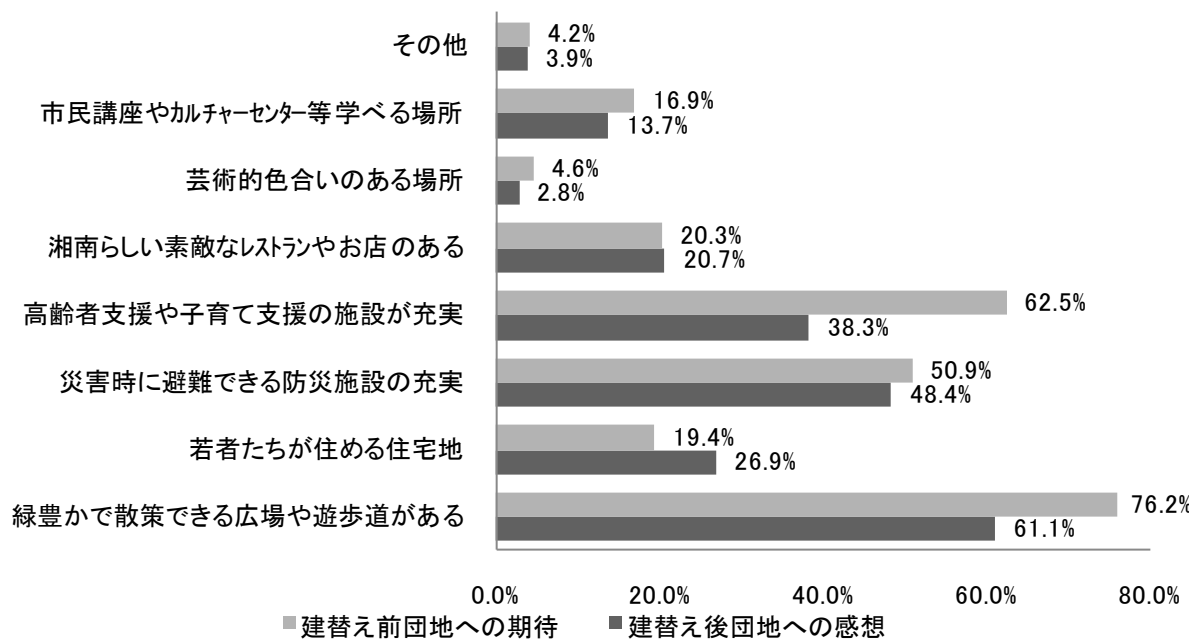


図3-8 建替え前の期待と建替えの感想の比較

3-2 建替えと近居への意向

アンケート調査で親族についての項目は日常的に最もお付き合いのあるご親族について回答してもらった。その中、本論文では浜見平団地、または団地と隣接している南湖町、柳島町、松尾町、オハナ茅ヶ崎ガーデン^{注6)}に居住している場合を近居として分類している。

近居率は団地全体で約23%であった。既存建物と新建物で近居率を分けて表3-4に整理した。特に既存建物の仮住まい群は約21%と高い近居率を挙げていて、新建物の戻り入居も25%と既存建物の既存住民22%に比べて高い。団地住民の中引っ越しを経験した群の近居率が上がっていることから、再整備された団地の中でも近居へのニーズは高く、新たに住環境を選ぶときの選択肢に多く入れられていることが分かる。

新建物の団地外部からの入居者の近居世帯は4世帯で約11%と低い割合であったが、この4世帯は茅ヶ崎市内から入居している。茅ヶ崎市内からの入居が全部で21世帯なので、その中から考えると近居率は約20%と特に低いわけではない。

外部からの入居世帯のうち1世帯は、前の居住地を神奈川県内^{注7)}とされた年齢80～84歳の一人世帯で、徒歩10分くらい離れている周辺地域に長男が近居をしているケースであった。呼び寄せられて近居を始めたケースと思われる。回答者は「日常生活」で助かっていて、週に1回程度親族からの訪問があり、月に1回より

注3-6

浜見平団地の建替える際に一角に建てられた民間の分譲マンション

注3-7

茅ヶ崎市、平塚市を除く神奈川県

表3-4 回答者の分類と近居有無

既存建物				新建物			
168				218			
既存住民		仮り住まい		戻り入居		外部入居	
133 79%		35 21%		182 83%		36 17%	
近居あり	近居なし	近居あり	近居なし	近居あり	近居なし	近居あり	近居なし
29 22%	104 78%	11 31%	24 69%	45 25%	137 75%	4 11%	32 89%

少ない程度で「一緒に買い物する」などの付き合いがあると回答した。近居親族は4人家族で孫代と思われる2人は19～29歳と子育て支援などを必要とする時期ではなく、支援も子世帯から親世帯へと一方的支援とみられる。また回答者は今後の暮らしについては「介護が必要になったら施設などに移りたい」と回答していた。

表3-5は建替え後家族数に変化があった理由の中、「親族の呼び寄せ」、「施設入居のため」の回答を整理したものである。引っ越しを経験した仮住まいや新建物の戻り入居の場合が既存建物の既存住民より「親族の呼び寄せ」のケースが上がっている。引っ越しを経験した世帯の近居率の上昇の理由の一つであろう。呼び寄せられる親族も建て替えによる整った住環境である方が近居に応じやすかったと考えられる。

さらに、世帯主の年齢65歳を基準に分け、引っ越し前（既存住民）と後（仮住まい、戻り入居）で近居率を比較すると、引っ越しの前には65歳以上の世帯（21.7%）と65歳未満の世帯（21.6%）でほぼ同じであるが、引っ越し後の近居率は65歳以上の世帯で24.9%、65歳未満の世帯では30%と、若年世帯の近居率の方が大きく差を見せる。それらを、親世帯と子世帯の近居率を見るために、65歳以上の世帯が子世帯と近居している場合と65歳未満の世帯が親世帯と近居している場合を整理し、表3-6、7にまとめた。既存建物の既存住民（①）を基準で全体の傾向をみると、引っ越しを経た仮住まい群（②）と新建物の戻り入居群（③）では反対の傾向を見せている。全体的にみると、近居率は引っ越しをした後上がっている。しかし、65歳以上の世帯においては戻り入居（③）においては大きい差はみられなかった半面、仮住まい（②）では32%、子世帯との近居においては24%と非常に高くなっている。元の住居から2回も引っ越しをすることとなる仮入居で近居率が高いことから、引っ越しなどの環境変化による負担を近くに親族がすんでいることで軽くすることができると考えられる。

また、65歳未満の世帯においての親世帯との近居率は仮住まい（②）ではケースが少なく、傾向がみられないが、戻り入居は親世帯と近居している率は23.3%と既存住民の約3倍であり、若年世

帯の近居へのニーズの高さがみられる。

また、外部から入居してきた子世帯は見られなかった。建替え後一新したため、2章の対象地であった左近山団地のような価格のメリットが小さいことが一つの要因として考えられる。

表3-5 建替え後家族数の変化の理由

	全体 (n=386)		既存建物				新建物	
			既存住民 (n=133)		仮り住まい (n=35)		戻り入居 (n=182)	
親族の呼び寄せ	9	2%	1	1%	2	6%	6	3%
施設入居のため	4	1%	2	2%	1	3%	1	0%

表3-6 世帯主65歳以上の近居率と子世帯との近居率

世帯主65歳以上×子世帯と近居

65歳以上	既存建物		新建物	
	①既存住民 (n=96)	②仮住まい (n=25)	③戻り入居 (n=152)	④,⑤外部入居 (n=24)
65歳以上近居あり	21 (21.7%)	8 (32%)	36 (23.7%)	4 (16.7%)
子世帯と近居	14 (14.6%)	6 (24%)	23 (15.1%)	4 (16.7%)

表3-7 世帯主65歳未満の近居率と親世帯との近居率

世帯主65歳未満×親世帯と近居

65歳未満	既存建物		新建物	
	①既存住民 (n=37)	②仮住まい (n=10)	③戻り入居 (n=30)	④,⑤外部入居 (n=12)
65歳未満近居あり	8 (21.6%)	3 (30%)	9 (30%)	0 (0%)
親世帯と近居	3 (8.1%)	1 (10%)	7 (23.3%)	0 (0%)

3-3 住環境と近居への意向

ここからは周辺環境の変化と近居の影響を見るために、対象を65歳以上の世帯に絞って比較分析する。

表3-8は高齢世帯の近居有無と親族への考え方を整理したものである。最も付き合いのある親族との距離について新建物の近居なし群は「近いがさらに近くがいい」の回答が10%と付き合いのある親族と近くで住みたいという意向がみられる。既存建物の近居なし群にくらべ近居への願望が高いといえる。

新建物の「近いがさらに近くがいい」と回答した12世帯のケースをみると、付き合いのある親族の居住地が神奈川県内で、移動手段は主に「車」が多く、「電車、バス」が3世帯であった。これらの世帯はお互いの家への訪問の頻度も高く、育児支援をしている世帯も5世帯あった。

表3-8で近居している群の親族から得られる安心感をみると「将来的に助けになる」、「非常時に助けになる」がもっとも高く、「日常生活で助かる」は半数以下であった。表3-10で親族との日常的付き合いをみると、「子・孫育手支援をする」、「家事の援助をする」、「介護・介助をする」などの親族からの支援は既存建物の近居有群を除いて、週1回以上の頻度での付き合いをしている世帯が10%以下である。近居の支援は必要としている時期と頻度が限られていて、支援としての「近居」は「現在」へのものより、「将来」へのものの方が多い。

続けて、表3-10で既存建物の近居あり群と新建物の近居あり群を比較したら、新しく近居をはじめた新建物の方より既存建物の方が、「回答者から訪問」「子・孫育て支援をする」「家事の援助をする」の頻度が高い。近居なし群においても「回答者から訪問」「子・孫育て支援をする」項目で既存建物の方が高く、回答者の高齢親世帯が子世帯に支援する頻度が新建物群より既存建物群で高い傾向がみられた。

半面、新建物群は親族世帯からの訪問頻度が既存建物群に比べ高

い。訪問頻度が高い要因としては、回答者の住環境（新建物）が新しく整備されていることが考えられる。そして、表3－12で外出行動をみると、月に1回以上の頻度が「一緒に買い物」、「一緒に通院」、「一緒に外食」、「一緒に散歩」の項目で、新建物群の方が高い。

それは、表3－9の合鍵など、共有しているものでも現れる。新建物群の方が合鍵や車の鍵を親族に共有することが多く、親族の家財や備蓄食料を預かる率も高い。整ったインフラの中での近居はその付き合いの種類を豊富とし、近居世帯の居住空間だけではなく、互いの世帯が住んでいる地域も共有する切っ掛けとなる。

表3-8 高齢世帯：近居有無×近居親族への考え方

		既存建物 × 近居あり × 65歳以上		新建物 × 近居あり × 65歳以上		既存建物 × 近居なし × 65歳以上		新建物 × 近居なし × 65歳以上	
総計		29	100%	36	100%	92	100%	116	100%
親族との距離	ちょうどいい近さ	24	83%	29	81%	37	40%	42	36%
	近すぎる	1	3%	1	3%	0	0%	0	0%
	さらに近くがいい	4	14%	2	6%	3	3%	12	10%
	近くない	0	0%	1	3%	34	37%	54	47%
親族安心感	あまり考えていない	2	7%	3	8%	22	24%	24	21%
	日常生活で助かる	13	45%	17	47%	25	27%	37	32%
	将来的に助けになる	18	62%	24	67%	24	26%	46	40%
	非常時に助けになる	15	52%	25	69%	30	33%	43	37%
	身元保証人などの制度上助かる	6	21%	13	36%	15	16%	29	25%
親族負担感	あまり考えていない	24	83%	27	75%	51	55%	68	59%
	親族支援に体力的に負担	1	3%	2	6%	3	3%	4	3%
	親族支援に経済的に負担	1	3%	2	6%	4	4%	2	2%
	親族の将来に不安	1	3%	3	8%	6	7%	8	7%
	気遣いなど	0	0%	2	6%	3	3%	5	4%

表3-9 高齢世帯：近居有無×親族^{注8)}と共有しているものと今後の生活への希望

		既存建物 × 近居あり × 65歳以上		新建物 × 近居あり × 65歳以上		既存建物 × 近居なし × 65歳以上		新建物 × 近居なし × 65歳以上	
総計		29	100%	36	100%	92	100%	116	100%
親族との共有	合鍵を親族にあずけている	21	72%	29	81%	51	55%	72	62%
	親族の合鍵をあずかっている	18	62%	17	47%	25	27%	22	19%
	車の合鍵を親族にあずけている	2	7%	4	11%	0	0%	1	1%
	親族の車の合鍵をあずかっている	1	3%	1	3%	1	1%	0	0%
	回答者の家財を親族にあずけている	2	7%	0	0%	2	2%	0	0%
	親族の家財をあずかっている	1	3%	3	8%	1	1%	1	1%
	回答者が親族の分まで備蓄食料をもっている	1	3%	4	11%	3	3%	4	3%
	親族が回答者の分まで備蓄食料をもっている	1	3%	0	0%	1	1%	1	1%
	その他	0	0%	1	3%	7	8%	16	14%
今後の生活希望	今の住まいに住み続けたい	19	66%	32	89%	65	71%	97	84%
	近くに親族を呼び寄せたい	0	0%	1	3%	1	1%	4	3%
	親族の近くに住み移りたい	0	0%	0	0%	4	4%	4	3%
	親族を呼んで同居したい	0	0%	2	6%	2	2%	2	2%
	親族のところで同居したい	0	0%	0	0%	3	3%	3	3%
	元気なうちに施設に移りたい	1	3%	0	0%	5	5%	13	11%
	介護が必要になったら施設に移りたい	9	31%	10	28%	27	29%	40	34%
	リフォームしたい	4	14%	2	6%	16	17%	7	6%
	まだ考えていない	8	28%	5	14%	16	17%	24	21%

注3-8

日常的に最もお付き合いのある親族として回答してもらっているため近居親族でない場合もある。

表3-10 高齢世帯：近居有無×親族^{注8)}と日常的付き合い（回答者からの支援）

			既存建物 × 近居あり × 65歳以上		新建物 × 近居あり × 65歳以上		既存建物 × 近居なし × 65歳以上		新建物 × 近居なし × 65歳以上	
総計			29	100%	36	100%	92	100%	116	100%
親族と日常的付き合い	回答者から訪問	ほとんど毎日	2	7%	2	6%	0	0%	1	1%
		2～3日に1回	5	17%	4	11%	4	4%	1	1%
		週1回	4	14%	4	11%	3	3%	4	3%
		月に1～2回	7	24%	2	6%	9	10%	5	4%
		月に1回より少ない	7	24%	11	31%	38	41%	42	36%
		まったくない	3	10%	6	17%	12	13%	34	29%
	子・孫育て支援をする	ほとんど毎日	0	0%	1	3%	0	0%	0	0%
		2～3日に1回	3	10%	0	0%	3	3%	0	0%
		週1回	3	10%	2	6%	0	0%	2	2%
		月に1～2回	1	3%	2	6%	5	5%	2	2%
		月に1回より少ない	4	14%	2	6%	15	16%	13	11%
		まったくない	9	31%	15	42%	32	35%	5	4%
	家事の援助をする	ほとんど毎日	1	3%	1	3%	0	0%	1	1%
		2～3日に1回	0	0%	0	0%	1	1%	0	0%
		週1回	2	7%	0	0%	1	1%	1	1%
		月に1～2回	1	3%	1	3%	1	1%	1	1%
		月に1回より少ない	2	7%	3	8%	4	4%	5	4%
		まったくない	13	45%	18	50%	44	48%	66	57%
	介護・介助をする	ほとんど毎日	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		2～3日に1回	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		週1回	0	0%	1	3%	1	1%	2	2%
		月に1～2回	1	3%	0	0%	1	1%	2	2%
		月に1回より少ない	0	0%	0	0%	2	2%	6	5%
		まったくない	18	62%	22	61%	47	51%	65	56%
	回答者が親族宅の留守番をする	ほとんど毎日	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		2～3日に1回	0	0%	1	3%	1	1%	0	0%
		週1回	1	3%	0	0%	1	1%	0	0%
		月に1～2回	0	0%	0	0%	0	0%	1	1%
		月に1回より少ない	3	10%	3	8%	5	5%	5	4%
		まったくない	17	59%	19	53%	46	50%	67	58%

表3-11 高齢世帯：近居有無×親族^{注8)}と日常的付き合い（親族からの支援）

			既存建物 × 近居あり × 65歳以上		新建物 × 近居あり × 65歳以上		既存建物 × 近居なし × 65歳以上		新建物 × 近居なし × 65歳以上	
総計			29	100%	36	100%	92	100%	116	100%
親族と日常的 付き合い	親族 から訪 問	ほとんど毎日	2	7%	3	8%	0	0%	3	3%
		2～3日に1回	1	3%	5	14%	1	1%	1	1%
		週1回	5	17%	6	17%	10	11%	16	14%
		月に1～2回	7	24%	8	22%	12	13%	25	22%
		月に1回より少ない	6	21%	7	19%	27	29%	35	30%
		まったくない	2	7%	1	3%	12	13%	15	13%
	子・孫 育て支 援を する	ほとんど毎日	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		2～3日に1回	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		週1回	0	0%	0	0%	1	1%	0	0%
		月に1～2回	2	7%	1	3%	2	2%	1	1%
		月に1回より少ない	1	3%	0	0%	4	4%	6	5%
		まったくない	15	52%	19	53%	42	46%	75	65%
	家事の 援助を する	ほとんど毎日	0	0%	0	0%	0	0%	1	1%
		2～3日に1回	0	0%	0	0%	0	0%	1	1%
		週1回	0	0%	0	0%	2	2%	3	3%
		月に1～2回	1	3%	3	8%	1	1%	3	3%
		月に1回より少ない	0	0%	2	6%	4	4%	6	5%
		まったくない	17	59%	19	53%	44	48%	63	54%
	介護・ 介助を する	ほとんど毎日	1	3%	0	0%	0	0%	1	1%
		2～3日に1回	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		週1回	0	0%	0	0%	0	0%	2	2%
		月に1～2回	0	0%	1	3%	0	0%	1	1%
		月に1回より少ない	1	3%	0	0%	2	2%	1	1%
		まったくない	17	59%	22	61%	49	53%	72	62%
	親族に 回答者 の留守 を する	ほとんど毎日	0	0%	0	0%	0	0%	1	1%
		2～3日に1回	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		週1回	0	0%	0	0%	0	0%	1	1%
		月に1～2回	1	3%	1	3%	1	1%	0	0%
		月に1回より少ない	1	3%	0	0%	5	5%	3	3%
		まったくない	18	62%	22	61%	46	50%	71	61%

表3-12 高齢世帯：近居有無×親族^{注8)}との外出行動

			既存建物 × 近居あり × 65歳以上		新建物 × 近居あり × 65歳以上		既存建物 × 近居なし × 65歳以上		新建物 × 近居なし × 65歳以上	
総計			29	100%	36	100%	92	100%	116	100%
近居親族との外出行動	一緒に 買い物	ほとんど毎日	0	0%	1	3%	1	1%	0	0%
		2～3日に1回	2	7%	0	0%	0	0%	3	3%
		週1回	2	7%	4	11%	4	4%	8	7%
		月に1～2回	5	17%	6	17%	12	13%	8	7%
		月に1回より少ない	10	34%	8	22%	21	23%	33	28%
		まったくくない	5	17%	10	28%	24	26%	42	36%
	一緒に 仕事	ほとんど毎日	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		2～3日に1回	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		週1回	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		月に1～2回	0	0%	0	0%	1	1%	0	0%
		月に1回より少ない	0	0%	0	0%	1	1%	1	1%
		まったくくない	21	72%	26	72%	49	53%	78	67%
	一緒に 通院	ほとんど毎日	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		2～3日に1回	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		週1回	0	0%	0	0%	2	2%	1	1%
		月に1～2回	2	7%	3	8%	0	0%	5	4%
		月に1回より少ない	1	3%	2	6%	6	7%	8	7%
		まったくくない	18	62%	22	61%	46	50%	67	58%
	一緒に 外食	ほとんど毎日	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		2～3日に1回	0	0%	1	3%	0	0%	1	1%
		週1回	2	7%	1	3%	3	3%	2	2%
		月に1～2回	4	14%	5	14%	8	9%	14	12%
		月に1回より少ない	13	45%	16	44%	25	27%	46	40%
		まったくくない	7	24%	5	14%	25	27%	27	23%
	一緒に 散歩	ほとんど毎日	1	3%	0	0%	0	0%	0	0%
		2～3日に1回	0	0%	1	3%	0	0%	2	2%
		週1回	0	0%	2	6%	0	0%	1	1%
		月に1～2回	1	3%	0	0%	2	2%	2	2%
		月に1回より少ない	3	10%	3	8%	14	15%	10	9%
		まったくくない	17	59%	20	56%	41	45%	64	55%
	一緒に 趣味・ 余暇	ほとんど毎日	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		2～3日に1回	0	0%	1	3%	0	0%	0	0%
		週1回	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		月に1～2回	0	0%	1	3%	1	1%	2	2%
		月に1回より少ない	3	10%	5	14%	15	16%	15	13%
		まったくくない	18	62%	20	56%	39	42%	63	54%
	一緒に 友人 訪問	ほとんど毎日	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		2～3日に1回	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		週1回	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		月に1～2回	0	0%	0	0%	1	1%	0	0%
		月に1回より少ない	0	0%	2	6%	7	8%	4	3%
		まったくくない	21	72%	24	67%	45	49%	75	65%
	一緒に ボランティア活動	ほとんど毎日	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		2～3日に1回	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		週1回	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		月に1～2回	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		月に1回より少ない	0	0%	0	0%	4	4%	2	2%
		まったくくない	21	72%	26	72%	49	53%	77	66%

3-4 小括

本章では、環境変化での親族近居のあり方を把握するため、建替えを経た対象地を居住移動という変化と周辺環境の変化という2つの視点から比較分析することを試みた。

戻り入居世帯が新建物居住世帯の82%と非常に高い。また、新建物の世帯主65歳以上の世帯は81%で既存建物の既存住民より高齢化率が上がった。高齢者の住み慣れた地域で住み続けたいという希望が原因の一つといえる。

建替え後の団地で近居率は上がっている。新しく住居を探すにあたって多くの世帯が近居を選択肢として挙げていると考えられる。建替え計画で最低2回の引っ越しをしなければいけない既存建物の仮住まい群においては65歳以上の世帯の近居率が特に高く、親族近居が高齢者の引っ越しへの負担軽減に寄与していると考えられる。平坦地で交通便が比較的便利な浜見平団地の地理的特徴のゆえ、多少離れている親族世帯と頻繁に付き合いがある世帯で、さらに近く住むことを望んでいる層も見られた。

引っ越しを経験した群では65歳以下の子世帯の近居率が高く、約30%となっている。特に住居が一新した戻り入居群の子世帯においては既存建物の3倍くらいの近居率であった。

しかし、高い近居率と近居への希望をみせるが、「日常的に助かる」の回答は近居あり群の半数以下であり、かならずしもどちらかの世帯が「現在」近居へ直接的な期待があって近居を決めたわけではないことがわかった。

既存建物の近居あり群と新建物の近居あり群を比較したら、新しく近居をはじめた新建物の方より既存建物の方が、「子・孫育て支援をする」「家事の援助をする」の頻度が高い高い傾向であった。近居なし群においても「子・孫育て支援をする」項目で既存建物の方が高い頻度を見せた。

郊外住宅団地における多世代近居からみた
世帯間相互支援行動に関する研究

第4章 近居の支援機能の実態

第4章 近居の支援機能の実態

左近山団地でのヒアリング調査をから近居の支援機能の実態について分析する。既往研究等で親族近居の高齢期の介護支援や子育て世帯の育児支援などに役に立つ可能性については示されている。本章では第3章で確認したニーズの高い近居の支援機能を近居の経緯に着目し、その実態を明らかにし、近居世帯ならでの外出行動を分析することで近居の有効性と課題を抽出することを目的とする。

左近山団地のヒアリング対象となった世帯は管理組合を通じて協力が得られた世帯であり、このため団地内での近居世帯に限られている。左近山団地の分譲街区におけるヒアリング調査は2014年6月に実施され、対象となった世帯は親世帯が7、子世帯が6であり、このうち血縁関係のある親子世帯がそれぞれ2世帯含まれる結果となった。近居経緯と日常的な外出行動について詳しく調査し、その内容を表4-1、2、3に表でまとめ、近居の経緯については図4-1～11で事例ごとに図式化した。

浜見平団地ではアンケート調査に回答する時にヒアリング調査へ協力できると連絡先を記入した世帯のうち近居している世帯を対象に2016年11月にヒアリング調査を行った。ヒアリングの内容はアンケートへの回答について理由などをさらに詳しく聞き、かつ近居世帯との付き合いについては過去の付き合い方も調査した。

親①／KN

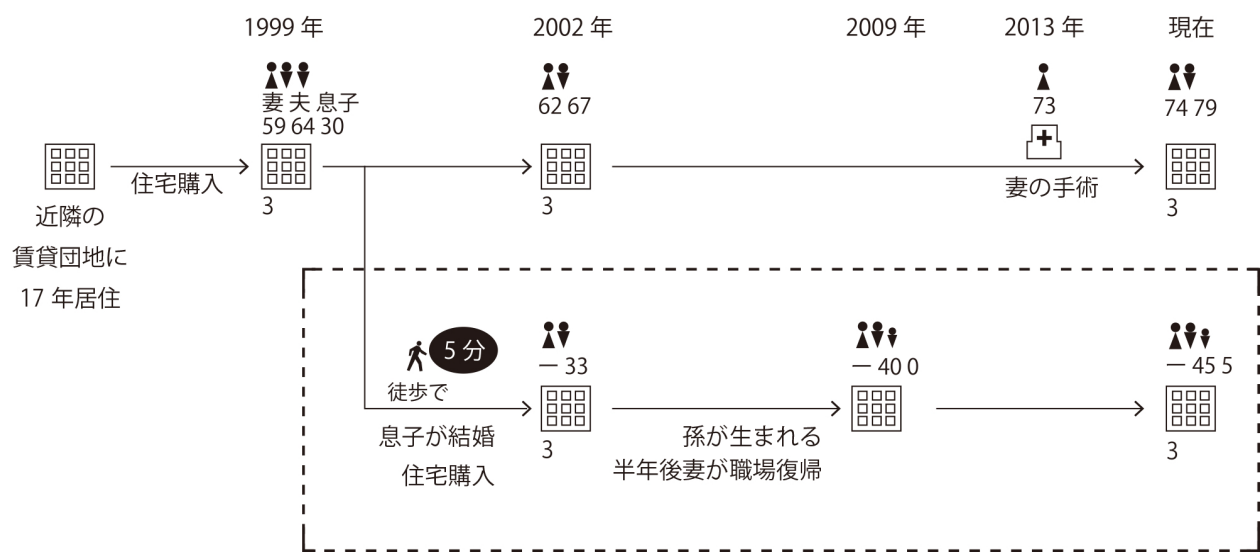


図4-1 親世帯①/KNの例

親②／KB

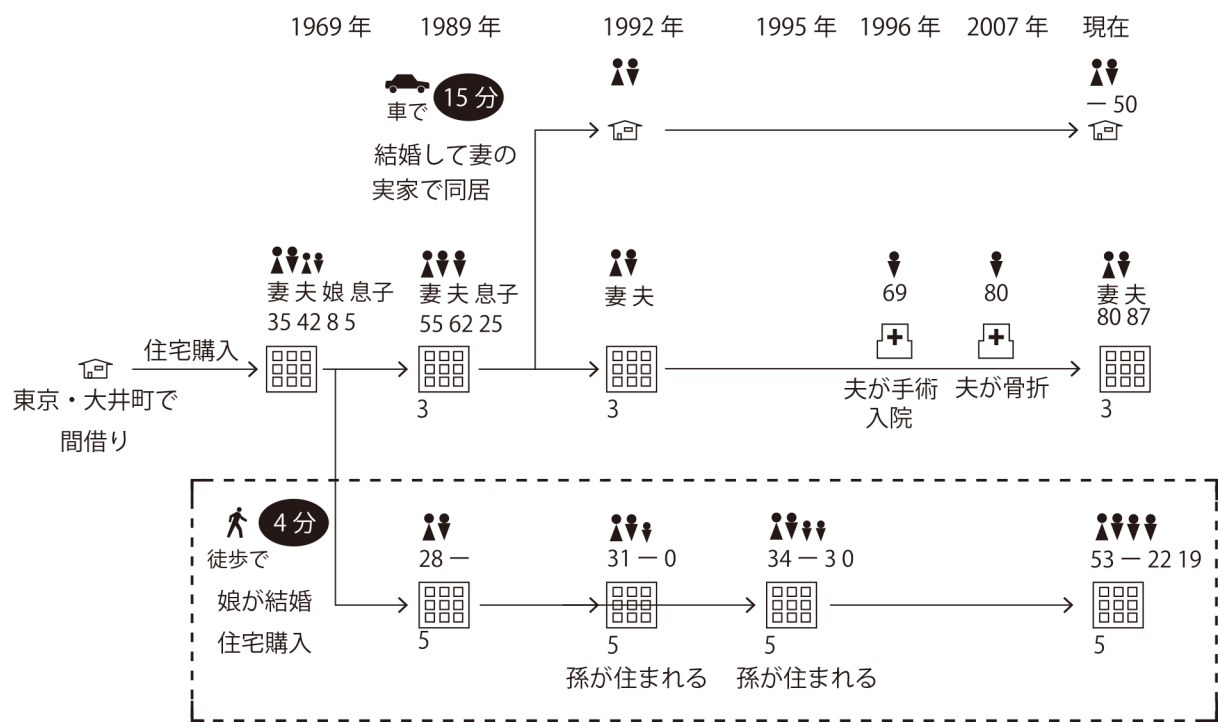


図4-2 親世帯②/KBの例

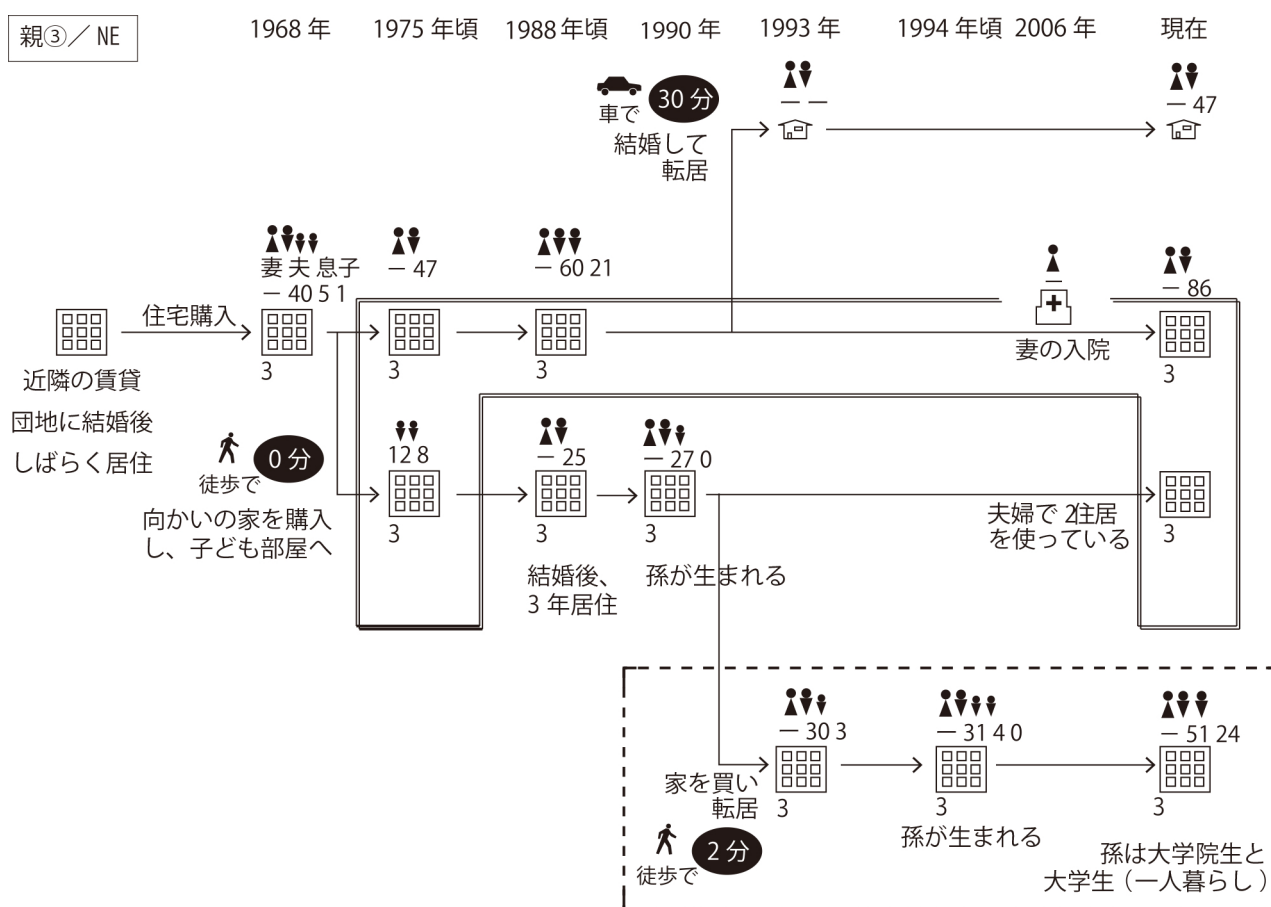
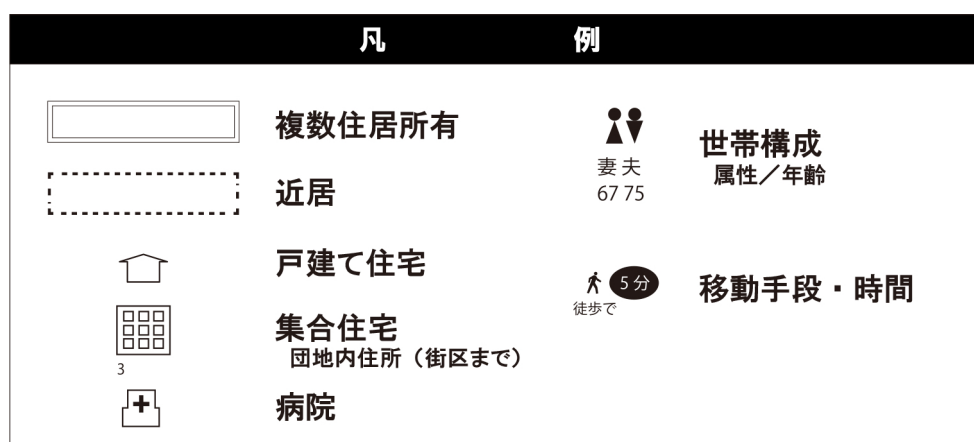


図4-3 親世帯③/NEの例



親④／EM

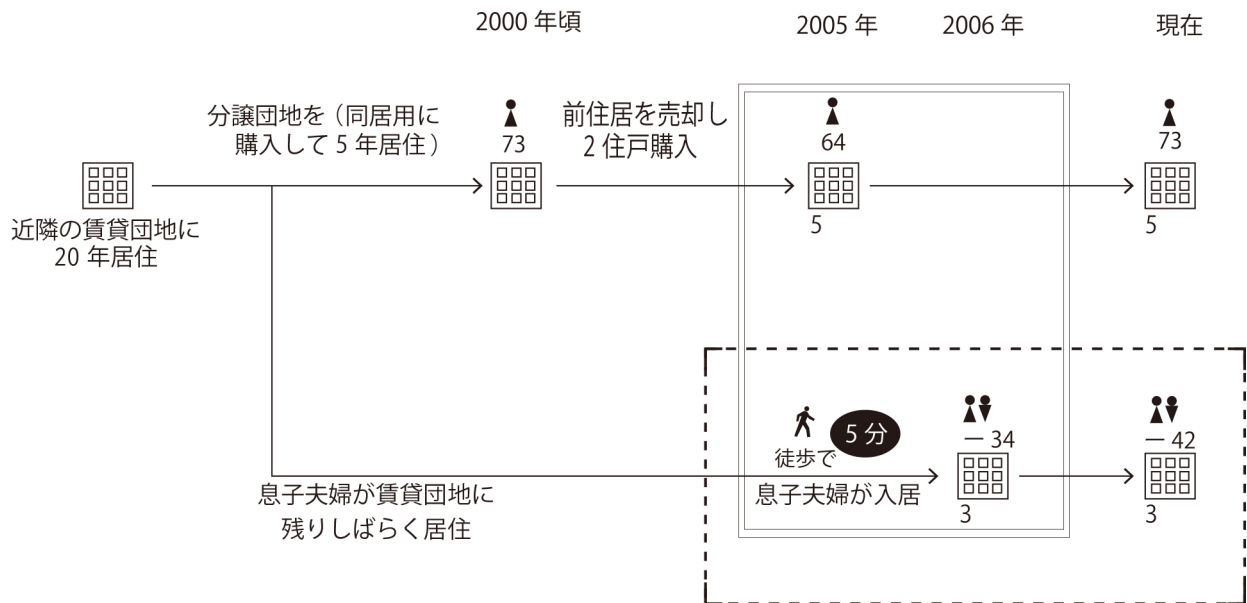


図4-4 親世帯④/EMの例

親⑤／YS

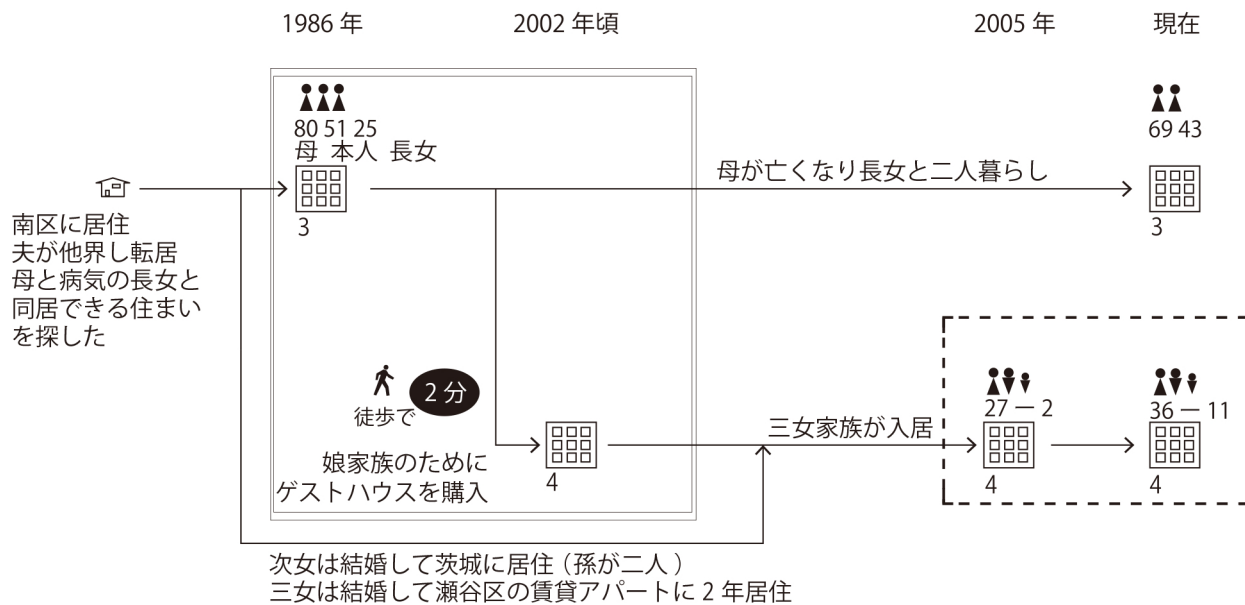


図4-5 親世帯⑤/YSの例

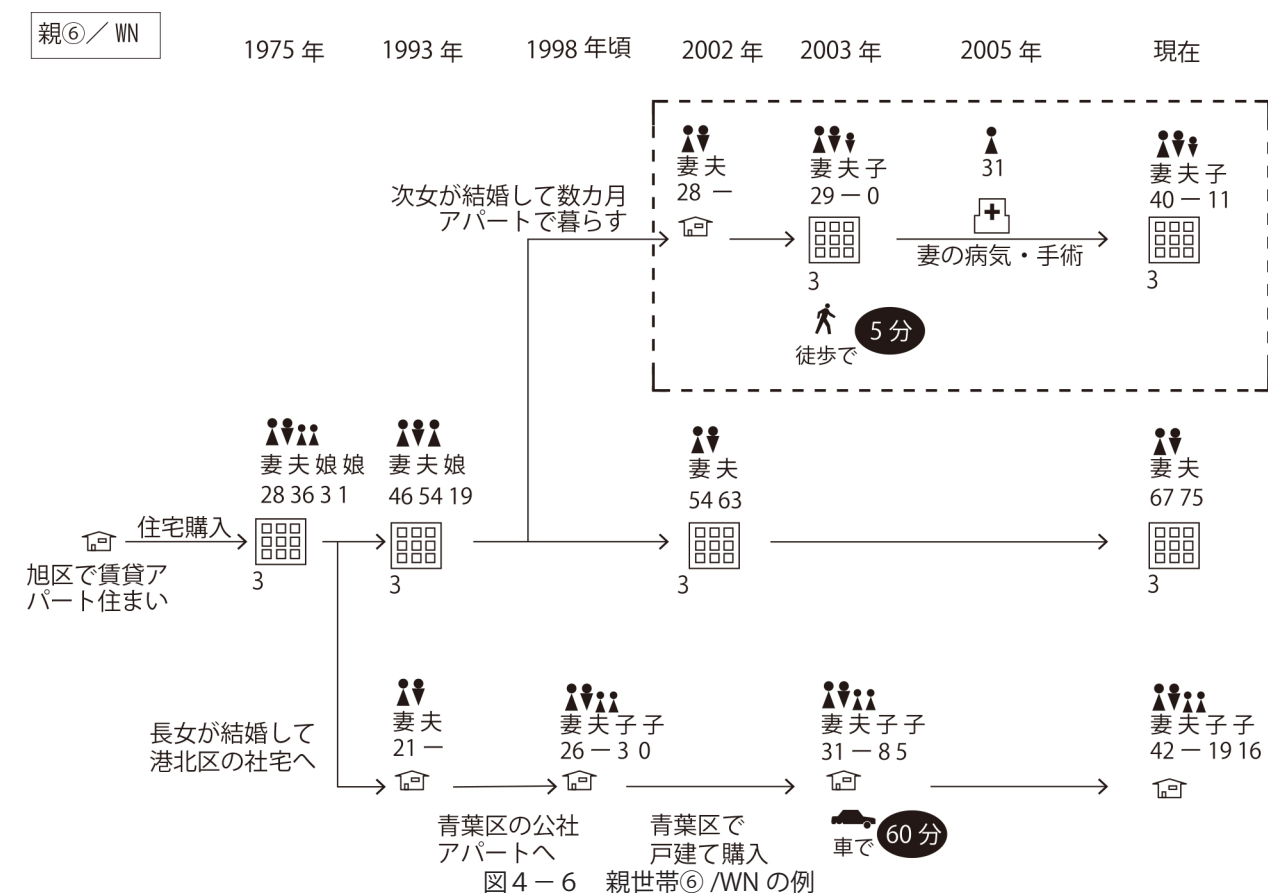


図4-6 親世帯⑥ / WN の例

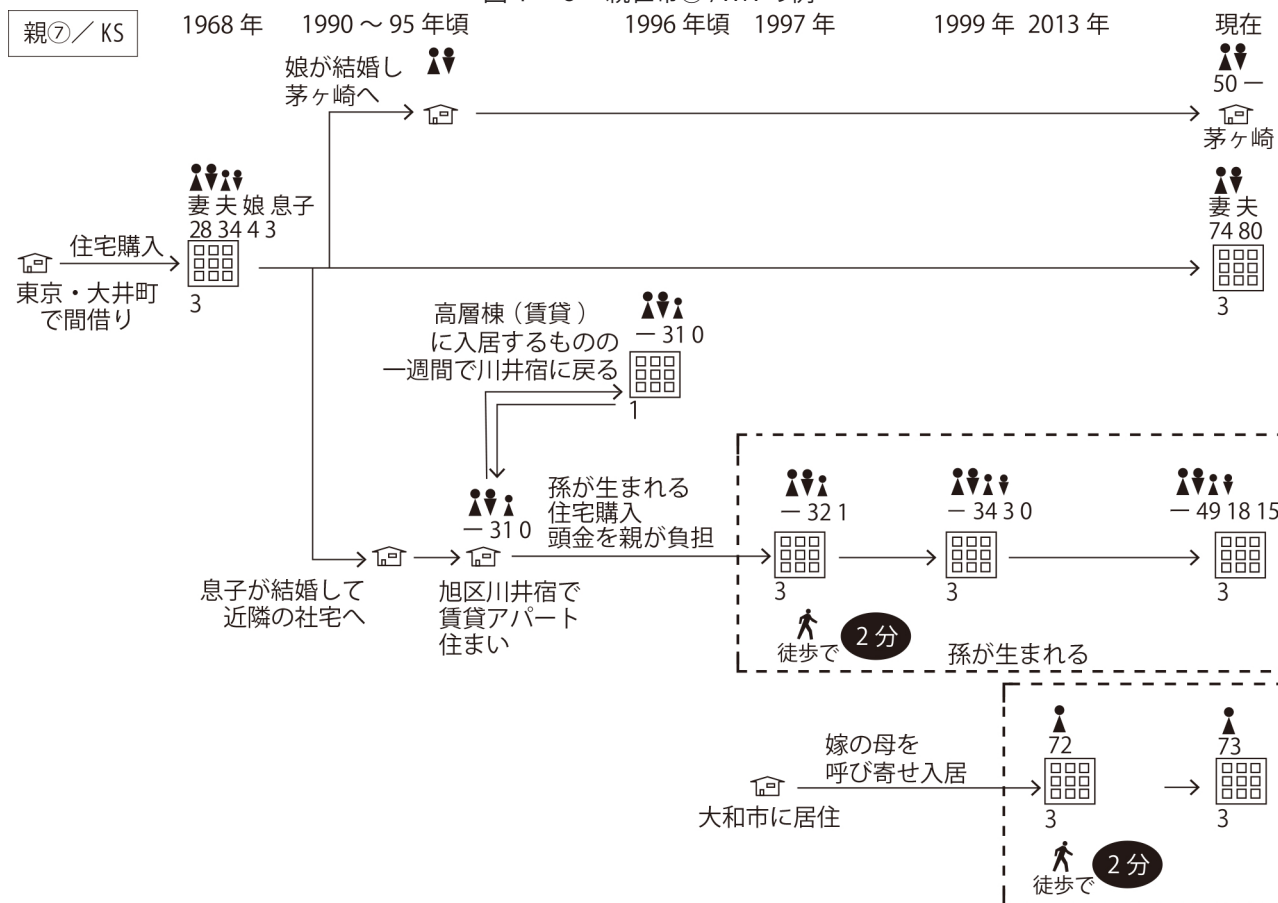


図4-7 親世帯⑦ / KS の例

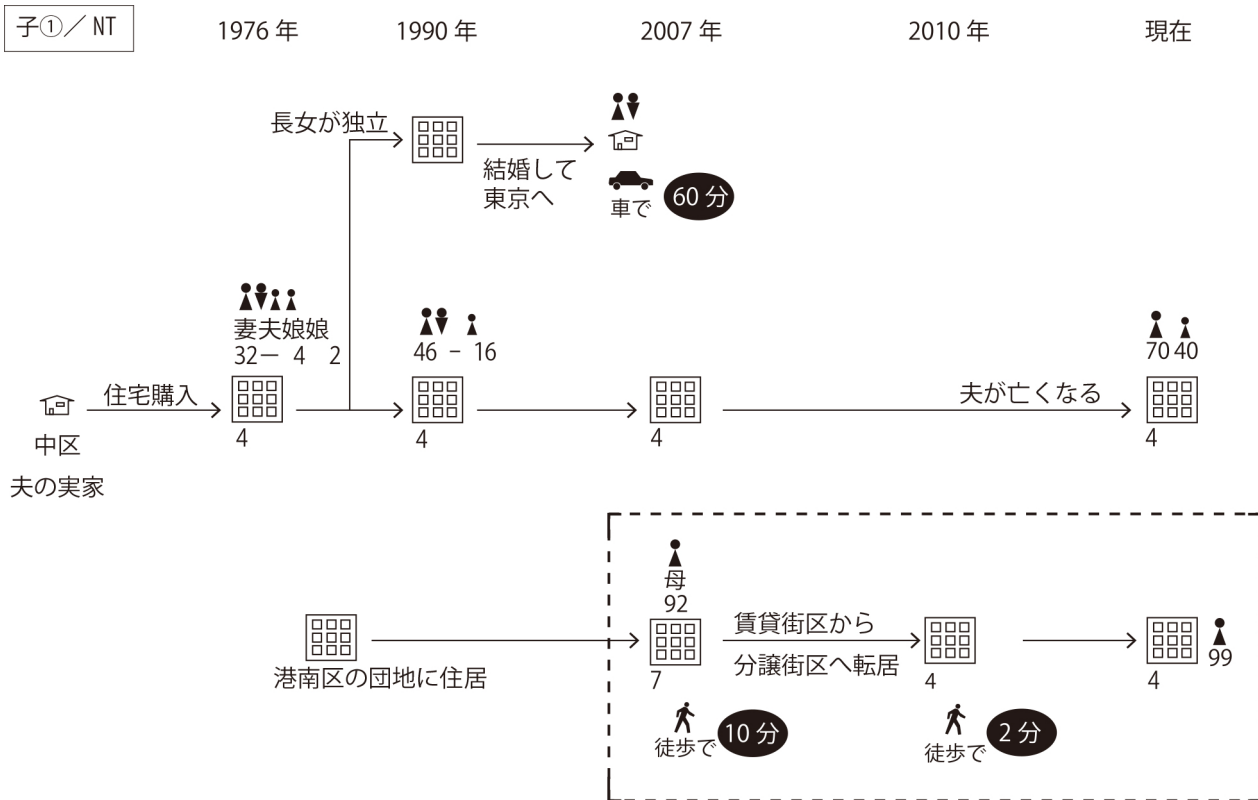


図4-8 子世帯①/NTの例

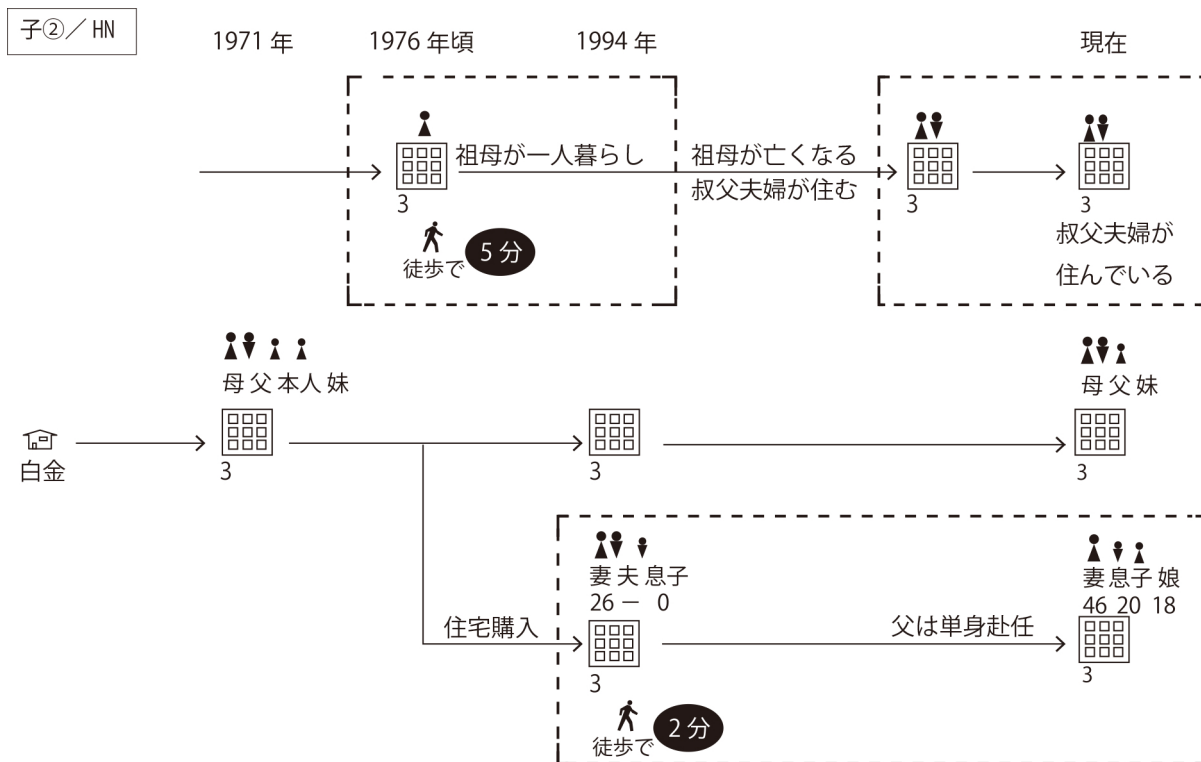


図4-9 子世帯②/HNの例

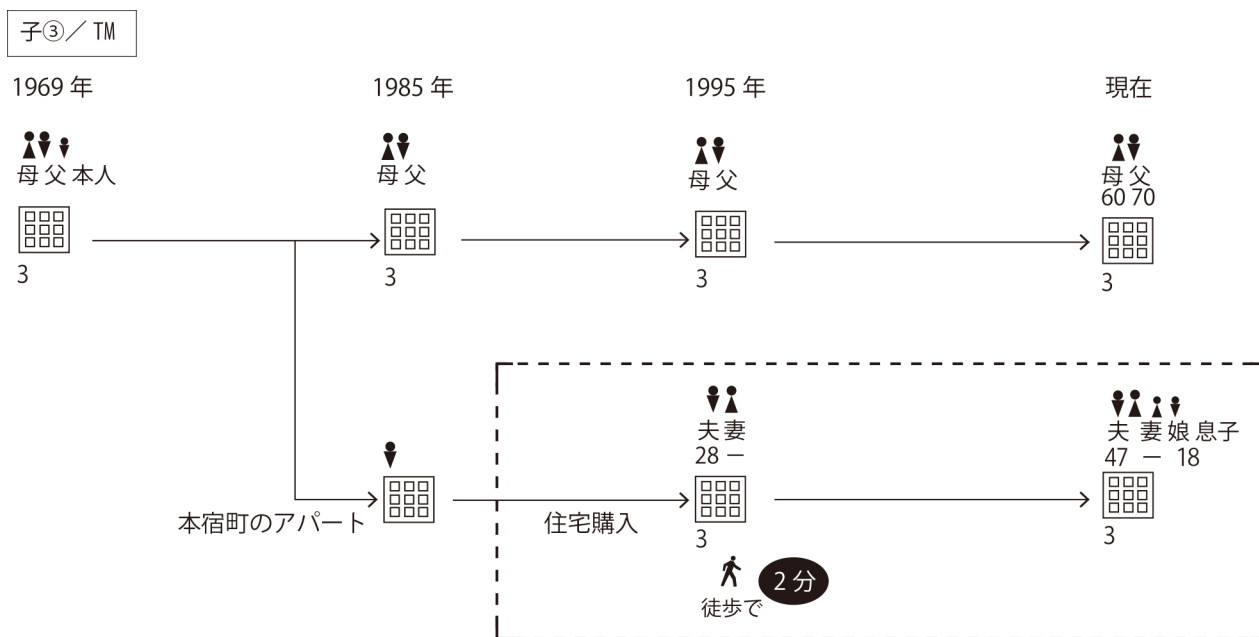


図4-10 子世帯③/TMの例

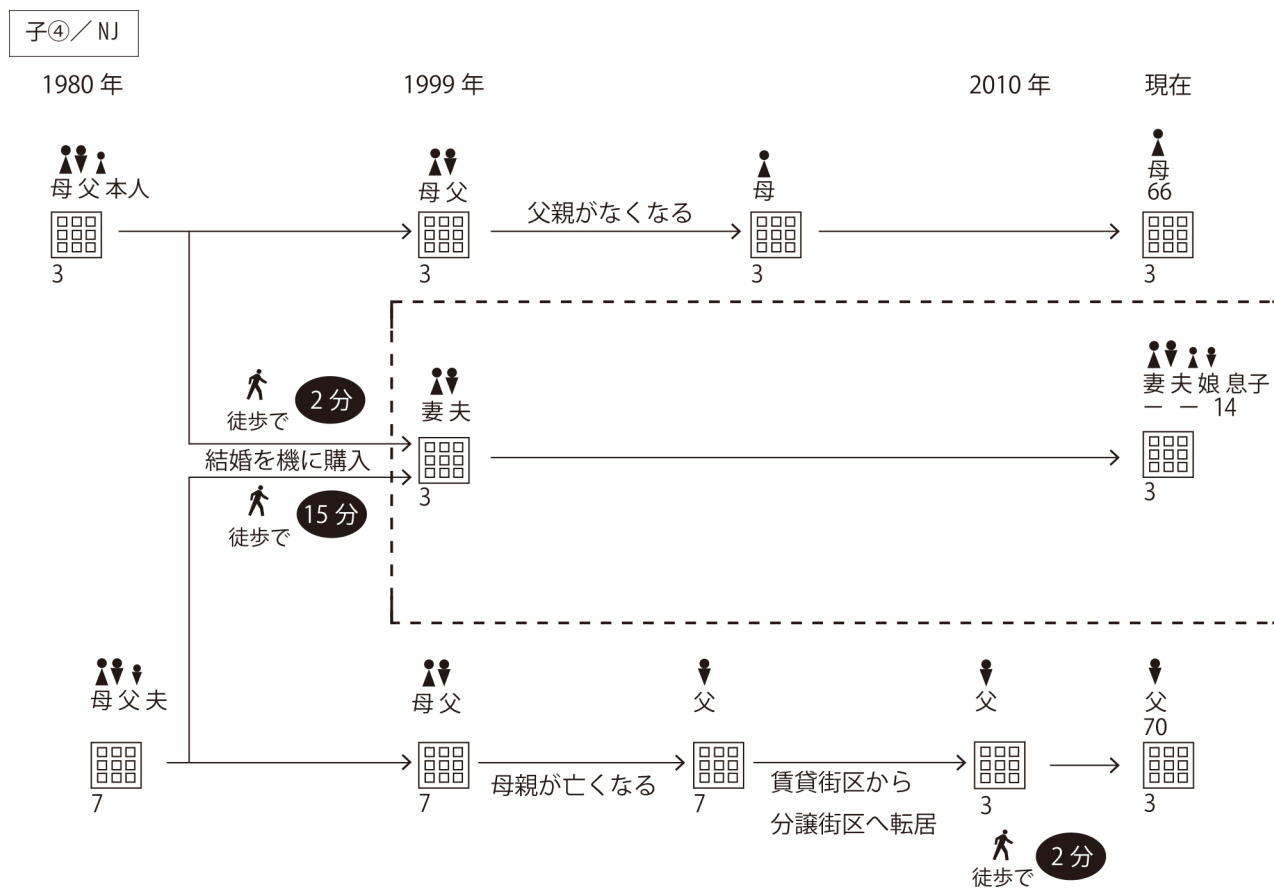


図4-11 子世帯④/NJの例

表4-1 親世帯①、②、③の概要

ヒアリング対象世帯の概要	ID	親①／KN	親②／KB	親③／NE
	現在の年齢	79	87	86
	性別	男	男	男
	家族構成	夫婦	夫婦	夫婦
	入居開始	1999年	1969年	1968年
	居住街区	3街区	3街区	3街区
親族近居の概要	近居親族	長男家族	長女家族	次男家族(長男は若い頃に死去)
	子世帯の共働きの有無	有(妻パート)	有(妻フルタイム)	有(妻パート)
	親世帯の生活支援・介護支援の有無	妻は要介護2、週2～3回複数の医院に通院	一時期要介護1(現在は回復)、週3回通院。	妻が週3回のリハビリ施設への通所
	入居開始	2002年	1989年	1988年頃と1993年
	居住街区	3街区	5街区	3街区→3街区
	準近居世帯	なし	長男家族	三男家族
	近居経緯	息子が結婚し左近山で新居を探した。候補となった3軒のうち結果的に親世帯から一番近い家に決めた。	長女が結婚して新居を探しているときにたまたま売りに出ていた家。近くて条件もよく決めた。息子も車で15分ぐらいのところに住んでいる。	階段室向かいの家が転居する際、子ども部屋用に購入。息子が結婚してしばらく新居として使用。隣の住棟で売りに出ている家を購入し移った。
	近居距離	徒歩5分	徒歩4分	徒歩2分
主な外出行動とその目的	単独で	妻の通院の送迎(週2～3回)、貸し菜園など	週3回のリハビリにバスで通っている。リハビリを兼ねて毎日散歩している。	妻が週3回のリハビリ施設への通所(施設の送迎車がくる)
	子から親(自宅)	月3～4日、孫を一日預けに来る。	長女が毎日のように来てくれる。	次男が週に1回は来る。孫が小さいときはもっと頻繁に来ていた。
	親から子(自宅)	妻が体調を崩す前はよく行っていたが最近は行かなくなった。	以前は何かあるたびに訪ねていたけど今は3ヶ月に1回ぐらい。	減多に行かない。年に1回ぐらい。
	親子で(団地内)	特になし	孫が小さいときには三輪車の乗り方を教えたりしていたが、今はない。	妻が数年前に入院してから、近所での買い物や病院などに出かけるときには、息子が車を出してくれるようになった。
	親子で(団地外)	息子の結婚当時はよく外食に連れて行ってくれたが最近はなくなった。	年に2回ぐらい外食に行く程度。	

表4-2 親世帯④、⑤、⑥、⑦の概要

ヒアリング対象世帯の概要	ID	親④／EM	親⑤／YS	親⑥／WN	親⑦／KS
	現在の年齢	73	69	67	80
	性別	女	女	女	男
	家族構成	単身	単身(長女と同居)	夫婦	夫婦
	入居開始	2005年	1986年	1975年	1968年
	居住街区	5街区	3街区	3街区	3街区
親族近居の概要	近居親族	長男夫婦	三女家族	次女家族	長男家族
	子世帯の共働きの有無	無	無	有(妻パート)	無
	親世帯の生活支援・介護支援の有無	無	無	無	無
	入居開始	2006年	2005年	2003年	1997年
	居住街区	3街区	4街区	3街区	3街区
	準近居世帯	なし	なし	長女家族	なし
	近居経緯	同居用に別の団地の分譲住宅を購入していたが、売却して近居するために左近山団地の2軒を購入した。	娘が家族連れで訪ねてくるので、自宅とは別の住戸をゲストハウス用に買っていた。そこに三女家族が孫を連れて移り住んできた。	次女夫婦に子どもが生まれ、生まれる直前に左近山に引っ越ししてきた。	孫が生まれて1歳3ヶ月のころに隣の住棟に引っ越してきた。昨年息子の義母が独り身になったのでここに越してきた。
	近居距離	徒歩5分	徒歩2分	徒歩5分	徒歩2分
主な外出行動とその目的	単独で	週に1～2回パート勤め。その他友人との外出を含めると週5～6日は外出。	月に1回の通院、2～3日に1回は団地内スーパーで買い物する。	月20日パート勤めをしている。	スポーツジムに週4回通っている。日常的にスーパーで買い物をする。
	子から親(自宅)	ほとんどない	週に2～3回孫を連れてくる。	孫が小学生にあがってから来なくなった。	孫が小さいときにはよく遊びにきていた。息子が来るのは月に1回ぐらい。
	親から子(自宅)	月1回ぐらい訪ねる程度	週に2～3回は行く。	娘夫婦が共働きなので、平日は毎日のように娘の家に行き、家事をしてあげている。	いかない(足が悪い階段が登れない)
	親子で(団地内)	特になし	特になし	孫が幼いころ幼稚園のお迎えの帰りによく一緒に遊んだが、今は一緒に遊ぶこともなくなった。	特になし
	親子で(団地外)	以前は一緒に外食することもあったが今はなくなった。	たまに一緒に銭湯にいたり、外食にいたりする程度。	ときどき車で一緒に遠出して買い物する。あとは月1回の主人の通院に娘が車を出してくれる程度。	たまに一緒に旅行に行く程度。

表4-3 子世帯①、②、③、④の概要

ヒアリング対象世帯の概要	ID	子①／NT	子②／HN	子③／TM	子④／NJ
	現在の年齢	70	46	47	不明
	性別	女	女	男	女
	家族構成	単身(次女と同居)	夫婦と子ども	夫婦と子ども	夫婦と子ども
	入居開始	1976年	1994年	1995年	1999年
	居住街区	4街区	3街区	3街区	3街区
親族近居の概要	近居親族	母	両親と妹	両親	妻の母と夫の父
	子世帯の共働きの有無	無	有(フルタイム、夫は単身赴任)	有(妻パート)	有(妻パート)
	親世帯の生活支援・介護支援の有無	普段はデイサービスを利用。家事全般支援。	無	無	家事支援程度
	入居開始	2007年と2010年	1971年	1969年	母は1980年 父は1985年
	居住街区	7街区→4街区	3街区	3街区	母は3街区 父は7街区→3街区
	準近居世帯	長女家族	なし	なし	なし
	近居経緯	現在99歳になる母が92歳のときに賃貸街区の1階(高優賃)に呼び寄せた。その後、4街区の同じ住棟で物件を見つけて購入し、移ってきてもらった。	両親(70歳代前半)と妹が住んでいたことと、子育ての手助けが必要となり移ってきた。	両親が二人で住んでいて、自分が結婚して子どもが生まれたときに移ってきた。価格も手ごろだった。	夫婦ともにこの団地で生まれ育っていたこともあり、偶然売りに出していた家を買った。妻の母は3街区で一人暮らし、夫の父は賃貸街区に住んでいたが4年前に3街区に呼び寄せた。
	近居距離	徒歩2分	徒歩2分	徒歩2分	徒歩2分 徒歩2分
主な外出行動とその目的	単独で	毎日散歩(1日7000歩)している。平日の買い物は団地内のスーパーを利用。	共働きしている。買い物は団地内のスーパーを利用。休日は長女の女子サッカーの応援。	共働きしている。買い物は団地内のスーパーを利用。	共働きしている。買い物は団地内のスーパーを利用。休日は息子のサッカーの応援。
	子から親(自宅)	毎日数回食事を作りにいたり、デイサービスの見送りをしたりしている。昼食と夕食は母宅で食べる。	ほとんどない	子供たちが小さいときは、よく両親の家に遊びに行っていた。今は用がないと行かない。	母方にはほとんど行かない。父方には洗濯・買い物・通院などで週に1回は必ず顔を出す。
	親から子(自宅)	ほとんどない	母が、平日は毎日家事をしに来てくれる。	ほとんどない	母方が2週に1回程度訪ねてくる。父方はほとんど来ない。
	親子で(団地内)	ときどき団地内の診療所に連れて行く。	特になし	特になし	特になし
	親子で(団地外)	特になし	家族の誕生日に外食する程度。	たまに外食する程度	特になし

4-1 相互支援と近居のリスク

注4-1

事例番号①～⑪は表4-1～3の事例親①～⑦、子①～④に対応する。

まず、現在の近居に至る住宅履歴をみると、左近山団地に先に親世帯が居住し子世帯が独立し分居したケースが8例と最も多く（① KN、② KB、③ NE、⑥ WN、⑦ KS、⑨ HN、⑩ TM、⑪ NJ）^{注1)}、このうち3例（⑥ WN、⑦ KS、⑩ TM）は子世帯がいったん地域外に離れて暮らしていたが団地内に戻ってきたケースであった。団地開発の時から住み続けた世帯の場合は、子世帯が団地で育ったことから土地勘があるなどが近居を決めた理由としてあげられた。

また、親世帯・子世帯ともに最近になって地域外から転居してきたケースが4例見られた。④ EM の場合、最初は子世帯と同居考え他団地の広めに住戸を購入したが、子世帯がなかなか応じてくれないため同居を断念し他団地の住戸を売却、左近山団地で2戸を買い近居を始めた。⑤ YS の場合は同居できる住まいとして左近山団地に入居したがその後、別住居を構え近居に至るケースであった。また、子世帯が先に居住し、後に親を呼び寄せて近居するケース（⑦ KS、⑧ NT）も2例みられた。そのうち⑦ KS は親世帯が子世帯を呼び寄せ近居をし始めその後、子世代が配偶者の親をさらに呼び寄せ近居を始めた多世帯近居であった。世帯構成員数が少ない場合でも同居ではなく、すこし離れて近居する傾向がよく見られる。

近居に至る住宅履歴を詳細にさかのぼってみると、近居以前に親世帯による複数住戸所有のプロセスを経るケースがいくつかみられた。ハードが決まって変更が難しい集合住宅で変化していく世帯と生活に合わせて暮らせるという利点と経済的支援の意味もあると思われる。たとえば④ EM の場合は戸数を増やして近居の住まい方へと対応している。また、⑤ YS は近居以外の目的としての所有が結果的に近居用に使われた例である。子世帯が訪問する時のゲストハウスとして購入した住戸を子世帯が近居することになった。③ NE の場合は子供がまだ小さい時、階段室向かいの住戸を子ども室として購入した。以降子供は独立したがまたその住戸に近居して戻ったケースであった。

この事例から郊外住宅団地での近居は家族の変化に合わせて住まい方の対応として活用されていることが確認できる。

次に、近居の距離に着目してみると、すべて徒歩圏での近居という点では共通している。(図4-12)が、近居の距離の決定にはいくつか理由が認められた。

第2章で指摘したように、徒歩圏に集中されできるだけ近い方が好まれる傾向がある。3住戸の候補のなかから最も近い住戸という理由で決めたケース(①KN)で実際に確認された。また、親世帯と子世帯が共に高齢世帯となっている⑧NTのケースではたまたま売りに出ていた同じ階段室の下階住戸を購入し親を呼び寄せ、二世帯住宅のように日常的に頻繁に行き来していた。

一方で、「できるだけ2階がよかった」「4階だがきれいにリフォームされていた」などのように、近さだけでない他の要因も複合的に影響していた。

逆に近すぎる近居を避けるケースもみられた。たとえば③NEのケースでは、階段室向かいの住戸を新居に暮らし始めたものの「近すぎる」という理由で、孫が生まれた後に隣の住棟に転居していた。子育て世帯でも育児対象の年齢などによって必要とされる支援の頻度と内容がちがうため、支援が対して必要出はない時期には近すぎるのが変えて負担になってしまうという事例であった。

このように、近さは重要な要素ではあるものの、他の要因も複合的に関係していること、特にどのようなサポートをどの程度必要としているかにもよることがわかった。

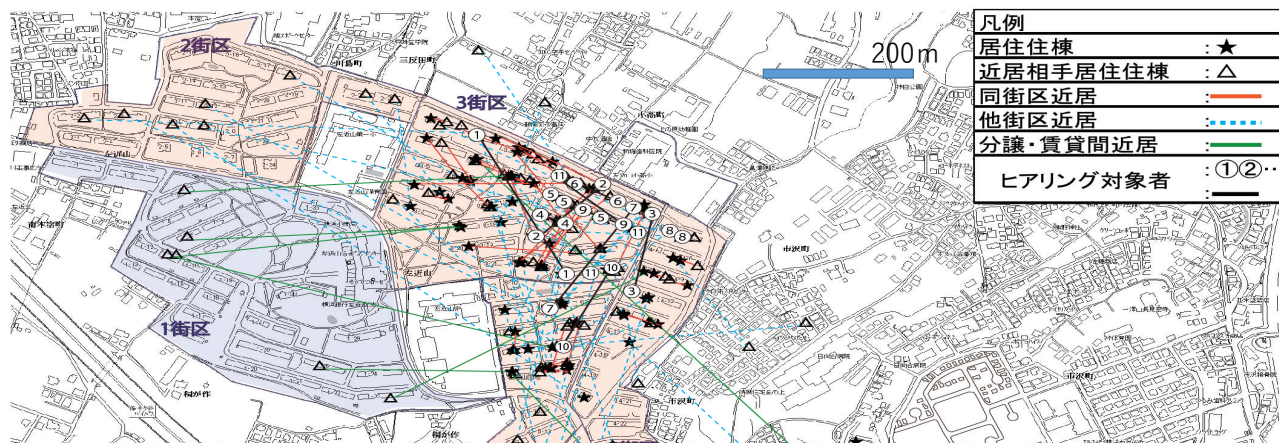


図4-12 左山団地ヒアリング対象の近居世帯の位置

結果的に、今回のヒアリングでは同一住棟・同一階段室での近居は1件（⑧ NT）、同一住棟・別階段室が2件（⑦ KS、⑩ TM）、隣接または向かいの住棟が3件（③ NE、⑦ KS、⑪ NJ）、その他（同一街区）が3件（① KN、⑥ WN、⑨ HN）、別街区が3件（② KB、④ EM、⑤ YS）であった。

親族支援は同じ時期にお互い支援しあう相互支援のケースが多く見られた。親世帯からは家事支援、育児支援などがあり、子世帯からは家事支援、外出支援、介護支援などがみられる。しかし、お互いの世帯に余裕がない時期だと支援生活が負担となることも多く、特に晩婚化と長寿命化が進む現代では親世帯が自分の介護と孫の育児のダブルケアや、子世帯の自分と親のダブルケアなどの問題がある。

4-2 近居ならでの外出行動の特徴

親族近居世帯特有の外出行動として、互いの家を行き来する外出行動（以降、訪問外出と呼ぶ）と、一緒に外出する行動（以降、同伴外出と呼ぶ）の2つの視点から整理した。

① 訪問外出

まず、最近の訪問外出についてみると、親世帯・子世帯ともにほとんどないケース（④ EM, ⑦ KS, ⑩ TM）、子世帯から親世帯への訪問外出が多いケース（① KN, ② KB, ③ NE, ⑧ NT, ⑪ NJ）、親世帯から子世帯への訪問外出が多いケース（⑥ WN, ⑨ HN）親世帯・子世帯ともに訪問外出が多いケース（⑤ YS）がみられた。

子世帯から親世帯への訪問外出については、未就学児がいる時期、親世帯の身体機能が低下し身の回りの家事手伝いや安否確認などが必要となる時期などに訪問頻度が高まる傾向が指摘できる。なかには親世帯（妻）が要介護期にあり、子世帯が共働きで子育て期（未就学児）と重なっている場合に、親世帯がほぼ毎週孫を終日（3食提供）預かるケースも見られた。

親世帯から子世帯への訪問外出については、子世帯不在時の家事支援などを目的とした訪問外出が複数みられた。現在はほとんど訪問してなくても、「孫が小さかった頃は」「娘が結婚した当初は」「病気をする前は」よく行っていたという回答がみられ、かつては頻繁に訪問していた時期があることをうかがわせた。このため、近居の有無によって「外出頻度」や「外出手段」にはほとんど違いがみられなかったのではないかと考えられる。

浜見平団地での事例でも、子世帯から親世帯への訪問の方が多いことがわかる。浜②Mのケースでは親世帯からの訪問が主であったが、その理由をその方が訪問のスケジュール（いつ帰るなど）をこちらの都合に合わせやすいからとあげていた。

訪問頻度は支援をしていた時より下がっていることは浜見平団地でも共通的に見られていたが、支援と関係なく日常生活の中で訪問

する例もあった。浜①Sの場合は、親世帯の住戸の近くにバス停があるため、月に2回程度そこで降りて親世帯によって夕食をとるなどを付き合いがみられた。この例では親世帯の住居に荷物をおいてもらったり、食料を一緒にまとめて買ったりなど生活を一緒にしている面もみられた。団地内（とその周辺）の高低差がない分徒歩15分の距離でもこういった濃密な付き合いが可能な環境であると思われる。

② 同伴外出

左近山団地の調査では親世帯と子世帯が共に外出することがあるかどうかを尋ねたところ、団地内・外を問わずこうした同伴外出はほとんどみられないことがわかった。しかし、孫が小さいときにお迎えのついでに公園で（孫と）よく遊んだ、といった孫との同伴外出や、外出困難な親につきそう形での買い物や通院などの同伴外出がみられた。

つまり同伴外出がみられる状況は、訪問外出と同様に、どちらかが何らかのサポートを必要としている場合に限られる傾向にあり、こうした場合以外での日常的な同伴外出（たとえば一緒に買い物するなどの行動）はほとんど見られなかった。このことは、2章での近居の有無と外出頻度・外出目的・外出手段との関係の分析において、外出目的の多様化傾向のみに有意差が確認されたこととも関係していると思われる。

しかし、浜見平団地の事例をみると、同伴外出の例が多く見られている。月に1回程度の趣味活動や外食（浜①、浜③、浜④）がよくみられ、子世帯が訪問してから一緒に団地内で散策に出掛けるなどのケース（浜④）もみられる。これは親世帯が比較的に出出しやすい環境であったことが（平坦地、道路や公園整備、バス停までのアクセス等）大きくかかわったと思われる。また、回答者はさらに団地内や近くに一緒にでかけられる場所を求めている。浜④の場合は新しく整備された公園を大変気に入って長男がきたら家で話をきくより、外と一緒に散策していると述べた。浜②の場合は子供が小さい時は孫と大型スーパーなどに一緒に出掛けたが、孫が高校生、大

表4-4 浜見平団地にアリング調査（近居世帯との外出行動）

	浜①Sさん	浜②Mさん	浜③Kさん	浜④KSさん
性別（年齢）	女（72）	男（73）	女（80）	男（88）
同居家族	夫と二人暮らし	一人暮らし	夫と二人暮らし	妻と二人暮らし
職業	6月まで働いて現在無職	自営業	無職	無職（以前は東京で教師）
近居親族	長女（40代）	次女	長男、長女	長男
家族構成	独身	夫、子供二人（大学生、高校生）	長男家族：妻、子供1人 長女家族：夫、子供2人、義理の親（二世帯）	妻（子供はない）
近居居住地	柳島町／徒歩15分	中島／自転車10分	長男家族：南湖2丁目／徒歩10分 長女家族：柳島2丁目／徒歩10分	川崎市／電車60分＋バス30分
特異事項	一時福島へ転勤した兄（回答者の長男）の家に住んでいる。2017年4月に兄が戻ってからの居住地が決まっていない。	以前の住まいは茅ヶ崎市。次女とは孫が小さい時から近居している。	長女の家族は以前は浜見平団地に住んでいて義理の親とも近居をしていて、現在二世帯住宅を建てて義理の親と同居。以前子どもが小さい時は回答者が週2回育児支援、義理の親に週3回育児支援をうけていた。幼稚園の迎えと夕食の時まで回答者も長男には重いものの買い物などを手伝ってもらっている。	回答者は団地の開発初期から浜見平団地に住んでいる。息子家族が近くに来てほしいが、職業が東京なので難しい。奥さんは毎週通院をしていて、一人で外出が難しい。
安心感・負担感	・具合がわるくなくなった時などに頼りになる	・非常時に助けになると思う	・将来的に助けになると思う ・長女家族との付き合いに気遣いなどの負担感がある	・非常時に助けになると思う。 ・すぐには無理だけど、いざというときに助けになる。
訪問外出	親族からの訪問 ・月に2回ほど：帰りによる ・家で食事をする ・食料を分け合う	回答者からの訪問 ・2,3か月に1回ほど	親族からの訪問 ・月1回以上 ・長男が子供をつれて週末などに来る。 ・子供が小さい時は幼稚園迎えにいて夕食の時まで孫の面倒をみた。	親族からの訪問 ・月2回程度 ・長男が一人でくる。家庭料理を食べて帰る。 ・一緒に散歩する。
同伴外出	・一時期：一緒に通院をする ・2,3か月に一回ほど：歌舞伎、美術館など	・孫が小さい時は毎週：大型スーパーに買い物に行くときに連れていく	・月に1回以上：長女の家族みんなと食事をする。一緒に趣味（カラオケ）活動をする。	・月に1回程度：長男に茅ヶ崎市内にショッピングにつれていてもらう。 ・月に1回より少ない：一緒に外食にてかける。一緒に散歩する ・自分が用事があるとき、妻の通院の付き添いを頼む。
将来	現在の賃料が高いため息子との同居を考えている。	同居は考えていない。たまにいい分はいいけど一緒に暮らすのは無理。	団地内でならもっと小さい住戸に引っ越したい。	奥さんが先になくなったら、息子と同居をする。 自分が先になくなったら、奥さんは施設にいく。

学生になったため今がやっていない。孫とは野球という共通の趣味があるが、それを生かせる場所は周辺にないと答えた。

以上、周辺環境は近居の同伴外出への促進に大きく関わっていると言える。同伴外出は近居世帯の付き合いが家の中だけに閉ざされることから外部へと引き出せる切っ掛けとなる。その同伴外出からさらに親族ではない世帯からの交流も引き出せられると考えられる。

4-3 小括

近居への期待を把握するために各事例の近居の経緯を調査した。互いのサポートニーズによって実行された近居が多く見られるが、中には親世帯が別の目的で余分に確保しておいた住戸が子世帯の近居の住まいとして置き換わるケースが見られた。経済的にゆとりのない子育て世帯に対して、親世帯からの実質的な経済的支援とみることも可能であり、親世帯にとってもこうした空間的余裕を備えておくことは担保物権としての活用可能性もふくめた老後の居住の安定につながると考えられる。

近居世帯の物理的距離は2章での結果と同じく、歩道圏内にできるだけ近く住みたい傾向を見せたが、近居体験後近すぎたことが不利となり、隣接住戸から隣の住棟に移すなど適度に離れていることの方が望ましいというケースもみられた。

互いの家の訪問など相手世帯がサポートを必要としている時の外出行動が近居世帯ならでの外出行動として見られた。特に子世帯から親世帯へと偏る傾向がある。しかしサポート目的以外で一緒に出かけることはほとんど見られず、親族近居が必ずしも日常的な地域での外出行動に関係しているわけではないことがわかった。

子世帯は家事援助や外出支援などの親世帯の生活援助、親世帯は家事援助や孫の送迎・一時預かりなどの育児支援がそれぞれ主な目的としており、いずれも近居親族は有力なサポート提供者となっていた。しかし、両世帯に身体的又は時間的余裕がなく互いがサポートを必要としている場合にはむしろ負担となる可能性も指摘された。

近居は空間の独立性から同居、隣居とは大きく異なり、そのゆえ世帯間の距離が各世帯の生活に深く影響している。互いにどのようなサポートを受けたいか、またどれくらいの私生活の分離を必要としているかによって適切な距離をとることになっている。私生活の分離は日常外出で同伴外出がほとんど見られないことから確認することができる。

郊外住宅団地における多世代近居からみた
世帯間相互支援行動に関する研究

第5章 まとめ

第5章 まとめ

5-1 結果の考察

① 生活ニーズへの対応としての近居

子育て世帯の近居ニーズは潜在的に高い。左近山団地では、子育て世帯の約3割が前居住地を当該団地と回答しており、かつ、将来的に親と同・近居したいとの意向も約6割と高く、今後も引き続き近居ニーズは存在すると考えられる。

一方で左近山団地については経年経過による公園遊具や歩行者路などの老朽化への不満もみられた。住環境への希望を多少あきらめても親族との近居を選択する切実な近居となる可能性も大きいだろう。浜見平団地でも建替え後の新建物をみると65歳未満の世帯のうち近居世帯は3割と建替え前の既存建物に比べ高い近居率を上げていた。整っている施設と住環境が若年世帯が近居に応じやすい結果となったと考えられる。また、既存建物群より新建物の方が近居世帯間の付き合いが多い傾向がみられた。

親世帯の近居に対する考えでは「子世帯に負担をかけてはならない」という考えが強く、近居を望んではいるものの積極的に進めていないケースもみられた。親世帯の場合、時間が経過とともにサポートを必要とするところが増えるため、将来への不安が近居ニーズにつながる傾向があった。

② 近居を成立させる環境条件

親世帯の入居の際に、別の目的で取得した余裕住戸が子世帯の近居の住まいとして置き換わるケースが見られた。経済的にゆとりのない子育て世帯に対して、親世帯からの実質的な経済的支援とみることも可能であり、親世帯にとってもこうした空間的余裕を備えておくことは担保物件としての活用可能性もふくめた老後の居住の安定につながると考えられる。浜見平団地は、建替えで住居の経済性が上がったことが働いたか、子世帯を呼び寄せたケースは多く見ら

れなかった。また、子育て世帯では土地勘があることや施設環境の一新などが近居へ応じやすい要因となっていた。

左近山団地での調査では、近居相手の居住地は団地内と団地外で半々であった。住戸間距離は 20 分以内、200m 圏内の徒歩圏に集中していて、同一住棟や隣住棟といった 50m 圏内のケースも多く見られた。団地内住戸の個体差は少なく、できるだけ近くに住みたいとする意向が結果として現れたものと考えられる。

浜見平団地での調査では、当該団地とその隣地に近居している親族との距離に対し「ちょうどいい近さ」と 80%以上が回答、「さらに近くがいい」まで合わせ約 90%となり、できるだけ近くに住みたい意向を示した。

一方で、必ずしも近ければよいというわけではなく、たとえば介護期は在宅が中心となるため隣接していることが望ましいが、乳幼児期は必ずしも隣接している必要はないため、適度に離れていることの方が望ましいという考えもみられた。

近居世帯間で求められている距離は今現在の相互支援行動、訪問行動、外出行動などと世帯がどのように付き合いに深くかかわっている。また、近居世帯間の関係から生じる「気遣いなどの負担感」も距離をとる要因として思われる。

③ 近居における外出の意味

近居ならではの外出行動としては互いの家を行き来する訪問外出がみられる。特に子世帯から親世帯への訪問外出の方に偏る傾向が見られた。この訪問外出は支援、物資の共有といった目的のついでとなることが多いが、まだ一人暮らしの子世帯の場合は会社帰りに寄る、食事をするなどと近居世帯の住居を含めて日常生活圏としているケースもあった。また、この日常生活での訪問外出は必ずしも世帯構成員の全員が行うわけではなく、近居世帯の親族の方のみが行うことが多い。

同伴外出については、どちらかの世帯がサポートを必要としている時期以外はほとんど見られず、親族近居が必ずしも日常的な地域での外出行動に関係しているわけではないことがわかった。しかし、

浜見平団地の場合では「散歩」と「外食」などと近居世帯同伴外出の事例が左近山団地のそれより多く、地域内の環境がこういった付き合いの上昇につながることがわかった。

④ 近居による生活への影響

子世帯は家事援助や外出支援などの親世帯の生活援助、親世帯は家事援助や孫の送迎・一時預かりなどの育児支援がそれぞれ主な目的としており、いずれも近居親族は有力なサポート提供者となっていた。しかし、両世帯に身体的又は時間的余裕がなく互いがサポートを必要としている場合にはむしろ負担となる可能性も指摘された。

5-2 実態からみた課題

以上より、親族近居の実態および近居世帯の外出行動と相互支援の実態を事例的に明らかとした。

近くで離れて支え合って暮らす住まい方として近居の広がりへの期待は大きい。一方で、長寿化や共働き率上昇といった社会構造の変化にともない、場合によっては育児期と要介護期が重複するケース、親も子も在宅で高齢となり老々介護となるケースなどがみられることもわかった。

この重複リスクは晩産化や長寿化によって今後拡大・長期化する可能性も考えられ、同居あるいは二世帯住宅とは異なる近居ならではの空間的独立がどのような問題を生じるのか注意を要する。今後の課題であろう。

また、近居ならではの外出行動のなかでも、たとえば未就学児がいる時期や、親世帯の身体機能が低下し身の回りの家事手伝いや安否確認などが必要となる時期など、一定期間内に集中的にあらわれる外出行動については、本研究では必ずしもその特徴を明らかにすることができなかった。この点についても今後の課題であろう。

さらに付け加えるとすれば、近居ニーズが特に子育て世帯に偏って形作られていた点にも注意が必要である。背景には子育て世帯に対する公的サービスや近隣地域からのインフォーマルなサポートが少子化の進む郊外住宅団地で不足しており、その裏返しとして最も身近な親からのサポートへの期待が高まっていることが推察される。近くで離れて支え合って暮らすという近居の利点を活かすためにも、近居世帯間だけの相互支援に閉じるのではなく地域の様々なサポート資源とも関係をもっていく視点が重要であろうと考えられる。以上を踏まえ、地域内での近居の有効活用には徒歩圏内の近居、地域内での多様な外出動機の創出、子育て世帯の暮らしやすさ・子どもの遊び環境への配慮などの条件が重要となってくる。

5-3 結論と提言

社会にとって近居の相互支援は必要である。直接生活に対する支援だけではなく、心理的な支援できる面も多く、環境の変化にリスクを感じる高齢期にも重要な支えあいとして両団地に共通的にみられた。対象を絞り詳しくみるとかなりのボリュームで必要とされている。そのニーズは現在必要としている支援（育児支援、介護支援など）だけではなく、非常時、将来のためのものへの比重が大きい。建替えにより環境が一新したところでも、各個人の生活にちょうどあった対応は難しく、その差を近居に頼ることで生活の質を上げられると考えられる。

問題となっているのは切実なサービス環境から始まる近居である。近居には集中的なサポートを必要とされる期間が存在するが、支援サービスが不足しているところでは、この期間をしばらく我慢してせざるをえない近居がみられる。計画的な施設整備を行わず、近居を支援施設のトレードオフかのように勧めるようなことは世帯の負担をさらに加重させることにつながる。そして、「親族を頼って近くに住むことは迷惑」という偏狭な意識となり、近居の有効性を考えずあきらめてしまうケースが増えるだろう。

近居の分離されているが近いという距離間は世帯がどのくらいお互い付き合うに対する自由度を高めている。そして、住居かつ周り環境によってその付き合い度をさらに高めることができる。世帯と一緒に利用できるような環境は近居世帯の日常生活での付き合いに深く関わっていて、これは地域の多世代交流の切っ掛けとなる可能性として考えられるだろう。

また、親—子—孫の三世帯関係を見ると、

親—子：近居ニーズが特に子育て世帯に偏っている。生活に余裕がないので「仕方なく」身近な親族を頼って近居する傾向が見える。

子—孫：子育て世帯から経過による公園遊具や歩行者路などの老朽化への不満が上げられている。

親―孫：子世帯への家事サポートや孫の育児サポートは三世帯の中で子だけが抜けた関係を見せる。

、以上親―子の関係だけではなく親―孫の関係についても地域の中で時間と空間をどのように共有しているかさらなる研究が必要である。近居は親世帯と子世帯で行われるが、育児へのサポートが大事になっている現状で親世帯と孫の関係が近居の空間特徴とどのような関係を見せるのか注意が必要である。

近居は外部によって促進されるものではなく、世帯が暮らしの中で選択してきた住まいの形である。一時的経済支援で推奨するのではなく、なぜその選択がされたかに注目しそれを補完するための仕組みが必要であろう。

郊外住宅団地はその密集性のため、できるだけ近い距離で家を構えたい近居世帯にとっては住居を探すに最適である。左近山団地での事例をみると近居するための住居探しは近所からの情報によるものがおおかった。将来近居を希望している世帯などを調査し、周辺の空き情報等を提供できる近居住戸確保システムなども団地内の空き家住戸の管理の一つとしても役に立つと考えられる。

また、近居世帯がもつ「多世代交流」を生かせる環境整備が重要としているなか、高齢世帯と子育て世帯だけではなく、孫世代との付き合い方も含めた環境計画が必要とされる。

郊外住宅団地における多世代近居からみた
世帯間相互支援行動に関する研究

付録

参考文献

- 1) 工藤禎子：都市部に引越した独居高齢者の危機管理（北海道医療大学看護福祉学部学会誌 9(1),pp.43-53,2013.03)
- 2) 大月敏雄+住総研：「近居 少子高齢社会の住まい・地域再生にどう活かすか」、学芸出版社、2014
- 3) 在塚 礼子：「老人・家族・住まい」、住まいの図書館出版局、1992
- 4) 上和田 茂，鳥飼 香代子，山田 英代，付 開楠：準近居の存在からみた老親世帯の自立と支援を止揚するサポート居住の動向：親子の居住関係を軸とする高齢者のサポート構造に関する研究 その1、日本建築学会計画系論文集 (566),9-16, 2003-04-30
- 5) J.H.Sheldon：The Social Medicine of Old Age, 1989
- 6) 藤崎 宏子：高齢者・家族・社会的ネットワーク（現代家族問題シリーズ）、培風館、1998-03
- 7) 安達 正嗣：高齢期家族の社会学(SEKAISHISO SEMINAR)、世界思想社、1999-02
- 8) Esther Urdang：Human Behavior in the Social Environment -Interweaving the inner and outer worlds The third edition、Published 2016 By Routledge
- 9) Elaine Pillar Congress：Multicultural perspectives in social work practice with families、Springer publishing Company, LLC, 1997
- 10) 松本 吉彦，入澤 敦子，添田 昌志，任 智顯：近居と同居における「孫共育」の比較：親子ネットワーク居住の実態調査(1)、学術演梗概集. E-2, 建築計画 II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育 2010, 219-220, 2010-07-20
- 11) 上和田 茂：高齢者支援の視点からみたサポート居住と準近居の現状と今後の展望（特集 多世代居住）、住宅 62(11), 15-23, 2013-11
- 12) 松本 恭治，吉田 進一，江口 司津：長期経過した公的分譲集合住宅団地における居住者の高齢化と住まい方：その3 親族近居の実態、学術講演梗概集. F-1, 都市計画, 建築経済・住宅問題 1995, 1197-1198, 1995-07-20
- 13) 重村力，田代純，菊田純一，延沢優，尾崎久純外5名：生活集積としての都市研究 # 38 ～ 46 千里ニュータウンの都市的成熟に関する研究 その5 親族間近居関係とライフステージに関する分析と展望、日本建築学会大会学術講演梗概集、2017-2018、1984-10
- 14) 澤田 圭祐，橋立 博幸，大沼 剛，柴田 未里，浅野 克俊，嶋崎 聡美，千葉 美幸：屋外活動が困難な在宅高齢者における屋内生活空間と床からの立ち上がり動作との関連、日本理学療法学会大会 2012(0),48100031-48100031, 2013
- 15) 橋立 博幸，大沼 剛，澤田 圭祐，阿部 勉：屋外活動が困難な在宅高齢者における屋内および屋外の生活空間と移動・移乗動作の自立度との関連、日本理学療法学会大会 2012(0), 48100019-48100019,2013
- 16) 井上 忠俊，上城 憲司，藤原 和彦[他]：介護老人福祉施設入居者に対する外出支援・屋外活動の試み、臨床作業療法 10(3), 298-304,2013-07
- 17) 柳原 崇男：高齢者の外出頻度から見た日常生活活動能力と移動手段に関する考察、土木学会論文集 D3（土木計画学） 71(5),I_459-I_465, 2015

- 18) 久家 あかね, 余 錦芳, 松本 真澄, 上野 淳: 多摩ニュータウン諏訪・永山地区における高齢者の屋外活動に関する調査、学術講演梗概集 2012(建築社会システム), 227-228, 2012-09-12
- 19) 松橋 圭子, 大原 一興, 藤岡 泰寛[他], 三輪 律江, 谷口 新: 地域における親子の居場所選択からみた子育て支援施設のあり方に関する研究 : 東京都三鷹市における外出調査より、日本建築学会計画系論文集 (600), 25-32, 2006-02-28
- 20) 岡村 遼 他: 建替え計画団地における世代間交流の場に関する研究 その1: 居住者による近隣交流の実態、日本建築学会大会学術講演梗概集. E-2, pp.269-270, 2007
- 21) 入村 誠 他: 建替え計画団地における世代間交流の場に関する研究 その2: 世代別にみた交流実態とコミュニティカフェの実験的取り組み、日本建築学会大会学術講演梗概集, E-2, pp.271-272, 2007
- 22) 河合克義著: 「大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立」, 法律文化社, 2009
- 23) William B. Gudykunst: Cross-Cultural and intercultural communication, Copyright 2003 by Sage Publications, Inc.
- 24) 松本 吉彦, 井村 理恵, 添田 昌志: 築 30 年二世帯住宅の孫世帯による継承の実態 : 二世帯住宅の長期的評価 その2, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2015(建築計画), 1289-1290, 2015-09-04
- 25) 安達 匡, 松本 吉彦, 近藤 知奈美, 鈴木 毅, 松原 茂樹, 木多 道宏: 家族構成・交流状況別の親世帯の住要求に関する研究 - 二世帯住宅における親世帯に関する研究 その1, 日本建築学会学術講演梗概集 2014(建築計画), 1103-1104, 2014-09-12
- 26) 近藤 知奈美, 松本 吉彦, 安達 匡, 鈴木 毅, 松原 茂樹, 木多 道宏: 生活空間の繋がり方の分類と同居家族の影響 - 二世帯住宅における親世帯に関する研究その2, 日本建築学会学術講演集 2014(建築計画), 1105-1106, 2014-09-12
- 27) 近藤 知奈美, 松本 吉彦, 安達 匡, 鈴木 毅, 松原 茂樹, 木多 道宏: 二世帯住宅の親世帯の生活空間に関する研究, 日本建築学会近畿支部研究報告集. 計画系 (54), 49-52, 2014-05-26
- 28) 松本 吉彦, 園田 真理子, 新堀 浩之: 経年した郊外住宅地の住宅履歴と住空間の変遷: 経年した郊外住宅地の住宅履歴と住空間の特性分析(その2), 日本建築学会大会学術講演梗概集 2013(建築計画), 1169-1170, 2013-08-30
- 29) 新堀 浩之, 園田 真理子, 松本 吉彦: 経年した郊外住宅地の人口分布の特性と住宅履歴の特徴 - 経年した郊外住宅地の住宅履歴と住空間の特性分析(その1) - 日本建築学会大会学術講演梗概集 2013(建築計画), 1167-1168, 2013-08-30
- 30) 吉田 進一, 松本 恭治: 長期経過した公的分譲集合住宅団地に於ける居住者の高齢化と住まい方について, 日本建築学会大会学術講演梗概集. F, 都市計画, 建築経済・住宅問題, 建築歴史・意匠 1994, 821-822, 1994-07-25
- 31) 江口 司津, 松本 恭治, 吉田 進一: 長期経過した公的分譲集合住宅団地における居住者の高齢化と住まい方 - その1 居住者の高齢化と生活 -, 日本建築学会大会学術講演梗概集. F-1, 都市計画, 建築経済・住宅問題 1995, 1193-1194, 1995-07-20
- 32) 吉田 進一, 松本 恭治, 江口 司津: 長期経過した公的分譲集合住宅団地における居住者の高齢化と住まい方 - その2 住み替えと複数住宅使用 -, 日本建築学会大会学術講演梗概集. F-1, 都市計画, 建築経済・住宅問題 1995, 1195-1196, 1995-07-20

- 3 3) 松本 恭治, 吉田 進一, 江口 司津: 長期経過した公的分譲集合住宅団地における居住者の高齢化と住まい方 - その 3 親族近居の実態 -, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-1, 都市計画, 建築経済・住宅問題 1995, 1197-1198, 1995-07-20
- 3 4) 水野治久, 谷口弘一, 福岡欣治, 古宮昇[編]: カウンセリングとソーシャルサポートつながり支えあう心理学, ナカニシヤ出版, 2007.10
- 3 5) 山口剛史, 加藤仁美, 河添麻以, 藤岡泰寛, 大原一興: 丘陵住宅地における居住者の屋外生活行動の実態: 地理的困難さを抱えた郊外住宅地の再生研究 その 1, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築社会システム, pp.349-350, 2013.08
- 3 6) 藤岡 泰寛, 河添麻以, 山口剛史, 加藤仁美, 大原一興: 丘陵住宅地における高齢期の外出行動と近居の関係: 地理的困難さを抱えた郊外住宅地の再生研究 その 2, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築社会システム, pp.351-352, 2013.08
- 3 7) 山口剛史, 加藤仁美, 藤岡泰寛, 金由羅, 大原一興: 子育て世帯の居住実態と居住意向からみた多世代居住の可能性: 地理的困難さを抱えた郊外住宅団地の再生研究その 3, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築社会システム, pp.219-220, 2014.09
- 3 8) 金 由羅, 藤岡泰寛, 加藤仁美, 山口剛史, 大原一興: 高齢世帯の外出行動と親族近居の関係からみた外出促進要因の考察—地理的困難さを抱えた郊外住宅地の再生研究その 4 —, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築社会システム, pp.221-222, 2014.09
- 3 9) 山口 剛史, 加藤仁美, 藤岡泰寛, 金由羅, 大原一興: 高度経済成長期の大規模住宅団地における居住実態からみた多世代居住の可能性—横浜市旭区左近山団地の場合—, 日本建築学会関東支部研究報告集, 2015.03
- 4 0) 藤岡泰寛, 加藤仁美, 金 由羅, 山口剛史, 大原一興: 郊外住宅団地における子育て世帯と高齢親世帯の近居実態からみたケアの社会化に関する考察, 日本建築学会大会学術講演梗概集, E-1, pp.1355-1358, 2015.09
- 4 1) 金 由羅, 藤岡 泰寛, 加藤 仁美, 山口 剛史, 大原一興: 郊外住宅団地における親族近居世帯の外出行動の特徴に関する研究: 親族近居世帯間の相互支援に着目して, 日本建築学会計画系論文集 81(728), 2163-2172, 2016-10

アンケート調査様式

- ・ 左近山団地 分譲棟（3,4,5 街区）
- ・ 浜見平団地 新建物
- ・ 浜見平団地 既存建物

居住環境に関するアンケート調査

2013年9月25日

左近山団地中央地区住宅管理組合

理事長 柳田 洋

いつも管理組合活動にご協力いただき、ありがとうございます。

このたび理事会は、横浜国立大学大学院建築計画研究室（大原一興教授、藤岡泰寛准教授）、及び東海大学工学部都市計画研究室（加藤仁美教授）と共同で、中央地区居住者に対する基本調査、及び居住環境に関する評価、将来への考え方などの全組合員対象とした「無記名」アンケート調査を実施することに致しました。目的は、入居第一世代が75歳を超え、団塊の世代が退職しつつある現在、わが管理組合の人的構成の変化を知り活動に活かすとともに、今後必要となるサービス条件や将来の方向性について検討するためです。

お手をかけますが、ご協力をお願いします。

1. 調査期間 2013年9月25日配布、10月5日までに回収
2. 調査結果 組合ニュース、階段委員会、及び報告集などで発表
3. 提 出 封筒に入れ、階段委員に渡してください。

① 基本調査項目です。

以下の質問に答えて、該当個所に○をして下さい。

- ①居住街区 ア. 3街区1～12号棟 イ. 3街区13～33号棟 ウ. 4街区 エ. 5街区
- ②階数 ア. 1階 イ. 2階 ウ. 3階 エ. 4階 オ. 5階
- ③世帯主の所有関係 ア. 所有者 イ. 占有者（賃貸） オ. その他（ ）
- ④世帯主年齢 ア. 20～24歳 イ. 25～29歳 ウ. 30～34歳 エ. 35～39歳
 オ. 40～44歳 カ. 45～49歳 キ. 50～54歳 ク. 55～59歳
 ケ. 60～64歳 コ. 65～69歳 サ. 70～74歳 シ. 75～79歳
 ス. 80～84歳 セ. 85～89歳 ソ. 90～94歳 タ. 95歳以上
- ⑤性 別 ア. 女 イ. 男
- ⑥職 種 ア. 自営業 イ. 会社員・公務員 ウ. 嘱託 エ. パート・アルバイト
 オ. 無職 カ. その他（ ）
- ⑦居住家族数 ア. 単身 イ. 2人 ウ. 3人 エ. 4人 オ. 5人以上
- ⑧世帯構成 ア. 夫婦 イ. 夫婦と子供 ウ. 親と夫婦と子供 エ. 親と夫婦
- ⑨家族に高齢者（65歳以上）の方はいらっしゃいますか。 ア. はい イ. いいえ
- ⑩家族に、通学中のお子様はいらっしゃいますか。
 ア. 小学生 イ. 中学生 ウ. 高校生 エ. 大学生 オ. その他（ ）
- ⑪居住年数 ア. 5年以内 イ. 6～10年 ウ. 11～20年 エ. 21～30年
 オ. 31～40年 カ. 40年超
- ⑫前住居 現在の住まいに入居する前はどこに住んでいましたか。（ア. は（ ）内に○）
 ア. 左近山内（1街区. 2街区. 市沢住宅. 7・8・9街区. 市沢団地） イ. 旭区内
 ウ. 横浜市内 エ. 神奈川県内 オ. 都内 カ. その他

1 管理組合活動について、5段階評価で、該当箇所に○をしてお答えください。

評 価 項 目	満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	不満
ア.管理組合の総合評価	5	4	3	2	1
イ.情報が的確に届いている	5	4	3	2	1
ウ.要望の処理が速い	5	4	3	2	1
エ.長期修繕が計画的に実現している	5	4	3	2	1
オ.緑化環境のレベルが高い	5	4	3	2	1
カ.公園の整備	5	4	3	2	1
キ.生活道路、遊歩道の整備	5	4	3	2	1
ク.バリアフリー	5	4	3	2	1
ケ.修繕積立金・組合費	5	4	3	2	1
コ.駐車場の利用料金	5	4	3	2	1
サ.集会所・会議室の利用、及び料金	5	4	3	2	1
シ.来客駐車場の設置数	5	4	3	2	1
ス.組合役員はよく動いている	5	4	3	2	1

2 現在のお住まいを選んだ理由として当てはまるものはどれですか。（○は最大3つ）

- ア.周辺に土地勘があったから イ.賃貸物件だから ウ.住み替えが容易だから
 オ.家の広さがちょうどいいから カ.家の広さの割りに価格が手頃だから
 キ.自由にリフォームができそうだから ク.敷地内に駐車できるから
 ケ.近くに親族が住んでいるから コ.職場や学校（自分の通う）に通いやすいから
 サ.眺めが良かったから シ.自然が豊かだから ス.静かな住宅地だから
 セ.その他（具体的に： ）

3 左近山団地全体の居住環境について、5段階評価で、該当箇所に○をしてお答えください。

評 価 項 目	満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	不満
ア.自然環境・公園などの豊富さ	5	4	3	2	1
イ.日常の買物の便	5	4	3	2	1
ウ.医療・保健施設の便	5	4	3	2	1
エ.集会施設・スポーツ施設等の豊富さ	5	4	3	2	1
オ.バスなどの公共交通の便	5	4	3	2	1
カ.行政機関利用の便	5	4	3	2	1
キ.近所づきあい	5	4	3	2	1
ク.騒音などの公害の少なさ	5	4	3	2	1
ケ.子育ての環境の良さ	5	4	3	2	1
コ.周辺道路・上下水道の整備	5	4	3	2	1
タ.高齢者への配慮	5	4	3	2	1

4 団地外の近隣や団地内に居住しているご親族はいらっしゃいますか？

- (はい いいえ) → ①はいの場合：ご親族の続柄()、
②近居のご親族の住まい 団地外の近隣の場合()町()丁目
団地内の場合()街区()棟()階
③近居のご親族と行き来する場合の交通手段と時間はどのくらいですか。
交通手段(ア.徒歩 イ.自転車 ウ.車 エ.電車)、所要時間()分

5 団地内で日常生活でよく使われる外出場所やルートについて、うかがいます。

- (1) 添付の地図上に、凡例で示した①～⑪のルート及び場所を記入して下さい。
(2) 一週間のうち、普段どのくらい外出されますか。(1つに○)
ア.ほとんど毎日 イ.週に4～5日 ウ.週に2～3日 エ.ほとんど外出しない
(3) 外出する方は、どのような目的で外出していますか。(あてはまるものすべてに○)
ア.買物 イ.仕事 ウ.通院 エ.家族・友人などを訪問 オ.外食 カ.散歩
キ.趣味・余暇活動 ク.ボランティア活動や地域活動 ケ.その他()
コ.外出しない(理由:)
(4) どのような方法で外出していますか。(あてはまるものすべてに○)
ア.自家用車を運転 イ.家族運転自家用車 ウ.タクシー エ.施設の送迎バス等
オ.バス、電車 カ.車いす キ.自転車、バイク ク.徒歩 ケ.福祉有償輸送サー
ビス コ.その他()
(5) 団地内でよく利用している施設や場所がありましたらお教えてください。
大人：場所 名称()
子ども：場所 名称()

6 「将来のお住まい」に対する考え方についておたずねします。

- (1) あなたは、これからもこの地域に住み続けたいと思いますか。(○は1つ)
ア.これからもずっと住み続けたい イ.どちらかといえば済み続けたい
ウ.どちらかといえば住みたくない エ.住みたくない オ.わからない
(2) **現在**、特に困っていることがあれば回答ください。無い場合は次に進む。
()
(3) **将来**に向けての不安や心配事があれば回答ください。(○は3つまで) 無い場合は次に進む。
ア.老後の不安(健康面) イ.子育て不安 ウ.隣近所との関係 エ.地震 災害時の
対応 オ.地域の活力の減少 カ.家屋内での要介護者の安全性 キ.住宅の管理
ク.住宅維持費など経済的な負担 ケ.管理・防犯面の不安(空き家の増加)
コ.高齢者への配慮(坂、階段、段差) サ.その他()
(4) 困りごとや不安を感じた時、家族以外の誰と相談したいですか。(○は3つまで)
ア.知人・友人 イ.医師・保健師 ウ.福祉・介護事業所・福祉団体 エ.近所の人
カ.職場の人 キ.管理組合 ク.自治会 ケ.民生委員 コ.行政 サ.親族
(5) 子育て世代が住む活気ある地域にするには、どのようなことが必要だと思いますか。(○は3つまで)
ア.子どもの育児をサポートするしくみ(保育ママ、一時預かり、病児保育等)の充実
イ.習い事や塾などの教育を支援するしくみ
ウ.子どもを中心としたスポーツ・サークル活動を支援するしくみ
エ.多世代が交流できる場所(コミュニティカフェなど)やイベントの充実

エ.多世代が暮らすことのできる多様な住宅タイプ

オ.その他 ()

(6) あなたはご自身の老後をどのように過ごしたいと思っていますか。

次の項目について、最も当てはまるものを1つ選んで○をつけてください。

評 価 項 目	そう したい	どちらか といえは そう したい	どちらか といえは そうした くない	そう したく ない
ア.介護が必要になっても現在のまま住み続ける	4	3	2	1
イ.介護が必要になったら自宅をリフォームして住み続ける	4	3	2	1
ウ.家族と同居、又は近居する	4	3	2	1
エ.元気な内に早めに高齢者住宅等に住み替える	4	3	2	1
オ.介護が必要になったら高齢者住宅や施設に住み替える	4	3	2	1
カ.地域の人と交流する	4	3	2	1
キ.同年代の仲間と交流する	4	3	2	1
ク.若い人たちと交流する	4	3	2	1
ケ.できるだけ働き続ける	4	3	2	1
コ.まったく考えていない	4	3	2	1

7 現在のコミュニティ活動についておたずねします。

(1) 自治会活動に参加したことがありますか。(該当するものすべて○)

ア.清掃活動 イ.防犯パトロール ウ.防災訓練 エ.お祭り オ.文化祭

カ.自治会の総会 キ.老人会活動 ク.その他 ()

(2) 管理組合活動に参加したことがありますか(該当するものすべて○)

ア.階段委員活動 イ.階段委員会への参加 ウ.専門委員会への参加 エ.総会に参加

オ.選挙管理委員になったことがある カ.理事又は監事になったことがある

(3) あなたはサークルや教室など地域交流活動に参加したことがありますか。(○は1つ)

ア.参加中 イ.今後、参加したい ウ.参加中だが、辞めたい エ.不参加

(4) 主な活動場所はどこですか。(該当するものすべて○)

ア.団地内集会所 イ.地域の集会所 ウ.地区センター エ.スポーツセンター

オ.コミュニティセンター カ.ケアプラザ キ.その他 ()

自由記入欄:

■ヒアリング調査協力をお願い

○本アンケートでお聞きした内容を具体的にお伺いしたいと考えております。

○実施時期は12月を予定しております。所要時間は30分～最大60分を予定しております。

○日程 時間調整の上で、ご協力いただける方は以下の欄にご記入ください。

氏 名 () 号棟 ()

電話番号 () Eメール ()

アンケートはここで終わりです。ご協力ありがとうございました。

団地建替えによるまちの変化とこれからの暮らしに関するアンケート

I. まず、あなた自身のことについてお伺いします。

問1 あなたの性別を教えてください。

1. 女 2. 男

問2 あなたの年齢について、当てはまるものひとつに○をつけてください。

1. 29歳以下 2. 30～39歳 3. 40～49歳 4. 50～54歳
5. 55～59歳 6. 60～64歳 7. 65～69歳 8. 70～74歳
9. 75～79歳 10. 80～84歳 11. 85歳以上

問3 あなたの職業について、当てはまるものひとつに○をつけてください。

1. 会社員・公務員 2. 自営業 3. パート・アルバイト
4. 働いていない 5. その他（具体的に： ）

問4 現在お住まいの住棟、居住階についてお答えください。

() 街区 () 号棟 () 階

問5 現在お住まいの間取りについて、当てはまるものひとつに○をつけてください。

1. 1DK 2. 1LDK 3. 2DK 4. 2LDK
5. 3DK 6. 3LDK 7. 4LDK

問6 現在同居しているご家族はあなたを含めて何人ですか。当てはまるものひとつに○をつけてください。

1. 1名（単身） 2. 2名 3. 3名 4. 4名
5. 5名 6. 6名 7. 7名以上

→ 問6で、「1名（単身）」を回答した人は 問8 にお進みください。

→ 問6で、「2～7」を回答した人は 問7 にお進みください。

問7 同居者について教えてください。ご自身をのぞき、該当する番号すべてに○を付け、() の中に人数をご記入ください。

- | | | |
|------------------|------------------|------------------|
| 1. 未就学児童 () 人 | 2. 幼稚園児 () 人 | 3. 保育園児 () 人 |
| 4. 小学生 () 人 | 5. 中学生 () 人 | 6. 高校生 () 人 |
| 7. 19～29歳 () 人 | 8. 30～39歳 () 人 | 9. 40～49歳 () 人 |
| 10. 50～54歳 () 人 | 11. 55～59歳 () 人 | 12. 60～64歳 () 人 |
| 13. 65～69歳 () 人 | 14. 70～74歳 () 人 | 15. 75～80歳 () 人 |
| 16. 80～84歳 () 人 | 17. 85歳以上 () 人 | |

II. つぎに、建て替え前の住まいについてお聞きします。

問8 建て替え前はどちらにお住まいでしたか。当てはまるものひとつに○をつけてください。

1. 浜見平団地 () 街区 () 号棟 () 階
2. 南湖 () 丁目 3. 柳島 () 丁目 4. 松尾 () 丁目
5. 茅ヶ崎市内 6. 平塚市内 7. 神奈川県内
8. その他（具体的に： ）

→ 問8で「1（浜見平団地）」と回答した方は 問9 にお進みください。

→ 問8で2～8と回答した方は 問14 にお進みください。

問 9 建て替え前のことについてお聞きします。お住まいのご家族はご自身を含めて何人でしたか。当てはまるものひとつに○をつけてください。

1. 1名 2. 2名 3. 3名 4. 4名
5. 5名 6. 6名 7. 7名以上
8. その他（具体的に： ）

問 10 建て替え前と比べて家族数に変化がある場合、その理由は何ですか。当てはまるものすべてに○をつけてください。

1. 結婚のため 2. 子供誕生のため 3. 親族呼び寄せのため
4. 離婚のため 5. 世帯独立のため 6. 死別のため
7. 施設入居のため
：「7. 施設入居のため」に○をつけた場合、その理由 ⇒ ア. 自立での生活が難しくなったため
イ. 良い老人施設が見つかったため
ウ. ケアマネージャー等のアドバイスで
エ. 病院に入院することになったため
8. 増減はない
9. その他（具体的に： ）

問 11 建て替え前の団地への入居時期について、当てはまるものひとつに○をつけてください。

1. 1964(s39)～1974(s49)年 2. 1975(s50)～1984(s59)年 3. 1985(s60)～1994(H6)年
4. 1995(H7)～2004(H16)年 5. 2005(H17)年～2010(H22)年 6. 2011年(H23)～現在

問 12 建て替え前の身近な生活環境における公共サービスへの満足度について、表に示すア～ケの各項目についてそれぞれ1～5の中で当てはまるものをひとつ選び○をつけてください。

	1. 満足	2. やや満足	3. 普通	4. やや不満	5. 不満
ア. 生活の安全性	1	2	3	4	5
イ. 交通安全対策	1	2	3	4	5
ウ. 保健・医療サービス	1	2	3	4	5
エ. 福祉サービス	1	2	3	4	5
オ. ゴミ・環境	1	2	3	4	5
カ. 買い物物の便利さ	1	2	3	4	5
キ. 公共交通の便利さ	1	2	3	4	5
ク. 公園・緑地・広場	1	2	3	4	5
ケ. 学習・趣味・スポーツ	1	2	3	4	5

問 13 建て替え前の団地内での暮らしの総合的な満足度について、表に示すア～エの各項目についてそれぞれ1～5の中で当てはまるものをひとつ選び○をつけてください。

	1. 満足	2. やや満足	3. 普通	4. やや不満	5. 不満
ア. 住環境全般	1	2	3	4	5
イ. 日常生活（買い物、交通などの利便性）	1	2	3	4	5
ウ. 社会的交流（付き合い、趣味などの活動）	1	2	3	4	5
エ. 住まい（住宅の性能）	1	2	3	4	5

Ⅲ. 建て替え後の施設活用についてお聞きます。

問 14 以下に示す、団地内および団地周辺施設をどのくらいの頻度で利用したことがありますか。表に示すア～スの各項目（場所）についてそれぞれ 1～6 の中で最も近いものをひとつ選び○をつけてください。

	1. ほとんど毎日	2. 2～3 日に 1 回程度	3. 週に 1 回程度	4. 月に 1～2 回程度	5. 月に 1 回より少ない	6. 利用したことがない
ア. まちづくりスポット茅ヶ崎	1	2	3	4	5	6
イ. ハマミーナまなびプラザ	1	2	3	4	5	6
ウ. ハマミーナ図書室	1	2	3	4	5	6
エ. ハマミーナ出張所	1	2	3	4	5	6
オ. 福祉相談室すみれ（ハマミーナ内）	1	2	3	4	5	6
カ. 地域包括支援センターすみれ（ハマミーナ内）	1	2	3	4	5	6
キ. ハマミーナ内の店舗（喫茶店やコンビニ等）	1	2	3	4	5	6
ク. 建て替え前団地の集会所	1	2	3	4	5	6
ケ. 建て替え後団地の新集会室	1	2	3	4	5	6
コ. 建て替え後団地内の中庭	1	2	3	4	5	6
サ. オハナ茅ヶ崎ガーデンアのエントランスホール	1	2	3	4	5	6
シ. 松尾川緑道	1	2	3	4	5	6
ス. しろやま公園	1	2	3	4	5	6

問 15 利用している・していないを問わず、団地内および団地周辺施設はどんな場所として利用してみたいと思いますか。表に示すア～スの各項目（場所）についてそれぞれ 1～9 の中で当てはまるものをすべて選び○をつけてください。

	1. ゆっくり話せる場所として使ってみたい	2. 待ち合わせ場所として使ってみたい	3. 一緒に出かけてみたい	4. 買い物ついでに寄ってみたい	5. 1人で使ってみたい	6. 多人数で使ってみたい	7. 子供、孫を遊ばせてみたい	8. 親族と使ってみたい	9. 利用してみたいとは思わない
ア. まちづくりスポット茅ヶ崎	1	2	3	4	5	6	7	8	9
イ. ハマミーナまなびプラザ	1	2	3	4	5	6	7	8	9
ウ. ハマミーナ図書室	1	2	3	4	5	6	7	8	9
エ. ハマミーナ出張所	1	2	3	4	5	6	7	8	9
オ. 福祉相談室すみれ（ハマミーナ内）	1	2	3	4	5	6	7	8	9
カ. 地域包括支援センターすみれ（ハマミーナ内）	1	2	3	4	5	6	7	8	9
キ. ハマミーナ内の店舗（喫茶店やコンビニ等）	1	2	3	4	5	6	7	8	9
ク. 建て替え前団地の集会所	1	2	3	4	5	6	7	8	9
ケ. 建て替え後団地の新集会室	1	2	3	4	5	6	7	8	9
コ. 建て替え後団地内の中庭	1	2	3	4	5	6	7	8	9
サ. オハナ茅ヶ崎ガーデンアのエントランスホール	1	2	3	4	5	6	7	8	9
シ. 松尾川緑道	1	2	3	4	5	6	7	8	9
ス. しろやま公園	1	2	3	4	5	6	7	8	9

問 16 建て替え後、集会室やその周辺花壇スペースを使って行われている活動の中で、参加している、または参加してみたいものはありますか。当てはまるものすべてに○をつけてください。

- | | |
|---------------------|-------------------------|
| 1. コミュニティカフェ（サンカフェ） | 2. コミュニティガーデン（花壇や菜園づくり） |
| 3. 麻雀教室 | 4. カラオケ教室 |
| 5. 手芸教室 | 6. 囲碁教室 |
| 7. 参加してみたいとは思わない | |

問 17 今後、浜見平団地自治会の活動の中で特に力を入れてほしい活動を教えてください。1～15の中で当てはまるもの3つまで○をつけてください。

- | | | |
|------------------------|---------------|------------------|
| 1. 防災資材の自主管理 | 2. 防災訓練 | 3. 防災ボランティアの登録 |
| 4. 家賃対策運動 | 5. 高齢者のいこいの部屋 | 6. 悩みごと相談ダイヤル |
| 7. 放置自転車の整理や処分 | 8. 環境美化・ゴミ取締り | 9. 団地内の図書室 |
| 10. 団地内の花壇づくり | 11. 体育振興の活動 | 12. 広報活動（自治会だより） |
| 13. イベント活動（桜まつりや納涼祭など） | 14. 防犯パトロール | |
| 15. その他（具体的に： | | ） |

問 18 建て替え後の、身近な生活環境における公共サービスへの満足度について、表に示すア～ケの各項目についてそれぞれ1～5の中で最も近いものをひとつ選び○をつけてください。

	1. 満足	2. やや満足	3. 普通	4. やや不満	5. 不満
ア. 生活の安全性	1	2	3	4	5
イ. 交通安全対策	1	2	3	4	5
ウ. 保健・医療サービス	1	2	3	4	5
エ. 福祉サービス	1	2	3	4	5
オ. ゴミ・環境	1	2	3	4	5
カ. 買い物の便利さ	1	2	3	4	5
キ. 公共交通の便利さ	1	2	3	4	5
ク. 公園・緑地・広場	1	2	3	4	5
ケ. 学習・趣味・スポーツ	1	2	3	4	5

問 19 建て替え後の、団地内での暮らしの総合的な満足度について、表に示すア～エの各項目についてそれぞれ1～5の中で最も近いものをひとつ選び○をつけてください。

	1. 満足	2. やや満足	3. 普通	4. やや不満	5. 不満
ア. 住環境全般	1	2	3	4	5
イ. 日常生活（買い物、交通などの利便性）	1	2	3	4	5
ウ. 社会的交流（付き合い、趣味などの活動）	1	2	3	4	5
エ. 住まい（住宅の性能）	1	2	3	4	5

問 20 建て替え後、浜見平団地および市南西部地域はどのような場所になりつつあると感じますか。1～8の中で当てはまるもの3つまで○をつけてください。

- みどりが豊かで散策のできる広場や遊歩道のある場所
- 若者たちが住める住宅地
- 災害時に地域の人達が避難できる防災施設の充実した場所
- 高齢者支援や子育て支援の施設が充実した場所
- 湘南らしい素敵なレストランやお店のある場所
- 芸術的色合いのある場所
- 市民講座やカルチャーセンターなどの学べる場所
- その他（具体的に：

）

Ⅳ. 現在、日常的に最もお付き合いのあるご親族との関係についてお聞きます。

問 21 日常的に最もお付き合いのあるご親族についてあなたからみた関係をお答えください。

(記入例)「ご自身の次女の家族」、「配偶者の甥(おい)」など

問 22 現在、日常的に最もお付き合いのあるご親族の居住地について当てはまるものひとつに○をつけ、1～4については()内もご記入ください。

- | | | |
|--------------------------------------|----------------|----------------|
| 1. 浜見平団地内 (() 街区 (() 棟 (() 階)) | | |
| 2. 南湖 (() 丁目 | 3. 柳島 (() 丁目 | 4. 松尾 (() 丁目 |
| 5. オハナ茅ヶ崎ガーデンア | 6. 茅ヶ崎市内 | 7. 平塚市内 |
| 8. 神奈川県内 | 9. 他県 | |
| 10. その他(具体的に: () | | |

問 23 日常的に最もお付き合いのあるご親族と行き来する場合の交通手段と所要時間はどのくらいですか。当てはまるものすべてに○をつけ、()内もご記入ください。

- | | | |
|------------------|----------------|--------------|
| 1. 徒歩 (() 分 | 2. 自転車 (() 分 | 3. 車 (() 分 |
| 4. 電車 (() 分 | 5. バス (() 分 | |
| 6. その他(具体的に: () | | |

問 24 日常的に最もお付き合いのあるご親族世帯の世帯構成員について、当てはまるものすべてに○を付けてください。()の中に人数をご記入ください。

- | | | |
|---------------------|---------------------|---------------------|
| 1. 未就学児童 (() 人 | 2. 幼稚園児 (() 人 | 3. 保育園児 (() 人 |
| 4. 小学生 (() 人 | 5. 中学生 (() 人 | 6. 高校生 (() 人 |
| 7. 19～29 歳 (() 人 | 8. 30～39 歳 (() 人 | 9. 40～49 歳 (() 人 |
| 10. 50～54 歳 (() 人 | 11. 55～59 歳 (() 人 | 12. 60～64 歳 (() 人 |
| 13. 65～69 歳 (() 人 | 14. 70～74 歳 (() 人 | 15. 75～80 歳 (() 人 |
| 16. 80～84 歳 (() 人 | 17. 85 歳以上 (() 人 | |

問 25 日常的に最もお付き合いのあるご親族とあなたの住まいの距離について教えてください。当てはまるものひとつに○をつけてください。

- | | | |
|-------------|------------|-----------------|
| 1. ちょうどいい近さ | 2. 近すぎると思う | 3. 近いけどさらに近くがいい |
| 4. 近くないと思う | | |

問 26 ご親族が近くに住んでいることで感じる「安心感」についてはどのような点があると思いますか。当てはまるものすべてに○をつけてください。

- | |
|----------------------|
| 1. あまり考えていない |
| 2. 日常生活で助かっている |
| 3. 将来的に助けになると思う |
| 4. 非常時に助けになると思う |
| 5. 身元保証人などの制度上助かっている |

問 27 ご親族が近くに住んでいることで感じる「負担感」についてはどのような点があるとおもいますか。当
てはまるものすべてに○をつけてください。

1. あまり考えていない
2. 親族への支援に体力的に負担感を感じている
3. 親族への支援に経済的に負担感を感じている
4. 親族の将来に不安を感じている
5. 気遣いなどに負担感を感じている

問 28 日常的に最もお付き合いのあるご親族との交流内容と交流頻度について教えてください。表に示すア～
サの各項目についてそれぞれ 1～6 の中で最も近いものをひとつ選び○をつけてください。

	1. ほとん ど毎日	2. 2～3 日 に 1 回程度	3. 週に 1 回程度	4. 月に 1 ～ 2 回程 度	5. 月に 1 回よりは 少ない	6. 全くな い
ア. あなたから訪問する	1	2	3	4	5	6
イ. 親族から訪問する	1	2	3	4	5	6
エ. 子・孫育ての援助をする	1	2	3	4	5	6
オ. 子・孫育ての援助をされる	1	2	3	4	5	6
カ. 家事の援助をする	1	2	3	4	5	6
キ. 家事の援助をされる	1	2	3	4	5	6
ク. 介護・介助をする	1	2	3	4	5	6
ケ. 介護・介助をされる	1	2	3	4	5	6
コ. あなたが親族宅の留守番 をする	1	2	3	4	5	6
サ. 親族にあなたの家の留守 番をしてもらう	1	2	3	4	5	6

問 29 日常的に最もお付き合いのあるご親族と一緒に外出する目的と頻度を教えてください。表に示すア～ク
の各項目についてそれぞれ 1～6 の中で最も近いものをひとつ選び○をつけてください。

	1. ほとん ど毎日	2. 2～3 日 に 1 回程度	3. 週に 1 回程度	4. 月に 1 ～ 2 回程 度	5. 月に 1 回よりは 少ない	6. 全くな い
ア. 一緒に買い物に行く	1	2	3	4	5	6
イ. 一緒に仕事に行く	1	2	3	4	5	6
ウ. 一緒に通院する	1	2	3	4	5	6
エ. 一緒に外食に出かける	1	2	3	4	5	6
オ. 一緒に散歩する	1	2	3	4	5	6
カ. 一緒に趣味・余暇活動に出 かける	1	2	3	4	5	6
キ. 一緒に友人等を訪問に行く	1	2	3	4	5	6
ク. 一緒にボランティア、地域 活動に参加する	1	2	3	4	5	6

問 30 ご親族同士での、家財や住居空間の共有（持ち合いや場所の貸し借り）についてお聞きます。当てはまるものすべてに○をつけてください。

1. 自分の家の合鍵を親族に預けている
2. 親族の家の合鍵を自分が預かっている
3. 自分の車の合鍵を親族に預けている
4. 親族の車の合鍵を自分が預かっている
5. 自宅の家財（季節物など）を親族宅に預けている
6. 親族宅の家財（季節物など）を自宅に預かっている
7. 自宅の備蓄食料は親族の分も含んでいる
8. 親族宅の備蓄食料は自分の家族の分も含まれている
9. その他（具体的に： _____）

V. これからのことについてお聞きます。

問 31 将来、あなたやあなたのご家族・ご親族が、高齢になり介護や介助が必要になった場合、在宅生活を続ける上でどのような支援が必要であると思いますか。表に示すア～ソの各項目についてそれぞれ1～5の中で最も近いものをひとつ選び○を付けてください。

	1. とても必要だと思う	2. まあ必要だと思う	3. どちらでもよい	4. あまり必要ない	5. 全く必要ない
ア. 悩みごとなどの電話相談サービス	1	2	3	4	5
イ. 安否確認などの声かけ	1	2	3	4	5
ウ. 掃除・洗濯などの家事の手助け	1	2	3	4	5
エ. 配食など食事サービス	1	2	3	4	5
オ. 通院送迎や外出手助け	1	2	3	4	5
カ. 訪問介護	1	2	3	4	5
キ. 訪問入浴サービス	1	2	3	4	5
ク. 訪問診療・看護	1	2	3	4	5
ケ. 訪問リハビリ	1	2	3	4	5
コ. 夜間の訪問サービス	1	2	3	4	5
サ. ショートステイ等の宿泊サービス	1	2	3	4	5
シ. 通所介護	1	2	3	4	5
ス. 通所リハビリ	1	2	3	4	5
セ. 福祉用具の貸与	1	2	3	4	5
ソ. 住宅改修（UR賃貸の場合、「模様替え基準」内での改修が可能です）	1	2	3	4	5

問 32 現在、あなたやあなたのご家族、または近くにお住まいのご親族のなかで、要支援または要介護の方がいらっしゃいますか。当てはまるものすべてに○を付けてください。

1. 要支援の人がいる
2. 要介護の人がいる
3. 要支援・要介護の人はいない

問 33 今後の暮らしとお住まいについて、現時点でのお考えについてお聞かせください。当てはまるものすべてに○をつけてください。

- | | |
|---------------------------------|------------------------|
| 1. 今の住まいに住み続けたい | 2. 近くに親族を呼び寄せたい |
| 3. 親族の近くに住み移りたい | 4. 親族を呼んで同居したい |
| 5. 親族のところで同居したい | 6. 元気なうちに高齢者住宅、施設に移りたい |
| 7. 介護が必要になったら施設などに移りたい | |
| 8. リフォーム（UR賃貸「模様替え基準」の範囲内で）したい。 | |
| 9. まだ考えていない。 | |
| 10. その他（具体的に： | ） |

問 34 浜見平団地自治会では、これまで取り組んできた活動に加えて、地域にお住まいの方々にもご参加いただけるさまざまな住民交流事業（たとえば周辺の農園での収穫イベント、子ども向けまち探検イベントなど）をNPO 法人（特定非営利活動法人）を設立し取り組んでいく予定です。このことについて、あなたのお考えに近いものをすべて選び○をつけてください。

- | | |
|------------------------------|---|
| 1. 内容によっては自分が参加してみたい | |
| 2. 内容によっては家族や友人といっしょに参加してみたい | |
| 3. 内容によっては企画から参加して取り組んでみたい | |
| 4. 関心はあるが参加しないと思う | |
| 5. とくに関心はない | |
| 6. その他（具体的に： | ） |

問 35 浜見平団地や団地周辺地域、あるいは茅ヶ崎市南西部地域が今後どのようなまち・地域になってほしいと思いますか。あなたのお考えをご自由にお書きください。

（記入例）「医療施設がもっと充実してほしい」「おしゃれなお店がたくさん増えてほしい」など

■ヒアリング調査協力をお願い

- ・本アンケートでお聞きした内容を具体的にお伺いしたいと考えております。
- ・実施時期は10月以降を予定しております。所要時間は30分～最大60分を予定しております。
- ・日程・時間調整の上で、ご協力いただける方は以下の欄にご記入下さい。
- ・実施場所はお自宅への直接訪問の予定ですが、第一・第三土曜日開催のコミュニティカフェ（コンフォール集会室）にお越しいただける場合はこの限りではありません。

お名前：

お電話番号：

E-mail：

以上でアンケートは終わりです。ご協力いただきありがとうございました。

記入後のアンケート用紙は、同封の返信用封筒（切手不要）に入れ、

9月30日（金）まで にご投函ください。

団地建替えによるまちの変化とこれからの暮らしに関するアンケート

I. まず、あなた自身のことについてお伺いします。

問1 あなたの性別を教えてください。

1. 女 2. 男

問2 あなたの年齢について、当てはまるものひとつに○をつけてください。

1. 29歳以下 2. 30～39歳 3. 40～49歳 4. 50～54歳
5. 55～59歳 6. 60～64歳 7. 65～69歳 8. 70～74歳
9. 75～79歳 10. 80～84歳 11. 85歳以上

問3 あなたの職業について、当てはまるものひとつに○をつけてください。

1. 会社員・公務員 2. 自営業 3. パート・アルバイト
4. 働いていない 5. その他（具体的に： ）

問4 現在お住まいの住棟、居住階についてお答えください。

() 街区 () 号棟 () 階

問5 現在お住まいの間取りについて、当てはまるものひとつに○をつけてください。

1. 1DK 2. 1LDK 3. 2DK 4. 2LDK
5. 3DK 6. 3LDK 7. 4LDK

問6 現在同居しているご家族はあなたを含めて何人ですか。当てはまるものひとつに○をつけてください。

1. 1名（単身） 2. 2名 3. 3名 4. 4名
5. 5名 6. 6名 7. 7名以上

→ 問6で、「1名（単身）」を回答した人は 問8 にお進みください。

→ 問6で、「2～7」を回答した人は 問7 にお進みください。

問7 同居者について教えてください。ご自身をのぞき、該当する番号すべてに○を付け、() の中に人数をご記入ください。

1. 未就学児童 () 人 2. 幼稚園児 () 人 3. 保育園児 () 人
4. 小学生 () 人 5. 中学生 () 人 6. 高校生 () 人
7. 19～29歳 () 人 8. 30～39歳 () 人 9. 40～49歳 () 人
10. 50～54歳 () 人 11. 55～59歳 () 人 12. 60～64歳 () 人
13. 65～69歳 () 人 14. 70～74歳 () 人 15. 75～80歳 () 人
16. 80～84歳 () 人 17. 85歳以上 () 人

II. つぎに、現在のお住まいについてお聞きします。

問8 現在お住まいの住宅と、団地全体の建て替えとの関係について、次のうち当てはまるものひとつに○をつけてください。

1. 建て替えが始まる前から、現在の住宅に住んでいる。
2. 建て替えが始まったため団地内で移転し、現在は仮住まい中である。
：2. に○をつけた場合、移転する前のお住まいの場所はどちらでしたか。
→ 浜見平団地 () 街区 () 号棟 () 階

問 9 団地の建て替えが始まる前のことについてお聞きします。お住まいのご家族はご自身を含めて何人でしたか。当てはまるものひとつに○をつけてください。

1. 1名 2. 2名 3. 3名 4. 4名
5. 5名 6. 6名 7. 7名以上
8. その他（具体的に： ）

問 10 団地の建て替えが始まる前と比べて家族数に変化がある場合、その理由は何ですか。当てはまるものすべてに○をつけてください。

1. 結婚のため 2. 子供誕生のため 3. 親族呼び寄せのため
4. 離婚のため 5. 世帯独立のため 6. 死別のため
7. 施設入居のため
：「7. 施設入居のため」に○をつけた場合、その理由 ⇒ ア. 自立での生活が難しくなったため
イ. 良い老人施設が見つかったため
ウ. ケアマネージャー等のアドバイスで
エ. 病院に入院することになったため
8. 増減はない
9. その他（具体的に： ）

問 11 団地の建て替えが始まる前の入居時期について、当てはまるものひとつに○をつけてください。

1. 1964(s39)～1974(s49)年 2. 1975(s50)～1984(s59)年 3. 1985(s60)～1994(H6)年
4. 1995(H7)～2004(H16)年 5. 2005(H17)年～2010(H22)年 6. 2011年(H23)～現在

問 12 団地の建て替えが始まる前の身近な生活環境における公共サービスへの満足度について、表に示すア～ケの各項目についてそれぞれ1～5の中で当てはまるものをひとつ選び○をつけてください。

	1. 満足	2. やや満足	3. 普通	4. やや不満	5. 不満
ア. 生活の安全性	1	2	3	4	5
イ. 交通安全対策	1	2	3	4	5
ウ. 保健・医療サービス	1	2	3	4	5
エ. 福祉サービス	1	2	3	4	5
オ. ゴミ・環境	1	2	3	4	5
カ. 買い物の便利さ	1	2	3	4	5
キ. 公共交通の便利さ	1	2	3	4	5
ク. 公園・緑地・広場	1	2	3	4	5
ケ. 学習・趣味・スポーツ	1	2	3	4	5

問 13 団地の建て替えが始まる前の暮らしの総合的な満足度について、表に示すア～エの各項目についてそれぞれ1～5の中で当てはまるものをひとつ選び○をつけてください。

	1. 満足	2. やや満足	3. 普通	4. やや不満	5. 不満
ア. 住環境全般	1	2	3	4	5
イ. 日常生活（買い物、交通などの利便性）	1	2	3	4	5
ウ. 社会的交流（付き合い、趣味などの活動）	1	2	3	4	5
エ. 住まい（住宅の性能）	1	2	3	4	5

Ⅲ. 建て替え後の施設活用についてお聞きます。

問 14 以下に示す、団地内および団地周辺施設をどのくらいの頻度で利用したことがありますか。表に示すア～スの各項目（場所）についてそれぞれ 1～6 の中で最も近いものをひとつ選び○をつけてください。

	1. ほとんど毎日	2. 2～3 日に 1 回程度	3. 週に 1 回程度	4. 月に 1～2 回程度	5. 月に 1 回より少ない	6. 利用したことがない
ア. まちづくりスポット茅ヶ崎	1	2	3	4	5	6
イ. ハマミーナまなびプラザ	1	2	3	4	5	6
ウ. ハマミーナ図書室	1	2	3	4	5	6
エ. ハマミーナ出張所	1	2	3	4	5	6
オ. 福祉相談室すみれ（ハマミーナ内）	1	2	3	4	5	6
カ. 地域包括支援センターすみれ（ハマミーナ内）	1	2	3	4	5	6
キ. ハマミーナ内の店舗（喫茶店やコンビニ等）	1	2	3	4	5	6
ク. 建て替え前団地の集会所	1	2	3	4	5	6
ケ. 建て替え後団地の新集会室	1	2	3	4	5	6
コ. 建て替え後団地内の中庭	1	2	3	4	5	6
サ. オハナ茅ヶ崎ガーデンアのエントランスホール	1	2	3	4	5	6
シ. 松尾川緑道	1	2	3	4	5	6
ス. しろやま公園	1	2	3	4	5	6

問 15 利用している・していないを問わず、団地内および団地周辺施設はどんな場所として利用してみたいと思いますか。表に示すア～スの各項目（場所）についてそれぞれ 1～9 の中で当てはまるものをすべて選び○をつけてください。

	1. ゆっくり話せる場所として使ってみたい	2. 待ち合わせ場所として使ってみたい	3. 一緒に出かけてみたい	4. 買い物ついでに寄ってみたい	5. 1人で使ってみたい	6. 多人数で使ってみたい	7. 子供、孫を遊ばせてみたい	8. 親族と使ってみたい	9. 利用してみたいとは思わない
ア. まちづくりスポット茅ヶ崎	1	2	3	4	5	6	7	8	9
イ. ハマミーナまなびプラザ	1	2	3	4	5	6	7	8	9
ウ. ハマミーナ図書室	1	2	3	4	5	6	7	8	9
エ. ハマミーナ出張所	1	2	3	4	5	6	7	8	9
オ. 福祉相談室すみれ（ハマミーナ内）	1	2	3	4	5	6	7	8	9
カ. 地域包括支援センターすみれ（ハマミーナ内）	1	2	3	4	5	6	7	8	9
キ. ハマミーナ内の店舗（喫茶店やコンビニ等）	1	2	3	4	5	6	7	8	9
ク. 建て替え前団地の集会所	1	2	3	4	5	6	7	8	9
ケ. 建て替え後団地の新集会室	1	2	3	4	5	6	7	8	9
コ. 建て替え後団地内の中庭	1	2	3	4	5	6	7	8	9
サ. オハナ茅ヶ崎ガーデンアのエントランスホール	1	2	3	4	5	6	7	8	9
シ. 松尾川緑道	1	2	3	4	5	6	7	8	9
ス. しろやま公園	1	2	3	4	5	6	7	8	9

問 16 建て替え後、集会室やその周辺花壇スペースを使って行われている活動の中で、参加している、または参加してみたいものはありますか。当てはまるものすべてに○をつけてください。

- | | |
|---------------------|-------------------------|
| 1. コミュニティカフェ（サンカフェ） | 2. コミュニティガーデン（花壇や菜園づくり） |
| 3. 麻雀教室 | 4. カラオケ教室 |
| 5. 手芸教室 | 6. 囲碁教室 |
| 7. 参加してみたいとは思わない | |

問 17 今後、浜見平団地自治会の活動の中で特に力を入れてほしい活動を教えてください。1～15の中で当てはまるもの3つまで○をつけてください。

- | | | |
|------------------------|---------------|------------------|
| 1. 防災資材の自主管理 | 2. 防災訓練 | 3. 防災ボランティアの登録 |
| 4. 家賃対策運動 | 5. 高齢者のいこいの部屋 | 6. 悩みごと相談ダイヤル |
| 7. 放置自転車の整理や処分 | 8. 環境美化・ゴミ取締り | 9. 団地内の図書室 |
| 10. 団地内の花壇づくり | 11. 体育振興の活動 | 12. 広報活動（自治会だより） |
| 13. イベント活動（桜まつりや納涼祭など） | 14. 防犯パトロール | |
| 15. その他（具体的に： | | ） |

問 18 建て替え後の、身近な生活環境における公共サービスへの満足度について、表に示すア～ケの各項目についてそれぞれ1～5の中で最も近いものをひとつ選び○をつけてください。

	1. 満足	2. やや満足	3. 普通	4. やや不満	5. 不満
ア. 生活の安全性	1	2	3	4	5
イ. 交通安全対策	1	2	3	4	5
ウ. 保健・医療サービス	1	2	3	4	5
エ. 福祉サービス	1	2	3	4	5
オ. ゴミ・環境	1	2	3	4	5
カ. 買い物の便利さ	1	2	3	4	5
キ. 公共交通の便利さ	1	2	3	4	5
ク. 公園・緑地・広場	1	2	3	4	5
ケ. 学習・趣味・スポーツ	1	2	3	4	5

問 19 建て替え後の、団地内での暮らしの総合的な満足度について、表に示すア～エの各項目についてそれぞれ1～5の中で最も近いものをひとつ選び○をつけてください。

	1. 満足	2. やや満足	3. 普通	4. やや不満	5. 不満
ア. 住環境全般	1	2	3	4	5
イ. 日常生活（買い物、交通などの利便性）	1	2	3	4	5
ウ. 社会的交流（付き合い、趣味などの活動）	1	2	3	4	5
エ. 住まい（住宅の性能）	1	2	3	4	5

問 20 建て替え後、浜見平団地および市南西部地域はどのような場所になりつつあると感じますか。1～8の中で当てはまるもの3つまで○をつけてください。

- みどりが豊かで散策のできる広場や遊歩道のある場所
- 若者たちが住める住宅地
- 災害時に地域の人達が避難できる防災施設の充実した場所
- 高齢者支援や子育て支援の施設が充実した場所
- 湘南らしい素敵なレストランやお店のある場所
- 芸術的色合いのある場所
- 市民講座やカルチャーセンターなどの学べる場所
- その他（具体的に：

）

Ⅳ. 現在、日常的に最もお付き合いのあるご親族との関係についてお聞きます。

問 21 日常的に最もお付き合いのあるご親族についてあなたからみた関係をお答えください。

(記入例)「ご自身の次女の家族」、「配偶者の甥(おい)」など

問 22 現在、日常的に最もお付き合いのあるご親族の居住地について当てはまるものひとつに○をつけ、1～4については()内もご記入ください。

- | | | |
|--------------------------------------|----------------|----------------|
| 1. 浜見平団地内 (() 街区 (() 棟 (() 階)) | | |
| 2. 南湖 (() 丁目 | 3. 柳島 (() 丁目 | 4. 松尾 (() 丁目 |
| 5. オハナ茅ヶ崎ガーデンア | 6. 茅ヶ崎市内 | 7. 平塚市内 |
| 8. 神奈川県内 | 9. 他県 | |
| 10. その他(具体的に: | |) |

問 23 日常的に最もお付き合いのあるご親族と行き来する場合の交通手段と所要時間はどのくらいですか。当てはまるものすべてに○をつけ、()内もご記入ください。

- | | | |
|---------------|----------------|--------------|
| 1. 徒歩 (() 分 | 2. 自転車 (() 分 | 3. 車 (() 分 |
| 4. 電車 (() 分 | 5. バス (() 分 | |
| 6. その他(具体的に: | |) |

問 24 日常的に最もお付き合いのあるご親族世帯の世帯構成員について、当てはまるものすべてに○を付けてください。()の中に人数をご記入ください。

- | | | |
|---------------------|---------------------|---------------------|
| 1. 未就学児童 (() 人 | 2. 幼稚園児 (() 人 | 3. 保育園児 (() 人 |
| 4. 小学生 (() 人 | 5. 中学生 (() 人 | 6. 高校生 (() 人 |
| 7. 19～29 歳 (() 人 | 8. 30～39 歳 (() 人 | 9. 40～49 歳 (() 人 |
| 10. 50～54 歳 (() 人 | 11. 55～59 歳 (() 人 | 12. 60～64 歳 (() 人 |
| 13. 65～69 歳 (() 人 | 14. 70～74 歳 (() 人 | 15. 75～80 歳 (() 人 |
| 16. 80～84 歳 (() 人 | 17. 85 歳以上 (() 人 | |

問 25 日常的に最もお付き合いのあるご親族とあなたの住まいの距離について教えてください。当てはまるものひとつに○をつけてください。

- | | | |
|-------------|------------|-----------------|
| 1. ちょうどいい近さ | 2. 近すぎると思う | 3. 近いけどさらに近くがいい |
| 4. 近くないと思う | | |

問 26 ご親族が近くに住んでいることで感じる「安心感」についてはどのような点があると思いますか。当てはまるものすべてに○をつけてください。

- | |
|----------------------|
| 1. あまり考えていない |
| 2. 日常生活で助かっている |
| 3. 将来的に助けになると思う |
| 4. 非常時に助けになると思う |
| 5. 身元保証人などの制度上助かっている |

問 27 ご親族が近くに住んでいることで感じる「負担感」についてはどのような点があるとおもいますか。当
てはまるものすべてに○をつけてください。

1. あまり考えていない
2. 親族への支援に体力的に負担感を感じている
3. 親族への支援に経済的に負担感を感じている
4. 親族の将来に不安を感じている
5. 気遣いなどに負担感を感じている

問 28 日常的に最もお付き合いのあるご親族との交流内容と交流頻度について教えてください。表に示すア～
サの各項目についてそれぞれ 1～6 の中で最も近いものをひとつ選び○をつけてください。

	1. ほとん ど毎日	2. 2～3 日 に 1 回程度	3. 週に 1 回程度	4. 月に 1 ～ 2 回程 度	5. 月に 1 回よりは 少ない	6. 全くな い
ア. あなたから訪問する	1	2	3	4	5	6
イ. 親族から訪問する	1	2	3	4	5	6
エ. 子・孫育ての援助をする	1	2	3	4	5	6
オ. 子・孫育ての援助をされる	1	2	3	4	5	6
カ. 家事の援助をする	1	2	3	4	5	6
キ. 家事の援助をされる	1	2	3	4	5	6
ク. 介護・介助をする	1	2	3	4	5	6
ケ. 介護・介助をされる	1	2	3	4	5	6
コ. あなたが親族宅の留守番 をする	1	2	3	4	5	6
サ. 親族にあなたの家の留守 番をしてもらう	1	2	3	4	5	6

問 29 日常的に最もお付き合いのあるご親族と一緒に外出する目的と頻度を教えてください。表に示すア～ク
の各項目についてそれぞれ 1～6 の中で最も近いものをひとつ選び○をつけてください。

	1. ほとん ど毎日	2. 2～3 日 に 1 回程度	3. 週に 1 回程度	4. 月に 1 ～ 2 回程 度	5. 月に 1 回よりは 少ない	6. 全くな い
ア. 一緒に買い物に行く	1	2	3	4	5	6
イ. 一緒に仕事に行く	1	2	3	4	5	6
ウ. 一緒に通院する	1	2	3	4	5	6
エ. 一緒に外食に出かける	1	2	3	4	5	6
オ. 一緒に散歩する	1	2	3	4	5	6
カ. 一緒に趣味・余暇活動に出 かける	1	2	3	4	5	6
キ. 一緒に友人等を訪問に行く	1	2	3	4	5	6
ク. 一緒にボランティア、地域 活動に参加する	1	2	3	4	5	6

問 30 ご親族同士での、家財や住居空間の共有（持ち合いや場所の貸し借り）についてお聞きます。当てはまるものすべてに○をつけてください。

1. 自分の家の合鍵を親族に預けている
2. 親族の家の合鍵を自分が預かっている
3. 自分の車の合鍵を親族に預けている
4. 親族の車の合鍵を自分が預かっている
5. 自宅の家財（季節物など）を親族宅に預けている
6. 親族宅の家財（季節物など）を自宅に預かっている
7. 自宅の備蓄食料は親族の分も含んでいる
8. 親族宅の備蓄食料は自分の家族の分も含まれている
9. その他（具体的に： _____）

V. これからのことについてお聞きます。

問 31 将来、あなたやあなたのご家族・ご親族が、高齢になり介護や介助が必要になった場合、在宅生活を続ける上でどのような支援が必要であると思いますか。表に示すア～ソの各項目についてそれぞれ1～5の中で最も近いものをひとつ選び○を付けてください。

	1. とても必要だと思う	2. まあ必要だと思う	3. どちらでもよい	4. あまり必要ない	5. 全く必要ない
ア. 悩みごとなどの電話相談サービス	1	2	3	4	5
イ. 安否確認などの声かけ	1	2	3	4	5
ウ. 掃除・洗濯などの家事の手助け	1	2	3	4	5
エ. 配食など食事サービス	1	2	3	4	5
オ. 通院送迎や外出手助け	1	2	3	4	5
カ. 訪問介護	1	2	3	4	5
キ. 訪問入浴サービス	1	2	3	4	5
ク. 訪問診療・看護	1	2	3	4	5
ケ. 訪問リハビリ	1	2	3	4	5
コ. 夜間の訪問サービス	1	2	3	4	5
サ. ショートステイ等の宿泊サービス	1	2	3	4	5
シ. 通所介護	1	2	3	4	5
ス. 通所リハビリ	1	2	3	4	5
セ. 福祉用具の貸与	1	2	3	4	5
ソ. 住宅改修（UR賃貸の場合、「模様替え基準」内での改修が可能です）	1	2	3	4	5

問 32 現在、あなたやあなたのご家族、または近くにお住まいのご親族のなかで、要支援または要介護の方がいらっしゃいますか。当てはまるものすべてに○を付けてください。

1. 要支援の人がいる
2. 要介護の人がいる
3. 要支援・要介護の人はいない

問 33 今後の暮らしとお住まいについて、現時点でのお考えについてお聞かせください。当てはまるものすべてに○をつけてください。

- | | |
|---------------------------------|------------------------|
| 1. 今の住まいに住み続けたい | 2. 近くに親族を呼び寄せたい |
| 3. 親族の近くに住み移りたい | 4. 親族を呼んで同居したい |
| 5. 親族のところで同居したい | 6. 元気なうちに高齢者住宅、施設に移りたい |
| 7. 介護が必要になったら施設などに移りたい | |
| 8. リフォーム（UR賃貸「模様替え基準」の範囲内で）したい。 | |
| 9. まだ考えていない。 | |
| 10. その他（具体的に： | ） |

問 34 浜見平団地自治会では、これまで取り組んできた活動に加えて、地域にお住まいの方々にもご参加いただけるさまざまな住民交流事業（たとえば周辺の農園での収穫イベント、子ども向けまち探検イベントなど）をNPO 法人（特定非営利活動法人）を設立し取り組んでいく予定です。このことについて、あなたのお考えに近いものをすべて選び○をつけてください。

- | | |
|------------------------------|---|
| 1. 内容によっては自分が参加してみたい | |
| 2. 内容によっては家族や友人といっしょに参加してみたい | |
| 3. 内容によっては企画から参加して取り組んでみたい | |
| 4. 関心はあるが参加しないと思う | |
| 5. とくに関心はない | |
| 6. その他（具体的に： | ） |

問 35 浜見平団地や団地周辺地域、あるいは茅ヶ崎市南西部地域が今後どのようなまち・地域になってほしいと思いますか。あなたのお考えをご自由にお書きください。

（記入例）「医療施設がもっと充実してほしい」「おしゃれなお店がたくさん増えてほしい」など

■ヒアリング調査協力をお願い

- ・本アンケートでお聞きした内容を具体的にお伺いしたいと考えております。
- ・実施時期は10月以降を予定しております。所要時間は30分～最大60分を予定しております。
- ・日程・時間調整の上で、ご協力いただける方は以下の欄にご記入下さい。
- ・実施場所はお自宅への直接訪問の予定ですが、第一・第三土曜日開催のコミュニティカフェ（コンフォール集会室）にお越しいただける場合はこの限りではありません。

お名前：

お電話番号：

E-mail：

以上でアンケートは終わりです。ご協力いただきありがとうございました。

記入後のアンケート用紙は、同封の返信用封筒（切手不要）に入れ、

9月30日（金）まで にご投函ください。

左近山団地 分譲棟（3,4,5 街区）アンケート 報告書

1. 回答者の属性

1-1. 回答者の性別と年齢と職種

回答者のうち、「男性」が 68.2%、「女性」が 29.8%であった。(図 1-1)回答者の年齢は、35.7%が 65 歳未満、62.8%が 65 歳以上であった。(図 1-2)回答者の職業については、52.8%が「無職」と答えた。「会社員・公務員」が 23.1%と次に多い。2.1%である「その他」の自由記述には契約社員、派遣、職人、主婦、会社役員、書記契約、建築業、マネキン、ガス工事、介護福祉士、年金暮らし、シフトで働いている等があった。(図 1-3)

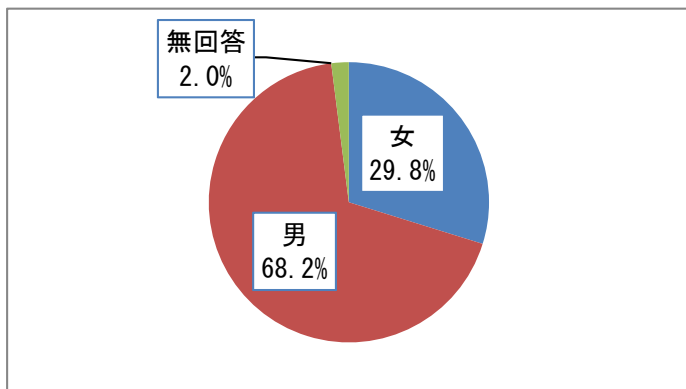


図 1-1. 性別

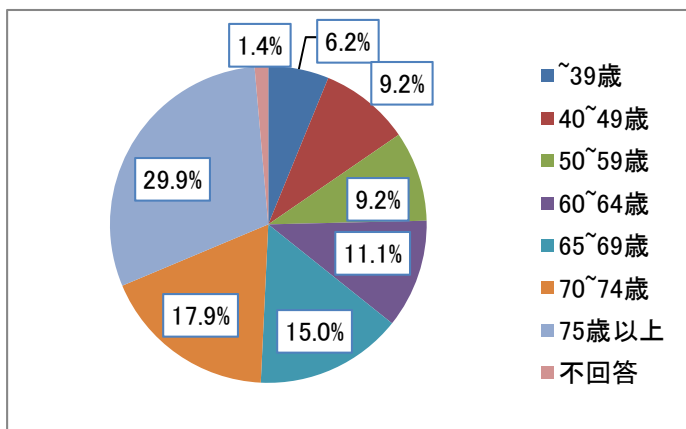


図 1-2. 年齢

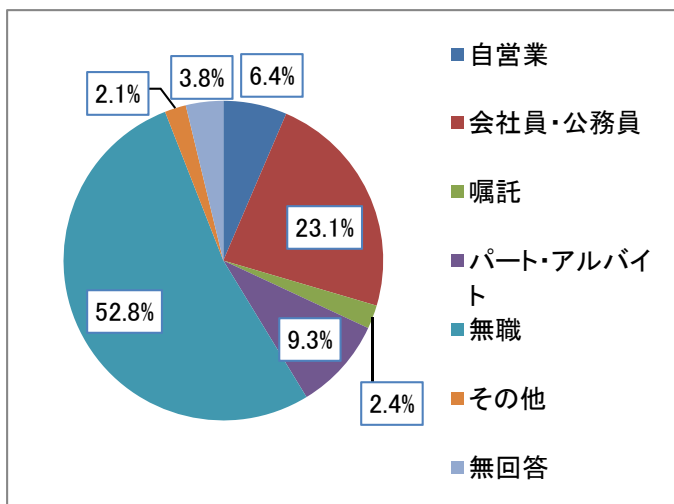


図 1-3. 職種

1-2. 回答者の住処

回答者の住まいの場所は3街区 13~33 号棟に最も高く、41.8%であった。次に3街区 1~12 号棟 24.4%、5街区 19.2%、4街区 14.7%の順であった。(図 1-4)住まいの階数は各階比較的に均等であった。その中で1階が 21.0%と最も高く、5階が 18.5%と最も低い。(図 1-5)

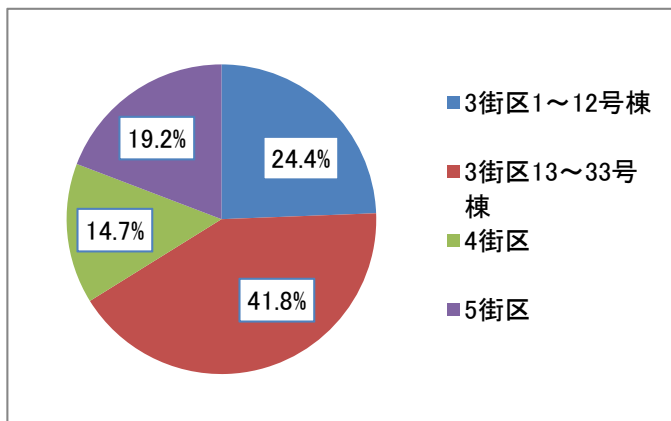


図 1-4. 居住街区

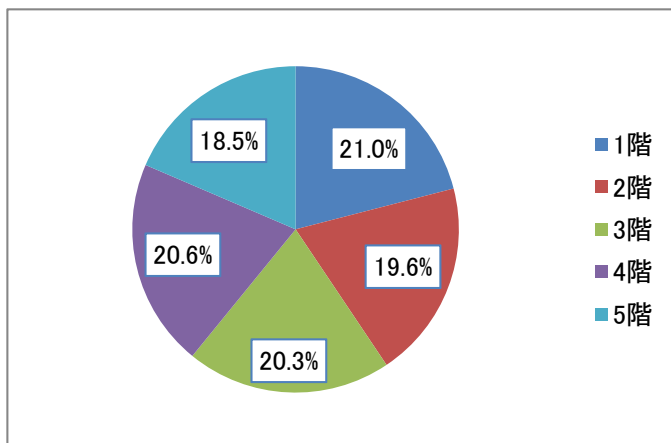


図 1-5. 階数

1-3. 回答者の住環境

居住家族数は「2 人」が 42.2%と最も高く、次に「単身」25.6%、「3 人」17.7%、「4 人」8.7%、「5 人以上」1.9%の順であった。(図 1-6)世帯構成でみると「夫婦」が 32.6%と最も高い。「単身」、「夫婦と子供」が各 1/4 ずつ占めているに対して、「親と夫婦と子供」、「親と夫婦」は 0.4%ずつであって、多世代住宅が非常に少ないと見える。(図 1-7)家族に高齢者(65 歳以上)がいると答えた割合は全体の約半分であることから、高齢者の一人暮らし、高齢者夫婦の数が多いと思われる。(図 1-8)家族に通学中(通園中)の子供の有無に関する質問には、その他を除いて「小学生」が 42 人と最も高く、「中学生」、「高校生」の約 2 倍くらいであったが、小学校の課程が 6 年と中高校の 2 倍であることを考えれば特に割合が高いわけでもない。

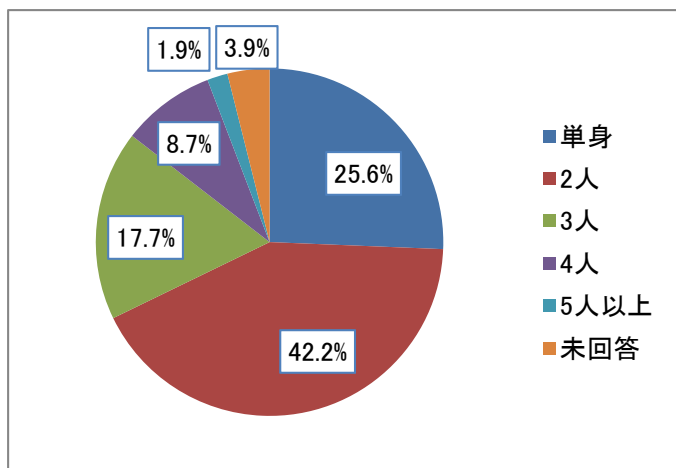


図 1-6. 居住家族数

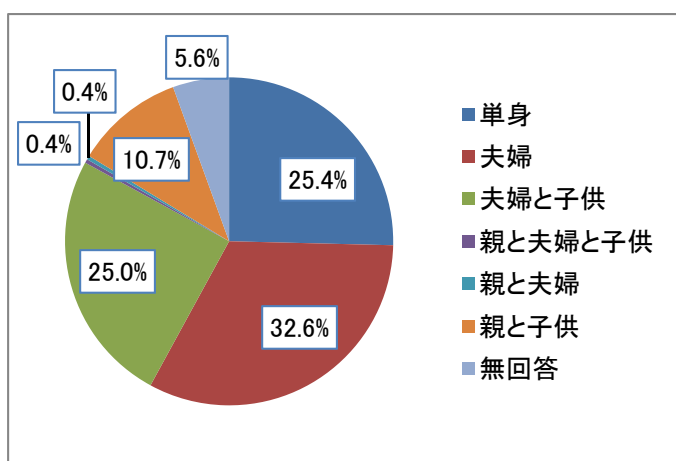


図 1-7. 世帯構成

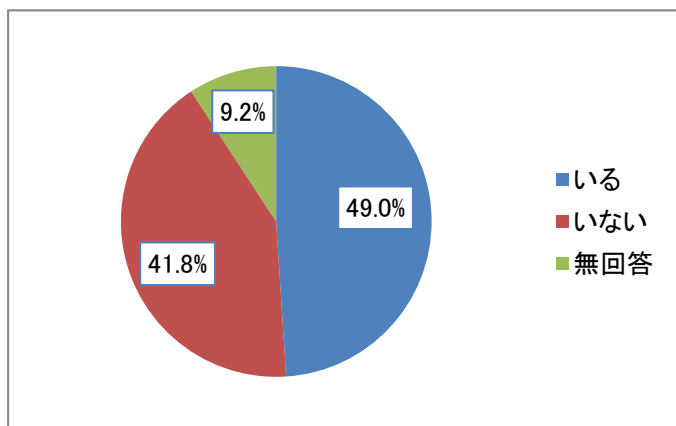


図 1-8. 家族に高齢者 (65 歳以上) の有無

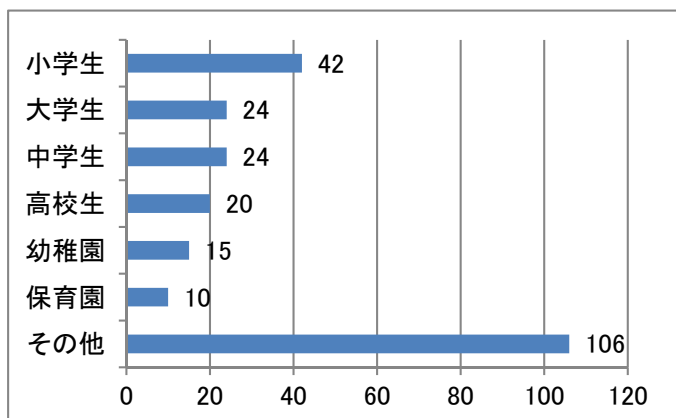


図 1-9. 家族に通学中 (通園中) の子供の有無

1-4. 回答者の住居形態

住宅所有関係をみると、「所有者」が 81.2%と最も高く、「占有者」は 7.2%であった。「その他」は 1.9%で、親所有、親族所有、家族所有、社宅等があった。(図 1-10) 居住年数は、「40 年超」が 23.9%、「31~40 年」20.6%と長く居住した人の方が多い傾向ではあるが、全体的に割合にばらつきがある。「5 年以上」も 12.6%であり、最近引っ越してきた人数も相当あると思われる。(図 1-11) 回答者の前の居住地は、「横浜市内」が 32.8%と最も高く、次に「旭区」17.8%、「都心」14.8%、「神奈川県内」14.1%、「左近山内」10.9%、「その他」7.6%順であった。(図 1-12) 以前の居住形態は、「分譲」が 19.9%、「賃貸」が 52.6%、「社宅、寮、寄宿舍等」が 10.6%であった。(図 1-13)

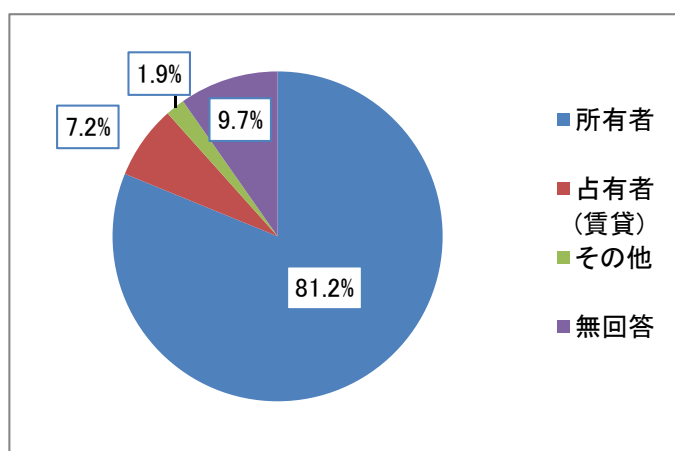


図 1-10. 回答者の所有関係

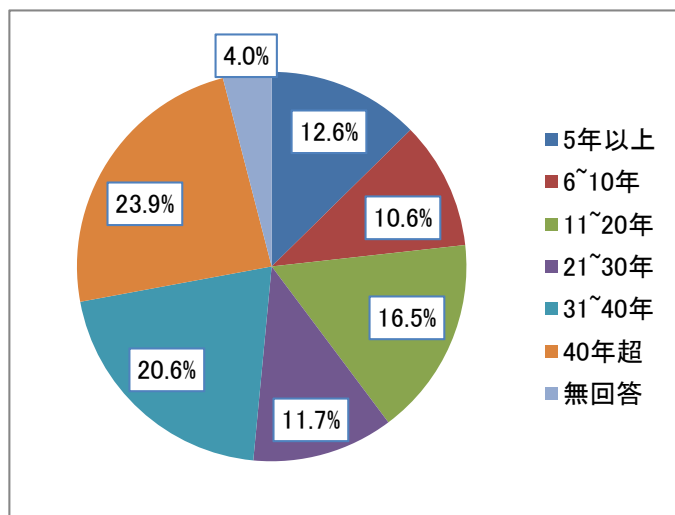


図 1-11. 回答者の居住年数

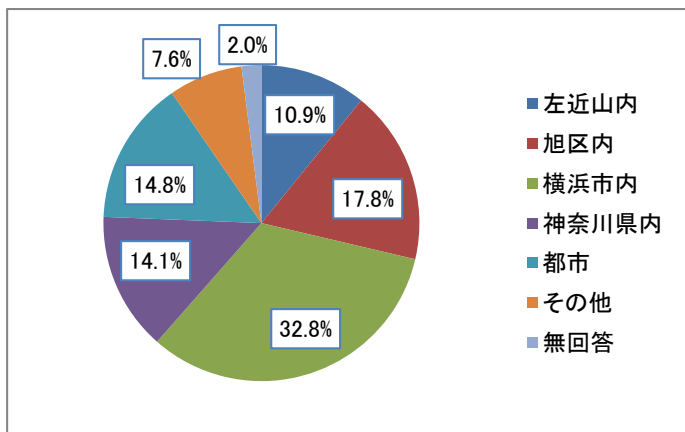


図 1-12.回答者の前の居住地

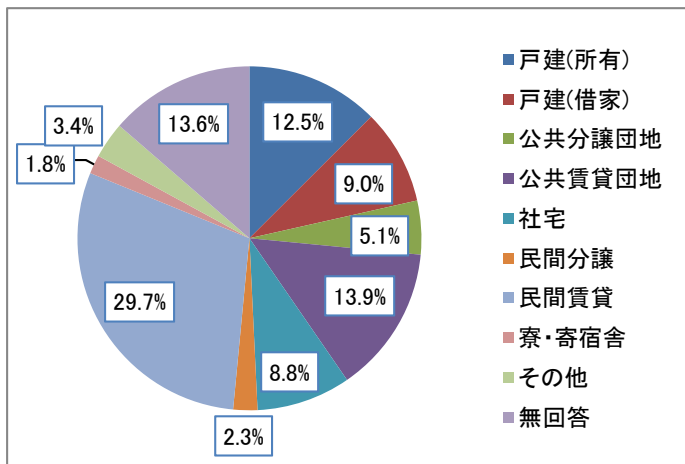


図 1-13.回答者の前の居住形態

2. 管理組合活動に対する評価

「緑化環境のレベルが高い」、「長期修繕が計画的に実現している」、「組合役員がよく働いている」「情報が的確に届いている」は満足寄り(満足、やや満足)が 6 割を超えている。不満寄り(不満、やや不満)が高い項目は「来客駐車場の設置数」、「バリアフリー」で 2 割を超えている。(図 2)

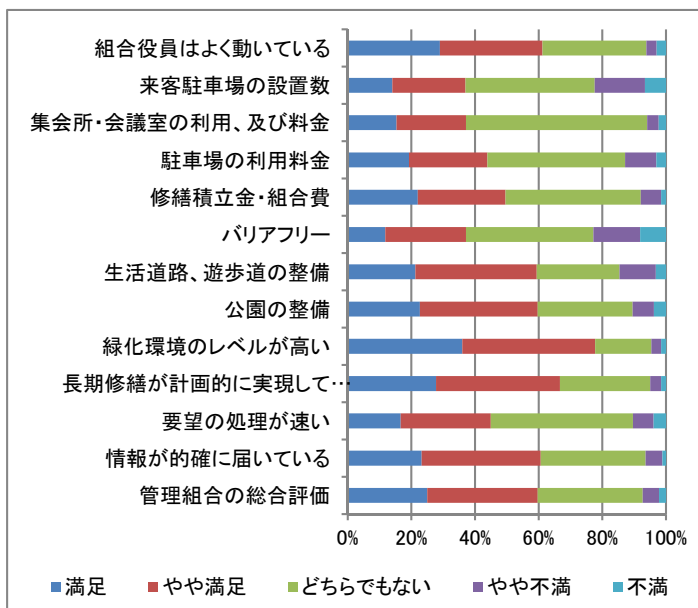


図 2.回答者の管理組合活動に対する評価

3. 現在の住まいを選んだ理由

住まいの理由を選んだ理由として最も多く答えられたのは「自然が豊か」であった。(図 3)「その他」としては、

公団分譲住宅の抽選に当たったから
 10年後には建て替えられると説明された
 たまたま親が所有、空いていた
 本人、又は妻の実家
 相続
 親族が住んでいたものだから
 親族、友人、知人からのすすめ、紹介
 介護のために仕方なく
 社宅、寮だから
 桜がある
 再開発
 交通が便利だから
 病院・銀行等が近い
 仕事の都合上便利
 転勤があっても通勤に便利だった
 一軒家購入前の仮住まい
 前住居が老朽化し転居を迫っていたため

、等であった。

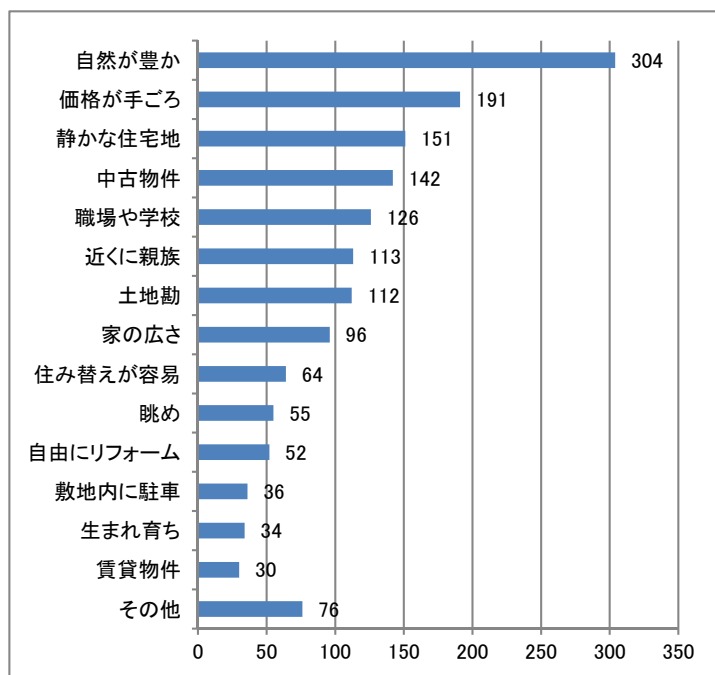


図 3.現在の住まいを選んだ理由

4. 周りの住環境の印象

実際住んでみてからの印象として最も多く答えられたのは「緑(公園)が多い」であった。その次に「買い物がしやすい」、「交通の便がいい」、「保育園・幼稚園・小中学校が近い」、「医療機関が近い」、「治安が良い」などが高く割合であった。(図 4)その他としては、

クリーニング室朝からうるさい

建物の間隔が広いから交通騒音が少ない

近所との関係が希薄

不法駐車が多い

日常の買い物がしやすい

車での移動には便利

、等があった。

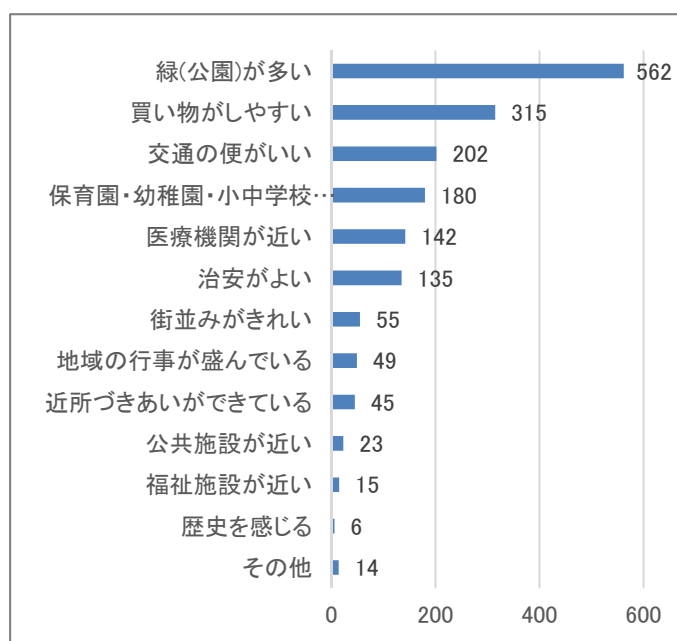


図 4. 実際に住んでみてからの周りの住環境の印象

5. 団地外の近隣や団地内に居住しているご親族

近居について、「近居なし」が 60.5%、「近居あり」が 30.3%であった。(図 5-1)近居の順番は「回答者が先」、「親族の方が先」がほぼ同じくらいであった。「回答者が先」と答えた人は親の呼び寄せや、子世帯の分家等が考えられ、「親族の方が先」は子の里帰り等が考えられる。「どちらともいえない」については地域内での住み替え等が考えられる。(図 5-2)近居先までの所要時間は「5 分」が最も多く、「5～10」、「20 以内」、「30 以内」、「40 以内」順であった。(図 5-3)

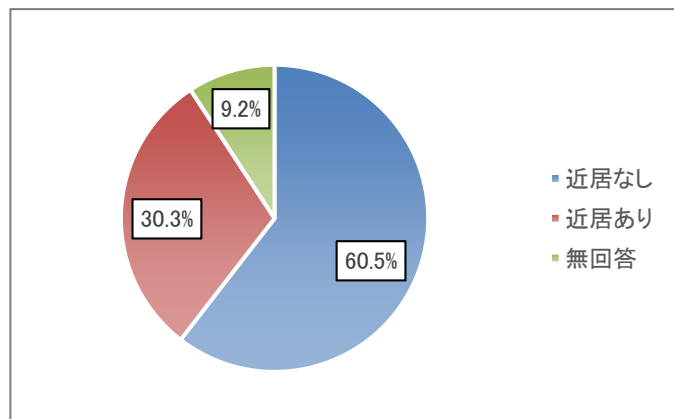


図 5.近居のありなし

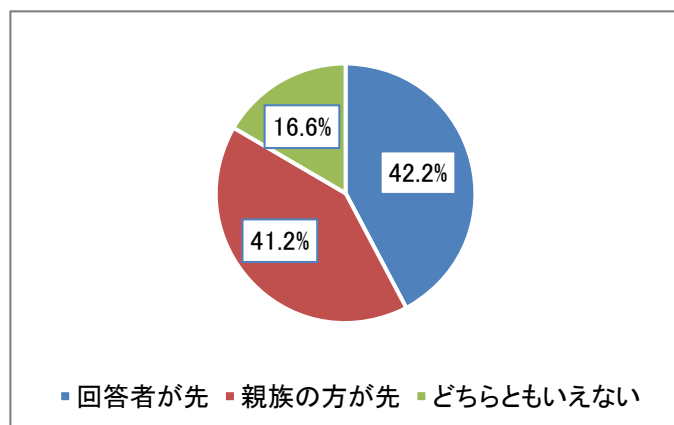


図 5-2.近居の順番

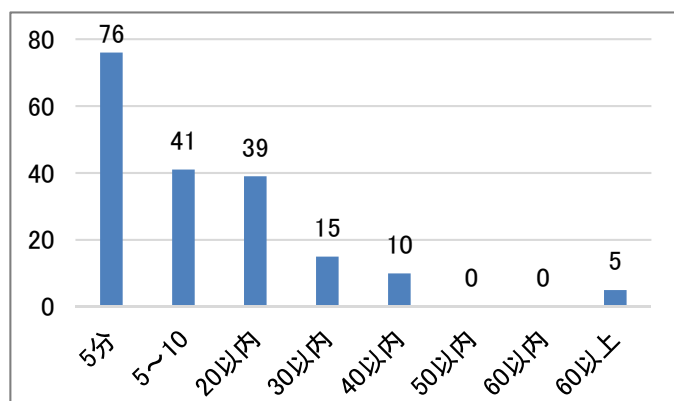


図 5-3.近居先までの所要時間(単位:分)

6. 外出傾向

外出頻度は「ほとんど毎日」45.8%、「週に 4～5 日」22.6%、「週に 2～3 日」16.2%の順であって、「ほとんど出ない」は 2.5%と非常に少ない。(図 6-1)外出目的は「買物」が最も高く、「通院」、「仕事」、「散歩」、「趣味・余暇活動」、「家族・友人など訪問」、「外食」、「ボランティア活動や地域活動」の順であった。(図 6-2)「その他」としては、

- 家族、子供の送迎
- 通院
- スポーツクラブ等
- デイサービス
- パート
- 銀行等
- 畑
- 雑事

、等があった。外出しない理由としては、
高齢、身体障害のため一人で動けない
別にこれということはない
、等があった。外出手段としては、「バス、電車」63.5%が最も高く、次に「徒歩」54.5%、「自家用車を運転」30.9%が高い割合を占めている。(図 6-3)

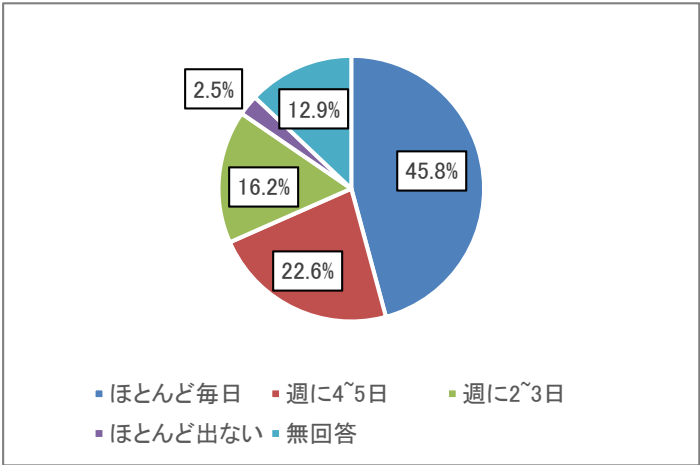


図 6-1.外出頻度

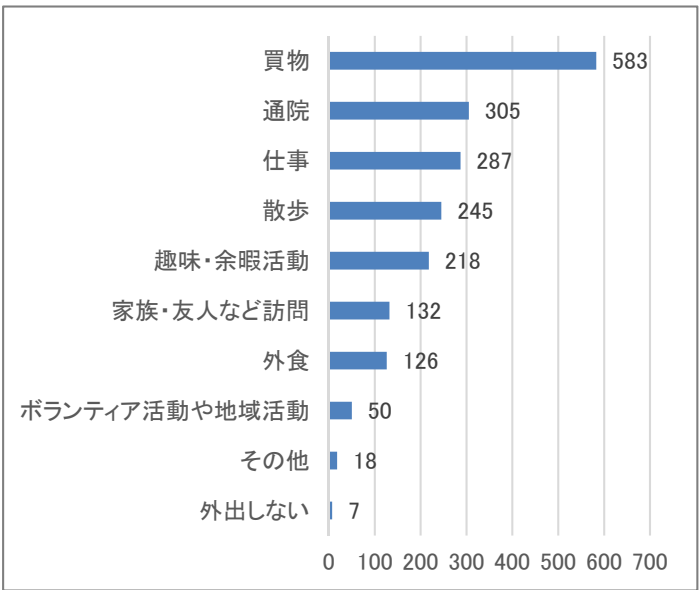


図 6-2. 外出目的

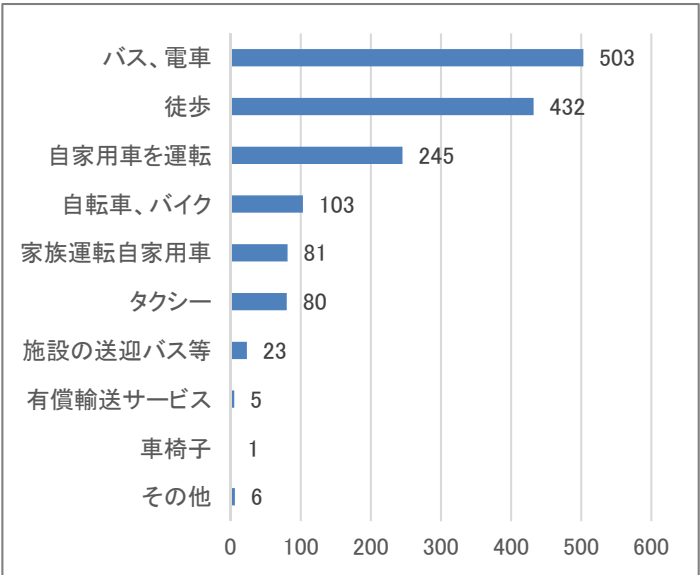


図 6-3. 外出手段

団地内でよく利用している施設や場所としては、
大人の場合、

- S.C
- 診療機関
- 病院
- 商店街
- ショッピングセンター
- ショッピングプラザ
- スーパー
- 量販店
- コンビニ
- 八百屋
- 散髪屋
- 野口書店
- コミュニティセンター
- ケアセンター
- コミュニティーハウス
- ケアプラザ
- 周期所
- 基会所
- 地区センター
- 地域センター
- 集会所
- 管理棟
- 団地集会所
- 市沢地区センター
- 第一集会所
- 第二集会所
- 第三集会所
- 団地内集会所
- スポーツセンター
- 小高第 3 集会所
- 第二小
- 集会所の講堂
- プール
- オープンカフェ
- 駐車場
- 公園緑地
- 左近山小学校校庭
- 郵便局
- プレイグラウンド
- 公園全般
- 小学校校庭
- 銀行
- 左近山中学校体育館及び格技場
- 銀行

子供の場合、

- ぐるぐる公園
- プール公園
- ジャンボ公園
- 街区公園
- スイミング(ホウトク)
- 書店

夏期は団地内プール	ちびっこプール
旭スポーツセンター	プレグラ
中央グランド	地区センター
第3集会所前広場	第3集会所
左近山保育園	左近山耳鼻科

、等であった。

7. 将来の住まい

「ずっと住みたい」が 35.1%で最も多く、「どちらかといえは住みたい」が 33.3%と次に多い。「どちらかといえは住みたくない」又は「住みたくない」は 8.1%と非常に少ない。(図 7-1) 困ったときの相談先としては「知人・友人」46.2%、「親族」41.4%が高い割合を占めている。機関や行政、団体以外では「近所の人」11.2%、「職場の人」5.5%もあった。(図 7-2) 将来の過ごし方としてはそうしたい、どちらかといえはそうしたいと答えた人が 6 割を超えた項目は「同年代の仲間と交流する」、「地域の人と交流する」、「介護が必要になっても現在の住まいに住み続けたい」、「若い人たちと交流する」、「家族と同居、または近居する」、「できるだけ働き続ける」があった。(図 7-3) 子育て世帯のために必要なものとしては、「子供の育児をサポートするしぐみの充実」が 44.4%と最も高く、「多世代が暮らせる多様な住宅タイプ」34.0%、「多世代が交流できる場所やイベントの充実」27.6%が次に高い。(図 7-4)

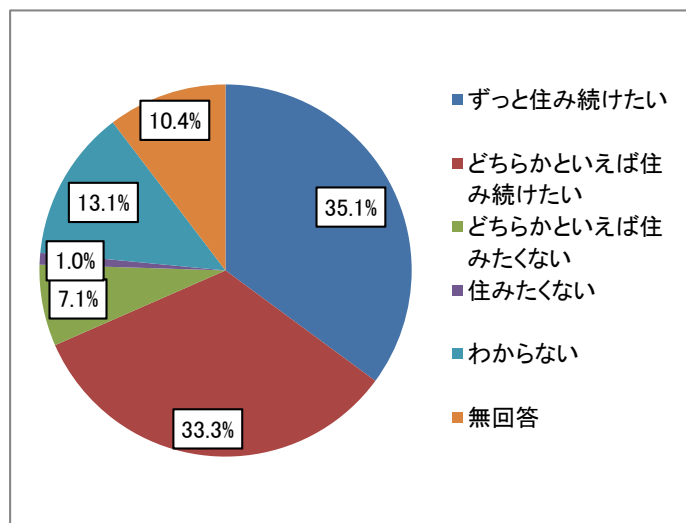


図 7-1. これからも住み続ける意向

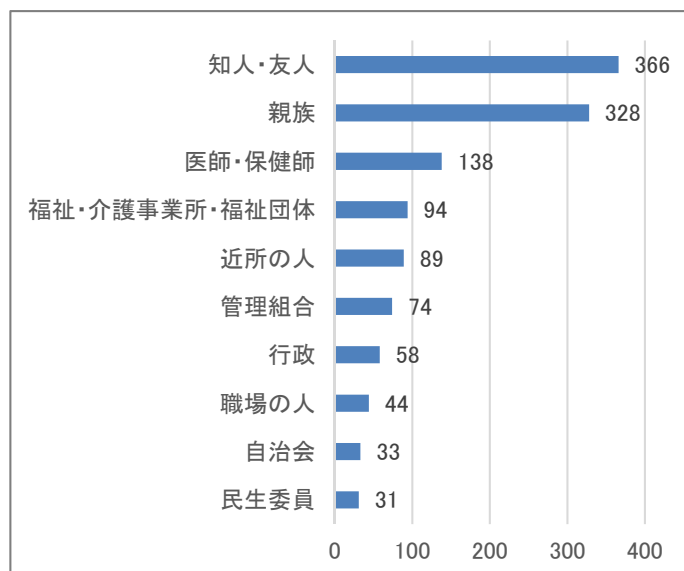


図 7-2. 困った時の家族以外の相談先

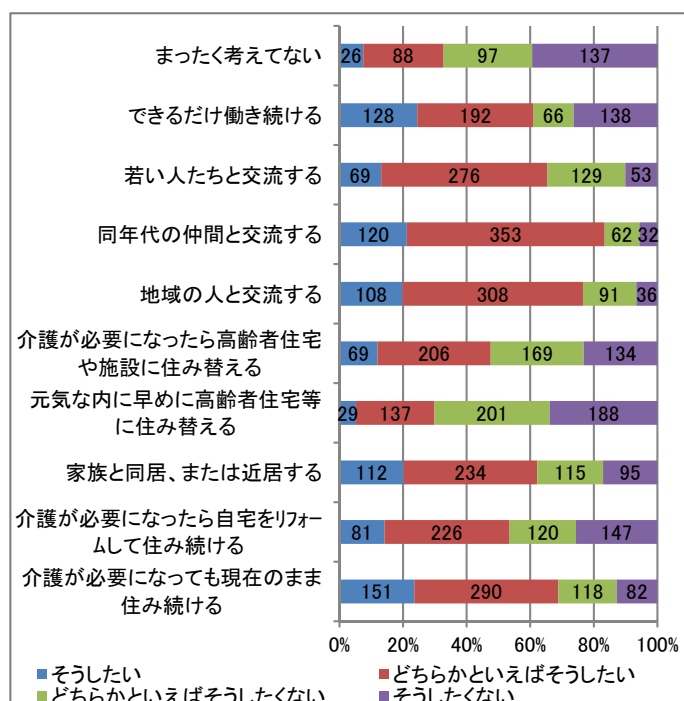


図 7-3. 将来の過ごし方

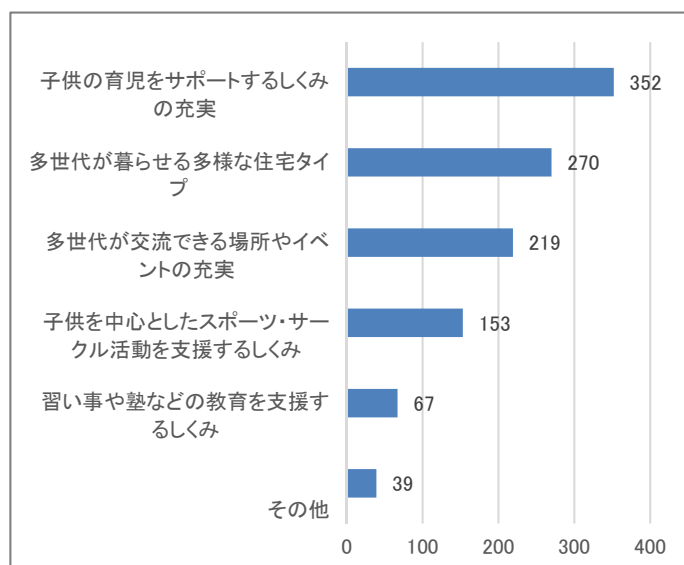


図 7-4. 子育て世帯が住むために必要なもの

表 1. 図 7-4 の「その他」記述

お年寄りが昔遊んだ物。ベイゴマ、メンコ、竹トンボ、杉デッポー、笹船など、ゲームだけの遊びでなく、物を作る、考える、人との会話、教養心
この地域はとても住みやすくすきですが、古さもあり引っ越してしまう友達も少なくありませんし、自分の越したい気持ちがあります。でも戸建てを探すと、みんな離れていくことをせんとくをしてしまう。戸建てが近くに建てほしい
コミュニティカフェなど1人でも気軽に立ち寄れる場所を希望。知人がいなくても立ち寄れる場所。行ってよかったと思える場所
もっと道を明るくすべき
やはりここは駐車場が必要です。少なすぎます。
建て替え：高層と広い間取り(最近のマンション相当)子供がいても階下への騒音(足音等)を気のする必要がない
公園の遊具が古くてさびていたりするので、ペンキを塗り直したり、新しい遊具を設置して今よりも明るい雰囲気のある公園にしたいと思う。公園にあるベンチも新しいものに変えたらお年寄りの方たちの憩いの場にもなると思う。
交通の便の良さ、近くに大きな複合施設
近隣の世代ギャップに解消・・・理解協力の心
現状だと、どちらかといえば子供を持つ家庭は住みづらい環境だと思います。第一世代と呼ばれる方達の子供達への対応が冷たいと何度か感じたことがあります。
老若男女・憩いの場(きれいな明るい喫茶店が団地内(バス停近くに有ると？楽しいですネ！嬉しいですネ！
老人のマナーをもっとよくしてほしい
商店の繁栄
上下関係は気をつかいます。孫が遊びに来た時など気をつかいます
収入が得られる仕事場
安い駐車場の設置
子供がいないのでわかりません
子供がのびのびと遊ぶ場所の提供、公園、樹木、石垣等の安全性
自動車中心とした団地内作り(駐車場)
自由に遊べるスペース
子育て世代の人の常識感
電車の駅があったら
店舗
住宅の外観がモダンだったり、まちがおしゃれだったり。利便性がよい。(交通等)
駐車場の幅が狭く、大きな車が止めづらい、駐車場が近くにない場合が多く、路駐が多い、駐車場の整備
駐車場を増やし、車での行動力を支援するしくみ
集合住宅の建て替えがそろそろ計画されて欲しい。それには新緑計画(交通計画)と絡められたものとなっ

て欲しい。団地は有力な団体となれるはず。
治安のよい安心して暮らせる地域にすること
親のマナー、常識のレベルアップ、お互いの気がかかり
学校跡地に企業を誘致、他の地域での利用形態の調査、TV局より情報の収集

8. 現在のコミュニティ活動

参加した自治会活動については、「清掃活動」41.0%、「お祭り」39.6%、「自治会の総会」39.1%、「防災訓練」38.1%の参加率が高く、次に「文化祭」18.6%、「防犯パトロール」8.5%、「老人会活動」7.8%の順であった。(図 8-1) その他としては、

ボランティア	オープンカフェ
ごきぶり団子作り	サークル活動
バザー	委員会
自治会の役員の経験	もちつき
給食ボランティア	特老ボランティア
苗・球根の植え付け	大掃除(階段)
食事会・ボランティア・老人会活動	

等があった。参加した管理組合活動については、「階段委員活動」53.0%、「階段委員会に出席」48.6%、「総会に出席」37.8%が最も高い。(図 8-2) 地域交流活動の参加については、「不参加」が 52.0%と最も高い。「参加中」または「今後参加したい」という答えは 26.2%であった。(図 8-3) 主な活動場所としては「団地内集会所」が最もあげられ、次に「地区センター」、「スポーツセンター」、「ケアプラザ」、「コミュニティセンター」「地域の集会所」の順であった。(図 8-4) その他としては、

ゴルフ場	ボランティア活動
ローゼン前	団地外が多い
家で編物をしている	先生の家
仕事場	学校校庭
左近山中学校	市沢地区センター
第1プレイグラウンド	
フィットナスクラブ・絵画クラブ	
ソフトボールチームの為小学校のグラウンド	

等であった。

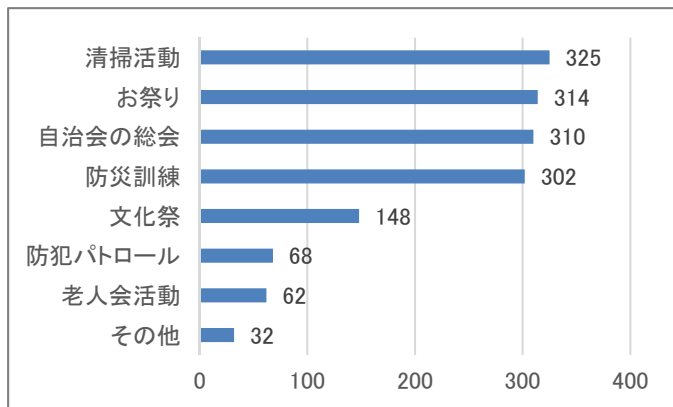


図 8-1.参加した自治会活動

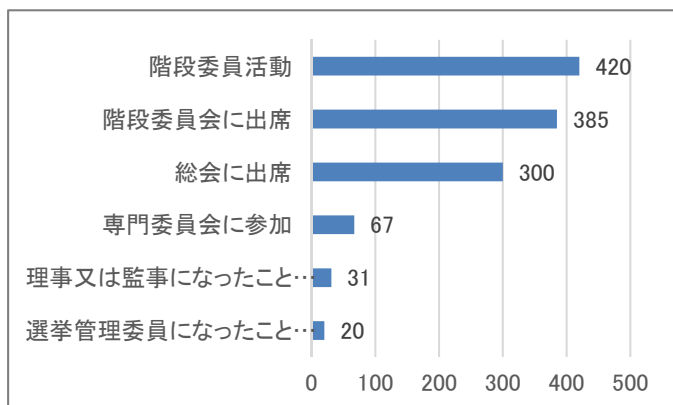


図 8-2.参加した管理組合活動

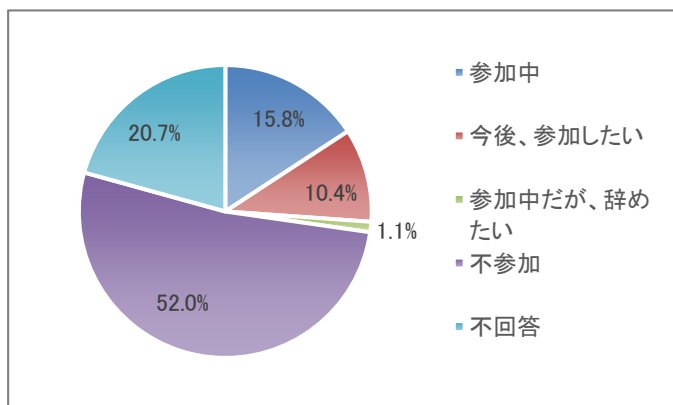


図 8-3. サークルや教室など地域交流活動への参加意向

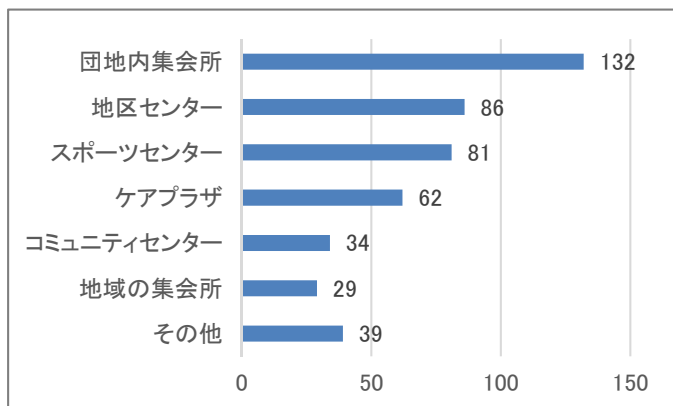


図 8-4.主な活動場所

9. 自由記入

ちびっこプールがあったり、読み聞かせがあったりと小さい子へのサポートはそれなりに充実しているし、高齢者が多いのでそれなりに充実しているが、学童世代にはきわめて住みにくいです。数年がまんすればよいことなのですが…。プールに入って遊んでいけなくなったのはなんでなのか…。全くもって納得いきません。当たり前のようにバスにすわるのも納得いきません。

ここに記入すべきではないかと思いますが、ヒーリングアニマルまたはアニマルコンパニオンをしてペットとの共生化も一考して頂けたら…。と思います。老後、犬の散歩などd他人とのつながりも生まれて、活性化できるのでは…。

高齢者住宅には高くてすめない。子供もなく将来がとても不安である。お互いに助け合えるシステムがあると安心です。団地内ではとじ込めておられる人も多いのでは？

ホームセンターがほしい。(金物類、修理(大工工事)など頼めるところが欲しい。)区役所出張所があるといい。防災のときの放送をしてほしい。高齢者のためのエレベーター。銭湯があるといい。みんなの交流の場にもなる。(フロが壊れたとき、本当に困った)。バスはミニバスでいいからこまめに走ってほしい。乗り合いタクシーでもいいけど。循環バスでもいいし。病院←往診してくれる・歯医者婦人科、ヒフ科。

とにかく駐車場が遠くて不便を感じている。住んでいる棟の前に駐車場があると良い。芝の半分くらいを使って駐車場を作ることはいできないか？今後高齢化が進めば、目の前に駐車場があるべきだ。

芝生でサッカーをしている家庭がある。団地内で遊んで良い場所、いけない場所、自転車で通っていい所、だめな所、など基本的なルールを回覧板でも使って、今一度公的に発信してほしい。

地図に犬猫病院が示されていません この辺の人たちはけっこう犬、猫を飼っているのによく行く場所だと思いますが？

集会所や地区センター、スポーツセンターなどどこでも行くようにしたいが、今は畑をやったり、パチンコに行ったりしています。

私は慢性疾患を数種抱えており、最近緑内障にもなったため、各行事には参加できません。

6(5)について自身の老後を…年金生活のため、リフォームや高齢者住宅など施設は自身の資金などに問題がある。

・洗濯機の排水をなんとかしてほしい。(下階の方に水が流れないか常に心配する)・風呂場の出入り口の段差解消(高齢になった場合つまづきの原因になる)

管理組合スタッフの対応が非常に悪い。

近頃は高齢者なので特にエレベーターがほしい。

他の地域の集合住宅、団地のように、敷地内に駐車場を増やし車での行動力を活かした環境づくり

終の棲家として左近山団地にきましたが、最近賃貸

<p>者が増加している中で、モラル、マナーが欠落しているため、区分所有者とトラブルになっています。管理組合、自治会におかれましては、所有者の味方となって助けてください。よろしくお願いします。</p> <p>姉妹で2人暮らし</p> <p>現在 30 代で子育て中。団地の環境は好きだが、築年数から考え(予算、エレベーター)今後の建て替えなどを含めて、もっと若い世代が入居しやすい環境整備が気になる。それがあ程度市市の働きも含め広域環境で考えて動いて欲しい。できるだけこの場所にいたいから。</p> <p>・団地内にどんなサークルがあるのかよくわからない。・地域ケアプラザの回覧を見かけるが、イベントは高齢者でなくても参加できるのだろうか？</p> <p>入りたいサークルがない。また、途中からサークルの仲間になりにくい。</p> <p>町に子どもがいなくなった。活気がなくなった。若い世代を増やすためにも大規模な建て替えが必要なのでは？</p> <p>建て替えが進められない。この団地の将来が心配です。</p> <p>夏場窓を開けないので小さな虫がたくさん入ってきます。気持ち悪くなります。芝生に何か薬とかはだめでしょうか？</p> <p>現在のコミュニティ活動等は一部の方のみで、活動等には参加しづらくて、まとまりがない。</p> <p>設問の中の言葉の意味のとり方にとまどうことがあった。例 A: 居住期間の長いものには状況を重ねて考える傾向があり、現時点だけの回答選択が難しい気がする。例 B: 相続したいとき、内容に応じ、地域の窓口で不足の場合もある。例 C: 場所・ルート記入 知っている道を色々な目的で使います。せまくて記入しづらかった。</p> <p>駐車場を希望しているが、中々入れない。入居時に希望届けを出しているが、確認したら忘れられていた。</p> <p>住んで 32 年になります。当初は私も若かったため 4 階に住んでも苦にならなかったが、近頃はしんどいです。当初は静かな用地であったが、近頃はゴミが散乱している。アプローチに駐車が多い。管理組合の人々等に感謝がないのか。そのような人が多い。</p> <p>今回のアンケート「無記名」とありながら、アンケートに答えた個人が特定できてしまう質問が多くあり疑問に感じた</p> <p>引越して来た時には、もっと木がたくさんあったが、どんどん切ってしまい、すっかり景色が変わってしまっ残念だ。</p> <p>二年前に駐車場がアスファルト舗装されてかなりスペースが空いています。そこを駐輪場にしたいほうがいいと思います。駐車できる車が限られています。1 ナンバーだけが止められるのはなぜですか？車両のサイズで制限したほうがいいと思います。</p> <p>調査するのは良いが、答えをもう少し明確にわかりや</p>

<p>すく</p> <p>いつもお世話になりありがとうございます。よろしくお願いたします。</p> <p>現在病気で療養中ですのでケアプラザの方々にお世話になっております。</p> <p>絵水様の撤去のお願い申し上げます。老朽化の前に改善が必要と考えております。例えば地震で倒壊の可能性を考えてください。</p> <p>旭スポーツセンターでバドミントンを 13 年間サークルの仲間と過ごしました。現在はパートで生計をたてています。</p> <p>半年前引っ越したばかり</p> <p>子育て世代向けの地域にするには、もっとその世代の意見を発信する機会があると良いと思います。例えば毎日子供が遊ぶ公園で危ない場所、しゅう禅してくれたりいいのについて思う点がいくつかあります。そういった意見を伝え、前向きに検討してもらえような環境にしてもらいたいです。</p> <p>団地の建物劣化が顕在化する前に、多摩ニュータウンの様な建て替えを機会を窺いながら検討していきたいと考えています。</p> <p>外の水道は必要ですか？第二日曜の清掃も自主管理にあり、現在は洗車をする人や、犬の散歩中に水を飲ませている人が目につきます。</p> <p>国の介護政策は悪くなってきている。介護が必要になると既に遅い。高齢化している団地なので福祉優先の街にしていきたい。学校の利用は要望を取り入れて住みやすく。</p> <p>代名や号棟聞いたらアンケートではないでしょう</p> <p>3 街区の細い歩道のコンクリートがデコボコになったり、亀裂が入ったりしていて危険なので舗装してほしい。</p> <p>友人の紹介で団地に住んで 20 年になります。皆様に声をかけてもらい感謝しております。10 年前に今のところに降りて暮らしています。管理組合、集会所が目の前なので安心しております。うれしい限りです。今後ともよろしくお願いします。</p> <p>体が自由にならなくなりました</p> <p>建て替えを計画してほしい</p> <p>建物の老朽化によって建て替えを希望します</p> <p>左近山第二バス停に学童クラブがあるが、バス通りに面しており、囲いや駐車場がなく、あまり良い場所にあるとは言えない。どこが別に良い場所があれば移転する方が良い。</p> <p>建物の老朽化に当たり、今後の団地の方針を知りたい。全棟建て替え計画など(緑化環境を縮小してエレベーター付きのタワーマンション建て替え計画は？)</p> <p>数年前に計画があった駐車場の増設が設計まで出来上がって廃棄になったが車社会の現代 1 世帯に複数台所有している家族も多いと思われるので当初計画の増設を実行し 1 住戸に対し複数の賃貸借契約が出来ることを希望するものである。広くて無駄な芝生を造成し駐車場にした方が収入も入るし芝刈り費用も軽</p>

減する。
氏名記入欄がなく従ってアンケート記述者と地図の関連性が失われ若し他人のものと混入した場合は証明不能となる。現在85歳、物忘れが激しくまた体力の消耗も甚だしく、なるべく他人に迷惑をかけないように心掛けておりますが先行きどうなりますやら不安も尽きません。
約20年前に購入し子供たちが幼小中と学校も近くとても子育てに良い住環境と思っていました。徐々に子供も成長していく中でやはり手狭と感じる事も。又、老朽化もすすみ自分の思いもそうですが、エレベーターの無い古い団地なんて若い子育て世帯の方たちのニーズに合わないと思います。バリアフリー化も中途半端。老人が歩いているのを見ると危険を感じます。少しでも障害があると階段を登らなければ帰れない人は施設生活。早急に建て替えが進められることを望みます。
バブル期に高層案がありましたが今はもう無理なのではないでしょうか？高齢になるとエレベーターがあると助かります。そういう方は多いと思います。
①当地は住の易いので今後の課題として早急に実現して欲しいのは道路及び階段入口のバリアフリーである。 ②将来の問題としてはエレベーターの設置を要望する。 ③騒音の問題。特に上下に対する騒音、水漏れ等課題としてあげたい
外付けエレベーターの設備は可能ですか？上階に住んでいる高齢者やベビーカーを使用している子育て世代のためにも考えをお願いします。
今後起きる地震に対する備えが不安。水道塔の活用も考えよう。地震後居住不能となった場合の構想。魅力に乏しい。こういう調査をもっと早く実施し、生かしてほしかった。6(5)コは理解不能
団地の活性化は若い人の入居しかないでしょう。ただ同然で購入できるようになり、入居者のレベルが低下している。建て替えにより、購入価格をアップ(若い人でも購入できる範囲)させることで入居者レベル(団地レベル)を上げる一つの要因と考える
駐車禁止の場所に軌道で止めている車がいつも同じ車が何台かいます。注意していただきたいと思います。
おかずの為に買い物で終わる
築43年になるので不安
一人暮らしの方毎日の状況がわかる(外から見て)方法はないものか
団地も古くなってきたので建て替えの計画をお願いします
もっと長時間車を駐車したり、バイクや自転車等ちゃんとナンバーなどで持ち主が分かるんだから注意してほしい。マナーが悪い！！ちゃんとお金を払ってみんな止めているんだから。
街区によって行き届いた設備の差がありすぎる。

10. クロス集計

家族構成と家族人数を見ると、「親と子供」に「2人」家族の割合が大きい。「夫婦と子供」の場合は「3人以上」の割合がほとんどであった。(図10-1)「単身」、「3人」には65歳以上の割合が6割以上であったが、「2人」には65歳以上の割合がさらに高くなっていった。「4人」「5人以上」には65歳未満がほとんど占めている。(図10-2)家族構成と年齢をみると、「75歳以上」の割合が高いのは「夫婦」、「単身」、「親と子供」であった。「65~74歳」は「夫婦」での割合が特に高く、「単身」、「夫婦と子供」、「親と子供」にも3割前後を占めていた。「~64歳」は「夫婦と子供」で最も高い割合であった。(「親と夫婦」、「親と夫婦と子供」は回答数が少ないため除く)(図10-3)

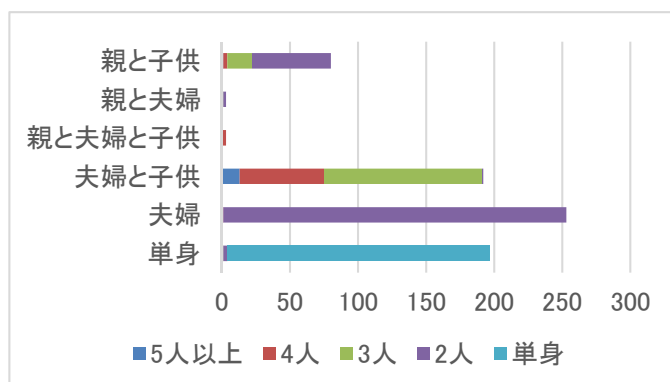


図10-1. 家族構成 × 家族人数

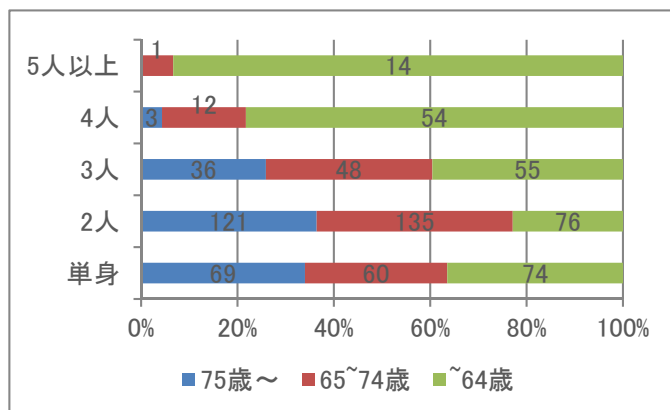


図10-2. 家族人数 × 年齢

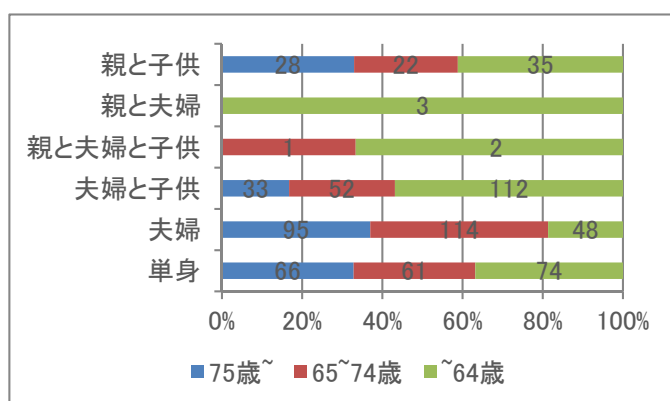


図10-3. 家族構成 × 年齢

住んでみてからの周りの住環境の印象と年齢の関係をみると「公共施設が近い」、「福祉施設が近い」、「医療機関が近い」には「75 歳～」の割合が高い。「歴史を感じる雰囲気がある」には「～64 歳」の割合が高い。（図 10-4）

家族人数でみると、「3 人以上」の場合、「保育園・幼稚園や小中学校が近い」が比較的に高い割合であった。「単身」の場合は、「福祉施設が近い」、「近所づきあいができている」等が高い割合であった。（図 10-5）

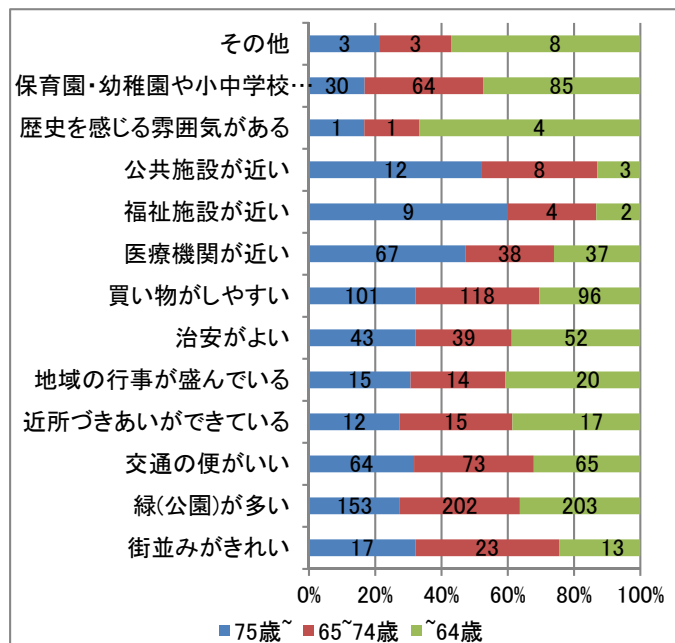


図 10-4. 住んでみて周りの住環境の印象 × 年齢

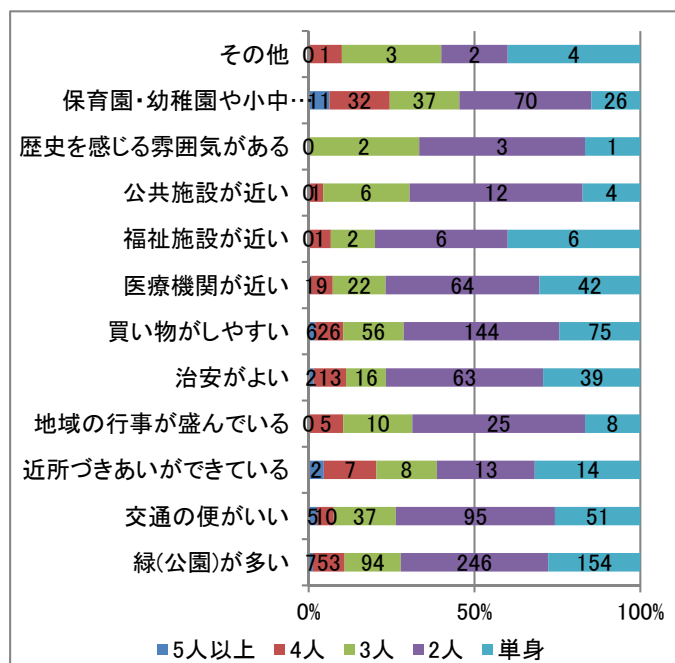


図 10-5. 住んでみて周りの住環境の印象 × 家族人数

年齢と外出頻度をみると、年齢が高くなるに伴って外出頻度が減っていることがわかる。65 歳以上では徐々に「ほとんど外出しない」の割合もでていった。（図 10-6）

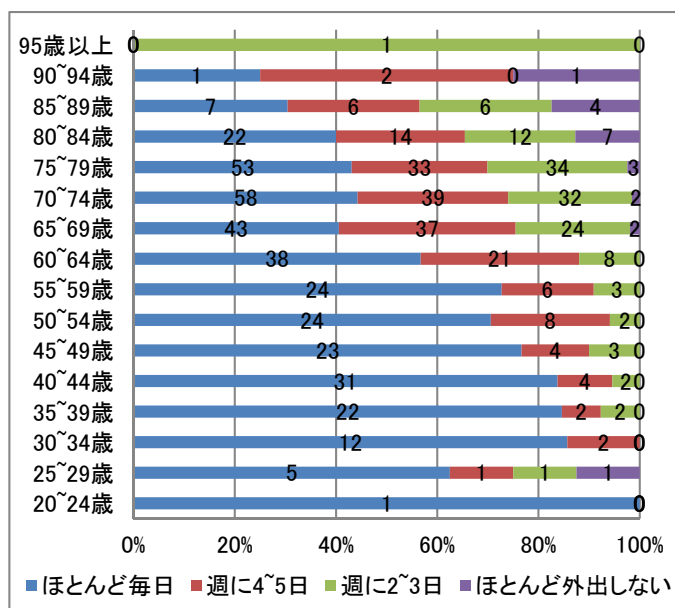
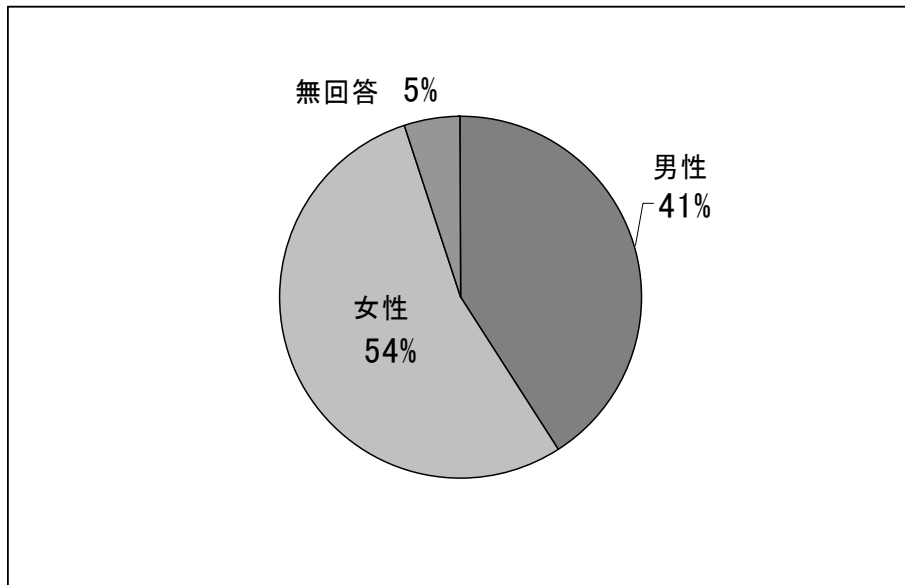


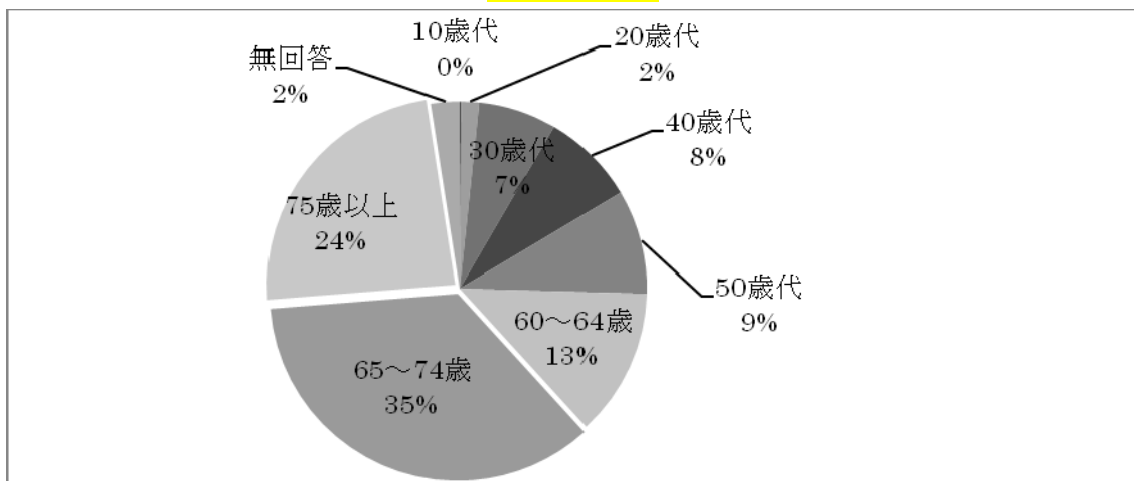
図 10-6. 年齢 × 外出頻度

左近山団地 賃貸棟（7,8,9 街区）+ 市沢団地アンケート 集計まとめ図

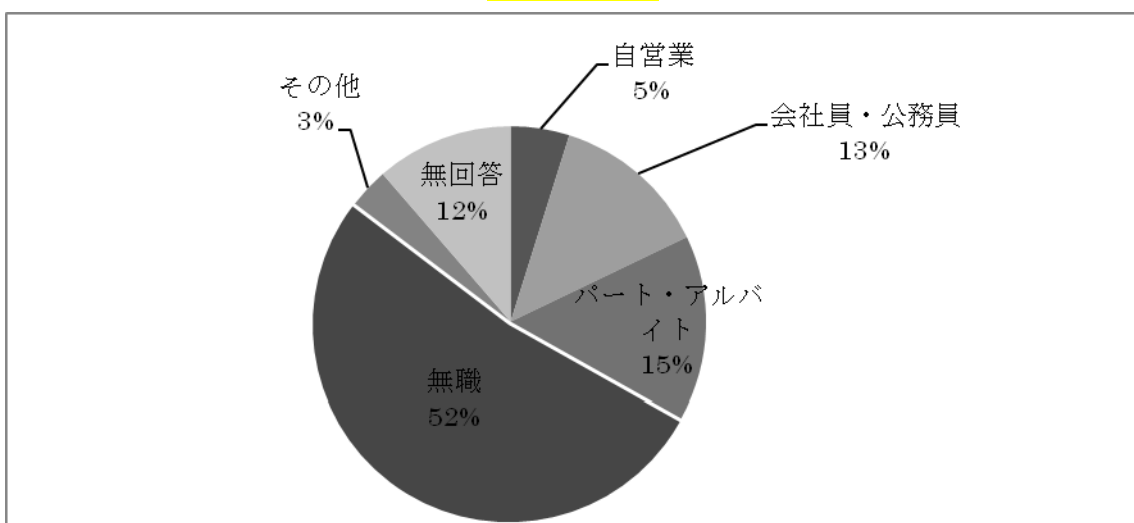
I-Q1. 性別



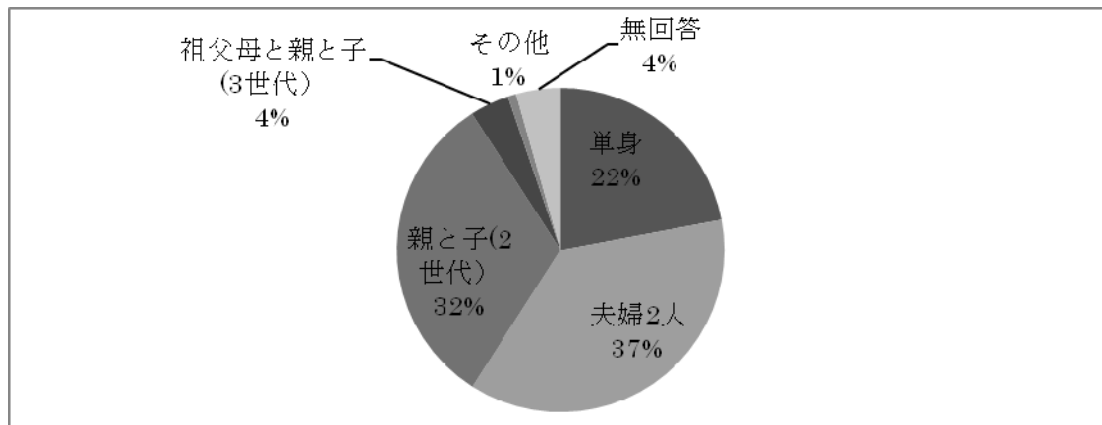
I-Q2. 年齢



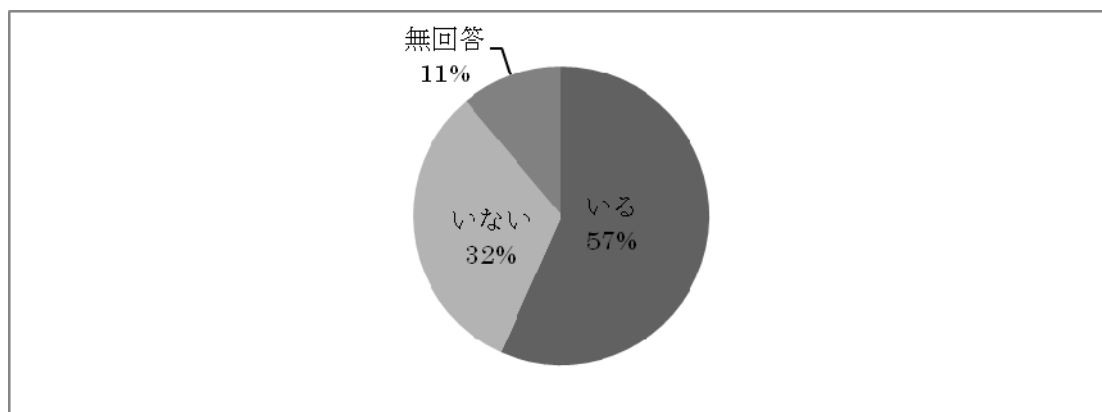
I-Q3. 職種



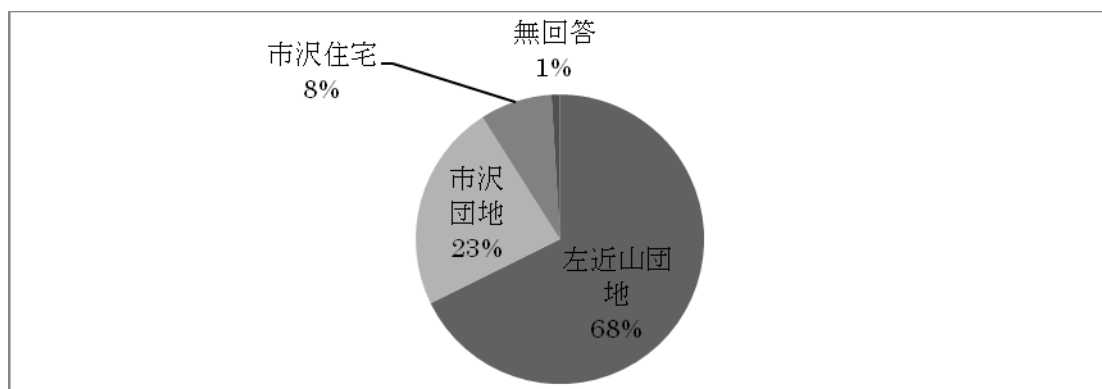
I－Q5.世帯構成



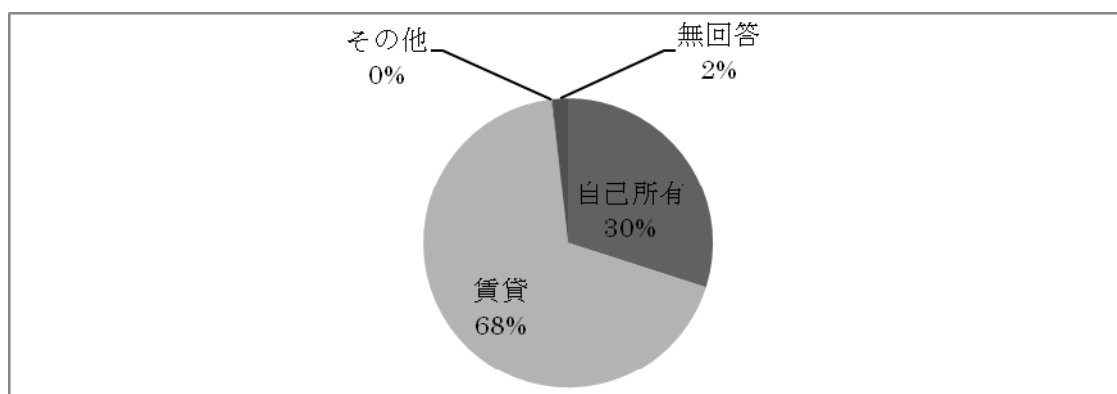
I－Q6. 高齢者有無



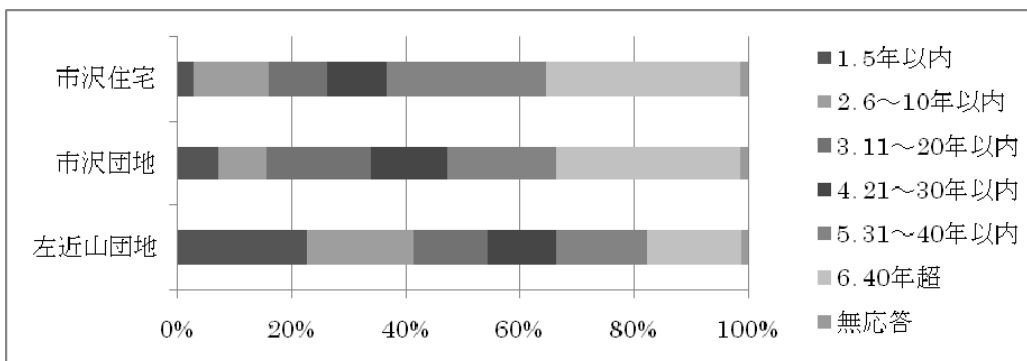
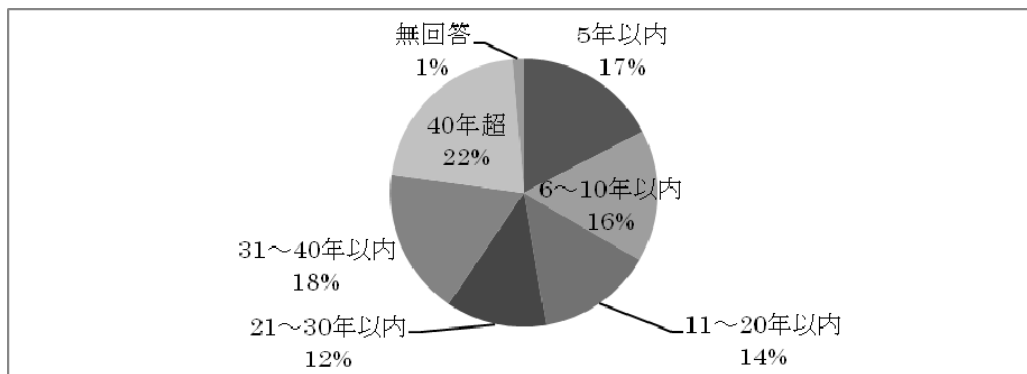
II－Q1. 住まい地区



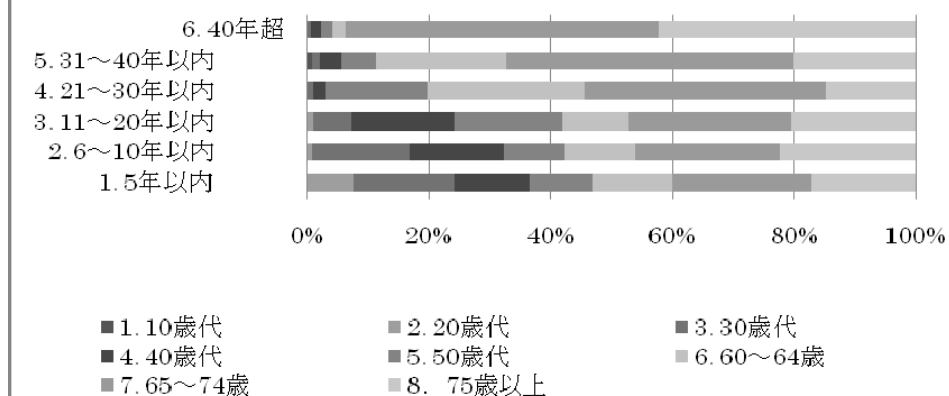
II－Q2. 所有状況



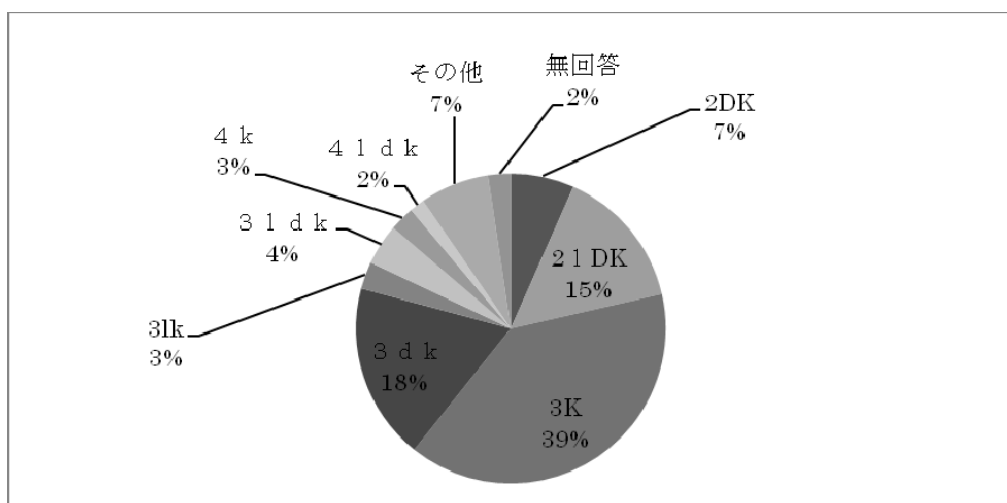
Ⅱ－Q3. 居住何年



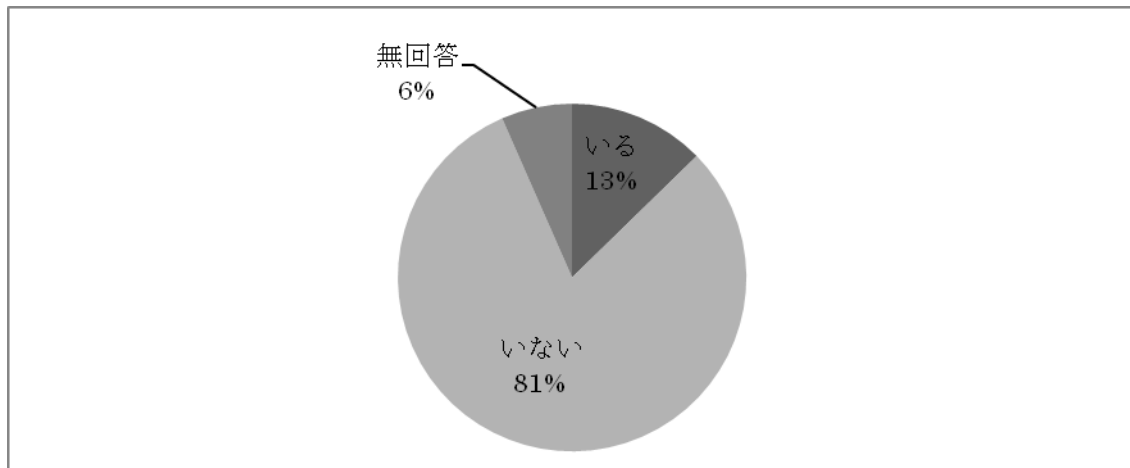
居住年数



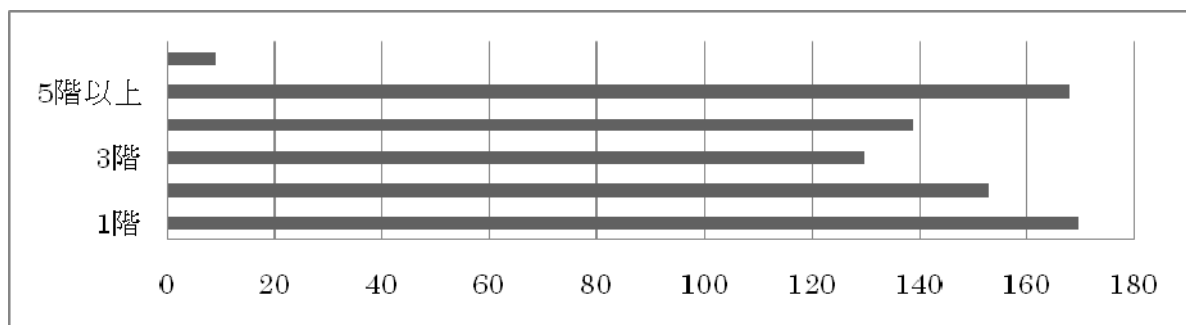
Ⅱ－Q4. 間取り



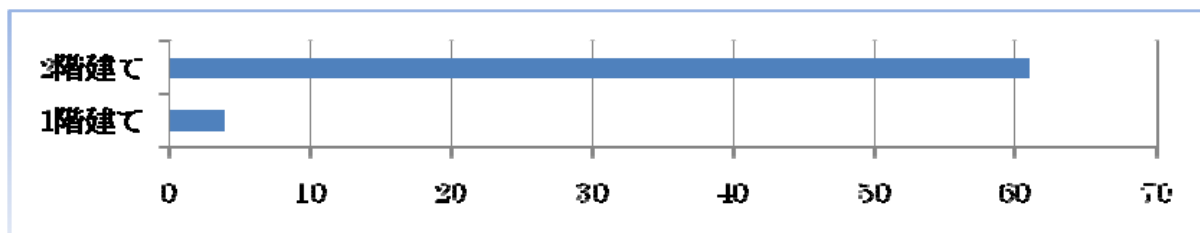
Ⅱ-Q5. 団地内の親族



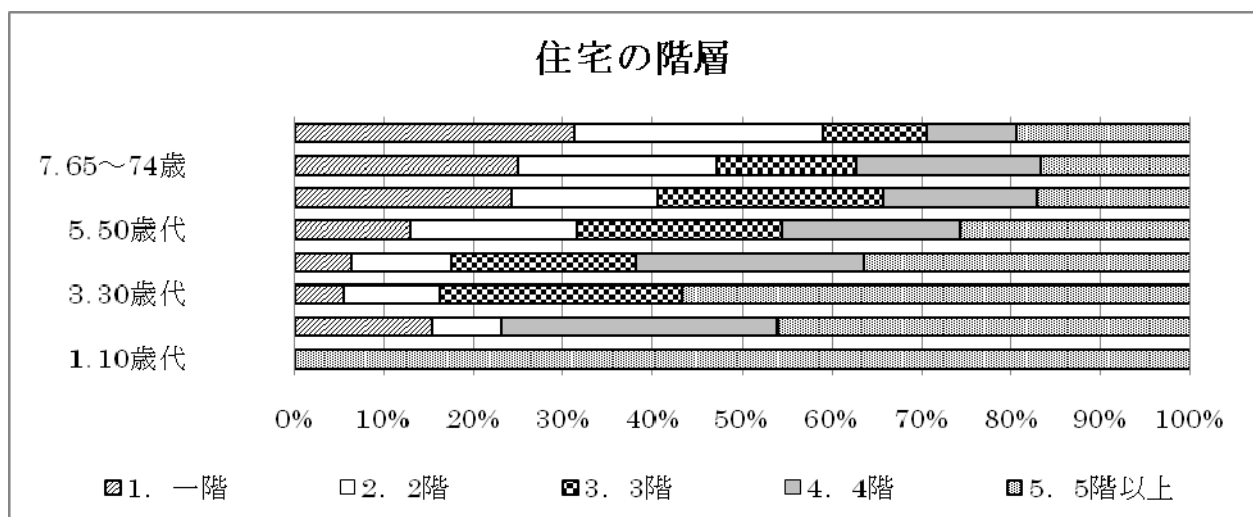
Ⅱ-Q6. 住宅の階層(集合住宅)



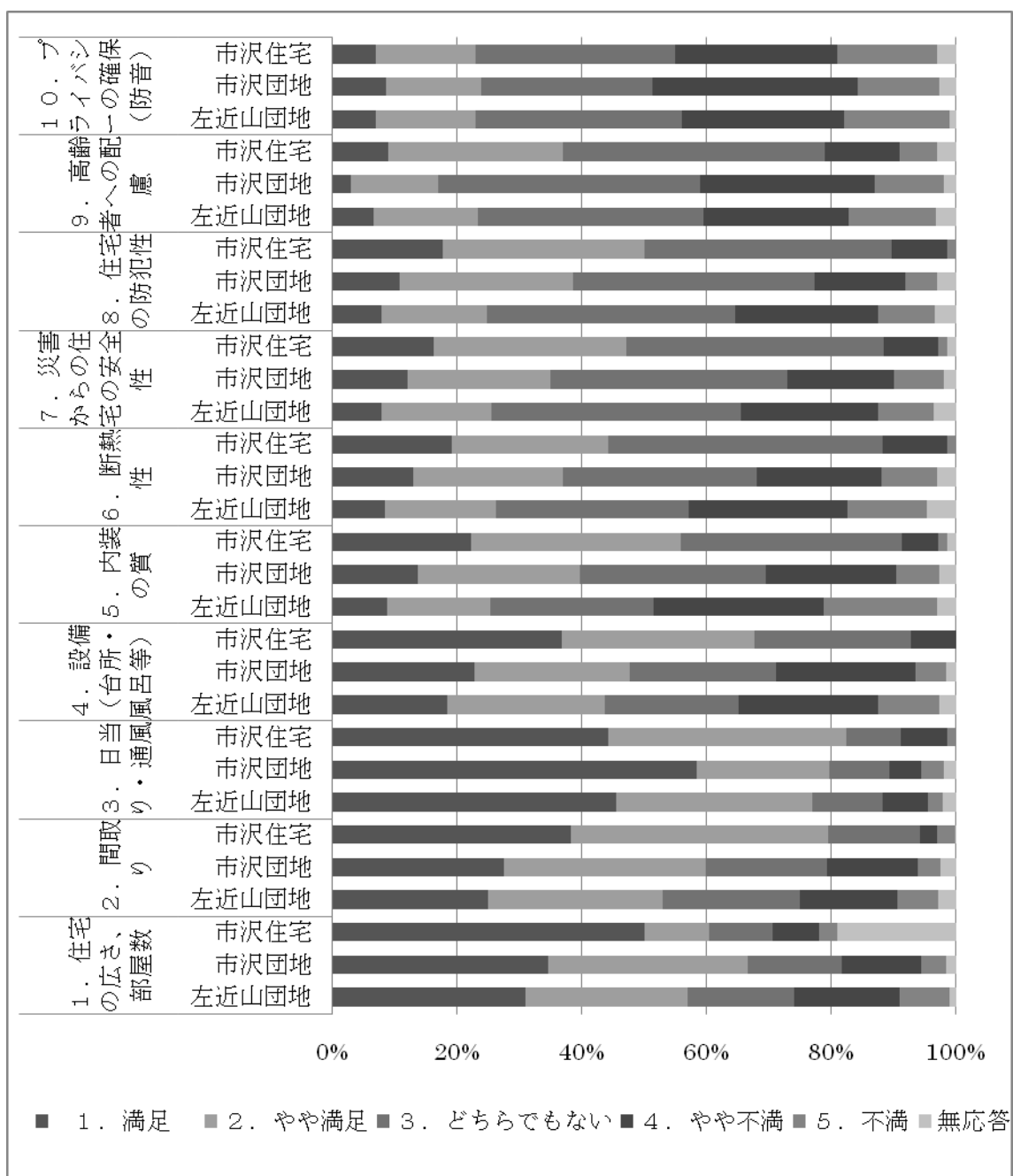
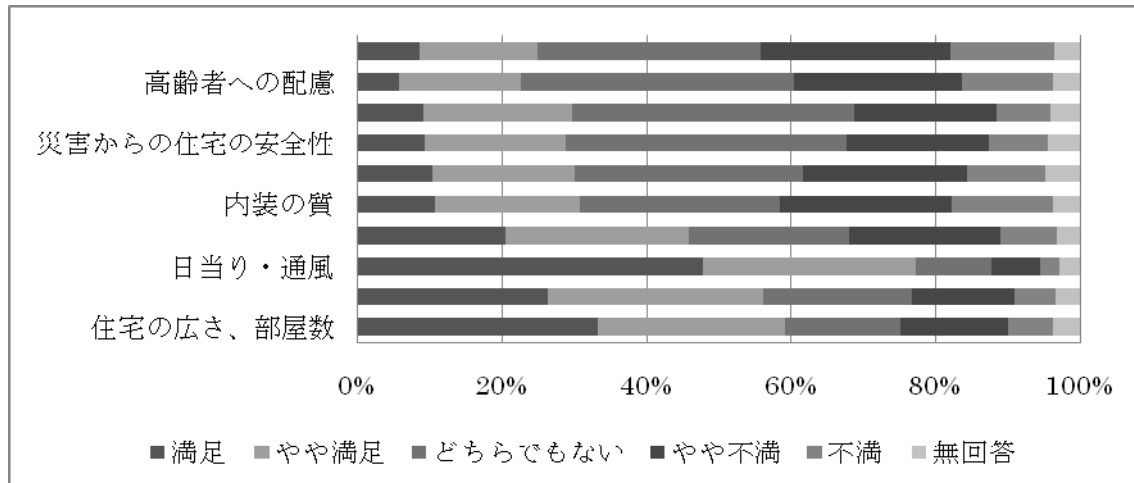
Ⅱ-Q6.住宅の階層(戸建住宅)



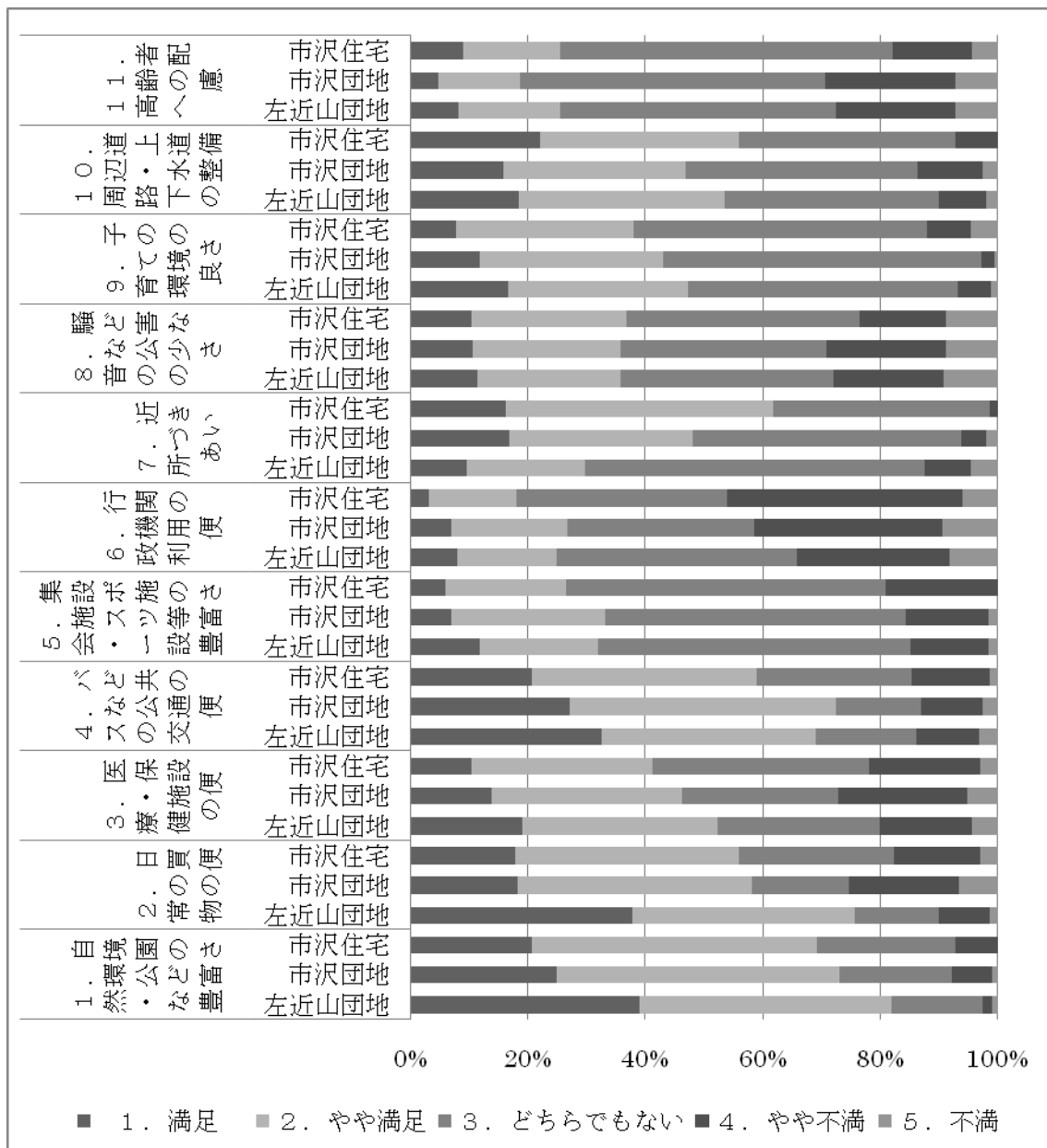
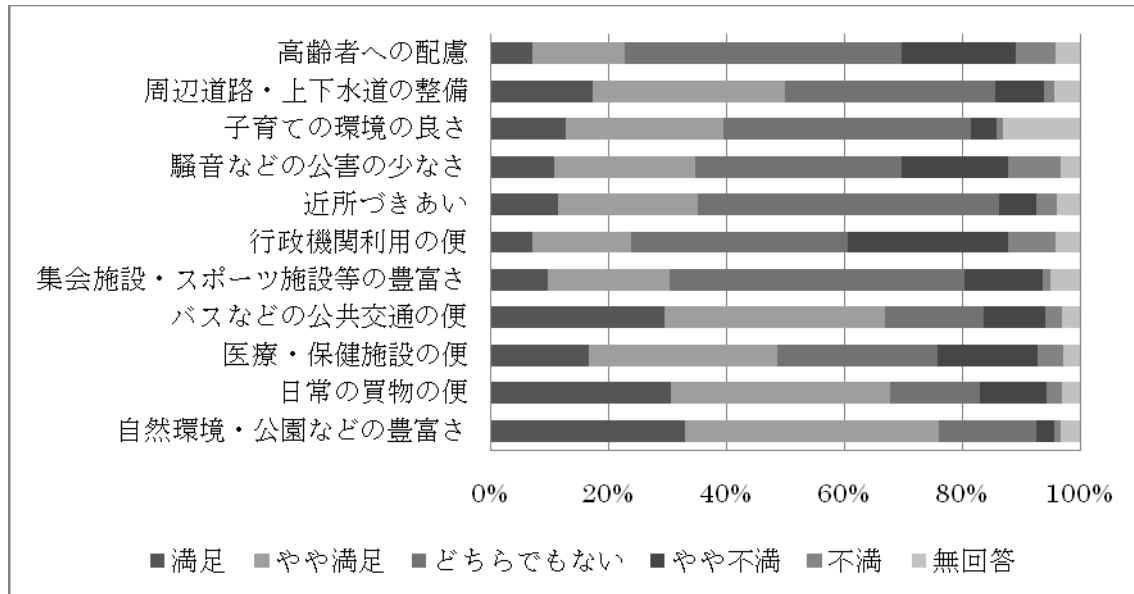
住宅の階層



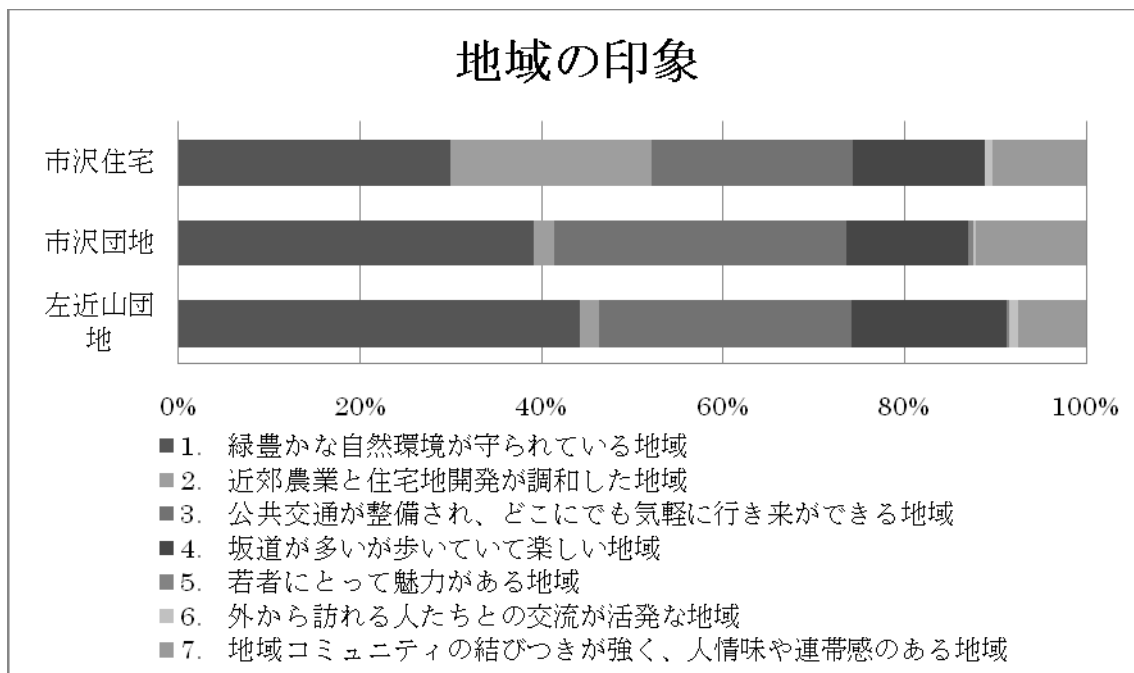
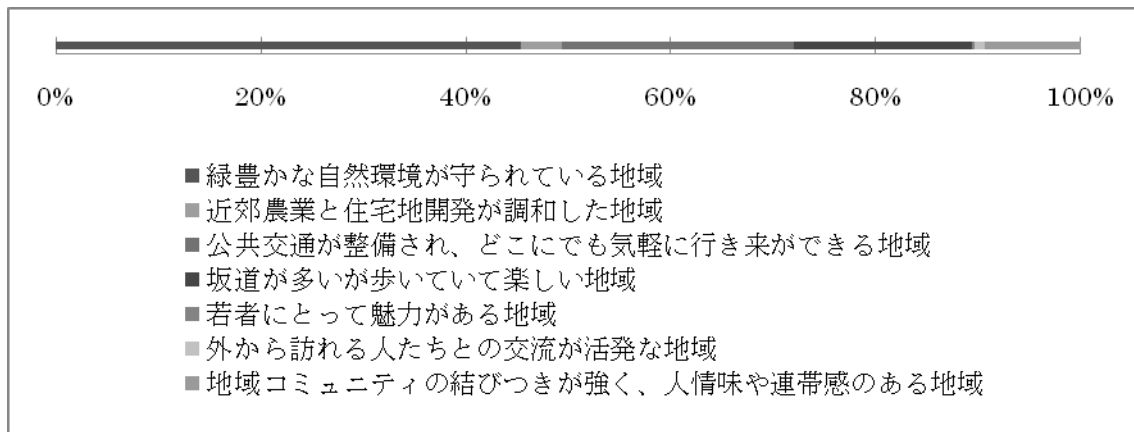
Ⅱ-Q7. 住戸内の評価



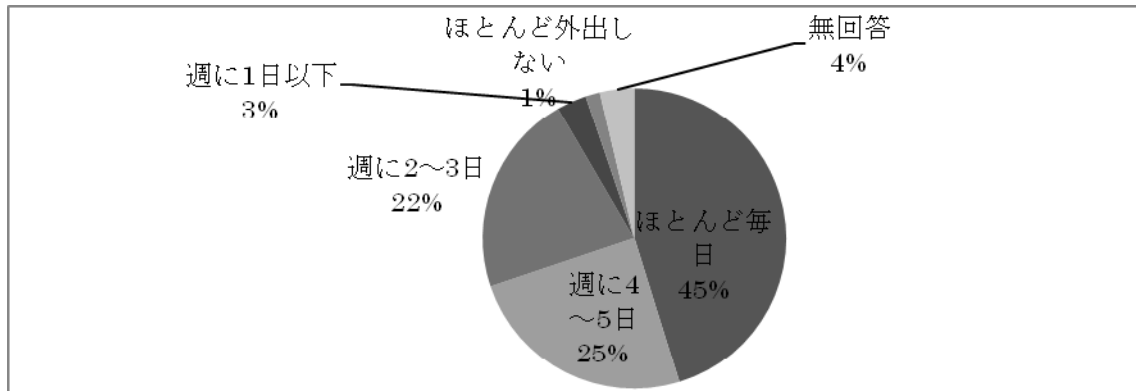
Ⅱ-Q8. まわりの環境評価



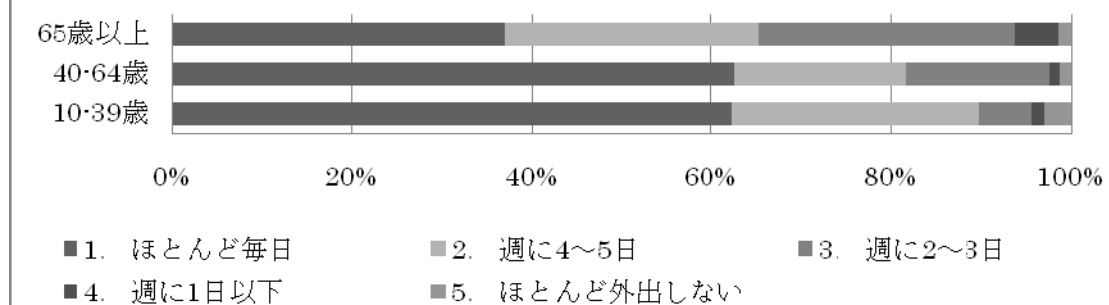
Ⅱ－Q9. 地域印象



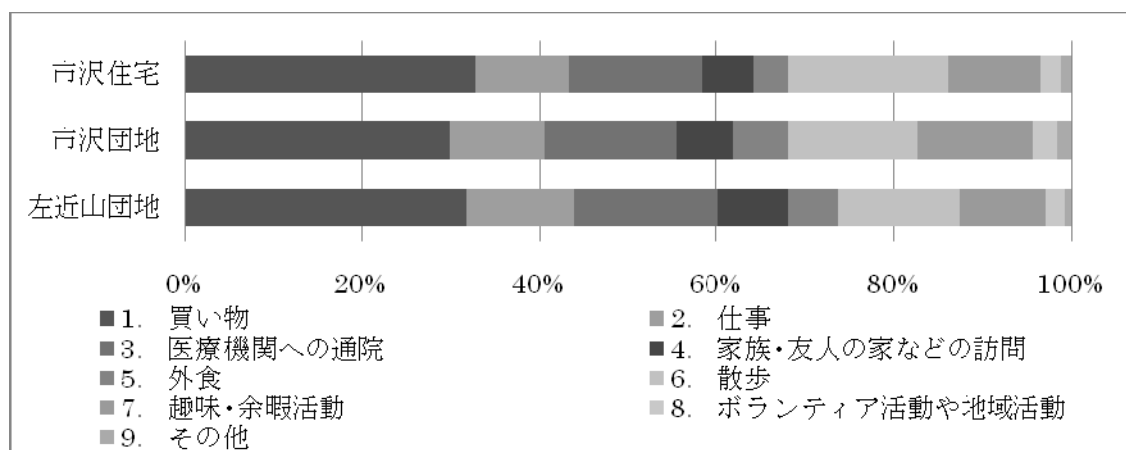
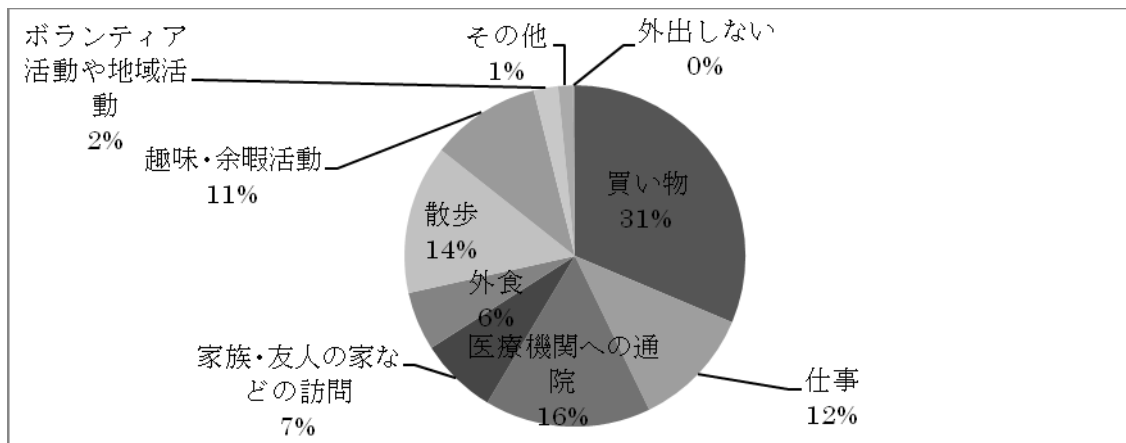
Ⅲ-Q2. 普段の外出



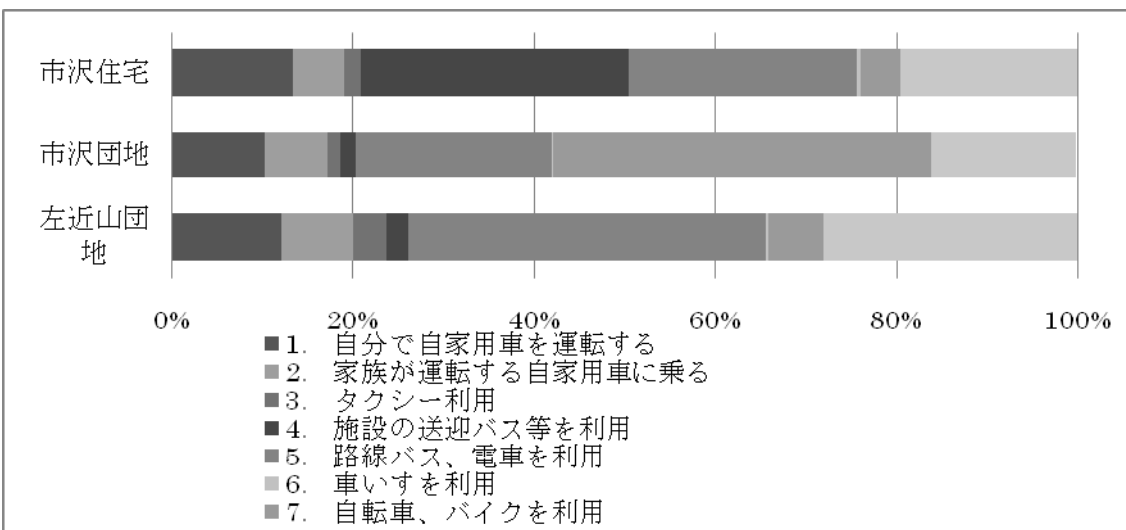
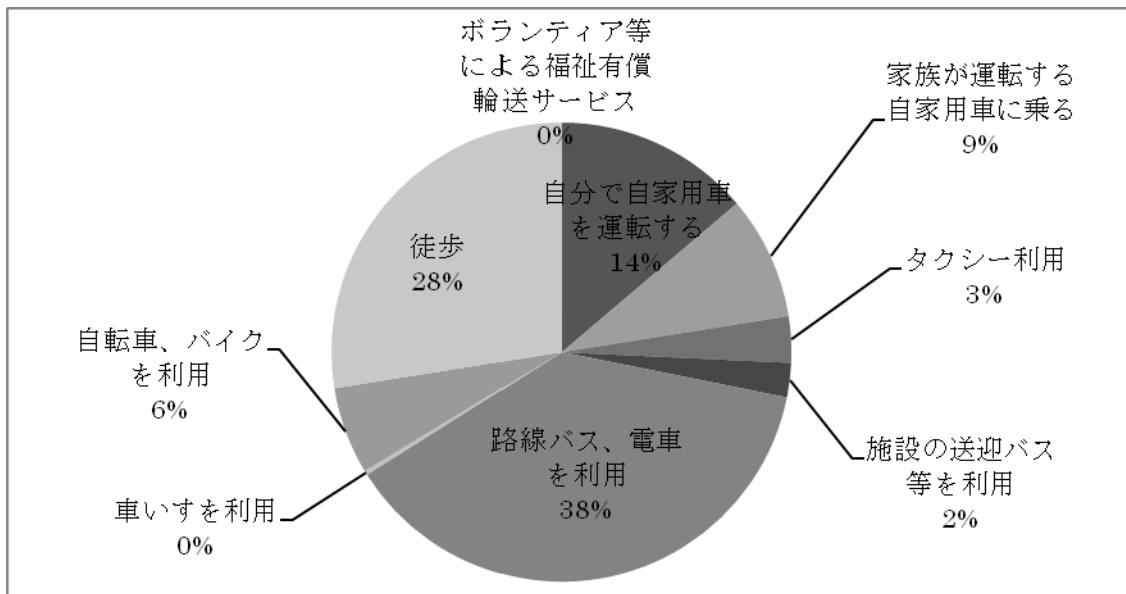
普段の外出



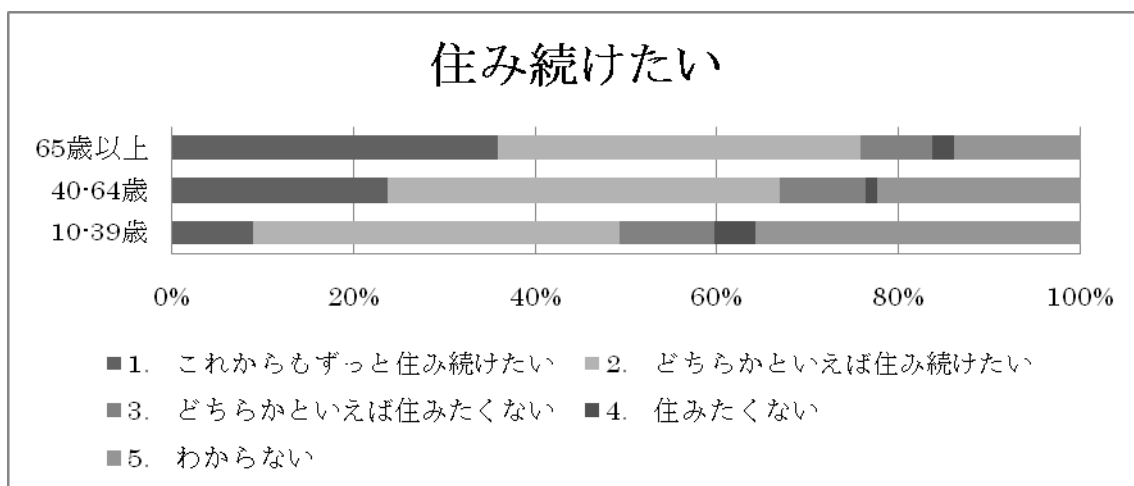
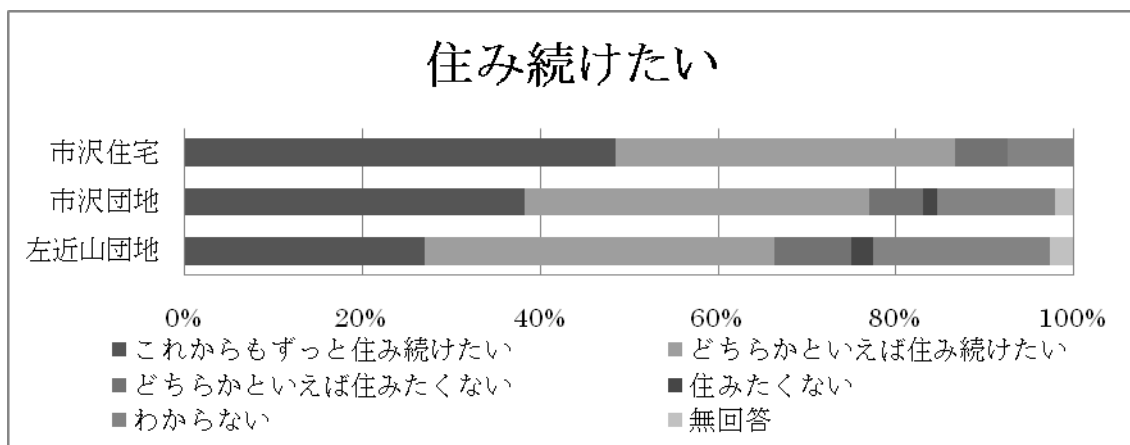
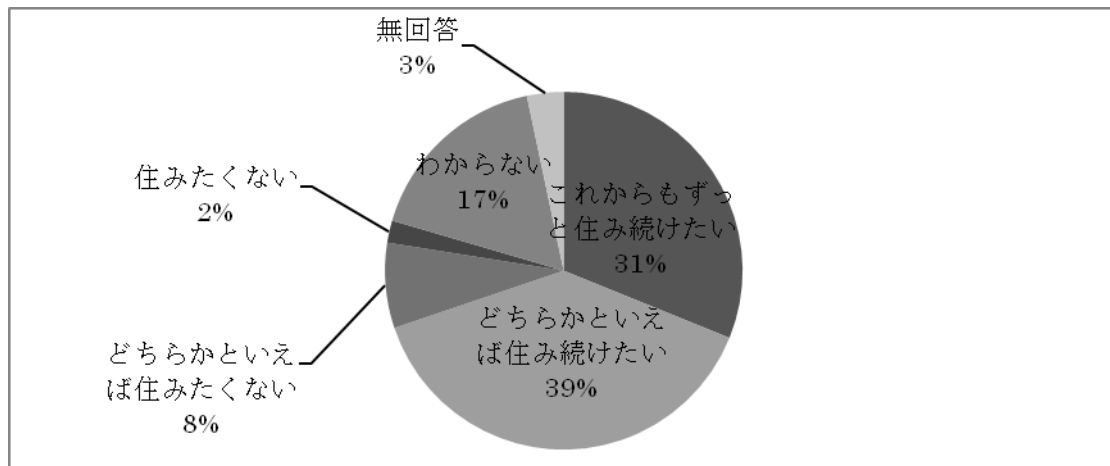
Ⅲ-Q.3 外出の目的



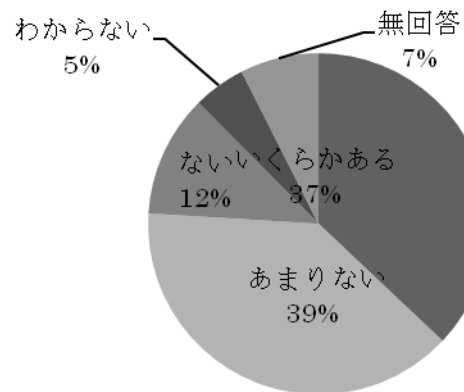
Ⅲ-Q4. 外出方法



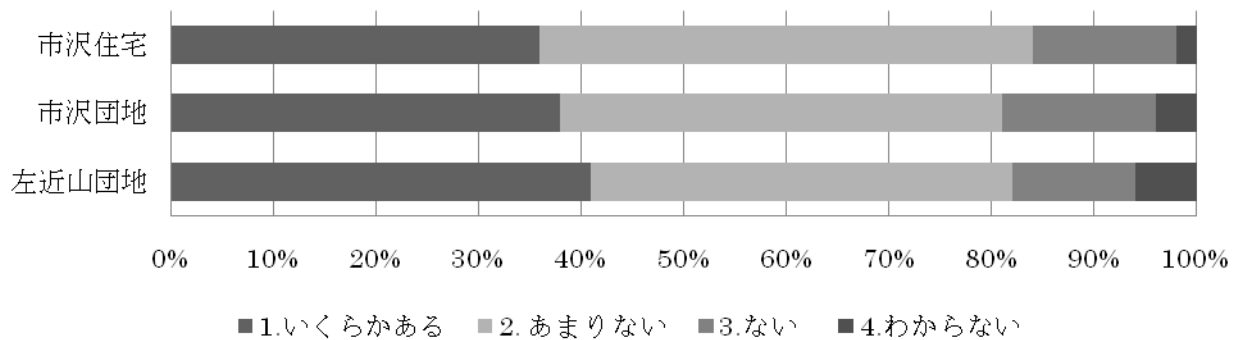
IV-Q1. 住み続けたい



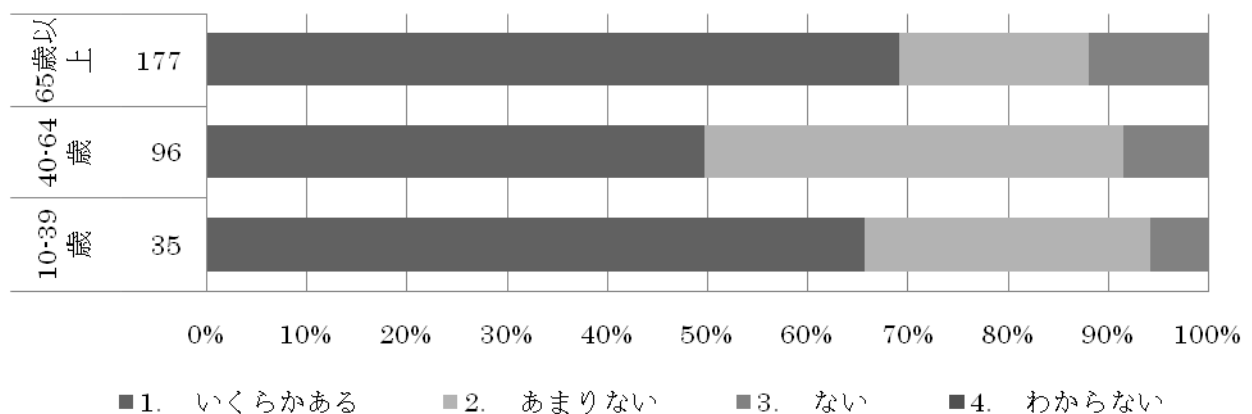
IV-Q2. 地域での不安



地域での不安

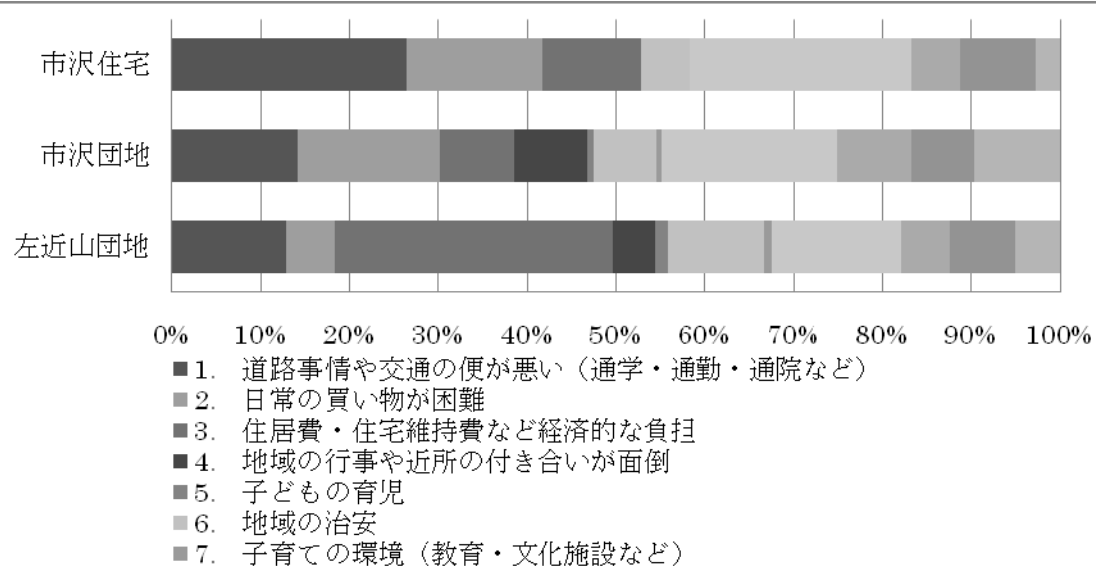
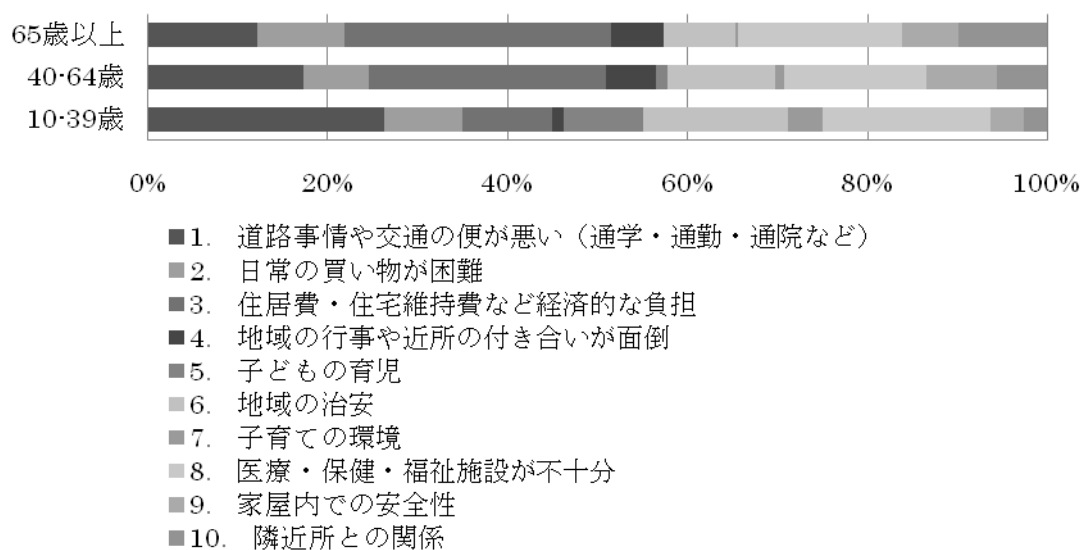


地域での不安

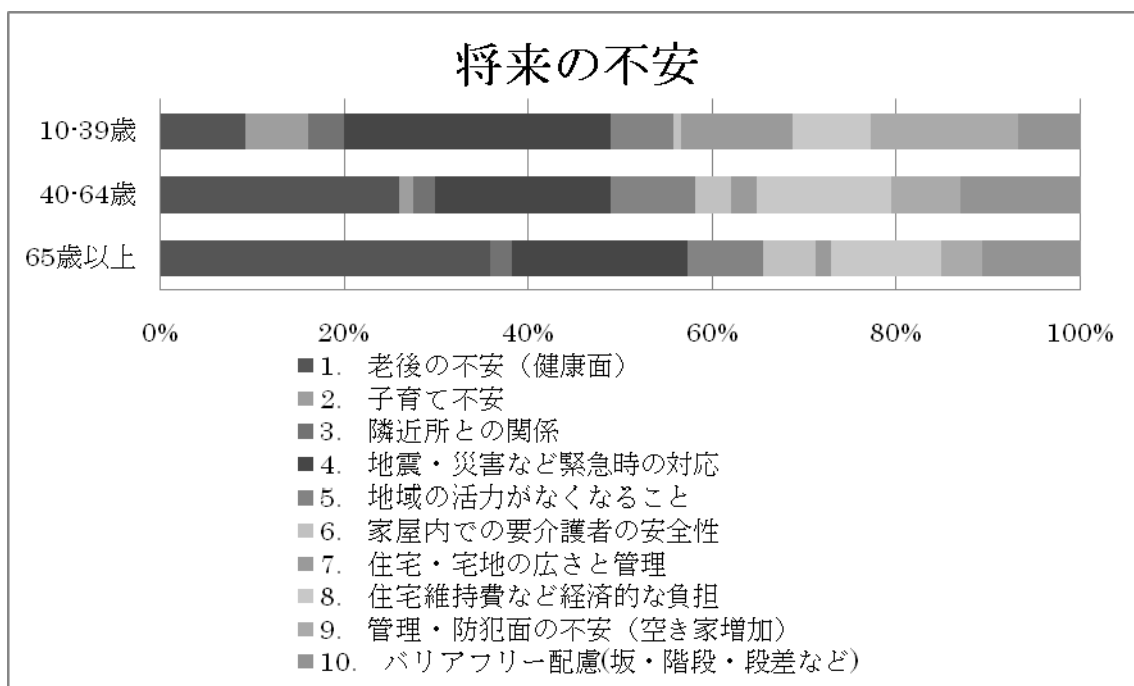
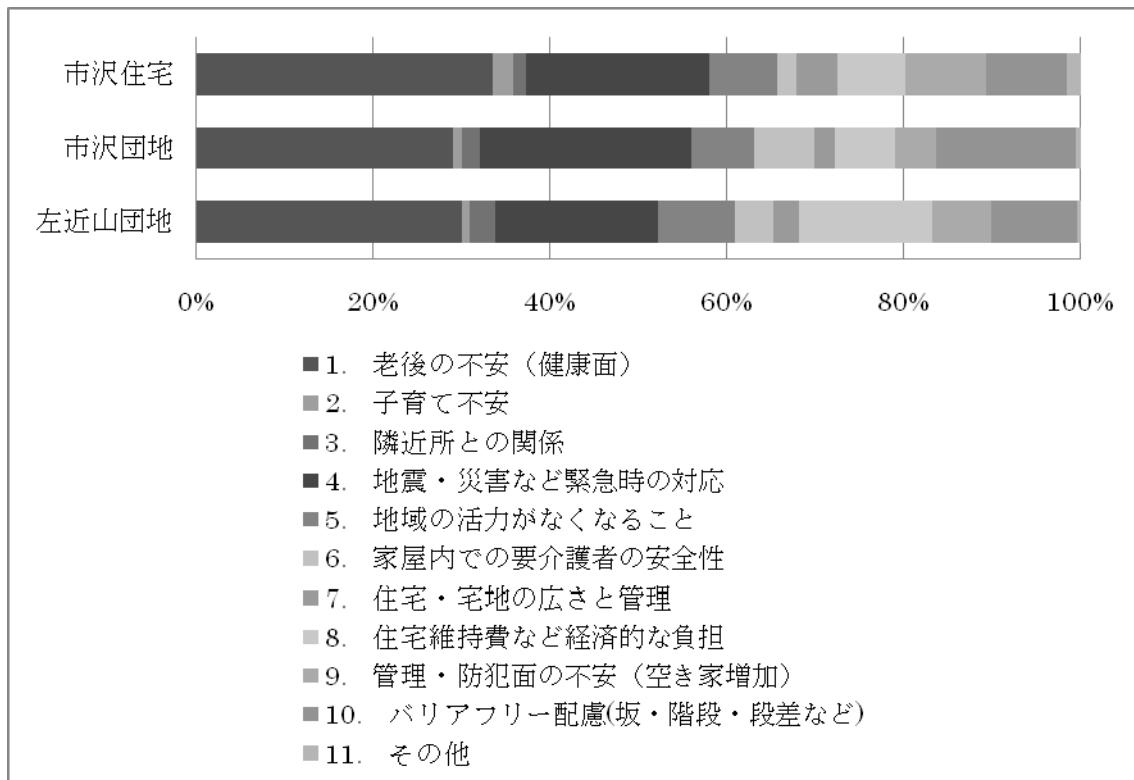


IV-Q3. 現在お困りのこと

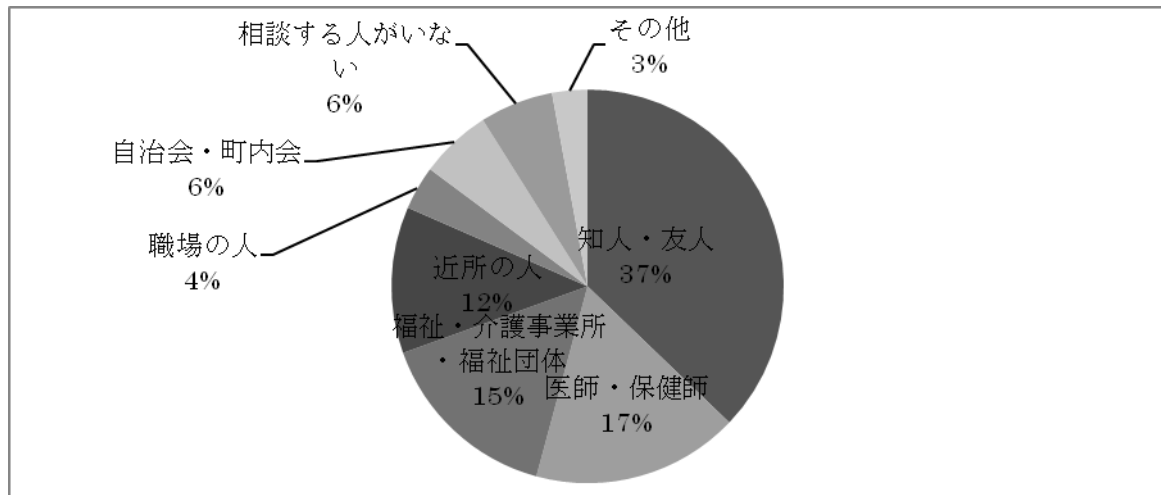
現在お困りのこと



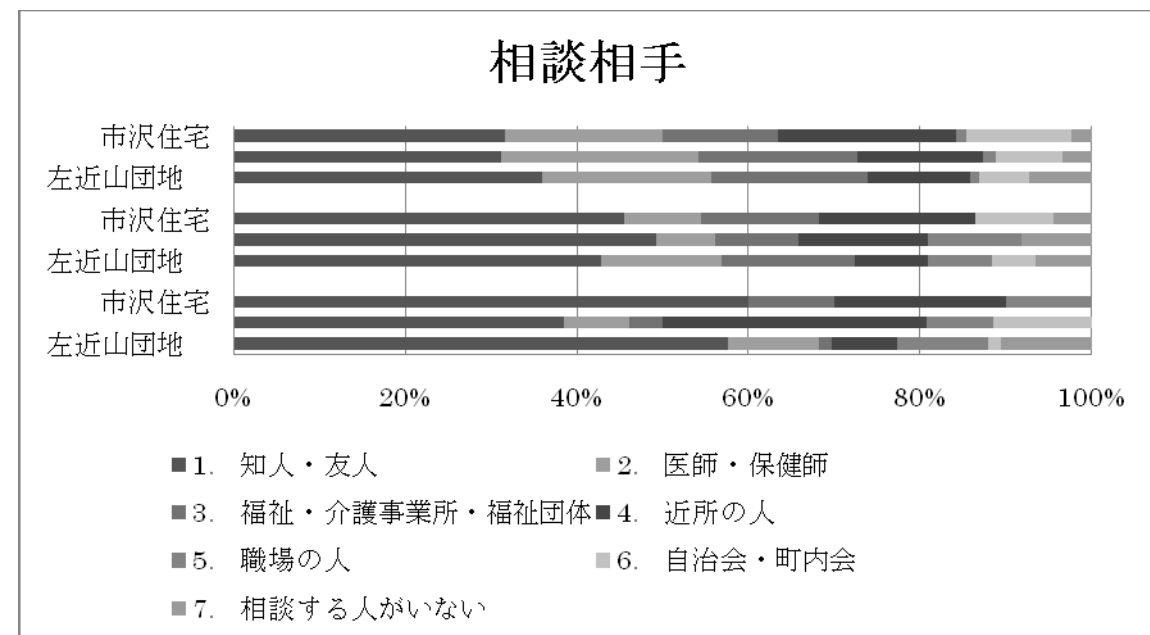
IV-Q4. 将来の不安



IV-Q5. 相談相手



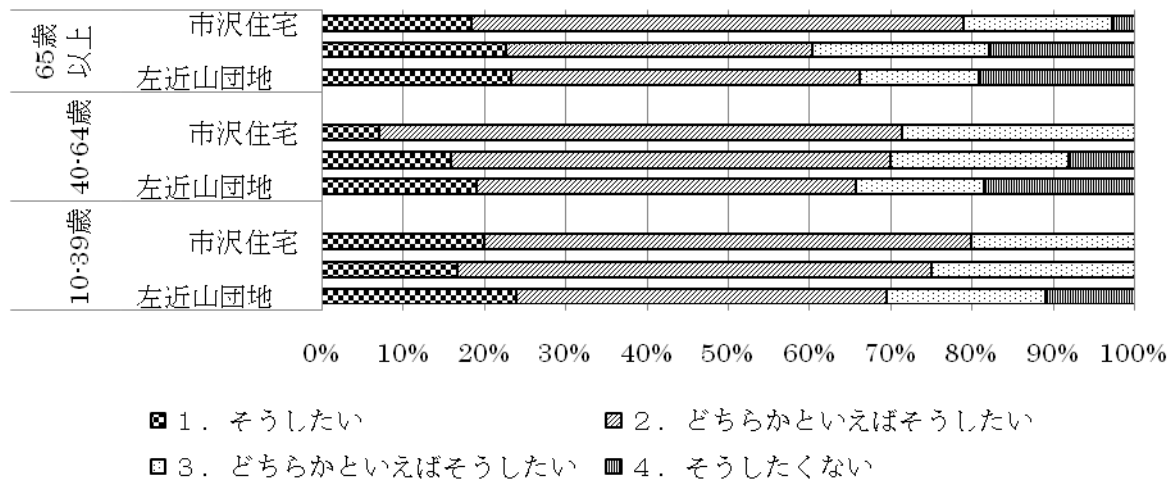
相談相手



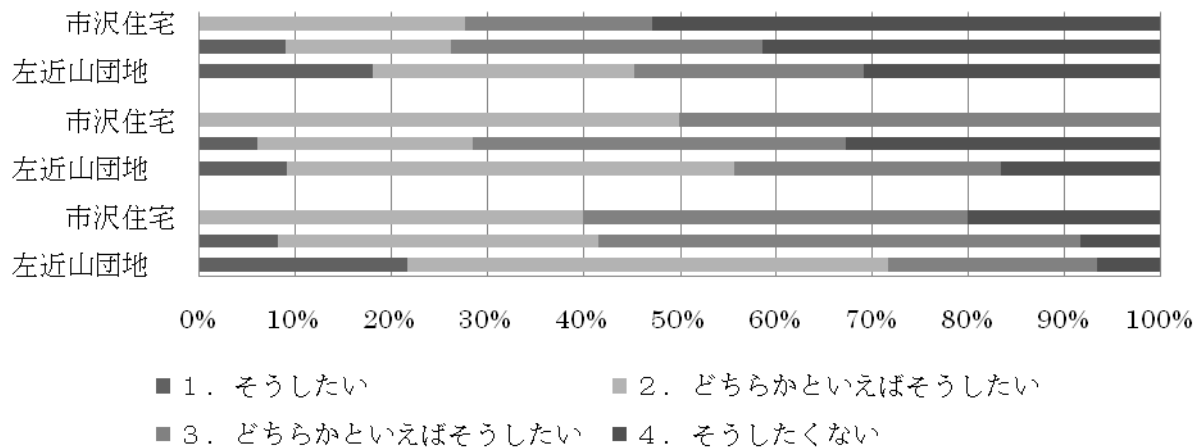
IV-Q6. 老後の過ごし



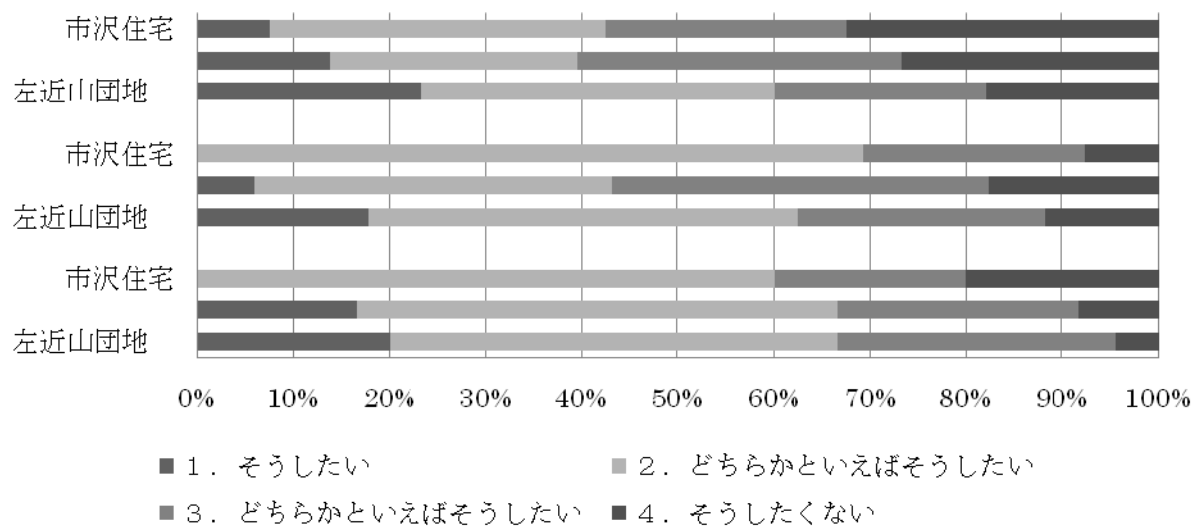
家族と同・近居する



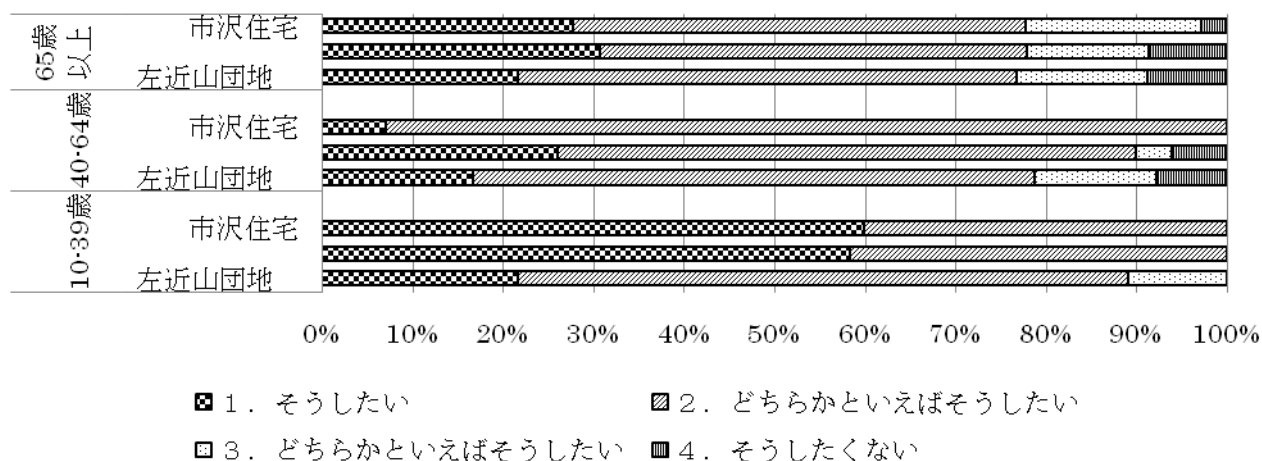
元気な内に早めに高齢者住宅等に住み替える



介護が必要になったら高齢者住宅や施設に住み替える



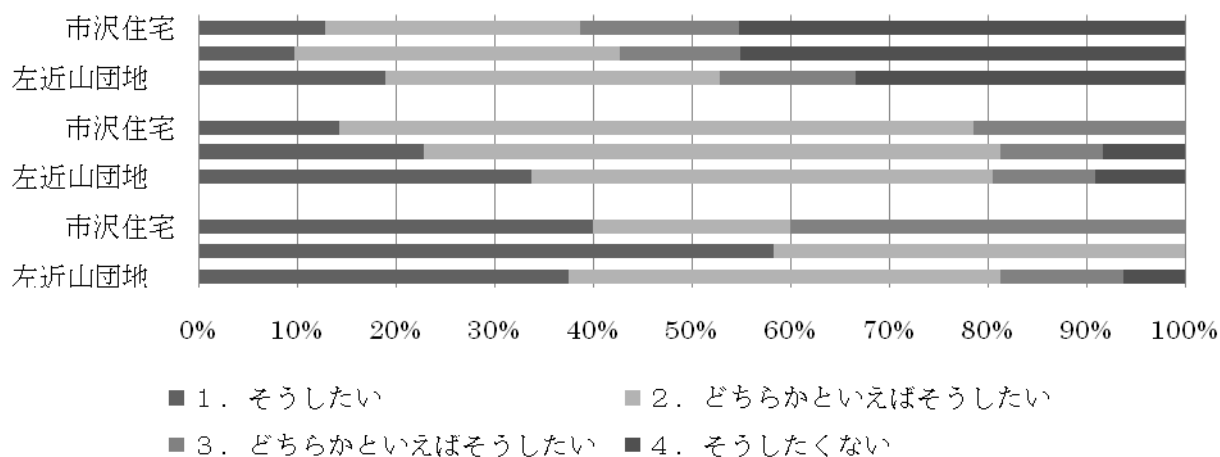
同年代の仲間と交流する



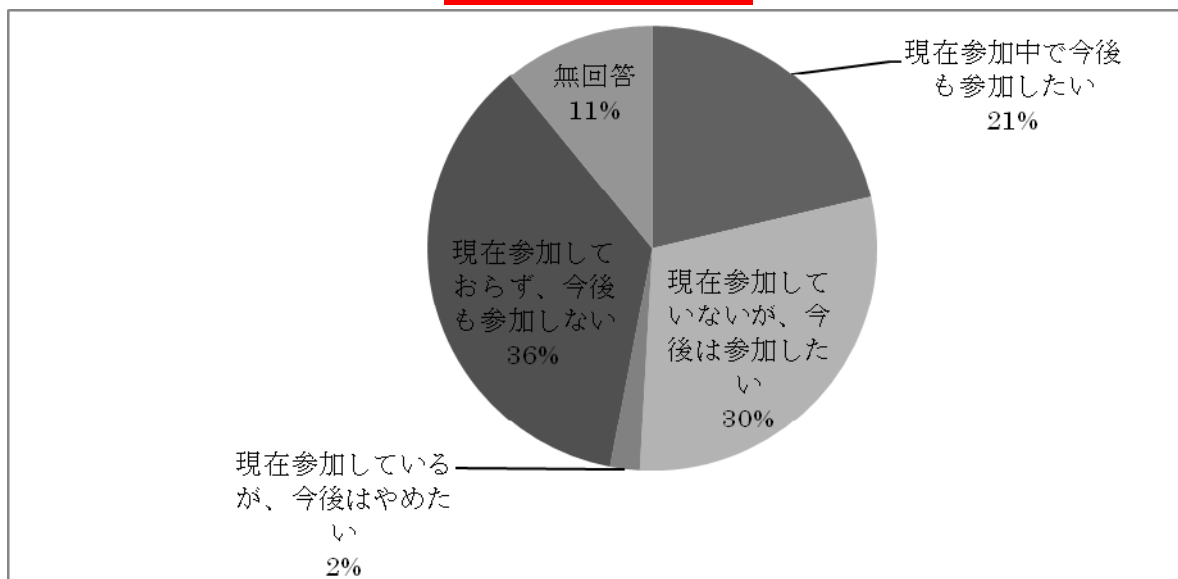
若い人たちと交流する



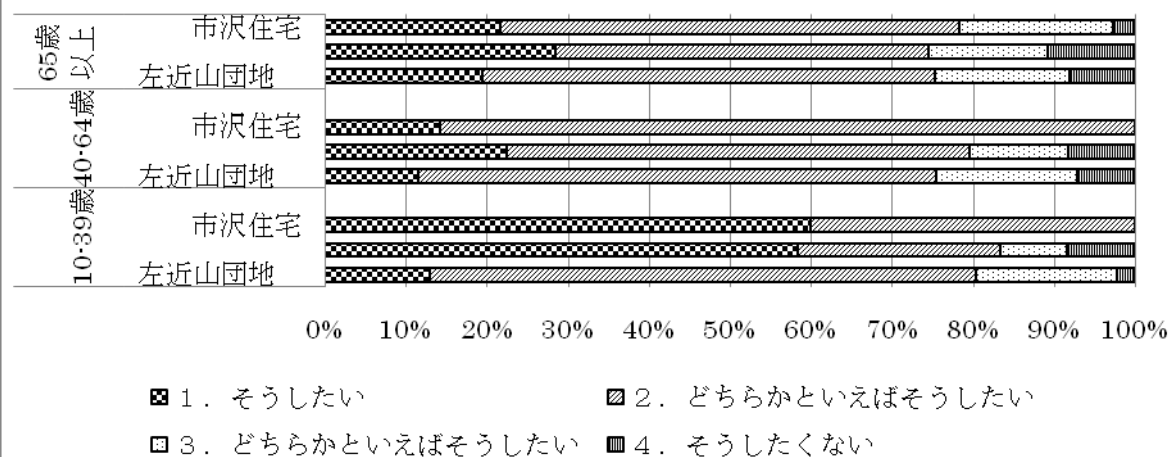
できるだけ働き続ける



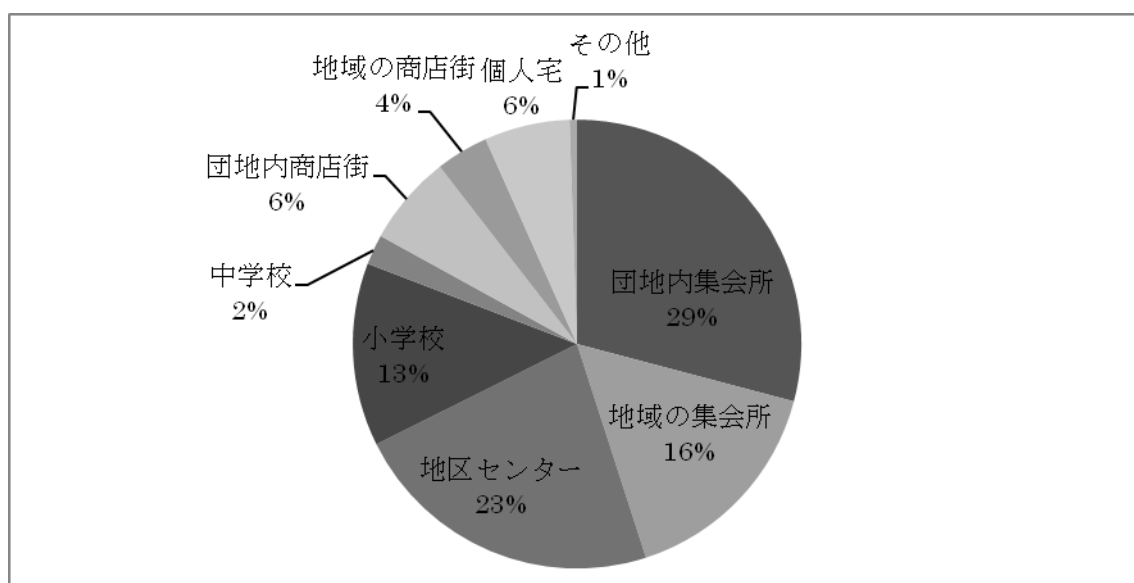
V-Q1. 地域交流の参加



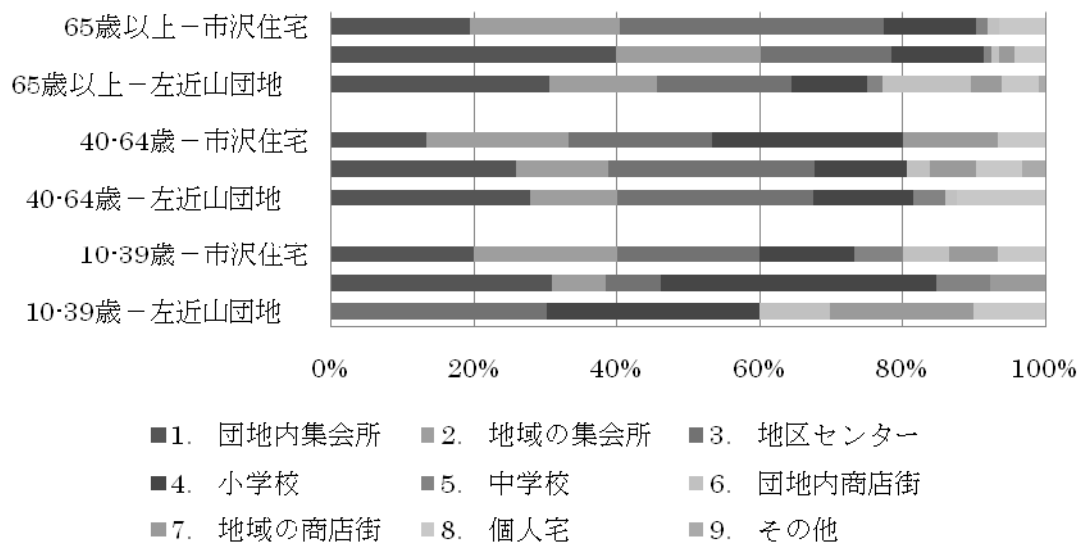
地域の人と交流する



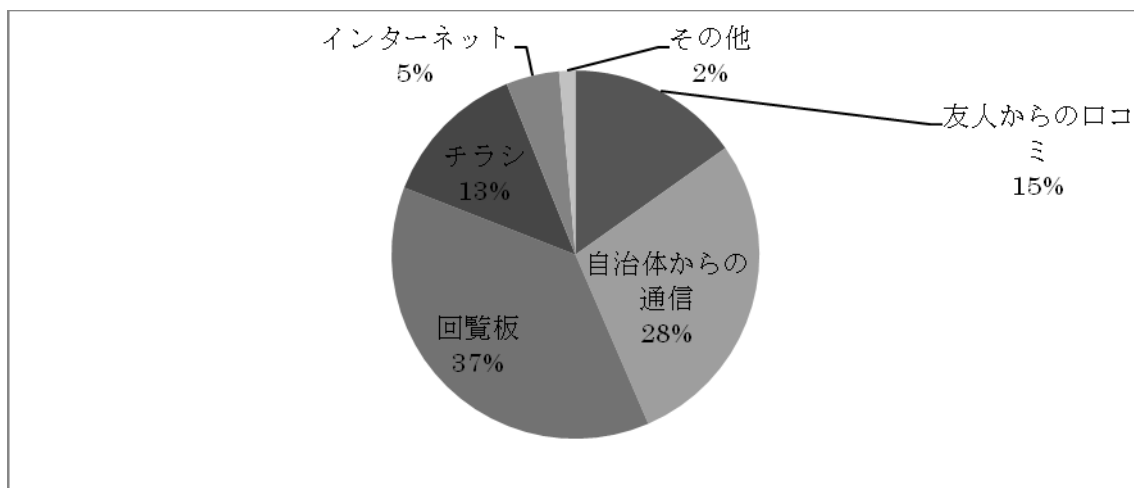
V-Q2. 参加経験



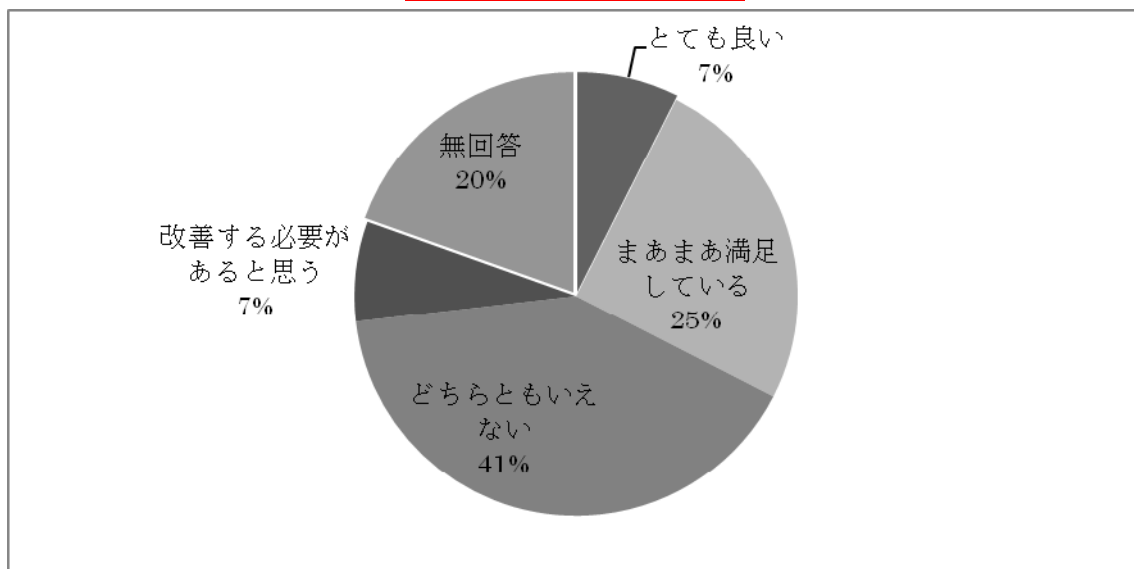
参加経験



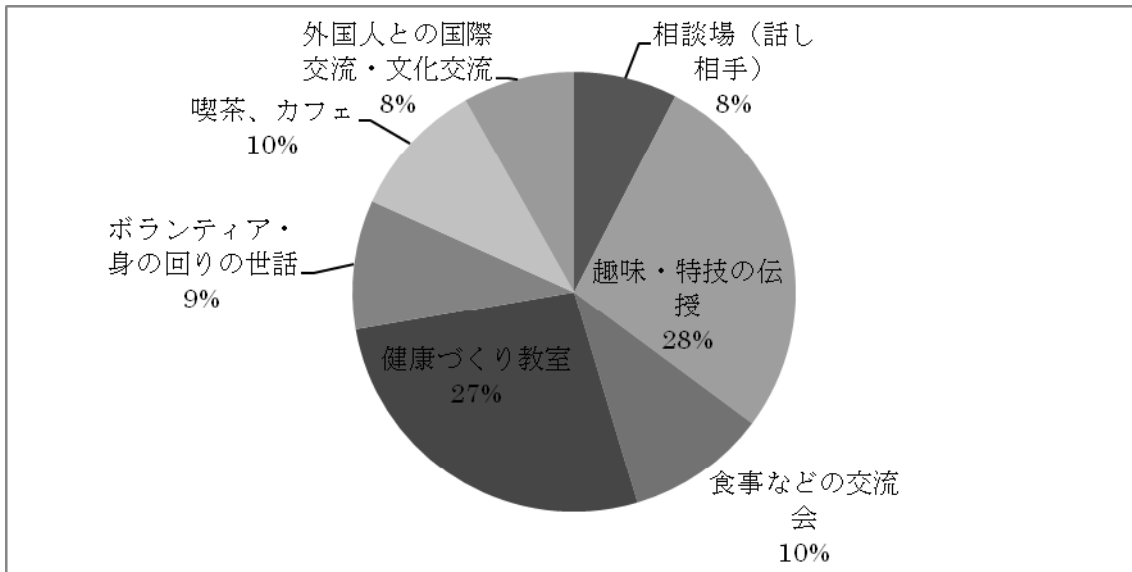
V-Q3. 地域の情報



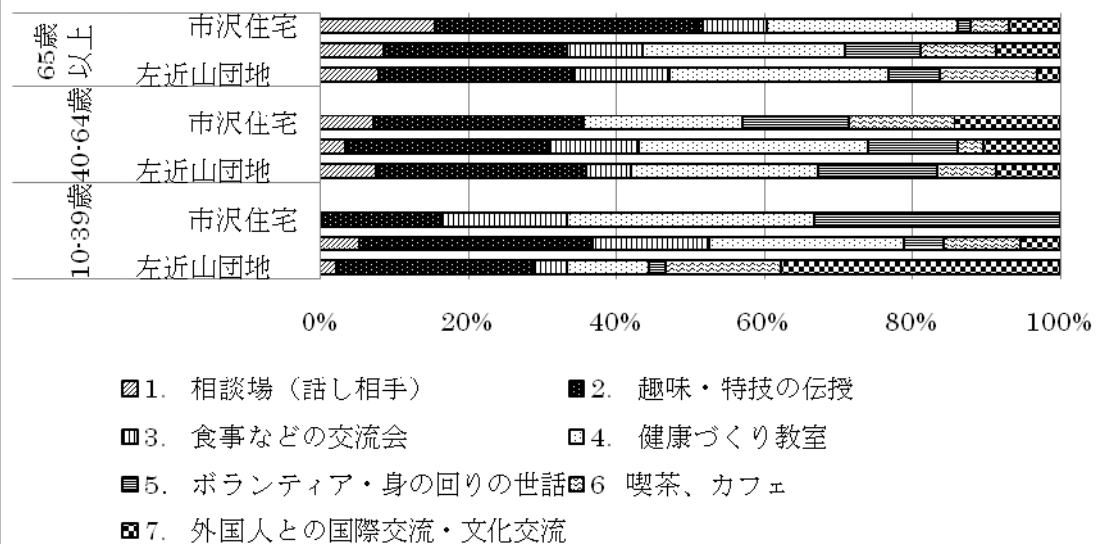
V-Q4. イベントについて



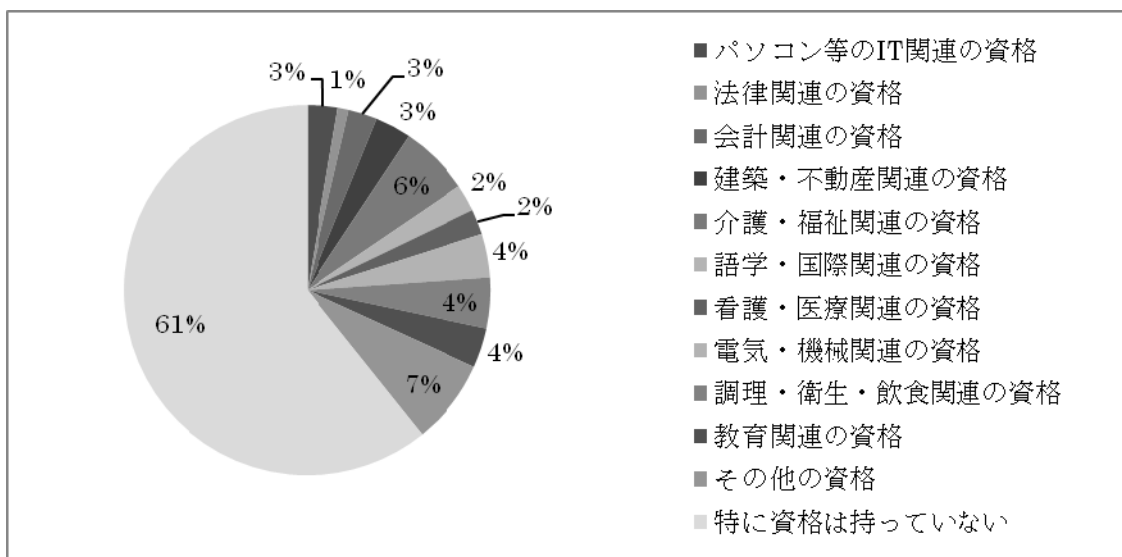
V-Q5. 参加したい行事



参加したい行事

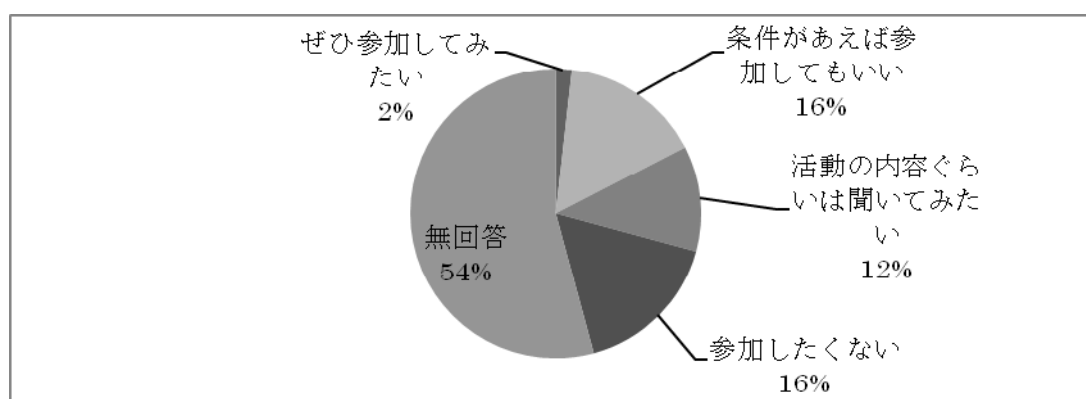


V-Q6. 専門資格



N0.	Q6. その他専門資格
4	情報処理、工事担任者
66	電気主任技術者
80	衛生管理士
110	自動車検査員
119	ラケット ストリンガー
124	縁の整備、掃除の保全まで永久に続けてもらいたい
163	ヘルパー 2 級、看護師、ケアマネージャー、精神障害者ヘルパー
167	ヘルパー 2 級と幼稚園保母
194	手芸
212	防災関係資格
221	スポーツ関係
239	パソコン会計、不動産
248	保育士、幼稚園教師
254	保育士、幼稚園教師
276	防災管理者
277	整備士、
279	クリーニング
366	日本語教師
442	茶道教受
513	消防設備士
527	調理師
531	中国語検定 2 級
548	英検定 2 級、漢検 b 級、理科教師
631	介護ボランティア 2 級
642	ヘルパー 2 級
700	整備
705	総合旅行業務取扱管理者
742	茶道

V-Q7. 活動に参加



謝辞

この度本論の作成にあたり、数多くの方にご協力いただきました。

左近山団地では、中村和彦様並びに自治会、地域の皆様には大変お世話になりました。左近山団地 3～5 街区へのアンケート調査おきましては、村上欽也様並びに中央地区住宅管理組合の皆様、3～5 街区に居住の皆様にご協力いただきました。

東海大学の加藤仁美教授ならびに研究室の方々には、左近山美化活動、夏祭りへの参加、アンケート及びヒアリングの調査等々のあらゆる場面で大変お世話になりました。

また、浜見平団地の研究については 2005 年度より継続して行っている浜見平団地再生支援研究会（日本大学建築・地域共生デザイン研究室と横浜国立大学建築計画研究室の協同研究）によるものであり、研究に際しては、浜見平団地自治会の協力を得ることができました。

ここに記して御礼申し上げます。

熱心にご指導いただいた大原一興教授及び藤岡泰寛准教授、そして審査してくださった佐土原聡教授、高見沢実教授、大野敏教授の貴重なご意見と指導に心から感謝いたします。

研究室でいつも励ましてくださった瀬尾明香様、研究を始めあらゆるサポートをしてくださった久野晃敬様、そして何かと迷惑をかけ続けてしまった研究室の後輩たちに深く感謝いたします。

最後に、長い留学生活にまけないようにと母国から毎日かかさず電話で応援してくださった母と父に心から感謝の気持ちを伝えたいと思います。

ありがとうございました。

